

# エジプト学研究第 20 号 2014 年

The Journal of Egyptian Studies Vol.20, 2014

## 目次

〈序文〉	吉村作治	3
〈調査報告〉		
2013 年 太陽の船プロジェクト 活動報告	黒河内宏昌・吉村作治	5
エジプト ダハシュール北遺跡発掘調査報告－第 19 次発掘調査－	吉村作治・矢澤 健・近藤二郎・西本真一・和田浩一郎	13
第 6 次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報	近藤二郎・吉村作治・柏木裕之・河合 望・高橋寿光	43
〈論文〉		
エジプト先王朝時代の穿孔技術に関する実験考古学的研究 －フリント製小型ドリルの切削能力と形状変化の観察－	長屋憲慶	59
〈研究ノート〉		
クシュの碑文を母系制として読む －即位の記録と「アララとアメン・ラーの契約」－	齋藤久美子	83
エジプト先王朝時代における石製容器の地域性	竹野内恵太	99
オブジェクト・フリーズ ( <i>frise d'objets</i> ) と出土遺物の比較 －装身具およびアミュレットを中心に－	山崎世理愛	115
〈動向〉		
争乱の中の大エジプト博物館建設と文化財保存修復をめぐる国際協力	高木規矩郎	131
〈活動報告〉		
2013 年度 早稲田大学エジプト学会活動報告		145
2013 年 エジプト調査概要		149
〈編集後記〉	近藤二郎	155

# The Journal of Egyptian Studies Vol.20, 2014

## CONTENTS

Preface .....	Sakuji YOSHIMURA.....	3
Field Reports		
Report of the Activity in 2013, Project of the Solar Boat .....	Hiromasa KUROKOCHI and Sakuji YOSHIMURA.....	5
Preliminary Report on the Waseda University Excavations at Dahshur North: Nineteenth Season .....	Sakuji YOSHIMURA, Ken YAZAWA, Jiro KONDO, Shinichi NISHIMOTO and Koichiro WADA.....	13
Preliminary Report on the Sixth Season of the Work at al-Khokha Area in the Theban Necropolis by the Waseda University Egyptian Expedition .....	Jiro KONDO, Sakuji YOSHIMURA, Hiroyuki KASHIWAGI, Nozomu KAWAI and Kazumitsu TAKAHASHI.....	43
Articles		
An Experimental Approach to the Drilling Technology in the Predynastic Period: Cutting Capability and Reduction Patterns of Flint Micro-drills .....	Kazuyoshi NAGAYA.....	59
Reading the Kushite Texts in the Matrilineal Context: Enthronement Records and the Covenant between Alara and Amen-Re .....	Kumiko SAITO.....	83
Regional Variation of Stone Vessels in Predynastic Egypt .....	Keita TAKENOUCI.....	99
Comparison between the <i>frise d'objets</i> and Burial Goods: Focused on the Ornaments and Amulets .....	Seria YAMAZAKI.....	115
Report .....	Kikuro TAKAGI.....	131
Activities of the Society, 2013-14.....		145
Brief Reports of Fieldworks in Egypt, 2013.....		149
Editor's Postscript.....	Jiro KONDO.....	155

## 序文

早稲田大学エジプト学研究所の紀要「エジプト学研究第 20 号」が発刊される運びとなりました。この発刊に関わった人は大変だったと思います。おつかれさまでした。しかし紀要なり報告書を出さなくなったら研究者として失格です。今巷では STAP 細胞の論文で学術研究の質が問われています。確かに間違いや思い違いはあるし、又出る可能性はありますが、出版しないことの方が罪が重いことを忘れてはいけません。私たちの論文やフィールドノートは STAP 細胞のように世の中をどうこうするものではありませんが、研究は研究で同価値です。襟を正して正確に誠実にあたらなければならないのです。

そういう意味では今回も論文が少なかったです。もちろん皆さん日々の生活が忙しいのはわかるのですが、何でこんなに苦難の道を選んだのかをもう一度思い出して下さい。エジプト考古学が好きだったからでしょう。そしたら好きな学問を懸命にやることはつらくはないはずです。そうでないと、毎日の生活に流され自分を見失ってしまうと、この苦勞が意味をもたなくなってしまうのです。研究を仕事としてではなく楽しみとして専念して下さい。では次の出版物が楽しみです。ともあれお疲れ様でした。

吉村 作治  
早稲田大学名誉教授

# 2013年 太陽の船プロジェクト 活動報告

黒河内 宏昌\*<sup>1</sup>・吉村 作治\*<sup>2</sup>

## Report of the Activity in 2013, Project of the Solar Boat

Hiromasa KUROKOCHI\*<sup>1</sup> and Sakuji YOSHIMURA\*<sup>2</sup>

### Abstract

This is an activity report of the project of the Second Boat of King Khufu in 2013. The activity were summarized in the following four items.

1. workshop on the consolidation of the wooden pieces of the Boat
2. design of the facilities and equipments
3. starting to lift up the wooden pieces
4. public relation

#### 1. workshop

On 27th and 28th in March, the workshop was held in Cairo (supported by JICA) and the result of additional investigation for consolidation of the wooden pieces was analyzed by specialists including international conservators and scientists. While the effectiveness of ‘nano-cellulose’ was confirmed, since there was no example of using it for conservation work in the world, it was decided to carry out a more detailed experimental test (pilot work) at the site.

#### 2. facilities and equipments

Designs of crane for lifting up the wooden pieces and laboratory for consolidation were finalized.

#### 3. lifting up the wooden pieces

We started lifting up the wooden pieces from the pit from June 2013. However the condition of the wood was worse than expected so it was necessary to do a temporary reinforcement in situ by facing the surface of the wood with Japanese paper. And also it was necessary to stabilize the wood to the environment of around 60% humidity from around 85% in the pit. Consolidation will start after this procedure of stabilization to the environment. Because of the security problem during anti Morsi regime movement in all over Egypt from June, the project stopped temporarily, but from September it started again.

#### 4. public relations

Symposium entitled "Toward the extract of the Boat of King Khufu" (January 25th, at Waseda University Ono Azusa Memorial Hall), and "Egypt Forum 22, Restart of the Project beyond the mayhem in Egypt" (November 10th at Waseda University Okuma Memorial Hall) were held. And TV specials program (supervised by Sakuji Yoshimura, produced by RKB) entitled "New discovery! Find out the hidden Truth of the Pyramid! Excavation of the Solarboat" was broadcasted to all over Japan through TBS network on December 8th.

\* 1 NPO 法人太陽の船復原研究所教授

\* 2 早稲田大学名誉教授

\* 1 Professor, NPO Institute of the Solar Boat

\* 2 Professor Emeritus, Waseda University

2012年の活動を以下の3つの項目にまとめて報告する。

1. サンプル分析の総括ワークショップ
2. 現場施設の整備
3. 部材の取り上げ
4. 広報

参加メンバーは以下の通りである（敬称略）。

【NPO 法人太陽の船復原研究所】

吉村作治	統括
黒河内宏昌	現場主任
吉村龍人	現地事務所所長
ユーセフ・カーリッド	現地主任技師
岩出まゆみ	広報
佐々木愛	事務局

【エジプト考古省ローカルスタッフ】

アフフィ・ローハイエム	ギザ地区インスペクター長〔考古学〕
アイーサ・ジダン	GEMCC <sup>1)</sup> 部長〔保存修復〕
モハメド・ムスタファ	アレキサンドリア地区長官（のち GEMCC 所長）〔水中考古学〕
ディア・エルディン	ギザ地区インスペクター〔考古学〕

【その他の参加者・参加機関】

<サンプル分析の総括ワークショップ>

青木繁夫	サイバー大学教授（保存科学）
イザベラ・ウフマン	保存修復家〔ポーランド、保存修復〕
アリ・アスファル	エジプト考古省・ギザ地区長官〔考古学〕
フセイン・バシル	エジプト考古省・GEMCC 所長〔保存科学〕
オサマ・アブエルヘル	エジプト考古省・GEMCC 部長〔保存科学〕
フセイン・カマル	エジプト考古省・GEMCC 部長〔保存科学〕
ムハンマド・アンワル	エジプト考古省・GEMCC 研究員〔保存科学〕
エルシャイマ・エルサイドエイド	エジプト考古省・GEMCC 研究員〔保存科学〕
アマル・リファート	カイロ大学講師〔通訳〕

<現場施設の整備>

シェリーフ・アブデルファタハ	SAMA CONSTRUCTION Co.
ムハンマド・フセイン	POWER EGYPT CO.
エザト・フセイン	POWER EGYPT CO.

<部材の取り上げ>

鎌倉 真音	東京大学生産技術研究所研究員〔情報学〕
柏木 裕之	サイバー大学教授〔建築学〕
高橋 寿光	早稲田大学エジプト学研究所研究員〔考古学〕
山田 綾乃	早稲田大学大学院〔考古学〕

## <広報>

早稲田大学エジプト学研究所

なお、「サンプル分析の総括ワークショップ」は、独立行政法人・国際協力機構（以下 JICA）の支援のもとに行われた。

### 1. サンプル分析の総括ワークショップ

#### (1) ワークショップの開催

「2012年太陽の船プロジェクト活動報告」でご報告した通り、私たちは2012年11月20日～22日に、クフ王第2の船部材のサンプルを分析した結果について、海外の専門家を交えて協議し、オープンセミナーで一般に向けて公開した（JICA、GEMCC 共催）。

しかしその際、なお追加のサンプルテストを行う必要が指摘されたため、JICAの支援を受けてテストを継続した。そして2013年3月27～28日、海外の専門家を交えたワークショップを開催し（於；ギザ・ピラミッド地区・エントランス棟内会議室）、サンプル分析の総括を行った。



図1 ワークショップ参加者

Fig.1 Attendants of the Workshop

ワークショップの参加者はNPO 法人太陽の船復原研究所より吉村作治、黒河内宏昌、吉村龍人、ユーセフ・カーリッド（前述 A、敬称略）、エジプト考古省ローカルスタッフのアフィフィ・ローハイエム、アイーサ・ジダン、モハメド・ムスタファ、ディア・エルディン（前述 B）、そして専門家の青木繁夫、イザベラ・ウフマン、フセイン・バシル、オサマ・アブエルヘル、フセイン・カマル、ムハンマド・アンワル、エルシャイマ・エルサイドエイド、通訳のアマル・リファート（前述 C-1）（図1）である。

#### (2) 結論

アイーサ氏がこれまでの GEMCC における分析結果を報告し、「ナノセルロース」が強化処理に有望であることが確認された。しかし「ナノセルロース」は文化財保存への使用例がない物質であることもあり、次のステップとして、サンプルではなく現場で実際の部材を用いて、強化処理の実験段階の作業（パイロットワーク）を行う必要があるということ、参加者全員で確認した。

すべての作業は実験しながら、手探りで進めていかなければならないが、ワークショップの結論として、今後の作業計画を以下のように決定した。

- ①部材の取り上げと保存処理に必要な設備を建設する。
- ②ピット内で部材を一時的に強化処理し、ピットから部材を取り上げる作業を開始する。
- ③ピット外の保存処理場にて、強化処理の実験を行う。この場合の強化処理は、まず部材の形状を保ち、ハンドリングができるようになるまでを目指す。
- ④強化処理が終わったのち、部材の測量と考古学的調査を行う。

## 2. 現場施設の整備

### (1) クレーン

部材を取り上げるために使うクレーンを図2のようにデザインした。施工はSAMA CONSTRUCTION CO.、POWER EGYPT CO. に依頼することとした。

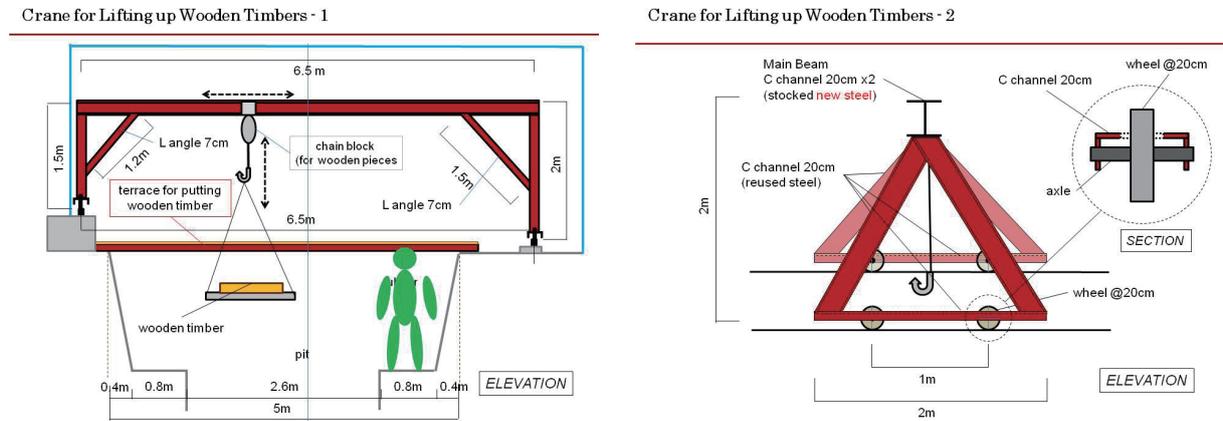


図2 部材取り上げ用クレーン 東・北立面図

Fig.2 Crane for lifting up the Wooden Pieces, East and North Elevation Drawing

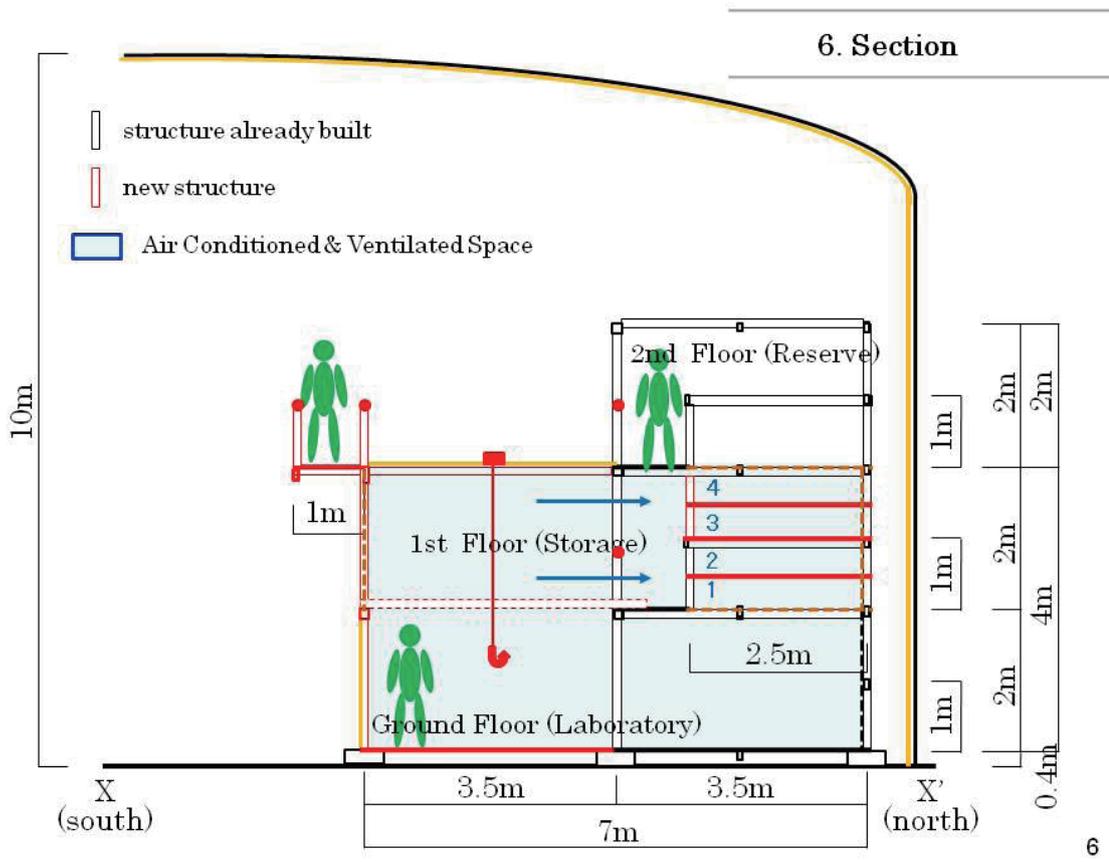


図3 保存処理場 南北断面図

Fig.3 Conservation Laboratory, South-North Section Drawing

## (2) 保存処理場

保存処理場は2011年6月の蓋石取り上げの時点で、エジプト考古省からの強い要請を受け、一部の鉄骨躯体は組み終わられていたが、当面はまず保存処理場と小規模な収納スペースを作ることとし、図3のようにデザインを考案した。保存処理場もまた施工はSAMA CONSTRUCTION CO.、POWER EGYPT CO.に依頼することとした。

## 3. 部材の取り上げ

### (1) 部材の取り上げの開始

部材の取り上げは2013年の6月より始めた(図4)。そして最初に、部材の取り上げ、写真撮影、三次元測量、手測量のプロセスを一通り行ってみた。

### (2) 部材をピットから取り上げるための一時的な強化処理(於;ピット内)

しかし部材の強度は予想以上に落ちており、ピットから安全に取り上げるためには、ピットの中で一時的な補強を行う必要があった。



図4 部材取り上げの開始(左から吉村教授、アイーサ・ジダン氏、当時の考古大臣アハメド・アイーサ氏)  
Fig.4 Lifting up the First Wooden Piece (from left, Prof.Yoshimura, Mr.Eissa Zidan, Mr. Ahmed Eissa (the former Minister of MSA))

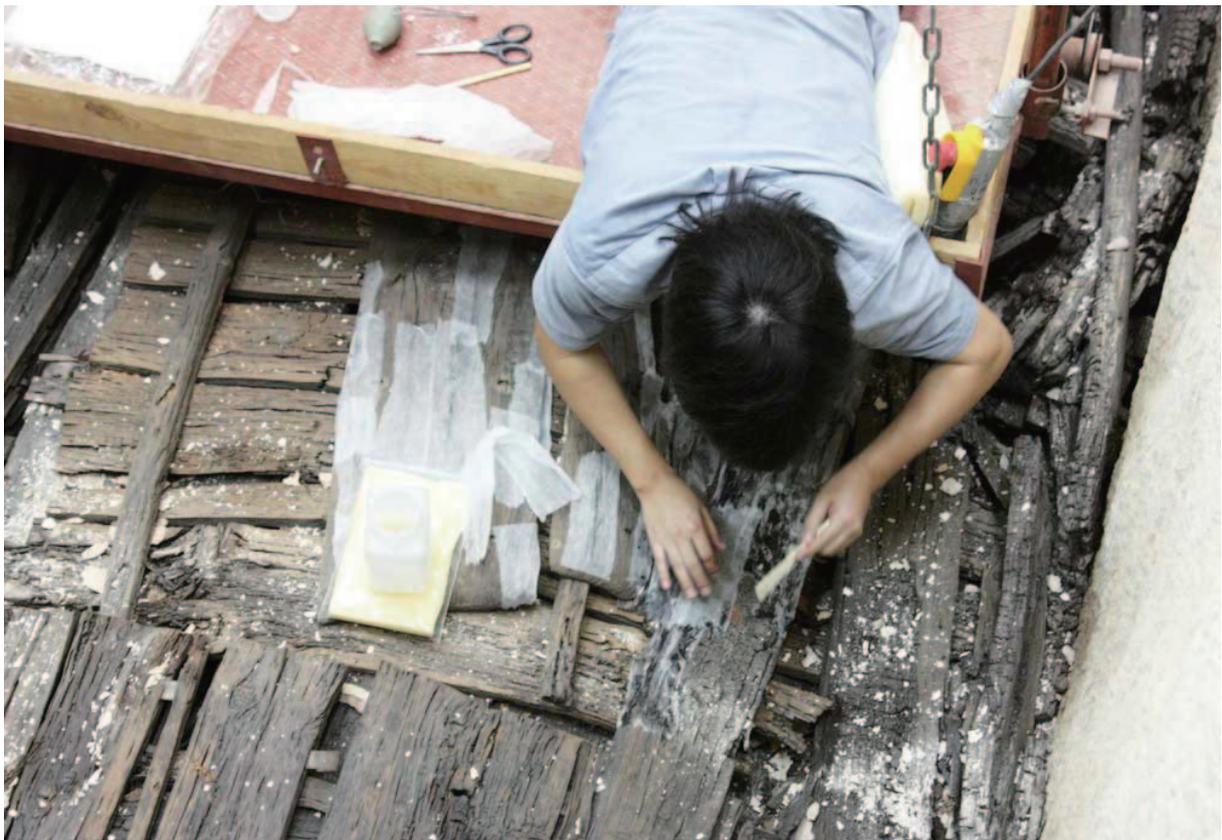


図5 ピット内で部材を補強(和紙を貼るフェーシング)  
Fig.5 Temporary Reinforcement of the Wooden Piece (Facing of the Surface with Japanese Paper)

そこでまず部材にアルコールをスプレーして殺菌したのち、短冊形に切った和紙をクルーセルG (0.5%、水とエチルアルコール溶液)で可能な範囲内で全面に貼り付けて表面を補強するフェーシングの処理を行い、そののちにピットから取り上げることとした(図5)。

### (3) 部材の環境調整(アコモデーションまたはシーズニング)

ピットから取り上げた部材は、ピット内の85%前後の湿度から、徐々に低い湿度へと適応させていく必要があった。そこで、部材を木製のトレイの上に乗せ、それをポリビニールシートで包み、保湿剤(タバコ・葉巻用の保湿剤)を入れて湿度を60~70%に保つようにして保管した(図6)。

どれくらいの期間、この適応作業を続ければよいかを判断するために、一つの部材を選び、湿度の低下とともにどれくらい寸法が変化するかを測定した。その結果、ピット内より15%ほど低い平均湿度70%前後の環境下では(平均温度はピット内より1~2℃低い)、2か月経過後も寸法に全く変化が見られないことが確認された。

### (4) プロジェクトの展開

2013年6月30日、モルシ政権に反対する人々の大規模なデモ、集会在、タハリール広場やカイロ各所、そして全国へと広がり、モルシ政権が倒されるという出来事が起こった。これを受けて日本国政府は、邦人に対しカイロへの「渡航延期勧告」を発令したため、一時部材の取り上げをストップせざるを得なくなった。ただし、幸いなことに現場の治安は保たれており、9月には作業を再開することができた。

こうした社会情勢に加え、プロジェクトを支援していただくJICAとの契約が2013年12月までずれ込んだこともあり、前述した作業計画③の強化処理の実験を終了することができなかったことが課題として残った。2014年はまず、強化処理をできるだけすみやかに軌道に乗せることを第一の課題とし、部材の取り上げ、測量作業を本格化させていきたい。

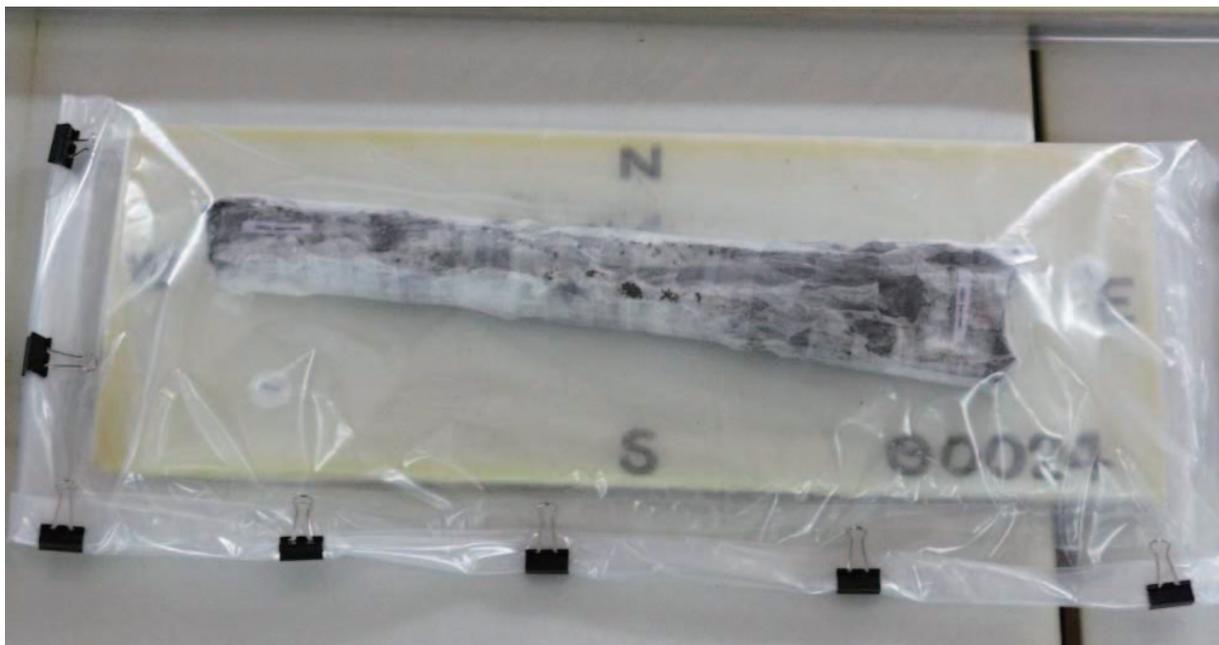


図6 取り上げた部材をシートで梱包して湿度を調節

Fig.6 Wrapping of the Wooden Piece and Controlling the Environment

## 4. 広報

### (1) TV 特別番組の放映

吉村作治監修、RKB 毎日放送制作のTV 特番、『新発見！ピラミッドに隠された真実を解け！太陽の船大発掘スペシャル』が、12月8日（日）15:30～17:00、TBS 系列にて放映され、好評を博した。

### (2) 太陽の船シンポジウム「クフ王の船取り上げに向けて」

2013年1月25日（金）18:30～20:30、早稲田大学小野梓記念講堂にて「クフ王の船取り上げに向けて」と題したシンポジウムが行われ、2012年の太陽の船プロジェクトの成果が発表された。

このシンポジウムでは、吉村作治教授が基調講演にて「プロジェクトの経緯」を紹介したあと、エジプトから招聘したアイーサ・ジダン氏（エジプト考古省）がGEMCCにおける「サンプル木片の分析と保存処理方法」について報告（図7）。さらに池内克史教授（東京大学）「三次元復原に向けて」、内山博子教授（女子美術大学）「復原像のCG表現」と発表が続き、最後に吉村教授と中川武教授（早稲田大学）の対談「今後に向けて」が行われた。

なおこのシンポジウムは主催・早稲田大学エジプト学研究所、共催・早稲田大学エジプト学会、NPO 法人太陽の船復原研究所、特別協賛・株式会社ニトリホールディングス、協力・JICA（独立行政法人国際協力機構）により開催された。



図7 太陽の船シンポジウム 来日中のアイーサ・ジダン氏の発表

Fig.7 Mr. Eissa Zidan in his Presentation in the Symposium

### (3) エジプトフォーラム 22「太陽の船プロジェクト再開！～エジプトの騒乱を乗り越えて～」

2013年11月10日（日）15:00～18:00、早稲田大学大隈記念講堂にて、エジプトフォーラム 22「太陽の船プロジェクト再開！～エジプトの騒乱を乗り越えて～」が開催され、2013年の成果が発表された。

このシンポジウムでは、吉村教授が基調講演「エジプトの社会情勢と早大隊のエジプト調査」を発表し、その後「社会混乱期の文化財の状況」と題して、前田耕作教授（和光大学）、中川武教授（早稲田大学）、近藤二郎教授（早稲田大学）、宮下佐江子氏（古代オリエント博物館研究員）、黒河内がパネルトークを行った。

このシンポジウムは、主催・早稲田大学エジプト学研究所、早稲田大学エジプト学会、後援・早稲田大学総合研究機構により行われた。

## 註

- 1) Grand Egyptian Museum Conservation Center(大エジプト博物館保存修復センター)の略称。以下、GEMCC と記載。

# エジプト ダハシユール北遺跡発掘調査報告

## — 第 19 次発掘調査 —

吉村 作治\*<sup>1</sup>・矢澤 健\*<sup>2</sup>・近藤 二郎\*<sup>3</sup>  
西本 真一\*<sup>4</sup>・和田 浩一郎\*<sup>5</sup>

### Preliminary Report on the Waseda University Excavations at Dahshur North: Nineteenth Season

Sakuji YOSHIMURA\*<sup>1</sup>, Ken YAZAWA\*<sup>2</sup>, Jiro KONDO\*<sup>3</sup>  
Shinichi NISHIMOTO\*<sup>4</sup> and Koichiro WADA\*<sup>5</sup>

#### Abstract

The mission of the Institute of Egyptology, Waseda University, conducted the fieldwork at Dahshur North from September 15th to October 13th in 2010. In this season, surface layers of the grids (Fig.1, 60 x 5 m) to the north of the Ramesside tomb of Ta were removed, and thirteen shaft tombs and two surface burials were identified. Among them, three shaft tombs (Shaft 113, 122, 123) and two surface burials (19p-011, 19p-014) were excavated. In addition, three shaft tombs (Shaft 90, 95, 96) were also cleared, the entrances of which have been already identified in the past seasons.

Shaft 90 (Fig.3) had three subterranean chambers, and five complete faience shabtis and two lids of faience canopic jars were found (Fig.4, 5). Associated amphorae (Fig.9.12-14) and shabtis were dated to the Ramesside Period. Shaft 95 (Fig.10) had a small flat based bottle (Fig.11), dated to the Middle Kingdom. Shaft 96 (Fig.12) had almost the same plan as Shaft 90, and shabtis made of pottery and wood were found (Fig.13, 14). Two wooden shabtis were complete. From Shaft 113 (Fig.17) traces of wooden Middle Kingdom coffin were identified. The wall of the burial chamber was daubed with thick layer of *tafla* (Photo 1), onto which the pigment of the coffin was adhered (Photo 2). From the shaft filling of Shaft 122 (Fig.19), at the level of the entrance of Room A, fragments of the Ramesside anthropoid coffin and a limestone relief fragment were found (Fig.20, 21). Shaft 123 (Fig.19) had a burial chamber to the south side at the bottom and at northern wall of the shaft there was a hole connected to the Room A of Shaft 122. At the bottom of the Shaft 123, complete large pottery jar, so called “Beer bottle” (Fig. 23.17), was found *in situ*.

One of the surface burial (Fig.25) cleared in this season, was belong to a child, and around the neck a set of glass bead pendants and gilded bronze ring were retrieved (Fig.26.1, 2, Photo 3). The other surface burial was already disturbed, no object was found except fragments of human bone and reed mat.

#### 1. はじめに

早稲田大学エジプト学研究所によるダハシユール北遺跡の調査隊は、1995 年の新王国時代第 18 王朝末の「王の書記イバイ」という人物の「トゥーム・チャペル（神殿型平地墓）」の発見を皮切りに、「パシエドゥ」、

\* 1 早稲田大学名誉教授

\* 2 早稲田大学エジプト学研究所招聘研究員

\* 3 早稲田大学文学学術院教授

\* 4 サイバー大学世界遺産学部客員教授

\* 5 サイバー大学世界遺産学部講師

\* 1 *Professor Emeritus, Waseda University*

\* 2 *Visiting Fellow, Institute of Egyptology, Waseda University*

\* 3 *Professor, Faculty of Letters, Arts and Sciences, Waseda University*

\* 4 *Visiting Professor, Faculty of World Heritage, Cyber University*

\* 5 *Lecturer, Faculty of World Heritage, Cyber University*

「タ」のトゥーム・チャペルとその周辺に点在する数々の新王国時代の墓を発見してきた。2004年以降は「タ」のトゥーム・チャペルとその周辺に広がるシャフト墓、土壌墓の調査を続けており、中王国時代と新王国時代の未盗掘墓が複数発見されるに至った。その後の調査で、この遺跡は新王国時代だけでなく、中王国時代の墓域も数多く存在することが分かってきた。両時代の埋葬習慣の解明が、本遺跡を対象とする研究の主要なテーマとなっている。

第19次調査<sup>1)</sup>の発掘は2010年9月15日から10月13日にかけて実施された。ダハシュール北遺跡の墓域のほぼ西端に位置する「タ」のトゥーム・チャペル周辺の様相を明らかにすることを目的として、「タ」墓周辺における発掘調査を継続した(図1)。まず発掘区の北辺を5m北側へ拡張する形で地上の発掘を行い、その後発掘区の南東に位置するシャフト90、95、96、今期拡張した範囲に含まれるシャフト113、122、123、土坑墓19p-011、19p-014の発掘を実施した。これらの墓は中王国時代と新王国時代に年代づけられるものであり、両時代における埋葬習慣や当時のメンフィス地域の様相を知る手がかりを補強することができた。本稿はその成果の概要報告である。

## 2. 地上部の発掘調査

今次調査では調査区を北側へ5m広げ、地上部の発掘調査を実施した。グリッド2E47cおよびd、2E48cおよびd、2E49cおよびd、2E50cおよびd、3E41cおよびd、3E42cおよびdが該当し、東西60m、南北5mの範囲である。地上部の堆積は厚さ10cm前後の礫を含む砂層であり、その下は地山となっている。2E50d南東部、3E41c南半分、3E41d西側から南縁にかけては薄いタフラ(付近の岩盤に由来する泥質の石灰岩)によって構成される層が砂層の下にあった。拡張された範囲から新たにシャフト112～124、および土壌墓19p-011、19p-014が発見された。

3E41cでは、タフラ層に包含される形で土器が集中して出土した。出土した土器群の詳細は図2に掲載した。ミニチュア土器(図2.1～3, 8～10)、胎土 Nile B1<sup>2)</sup>の半球形碗(図2.6)、Nile Cの大型壺(図2.12, 13)などは中王国時代の埋葬に見られる典型的な構成である。R. シストルと A. ザイラーによる半球形碗の分類では、図2.6は Group 4に相当し、アメンエムハト3世治世頃から第13王朝に年代づけられている(Schiestl and Seiler 2012: 100-105)。大型壺の口縁部の形状は、R. シストルと A. ザイラーによるこの器形の分類では Class 3dに相当すると考えられ(Schiestl and Seiler 2012: 660-661)、Class 3dはアメンエムハト3世治世から第13王朝初期に年代付けられている。さらに、テル・エル＝ダバア出土の同器形の年代に関する研究(Szafrański 1998)の基準に従うならば、この中でも第13王朝初期に年代づけられることになる<sup>3)</sup>。肩に有孔のある平底壺(胎土は Nile C)は、本遺跡で未盗掘の状態が発見されたシャフト65の、シャフト開口部周辺で出土した注口付土器と類似している。シャフト65開口部で発見された土器の一群は、埋葬後の祭祀活動に関連する可能性が指摘されている(Baba and Yoshimura 2011: 165-166, Fig.5.3)。この土器群が発見された場所のすぐ南には中王国時代に年代づけられるシャフト106<sup>4)</sup>の開口部が位置していることから、土器群はシャフト106の埋葬に関連している可能性が高い。同様にシャフト開口部周辺で土器が集中して出土する例はこれまでもいくつか報告されており(吉村他 2009: 25, 2010: 25, 写真10)、中王国時代の埋葬時に行われた祭祀活動を示す考古学的資料として注目される。

## 3. シャフト墓の発掘調査

### (1) シャフト90

#### ①遺構の概要(図3)



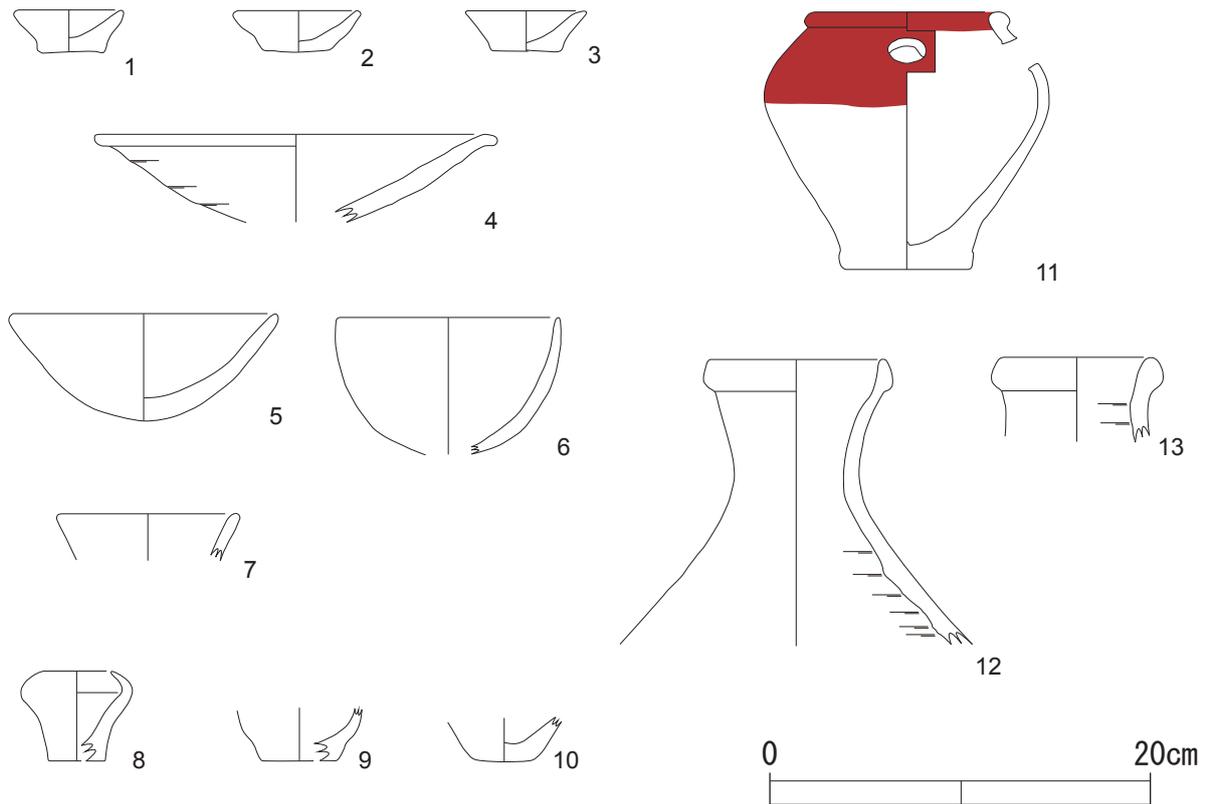


図2 グリッド 3E41c 出土土器  
Fig.2 Pottery vessels from Grid square 3E41c

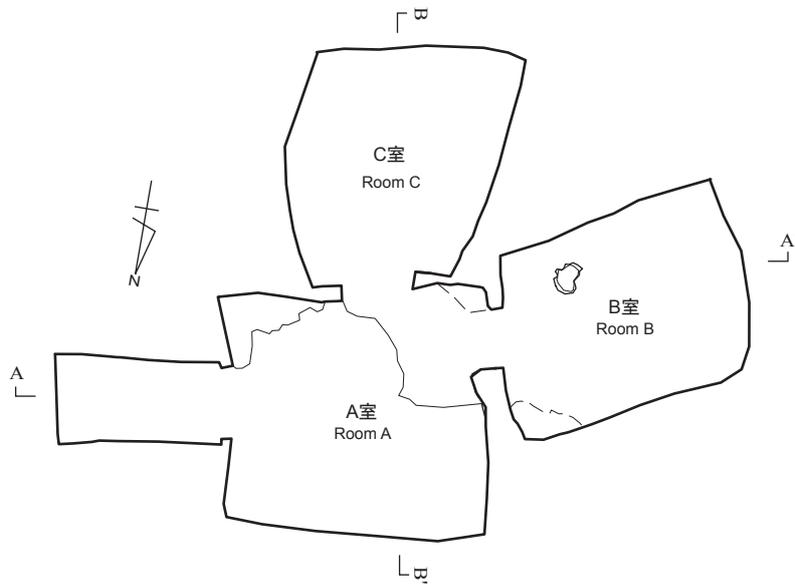
シャフト 90 はグリッド 3E12 に位置し、2007 年第 13 次調査での地上部の発掘でシャフト開口部が発見されていた。開口部の長軸は東西方向であり、平面の大きさは南北 1.0m、東西 2.1m、シャフト部の深さは 9.4m であった。シャフト最下部から西側に部屋が発見された (A 室)。A 室の平面は方形で南北 3.0m、東西 3.5m、床から天井までの高さが 1.6m であった。A 室の西側と南側には別の部屋が作られていた (それぞれ B 室、C 室)。西側の B 室は方形で南北 2.5m、東西 3.0m、床から天井までの高さが 1.1m、南側の C 室は南側に向けてやや幅広になる形状で、南北 3.1m、東西 1.8m、床から天井までの高さが 1.1m であった。

シャフト部は黄色の細砂で満たされており、A 室開口部前のレベルから着衣型のファイアンス製シャブティが出土した。A、B、C 室内部はわずかにタフラ粒の混じる黄色の砂層が堆積しており、ファイアンス製のカノポス壺の蓋 2 点が A 室と B 室の砂層の上から発見された。A 室の北西コーナー付近から人骨と木棺片がまとめて出土しており、人型木棺の眼と眉を表現した象嵌と考えられる遺物群 (図 6 および図 7.1 ~ 3) もほとんどが A 室から出土した。出土状況から、盗掘者に必要なかった物が、A 室の北西コーナーにまとめられていたと推測される。シャブティは全てファイアンス製であり、A 室から 2 点、B 室から 2 点出土した。その他、スカラベやビーズ、指輪、土器片、金箔などが発見された。

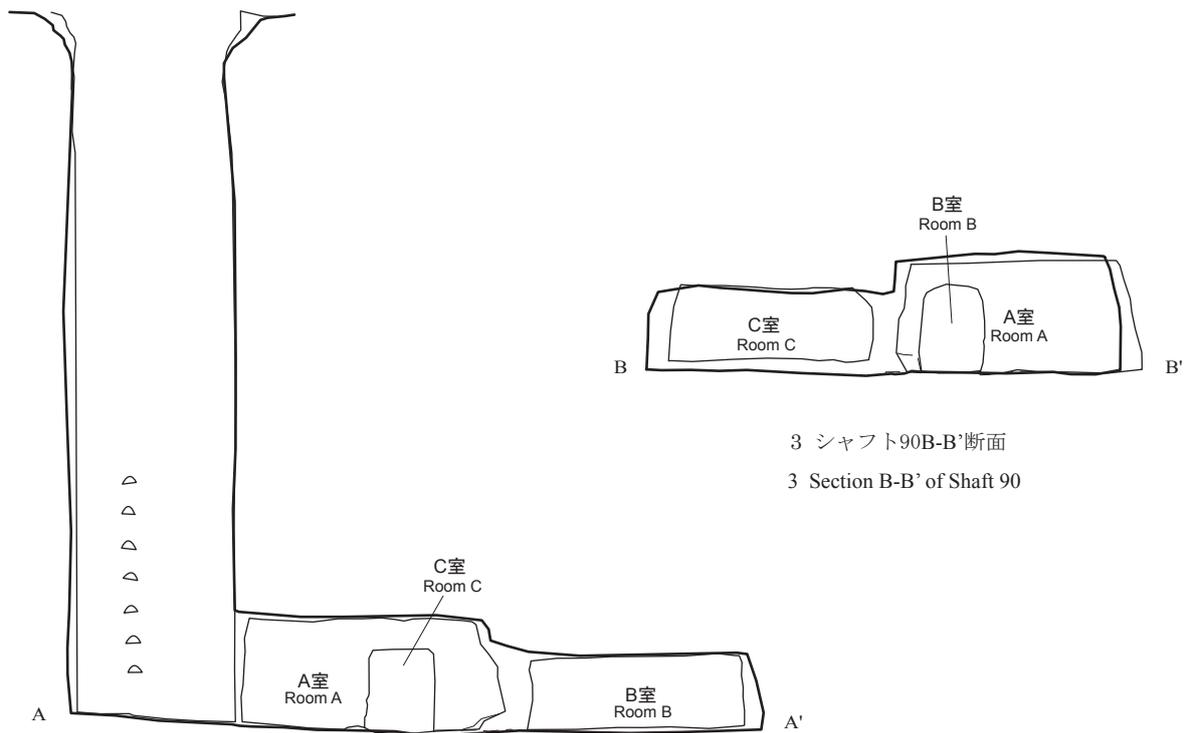
## ②出土遺物

### a) ファイアンス製カノポス壺の蓋 (図 4)

青色ファイアンス製のカノポス壺の蓋が 2 点発見されており、両者とも 2 つの断片から復元された。2 つの断片はどちらの例も A 室出土のもの、B 室出土のものによって構成される。黒色の線で細部が描かれており、図 4.1 はハヤブサの頭部を持つケベフセヌウエフ神を表現したと考えられ、図 4.2 はヒヒの頭部で



1 シャフト90底部平面  
1 Plan of Shaft 90



2 シャフト90A-A'断面  
2 Section A-A' of Shaft 90

3 シャフト90B-B'断面  
3 Section B-B' of Shaft 90



図3 シャフト90平面・断面図  
Fig.3 Plan and Section of Shaft 90

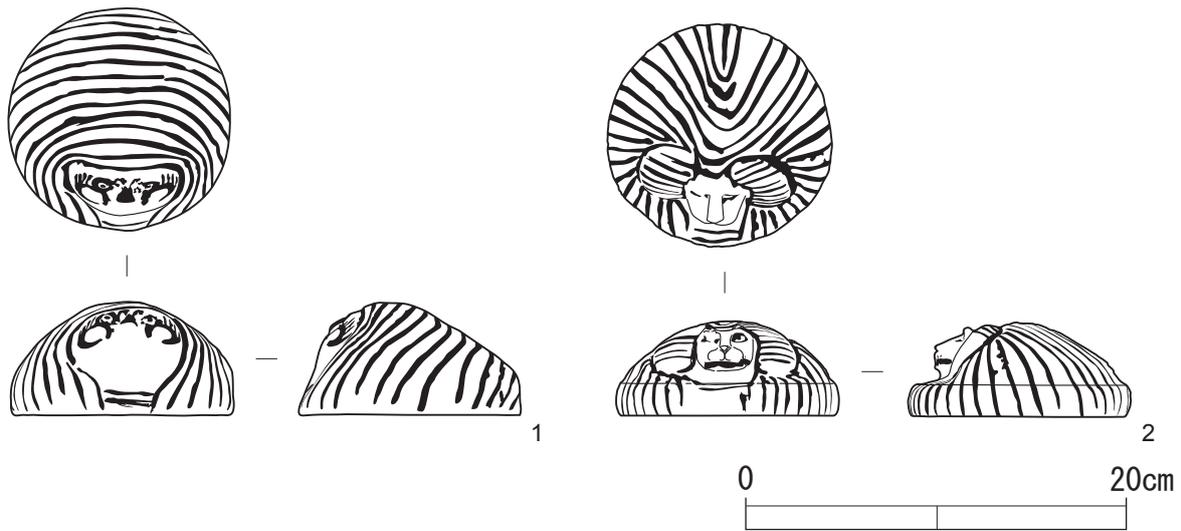


図4 シャフト90出土ファイアンス製カノポス壺蓋  
Fig.4 Lids of faience canopic jars from Shaft 90

あり、ハピ神を表していると考えられる。

#### b) ファイアンス製シャブティ (図5)

シャフト90から全部で5点のファイアンス製シャブティが出土しており、全てやや白みがかった青色を呈し、黒色で細部の表現や銘文が描かれていた。図5.1はシャフト部のA室開口部前から出土した着衣型のもので、銘文は *3sir irwy ..... mꜣꜥ-hrw* 「オシリス イルウイ<sup>5)</sup>..... 声正しき者」と書かれていた。

図5.2～4の3点は銘文が2列の帯になって描かれていたもので、背面が平坦で全体が比較的薄いという特徴があった。図5.2、3はA室出土、図5.4はB室出土である。銘文から3点とも同じ被葬者に属するものであり、*3sir kdn ꜥh-pt mꜣꜥ-hrw* 「オシリス チャリオットの馭者 アクペト<sup>6)</sup> 声正しき者」となっていた。このように背面が平坦で2列の銘文帯を持つファイアンス製シャブティはデイル・エル＝バハリで出土した例があり、第21王朝に年代づけられている (Schneider 1977: 4.3.1.64)。

図5.5は銘文帯が1列であるが、正面の外形や大きさ、全体が薄く背面が平坦であるという特徴は図5.2～4と類似していた。被葬者の名前は銘文の磨滅が激しく、判別が難しかった。同様の例は第20王朝に年代づけられている (Schneider 1977: 3.3.1.2, 3.3.1.3)。

#### c) 木棺の眼、眉の象嵌 (図6、7.1～3)

木棺の眼と眉を表現していた象嵌の一部と考えられる遺物群であり、図6.1の一部と、図7.1の一部のみがシャフト部から出土しており、それ以外は全てA室から出土した。

#### d) 牙製<sup>7)</sup>象嵌 (図7.4, 5)

A室から出土した牙製の遺物であり、象嵌として何らかの副葬品にはめ込まれていたと考えられる。

#### e) ファイアンス製指輪 (図7.6～9)

図7.6、7.7はA室から出土したもので、やや緑がかった青色、図7.8はシャフト部から出土したもので、同じく緑がかった青色であった。図7.9はB室から出土したもので、白色であった。類例は近隣のサッカ

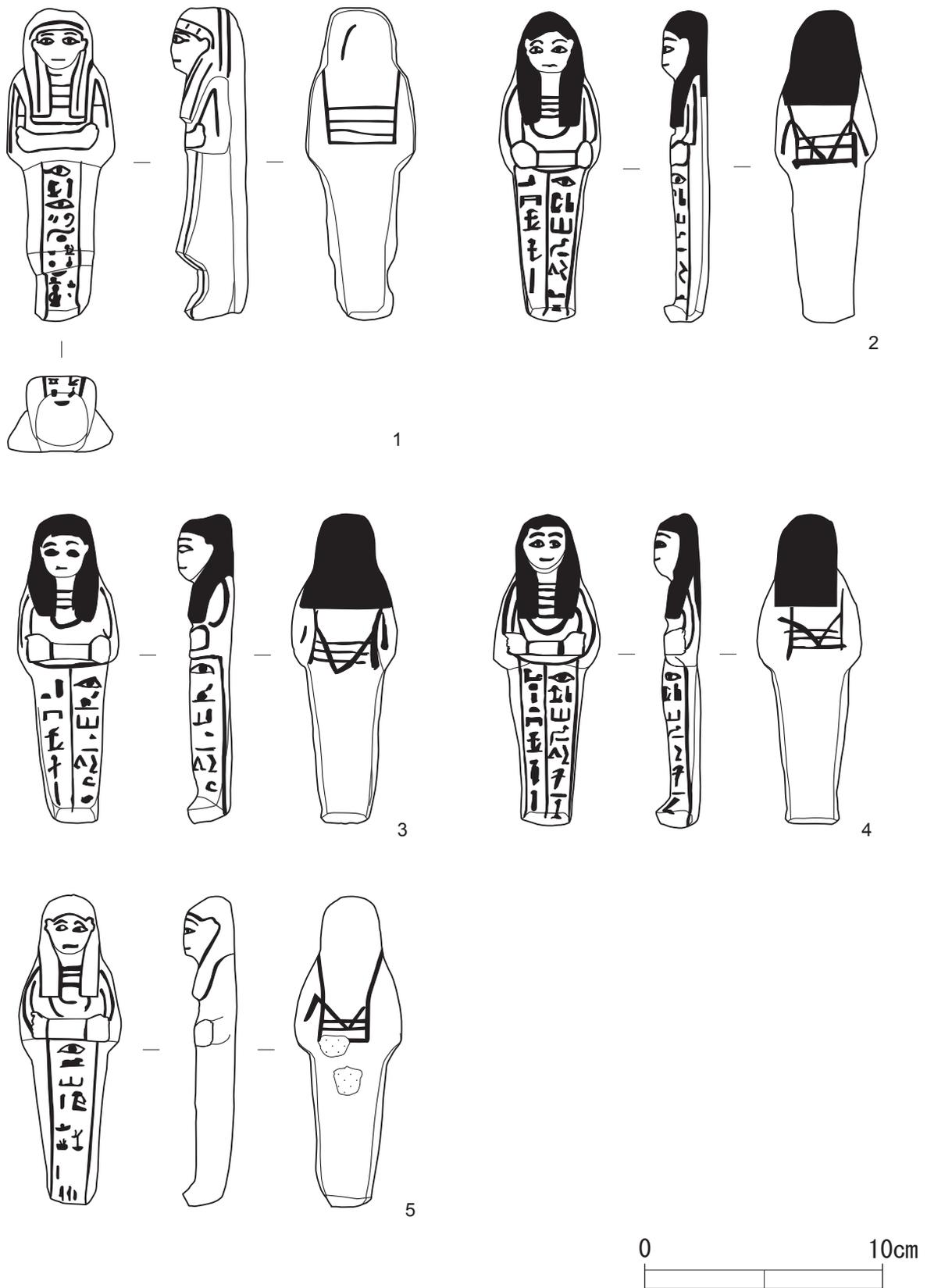


図5 シャフト90出土ファイアンス製シャブティ  
Fig.5 Faience Shabtis from Shaft 90

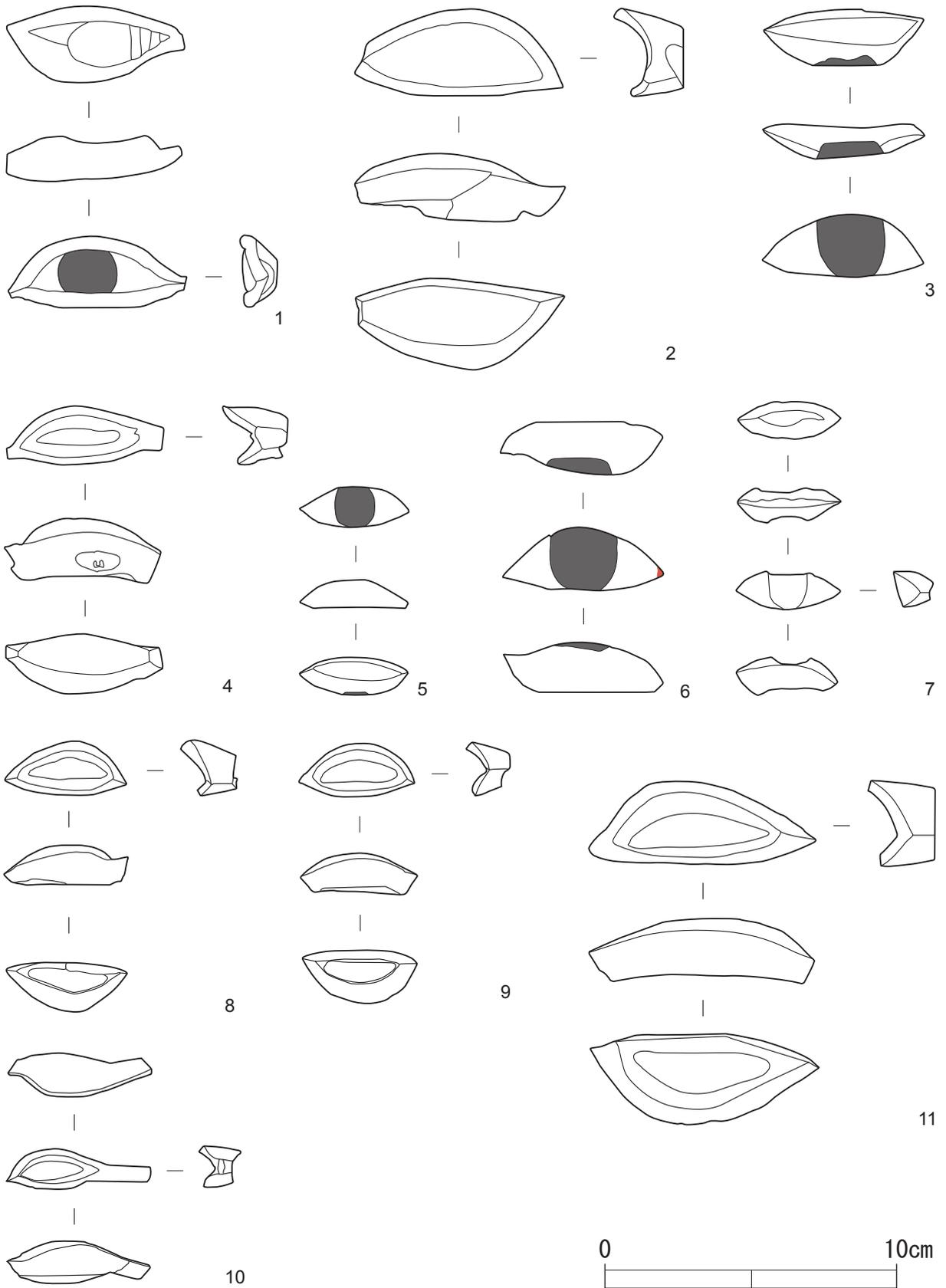


図6 シャフト90出土象嵌（人型木棺の眼）  
 Fig.6 Inlaid eyes of anthropoid coffin from Shaft 90

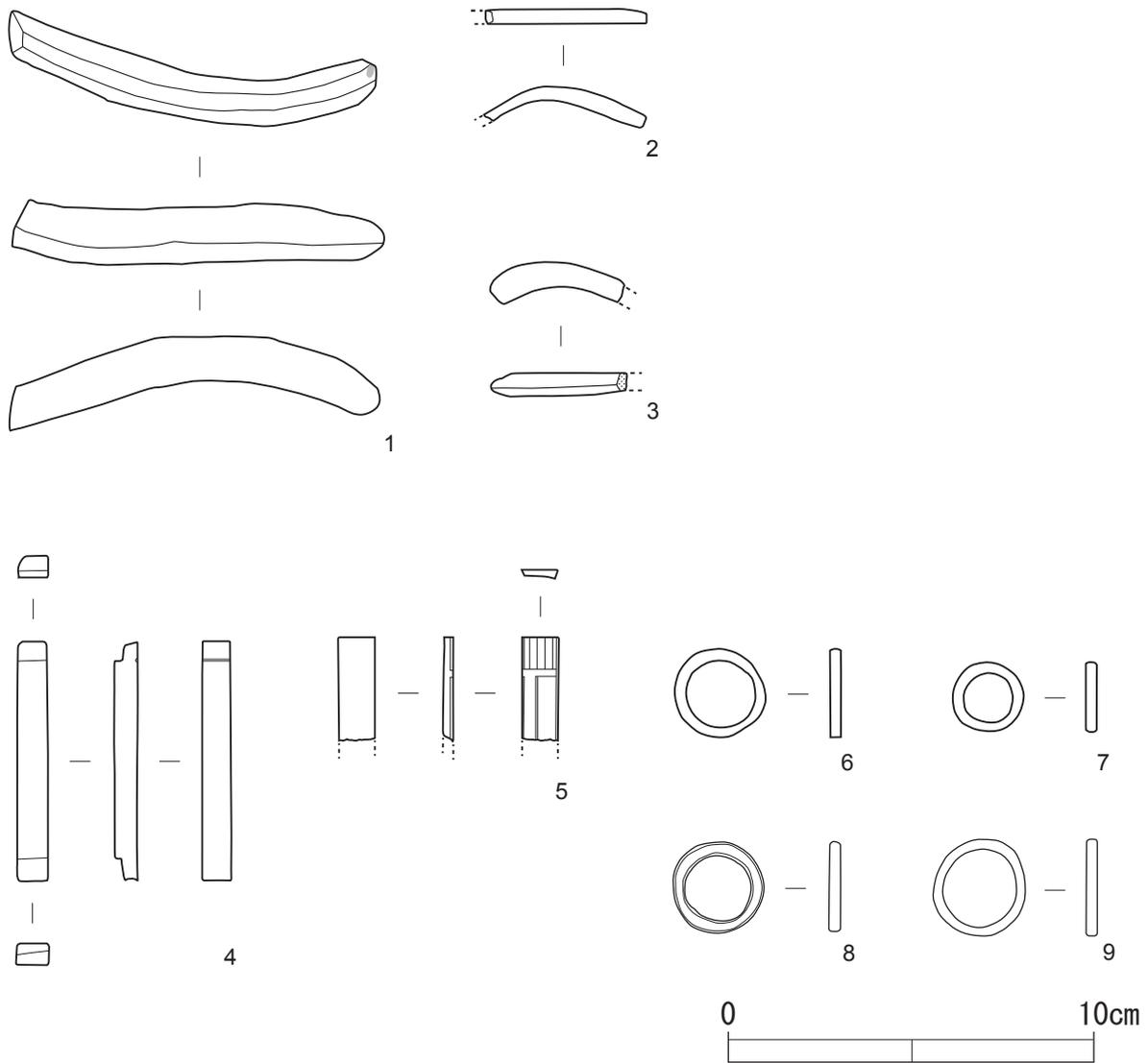


図7 シャフト90出土象嵌・指輪  
Fig.7 Parts of inlaid objects and faience rings from Shaft 90

ラで発見されており、第18王朝後期から第19王朝に年代づけられている (Schneider 1996: 49, Cat.306; Martin et al. 2001: 47, Cat.105)。本遺跡のシャフト71からも11点出土した (吉村他 2012: 30, 図9)。

f) ビーズ (図8)

特徴的なものについてだけ述べると、図8.1はB室から出土したスカラベ形の装飾品で、長軸方向に穿孔があった。

図8.2はA室から出土したベス神を象ったと考えられる青色ファイアンス製ビーズである。サッカラのイウルデフ墓やティアとティアの墓から同様の遺物が出土しており、前者は第3中間期、後者は末期王朝時代に年代づけられている (Raven 1991: 43, Cat.68, Pl.46.22; Martin 1997: 78, Cat.123, Pl.174)。

図8.3は何らかの動物を象ったファイアンス製のビーズであり、カバとも考えられるが、サッカラのイウルデフ墓から発見された例では“sow (ブタの雌)”と報告されており、第3中間期に年代づけられている (Raven 1991: 44, Cat.72, Pl.46.23)。グループでも同様の例が出土していた (Brunton and Engelbach 1927: 11,

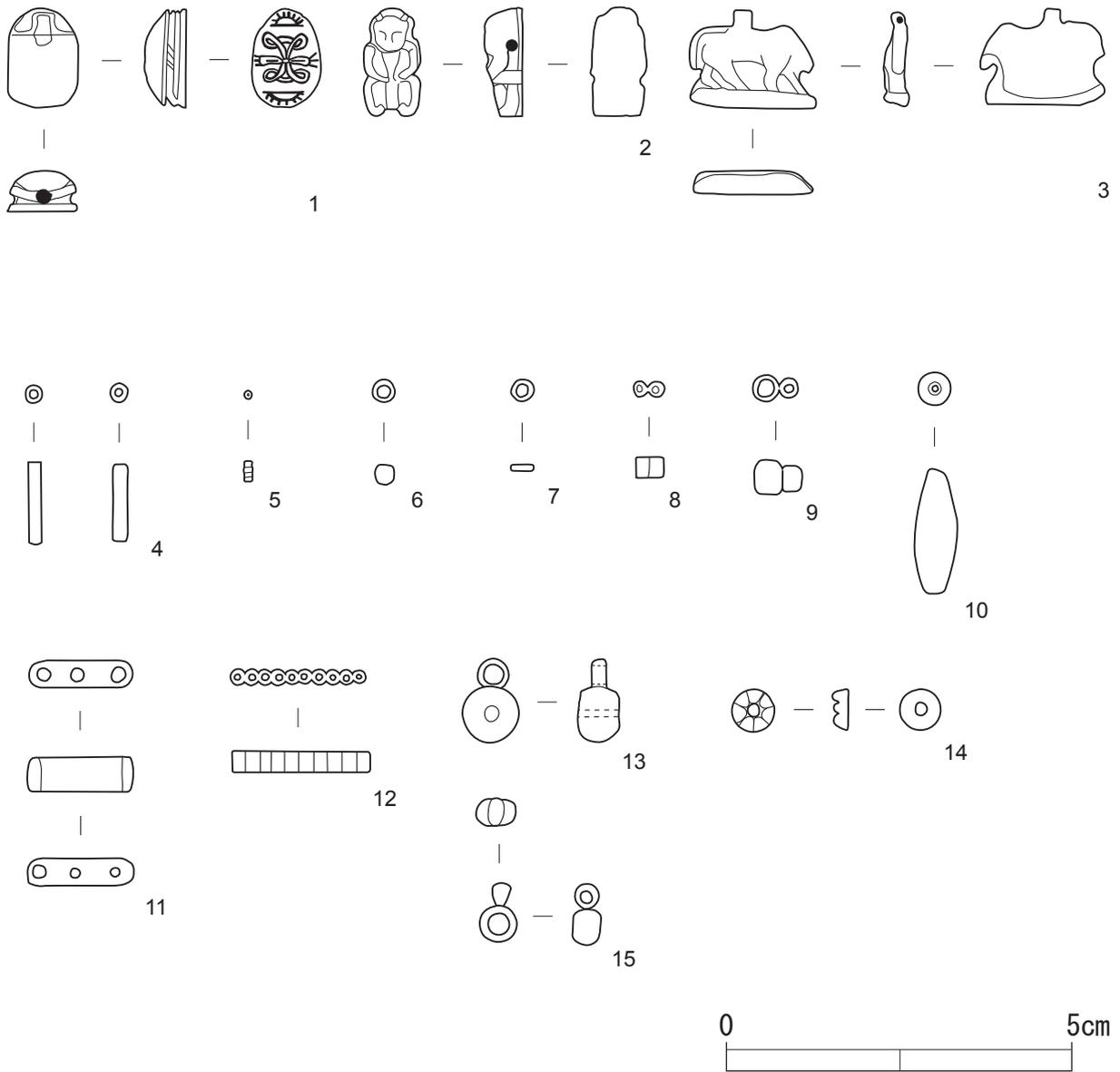


図8 シャフト90出土ビーズ  
Fig.8 Beads from Shaft 90

Pl.XXX.17, 24)。

g) 土器 (図9)

図9.3はA室北東コーナー付近で床面の直上から発見された。完形であり、土器の内面には泥状の付着物が見られた。それ以外は接合によって復元されたが、シャフト部、A室、B室、C室の様々な場所で発見された断片が1つの個体として接合する例が多く、激しく攪乱されていたことが推察される。

年代を示す特徴的な器形としてあげられるのはアンフォラであり、図9.12は器形からD.アストンによるType C1と考えられ、ラムセス2世治世からラムセス4世治世までの期間に類例が認められている (Aston 2004: 195-197)。図9.13、9.14のような幅広の形状で底部がわずかに尖底となっているアンフォラはD.アストンによるType B2に相当すると考えられ、ラムセス2世治世からセットナクトまたはラムセス3世治世頃

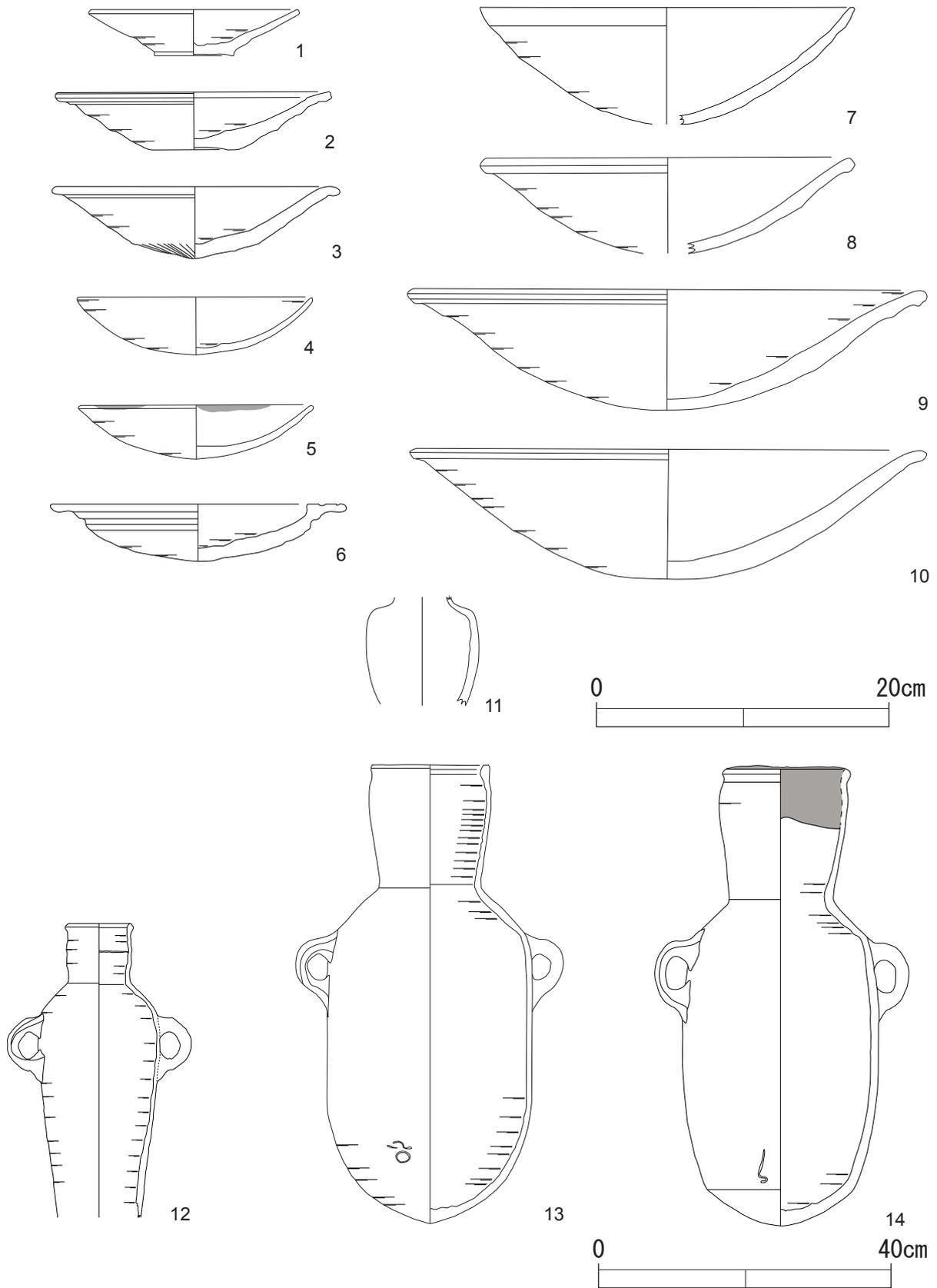


図9 シャフト90出土土器  
Fig.9 Pottery vessels from Shaft 90

まで使用されていたと考えられている (Aston 2004: 191-193)。

## (2) シャフト 95

### ①遺構の概要 (図 10)

シャフト 95 はグリッド 3E2 に位置し、2008 年第 14 次調査での地上部の発掘でシャフト開口部が発見されていた。開口部の長軸は南北方向であり、平面の大きさは南北 2.3m、東西 0.9m、シャフト部の深さは 2.9m であった。シャフトのほぼ最下部から西側に、南北に長い長方形の平面を有する部屋が作られていた。部屋は南北 1.9m、東西 0.4m、床面から天井までの高さが 0.8m であった。幅が 0.4 m であり、別個の埋葬室としては狭く、シャフトの底に棺と副葬品を置くためのスペースを確保する拡張という性格のものであったと推測される。

内部は盗掘による攪乱を受けており、土器片、骨、彩色プラスタール片、石灰岩片のみが出土した。

### ②出土遺物

#### a) 土器 (図 11)

本来の形状を復元できたのは 1 点のみであり、平底、短頸の壺形土器である。この器形は墓やファウンデーション・デポジットなどで発見されており、アメンエムハト 2 世治世からアメンエムハト 3 世治世に年代づけられている (Schiestl and Seiler 2012: 994-995)。

## (3) シャフト 96

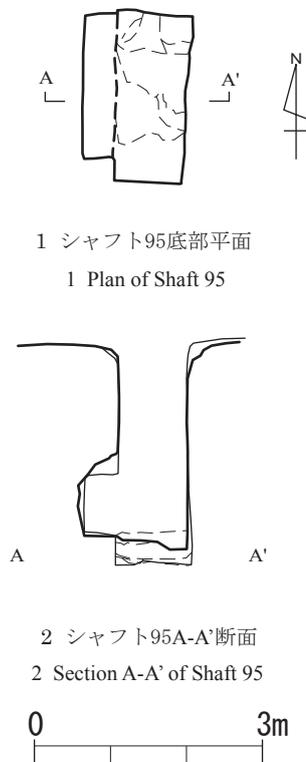


図 10 シャフト 95 平面・断面図  
Fig.10 Plan and Section of Shaft 95

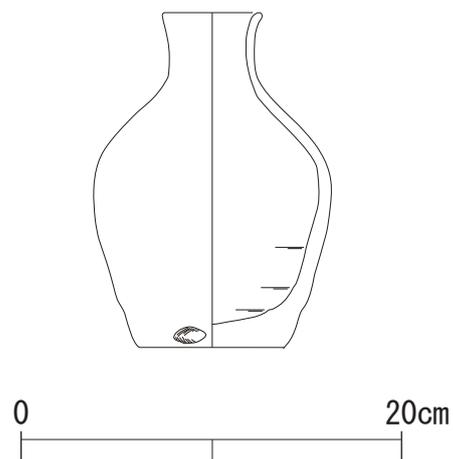


図 11 シャフト 95 出土土器  
Fig.11 Pottery vessel from Shaft 95

①遺構の概要 (図12)

シャフト96はグリッド3E2に位置し、2008年の第14次調査での地上部の発掘でシャフト開口部が発見されていた。開口部の長軸は東西方向であり、平面の大きさは南北1.1m、東西2.1m、シャフト部の深さは7.2mであった。シャフト最下部から西側に部屋が発見された(A室)。シャフト部の床面は西側のA室開口部が

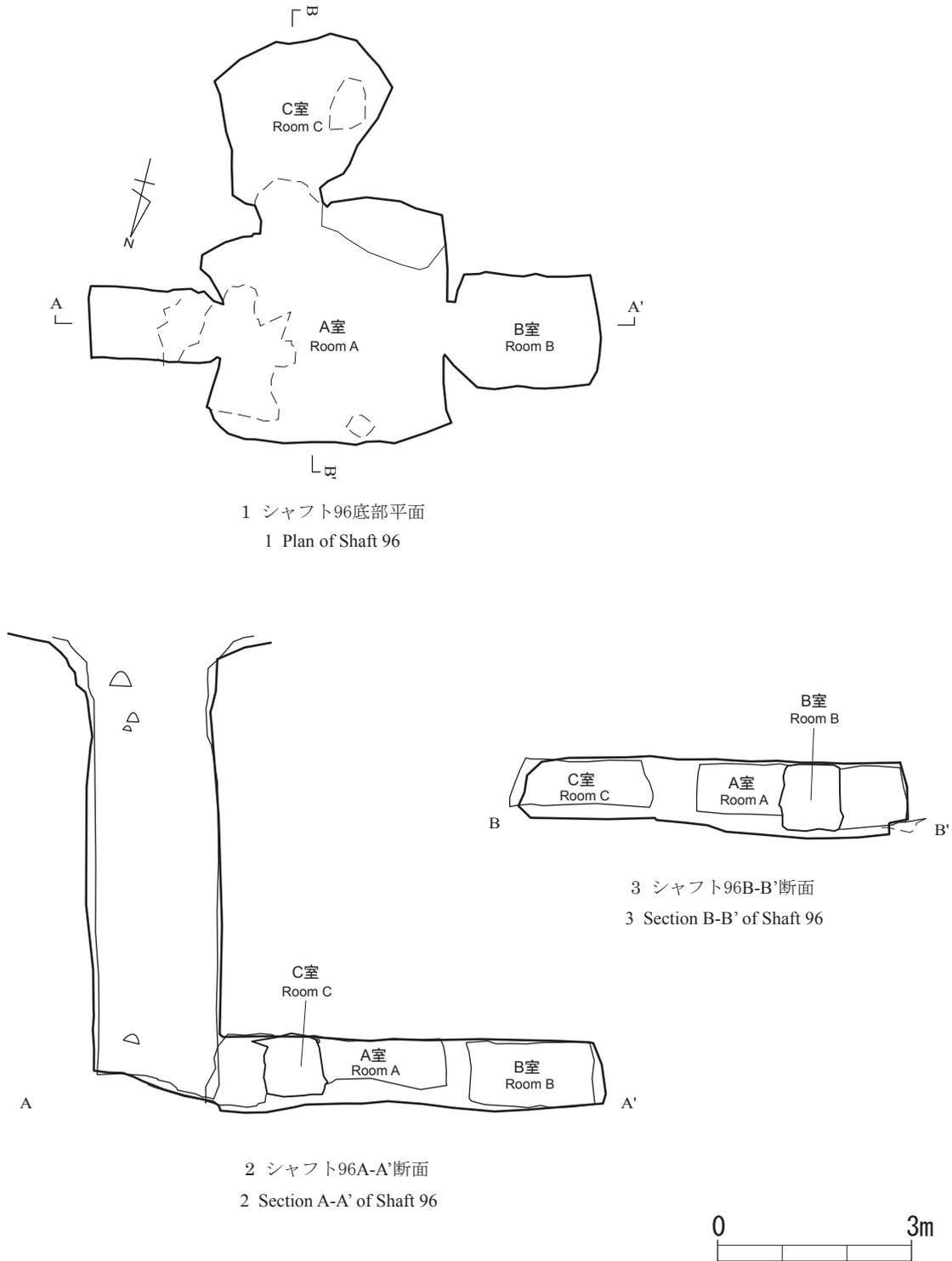


図12 シャフト96平面・断面図  
Fig.12 Plan and Section of Shaft 96

わずかに低くなるように、緩やかに傾斜していた。A室の平面は方形に近く、南北2.5m、東西3.8m、床から天井までの高さが1.3mであった。A室の西側と南側には別の部屋が設けられていた（それぞれB室、C室）。西側のB室は方形に近い平面であり、南北1.7m、東西2.0m、床から天井までの高さが1.0mであった。南側のC室の平面は南に向かって幅広になる台形状であり、南北1.4m、東西の最長部が2.7m、床から天井までの高さが1.0mであった。

シャフト部は黄色の砂によって満たされており、A室開口部前のレベルから板状の石灰岩の断片が複数出土した。同じ場所から陶製のシャブティの断片が発見された。A室内部はタフラ混じりの砂層が厚く堆積しており、南西コーナー付近にはタフラ塊を主体とする堆積があった。タフラ塊の堆積内からは何も発見されておらず、おそらくB室もしくはC室を掘削した際の廃土と考えられる。シャフト96出土遺物の大部分はA室の砂層から出土しており、陶製と木製のシャブティ、木棺片、人型木棺の眼と眉の象眼、ビーズ、土器片、金箔片、骨、彩色プラスターなどが出土している。

## ②出土遺物

### a) シャブティ (図13、14)

図13は陶製のシャブティであり、背面、底面と前面の上半部および銘文帯が黄色で彩色されていた。鬘や眼、口、手や持ち物など細部の表現や、銘文は黒色によって描かれていた。図13.1はシャフト部とA室から発見された断片が接合されたもので、図13.2はA室、図13.3はC室から発見された。これらは開放型の鋳型を利用して作られていたようであり、前面が型にはめ込まれ、背面の余った粘土を指で縦方向に調整した痕跡が残されていた。こうした特徴は新王国時代の陶製のシャブティに良く見られるものであり、第19王朝末頃から陶製のシャブティの利用例は増加すると言われている (Schneider 1977: 237)。類例はサッカラのティアとティアの墓からも発見されており、第19王朝に年代づけられている (Martin 1997: 71, Cat.44)。

図14はA室から発見された木製シャブティの一部である。図14.1、14.2は木の材の上に直接黒色の線で細部の表現や銘文帯が描かれていた。銘文帯には *shd 3sir B-wsrt ʕnh ti* 「セヘジュ、オシリス タ・ウセルト<sup>8)</sup> 生きよ」と書かれていた。両者とも背面には欠損部分をプラスターで補っている箇所があった。

図14.3は全面が黒色に塗られた木製シャブティである。銘文などは記載されていなかった。同様の例はサッカラでも発見されており、第19王朝に年代づけられている (Martin et al. 2001: 40, Cat.29a, Pl.77)。

### b) 象嵌 (図15.1～6)

全てA室から出土したものであり、図15.1は木棺の眼、図15.2～4は眉の部分と考えられる。図15.5は白色ガラス製で、木棺もしくは何らかの木製品の装飾として使用されていたと考えられる。図15.6は赤色ガラス製であり、人型棺の象眼装飾として使用されたと考えられ、いわゆるセウエレット・ビーズであった可能性がある。類例はサッカラでも発見されており、第19王朝に年代づけられている (Raven 2005: Cat.194, Pl.96)。

### c) ビーズ (図15.7～21)

ファイアンス製もしくはガラス製のビーズであり、全てA室から出土した。

### d) アミュレット (図15.22, 23)

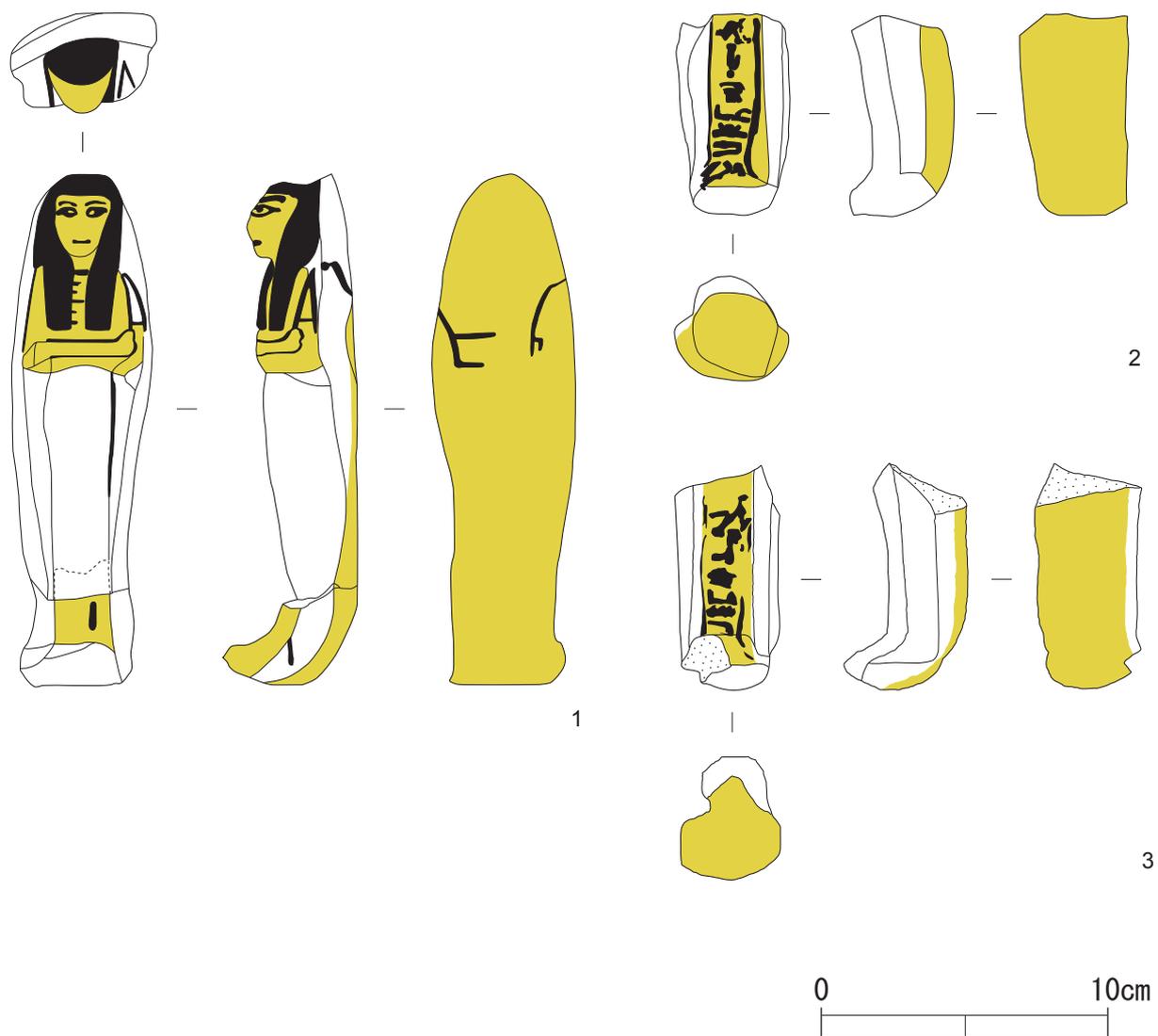


図 13 シャフト 96 出土陶製シャブティ  
Fig.13 Pottery shabtis from Shaft 96

図 15.22 は青色ファイアンス製で、パピルスの杖を象ったものと考えられる。同様の例はサッカラのティアとティアの墓、マヤとメリトの墓から出土しており、末期王朝時代に年代づけられている (Martin 1997: 78, Cat.132, Pl.174; Raven 2001: 48-49, Cat.242-244, Pl.21)。図 15.23 は白色のファイアンス製であり、断片的であるため本来の形状を推定することができなかった。

e) 石製容器 (図 16.1)

A 室から発見されたものであり、断片のため全体像は不明である。頸部と肩部と胸部の3つの部分に分割された石製容器が本遺跡のシャフト 105 から発見されており (吉村他 2013: 25, 図 10.1)、そのうちの頸部と類似している。

f) 土器 (図 16.2 ~ 5)

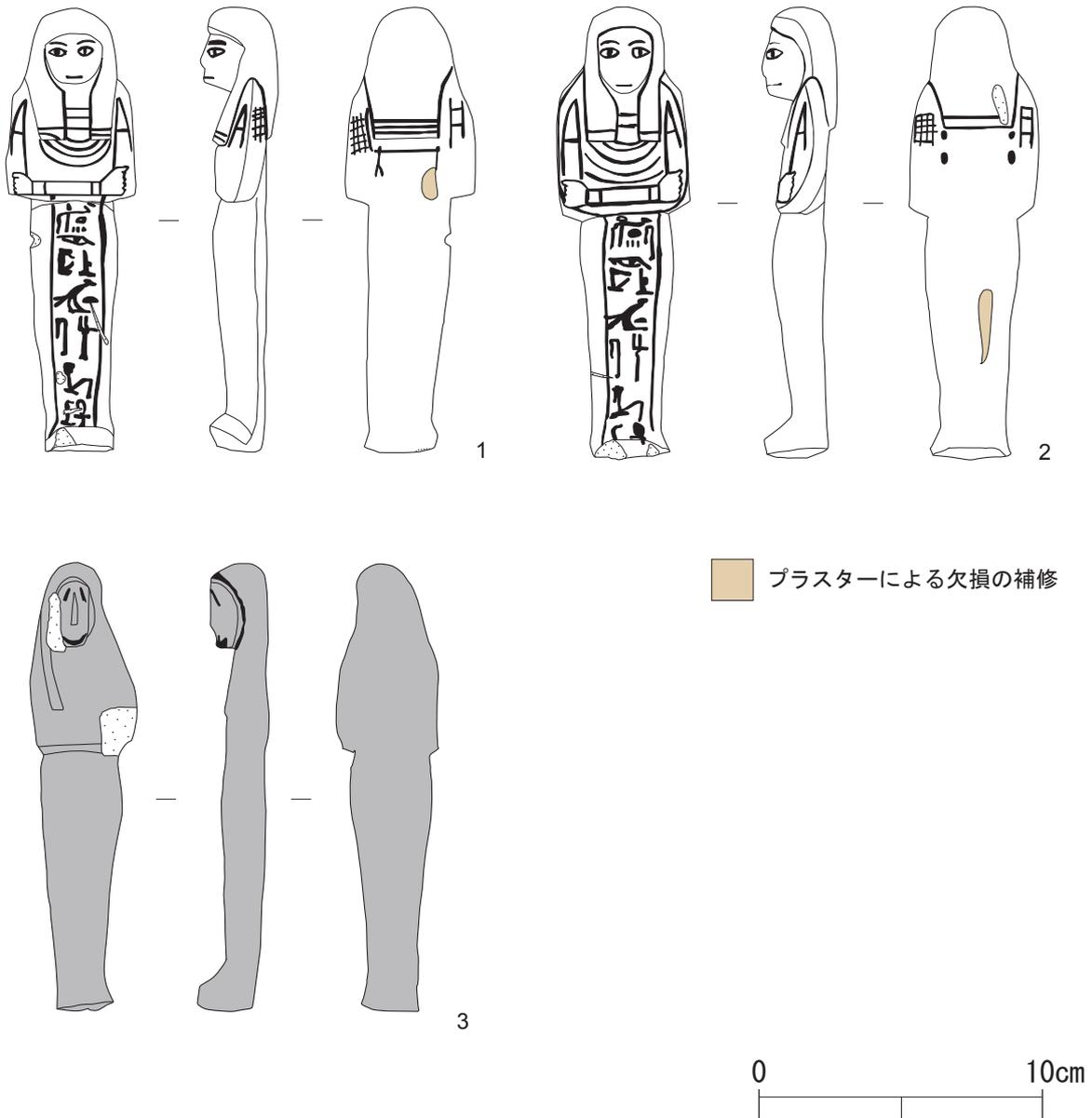
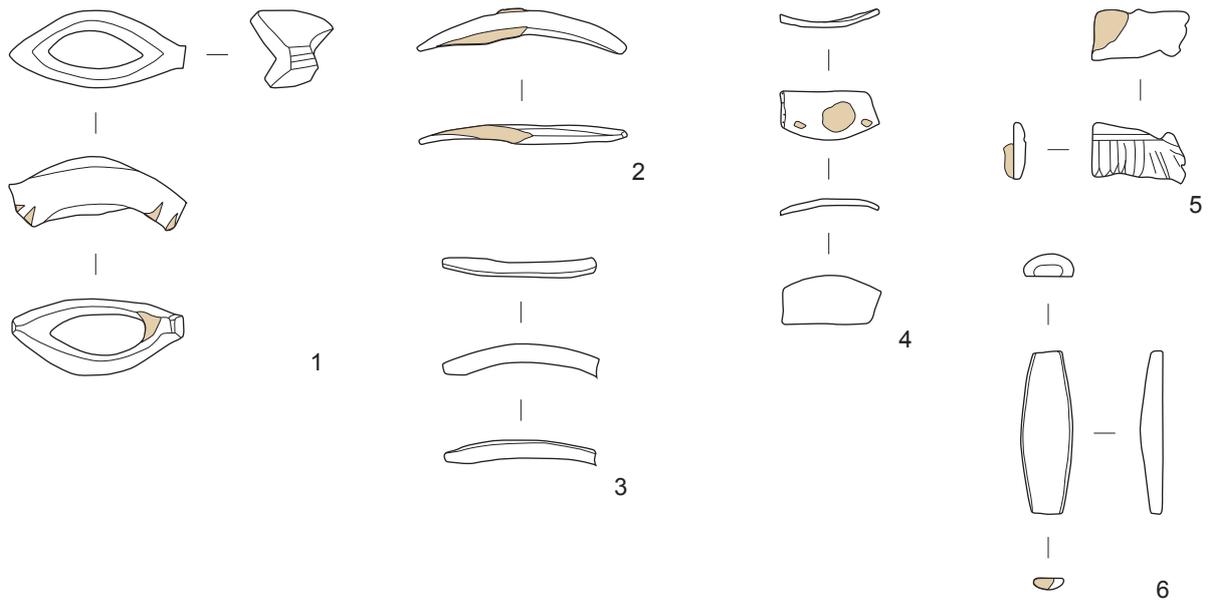


図14 シャフト96出土木製シャブティ  
 Fig.14 Wooden shabtis from Shaft 96

図に挙げられているものは全てA室から発見された。図16.2は特徴的であり、底部が内側に向かって窪み突起を成しており、全面に赤色スリッパが塗布され、軽くミガキが施されている。外面は火を受けたことによる黒変が認められた。グループで類例が発見されており、セティ2世頃とされているが (Petrie 1891: 18, Pl.XIX.15)、D. アストンは紀元前12～10世紀 (Phase I, Aston 1996: 61, Fig.190) という年代を与えている。

#### (4) シャフト113



■ プラスター付着部

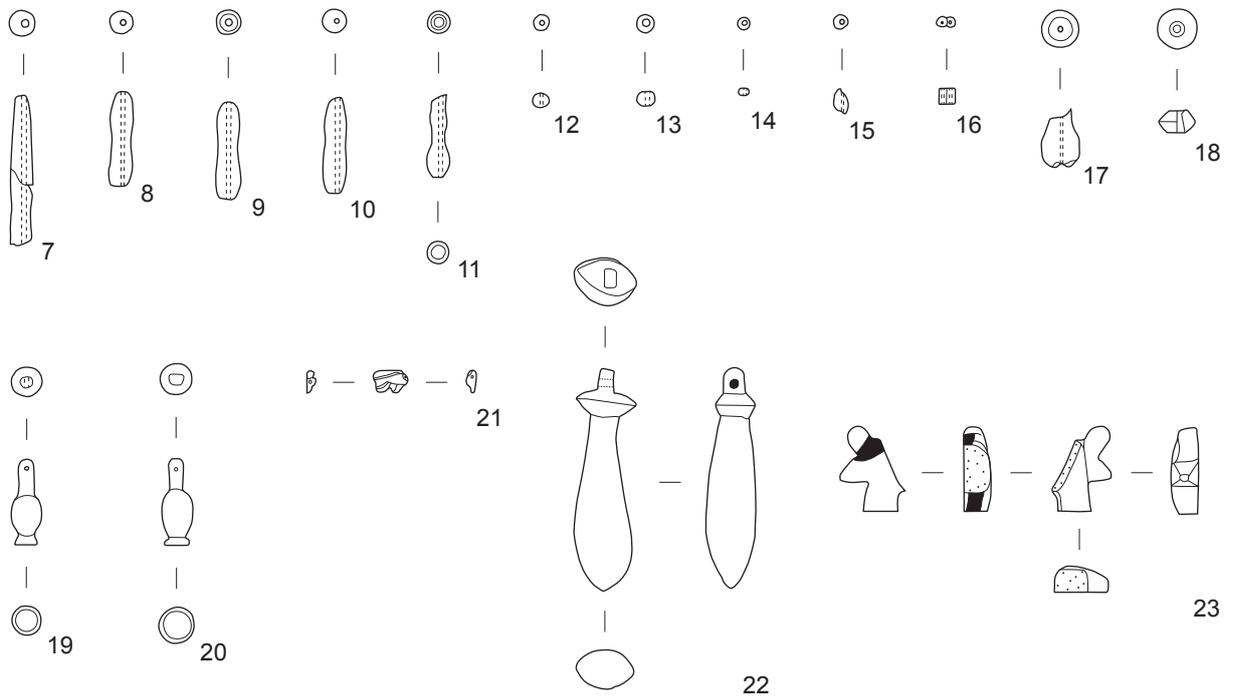


図15 シャフト96出土象嵌・ビーズ・アミュレット  
Fig.15 Inlays, beads and amulet from Shaft 96

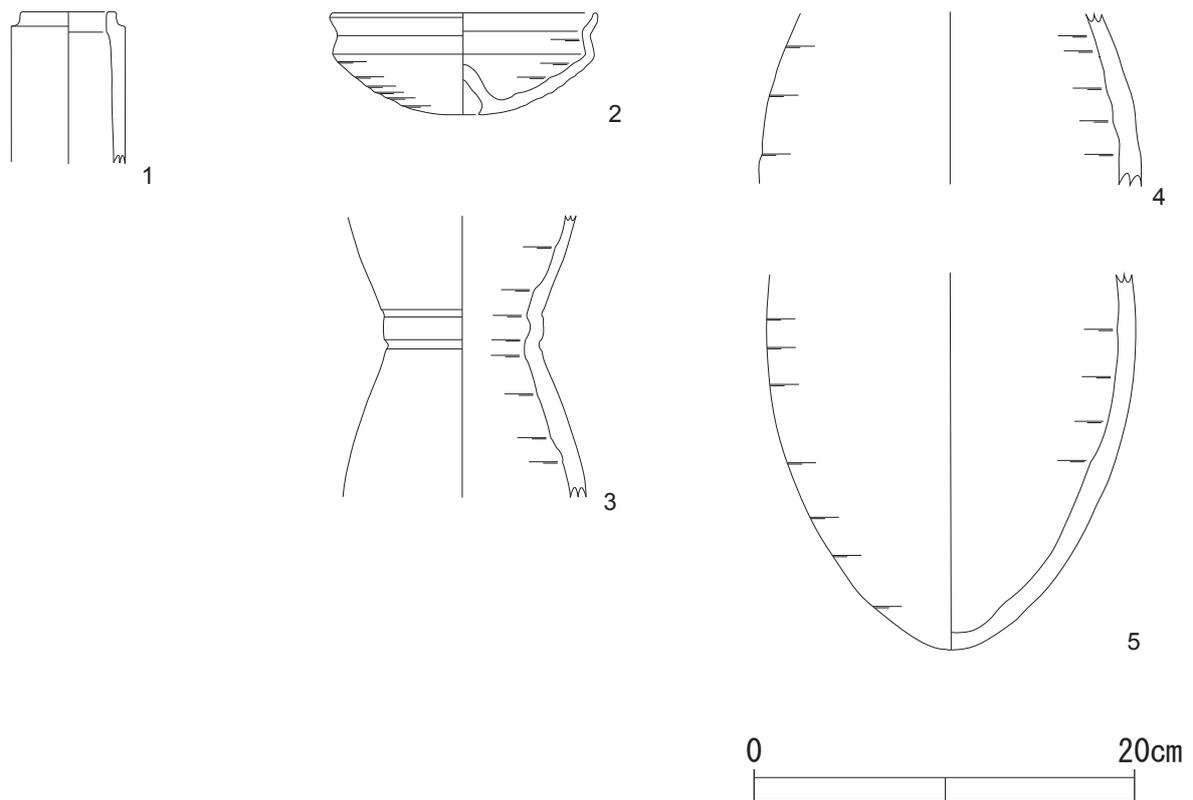


図16 シャフト96出土石製容器、土器  
Fig.16 Stone and pottery vessels from Shaft 96

#### ①遺構の概要（図17）

シャフト113はグリッド3E42に位置し、今次調査の地上部の発掘によって発見された。シャフト開口部の長軸は南北方向であり、平面の大きさは南北1.9m、東西0.7m、シャフト部の深さは2.8mであった。シャフト最下部から南側に部屋が発見された（A室）。A室の平面は南北に長い長方形であり、南北1.9m、東西0.7m、床から天井までの高さは1.3mであった。シャフト部からA室にかけての床面は、北側から南側に向かって緩やかな傾斜となっている。

シャフト113のA室にはおそらく中王国時代に典型的な箱型木棺が納められており、そこに水が流入し、木棺とA室壁との隙間や、木棺の下部に横方向に置かれた、木棺を支える「足」となっている4本の部材の間に水に溶けたタフラが流入し、乾燥して固まったと推測される。その後木棺は崩壊したが、その周囲にあったタフラは壁となって残った（写真1）。タフラの西側壁の下部にはまだ木棺の側面下部の部材が貼り付いていた。木棺の表面の装飾がそのままタフラの壁に残っていたことや、発見された木棺の部材から、木棺の本来の姿は長手方向の側面に4本の銘文帯があり、短手方向の側面に2本の銘文帯があるタイプの木棺（H. ウィレムズによる分類の Type IV、Willems 1988: 136-137）であることが分かった。銘文は青色で書かれていたが、被葬者の名前や銘文の内容については断片的であるため判読することができなかった。このタイプの木棺に一般的に描かれるウジャトの眼の、下にあたる箇所（東壁の北側下部）には偽扉の装飾があったことも、壁に残された痕跡から明らかになった（写真2）。残された部材と壁面から、この木棺の平面の大きさは長さ190cm、幅58cmであったと考えられる。

木棺片以外の遺物としては、土器とその封泥、骨が出土した。

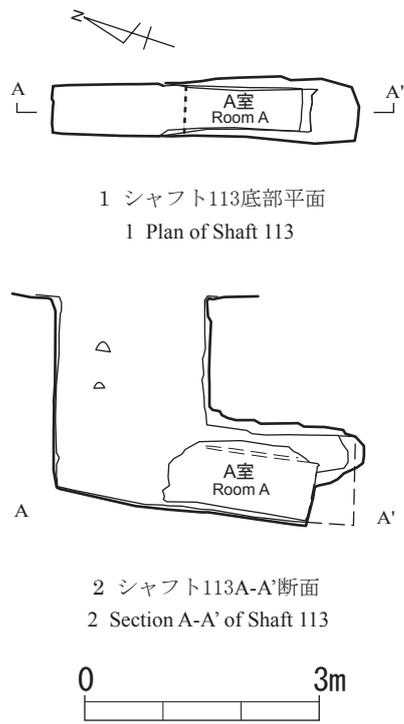


図17 シャフト113平面・断面図  
Fig.17 Plan and Section of Shaft 113

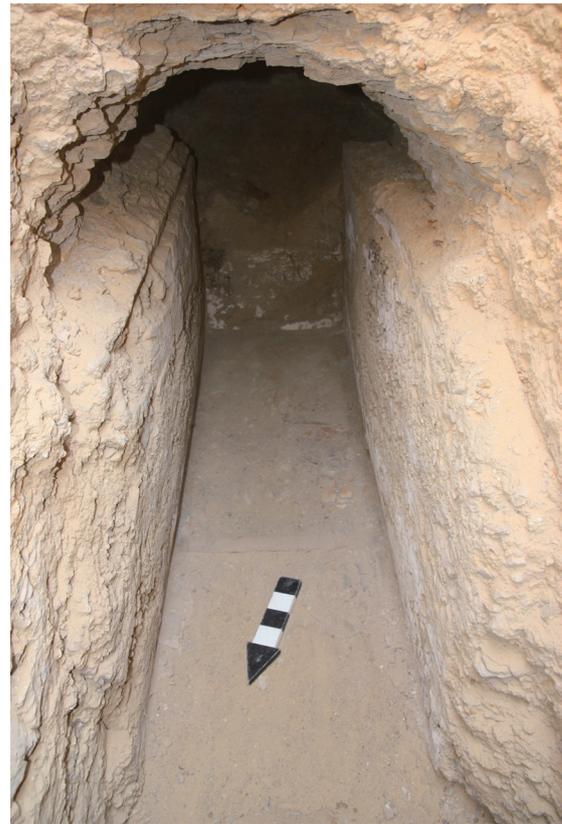


写真1 シャフト113 A室のタフラの壁  
Photo 1 *Tafta* wall of Room A in Shaft 113



写真2 シャフト113 A室東側タフラ壁に残った木棺のファサード装飾  
Photo 2 Trace of façade decoration of coffin remained on eastern *Tafta* wall of Room A in Shaft 113

## ②出土遺物

## a) 土器 (図 18)

図 18.1 はシャフト部から出土した Nile B2 のミニチュア平底皿形土器、図 18.2 はシャフト部と A 室で発見された断片から接合された Nile C の大型の丸底壺形土器である。後者は R. シストルと A. ザイラーによる分類では Class 5 に相当すると考えられ、第 13 王朝初期に年代づけられる (Schiestl and Seiler 2012: 672-673) 9)。

## (5) シャフト 122

## ①遺構の概要 (図 19)

シャフト 122 はグリッド 2E48 北東部に位置し、今次調査の地上部の発掘によって発見された。シャフト開口部の長軸は東西方向であり、平面の大きさは南北 0.9m、東西 1.7m、シャフト部の深さは 4.5m であった。シャフト上部は石灰岩ブロックによる壁体が残存していた。シャフト最下部から西側に部屋が発見された

(A 室)。A 室の平面は東西にやや長い長方形であり、南北 1.5m、東西 2.7m、床から天井までの高さが 1.6m であった。A 室の南側は隣接するシャフト 123 のシャフト部に繋がっており、開口部には日乾煉瓦によって封鎖壁が築かれていた。封鎖壁は床面から高さ 0.7m まで残存していた。

シャフト部は主に細砂によって満たされており、A 室開口部前からレリーフ片と木棺片が発見された。A 室はタフラ粒が混じる砂層が厚く堆積しており、木棺片、土器片、骨などが出土した。

## ②出土遺物

## a) 石灰岩製レリーフ (図 20)

シャフト部の A 室開口部前のレベルから出土した。沈み浮き彫りで、5 人の人物が左側に向かって礼拝をする姿が描かれていた。左から 2 番目と 3 番目の女性は右手にシストラムを持っており、3 番目の女性は左手にパピルスを持っている。1 番目と 2 番目の人物の間には *nbt pr šmꜣyt ..* 「家の女主人、歌い手」、2 番目と 3 番目の人物の間には *s3t=s šmꜣyt ...* 「彼女の娘、歌い手」と書かれていた。厚さが約 8cm で薄いことから、ステラの一部であった可能性が考えられる。

## b) 木棺片 (図 21)

図に掲載したものは両者ともシャフト部の A 室開口部前からまとめて出土した。図 21.1 は人型木棺頭部の断片で、鬢にはロータスの図像が赤の線で描かれており、肌の部分は赤褐色に塗られていた。眼と眉の輪郭は黒色によって描かれており、唇の輪郭は赤色の線によって書かれていた。ロータスを鬢の中央に配す

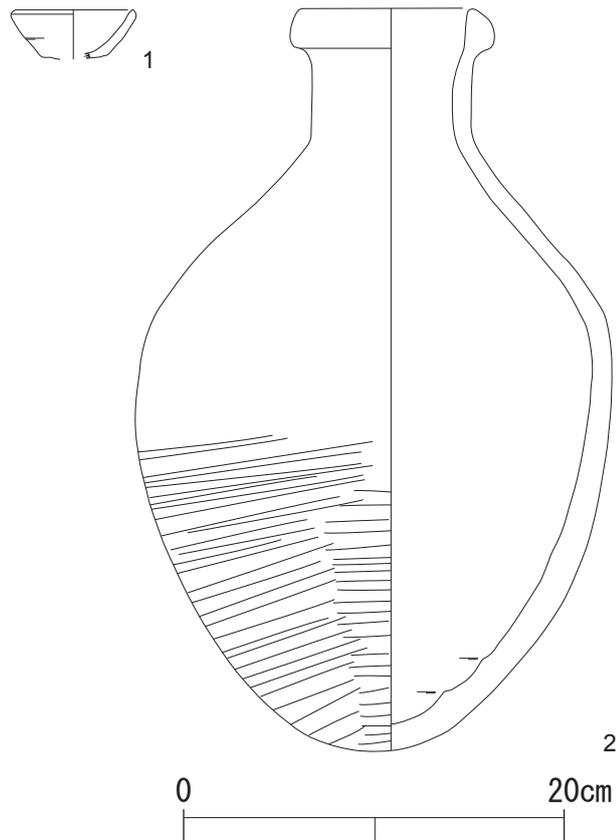
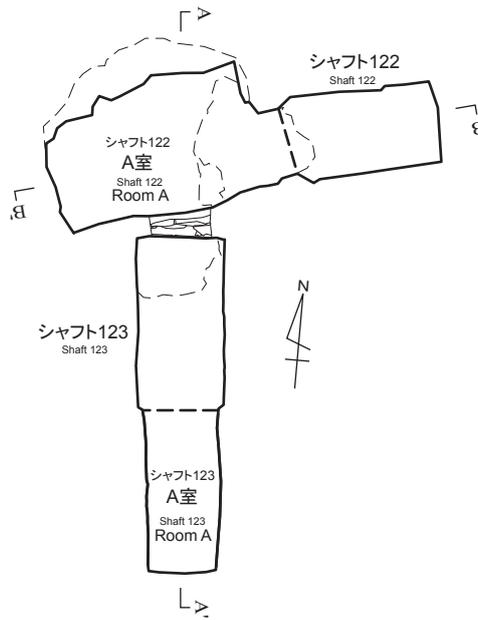
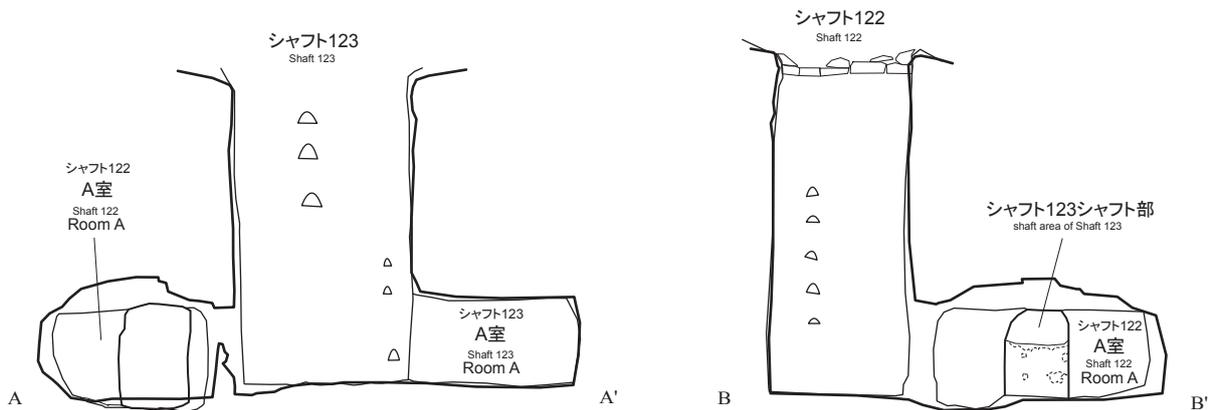


図 18 シャフト 113 出土土器  
Fig.18 Pottery vessels from Shaft 113



1 シャフト122、123底部平面  
1 Plan of Shaft 122, 123



2 シャフト122、123A-A'断面  
2 Section A-A' of Shaft 122, 123

3 シャフト122、123B-B'断面  
3 Section B-B' of Shaft 122, 123



図19 シャフト122、123平面・断面図  
Fig.19 Plan and Sections of Shaft 122 and 123

るのは第19～20王朝の黄色を背景に持つ木棺によく見られる特徴である (Niwinski 1988: 12)。図21.2は人型木棺の右手部分であり、表面は同様に赤褐色で肌の色が表現されていた。

(6) シャフト123

①遺構の概要 (図19)

シャフト123はグリッド2E48北東部に位置し、今次調査の地上部の発掘によって発見された。シャフト開口部の周囲は南北5m、東西4mほどの範囲で浅く掘り込まれていた。シャフト開口部の長軸は南北方向

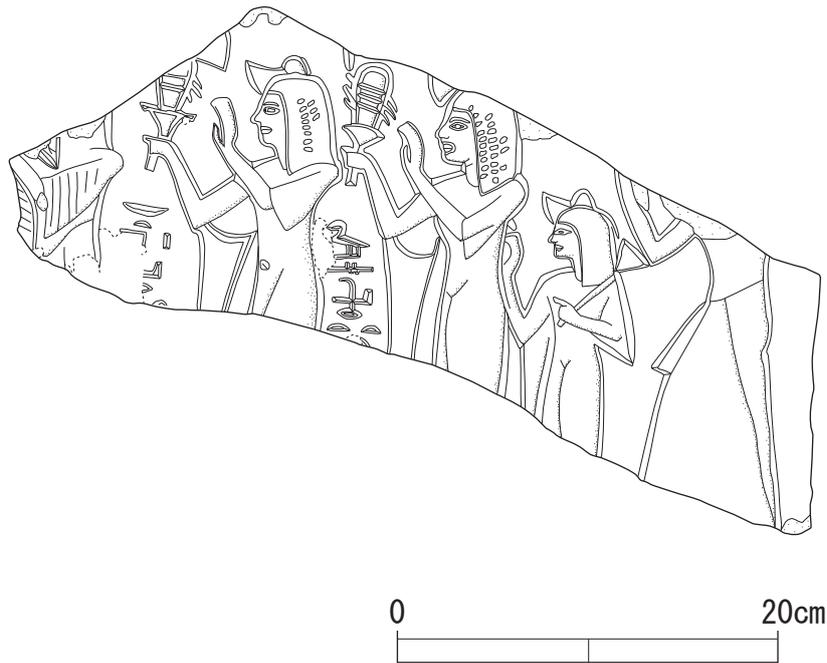


図20 シャフト122出土石灰岩レリーフ  
Fig.20 Limestone relief fragment from Shaft 122

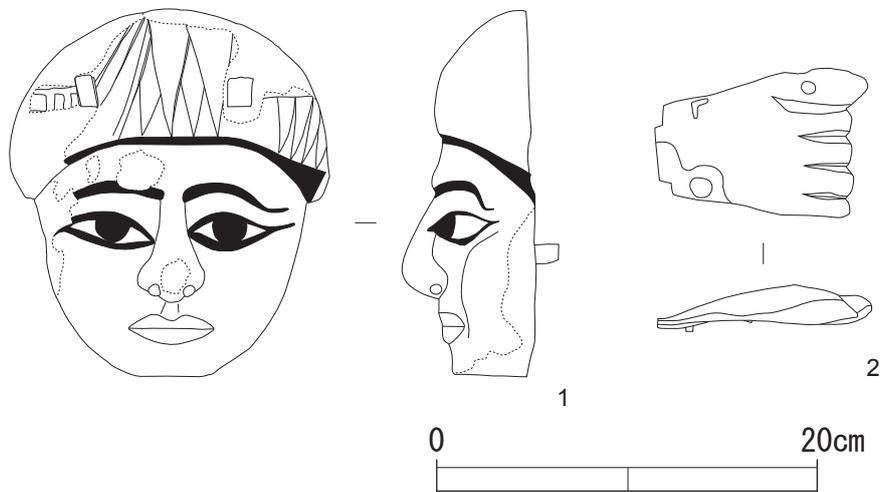


図21 シャフト122出土人型木棺片  
Fig.21 Fragments of wooden anthropoid coffin from Shaft 122

であり、平面の大きさは南北2.3m、東西1.1m、シャフト部の深さが4.2mであった。シャフト最下部から南側に部屋が作られていた（A室）。A室の平面は南北に長い長方形であり、南北2.1m、東西0.9m、床から天井までの高さは1.2mであった。シャフト最下部の北壁は前述のシャフト122のA室に通じる開口部があった。

シャフト部の床面に近い褐色のタフラ粒が混じった層からは中王国時代に年代づけられる土器片が数多く出土した。完形の大型丸底壺形土器（図23.13）が、A室開口部前、シャフト部の南東コーナー付近の床面

直上から発見された。その傍らからこの土器のものと思われる封泥も出土した。ちょうど対となる位置、すなわちシャフト部北西コーナーからも上部が失われた大型丸底壺形土器(図24.1)が床面直上から出土した。出土状況から見て、これらの土器群は埋葬時の状況をそのままとどめており、おそらく北側にも本来は埋葬室があったものと推測される。シャフト123への開口部は、シャフト122のA室が掘削された段階で貫通したものではなく、もともとシャフト123の北側に埋葬室の空間があり、そこにシャフト122のA室を掘削している段階でぶつかったということである。シャフト123北側開口部の高さがシャフト123のA室とほぼ同一であり、開口部の側面が整形されていることもこの推測を裏付けている。

## ②出土遺物

### a) 石灰岩製ステラ片(図22)

A室から発見されたもので、コーニスを持つステラの右上端である。図像や銘文が描かれるスペースの厚さとシャフト122のシャフト部から発見されたレリーフ片の厚さがほぼ同じであることから、これらの断片は同一の個体に由来する可能性がある。

### b) 土器(図23、24)

土器片の多くはシャフト部より発見された。ミニチュアの平底皿形(Nile C、図23.1、2)、高台付鉢形(Nile C、図23.5、6)半球形碗形(Nile B1、図23.8～10)、大型丸底壺形(Nile C 図23.12～18、図24.1、2)などは中王国時代の埋葬でよく見られる器形である。シャフト部の床面直上から発見された大型丸底壺は、R. シストルとA. ザイラーによる分類ではClass 3bに相当すると考えられ、センウセレット3世治世から第13王朝中期までこの器形は認められている(Schiestl and Seiler 2012: 652-656)。さらに、テル・エル＝ダバア出

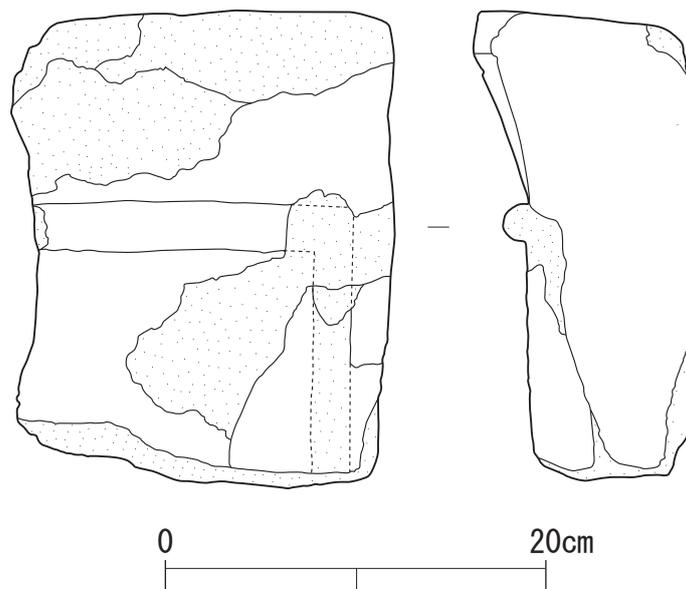


図22 シャフト123出土石灰岩製ステラ片  
Fig.22 Fragment of limestone stela from Shaft 123

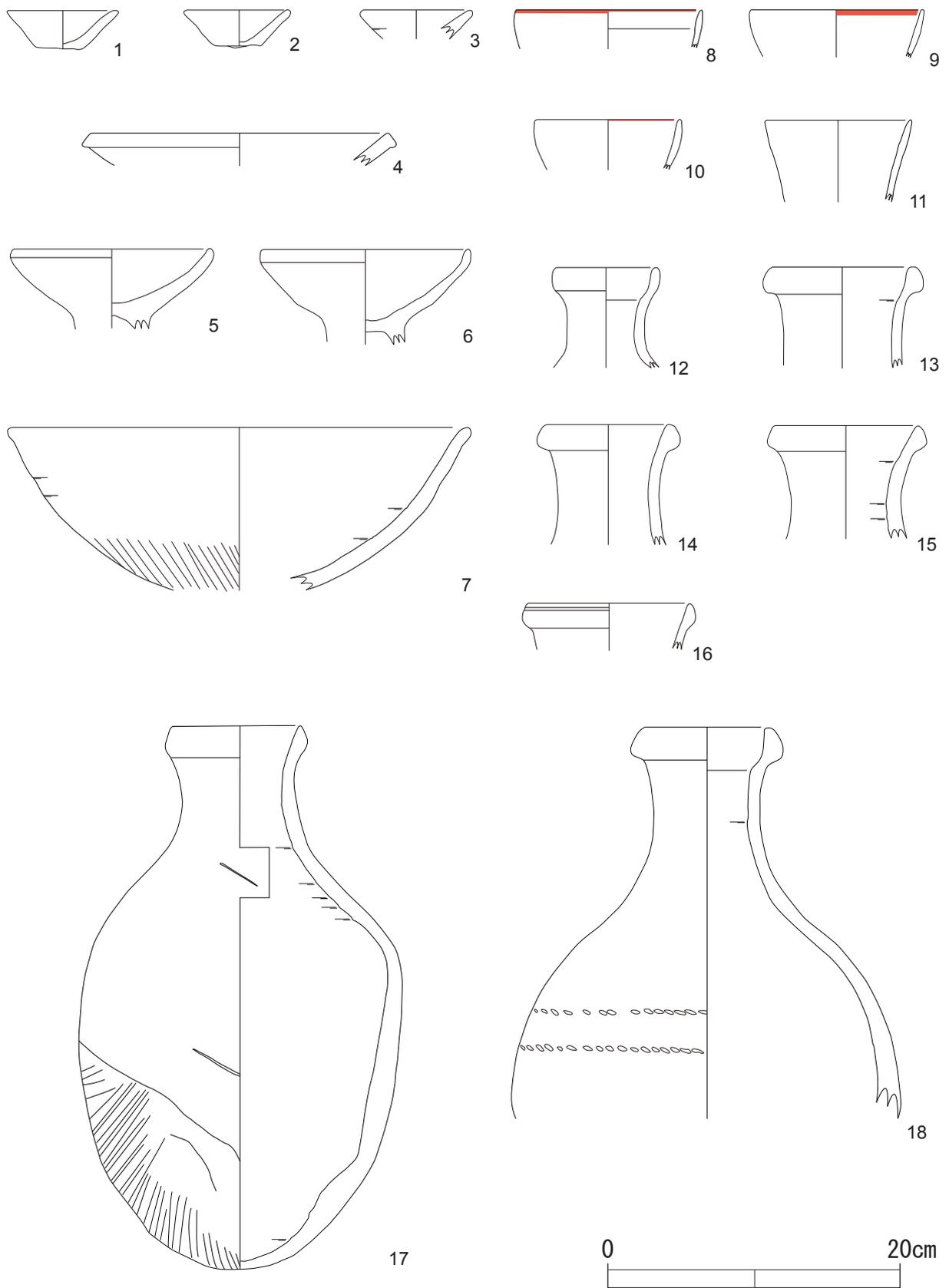


図23 シャフト123出土土器(1)  
 Fig.23 Pottery vessels from Shaft 123 (1)

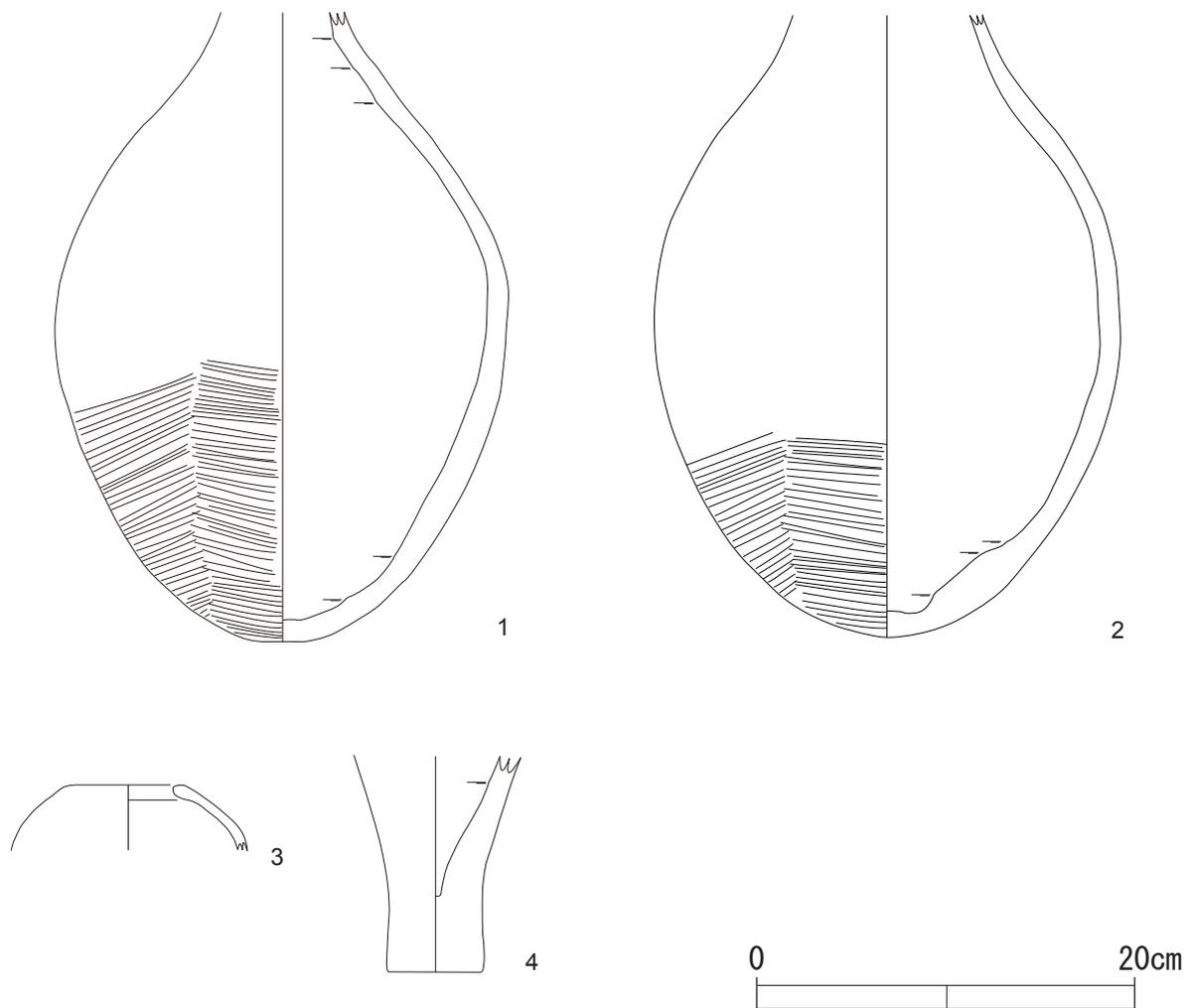


図24 シャフト123出土土器(2)  
Fig.24 Pottery vessels from Shaft 123 (2)

土の同器形の年代に関する研究 (Szafranski 1998) の基準に従うならば、この中でも第13王朝初期に年代づけられることになる<sup>10)</sup>。

#### 4. 土壙墓の発掘調査

##### (1) 土壙墓 19p-011 (図 25.1, 2)

###### ①遺構の概要

土壙墓 19p-011 はグリッド 2E50 に位置しており、今次調査での地上部の発掘によって発見された。土壙は南北に長く、南北 1.0m、東西 0.3m、深さ 0.4m であった。土壙の内部にはタフラ粒を含む赤褐色の砂層があり、その下から植物のマットにくるまれた埋葬が未盗掘で発見された。埋葬は子供のもので、頭を北側に向け、埋葬姿勢は仰臥位であった。首にあたる部分には渦巻き状の装飾を持つガラス製のビーズ、径 1mm 前後の球状のビーズが複数出土した。それよりやや南側からは金銅製の耳飾りが 1 点発見された。

###### ②出土遺物

###### a) 金銅製耳飾り (図 26.1)

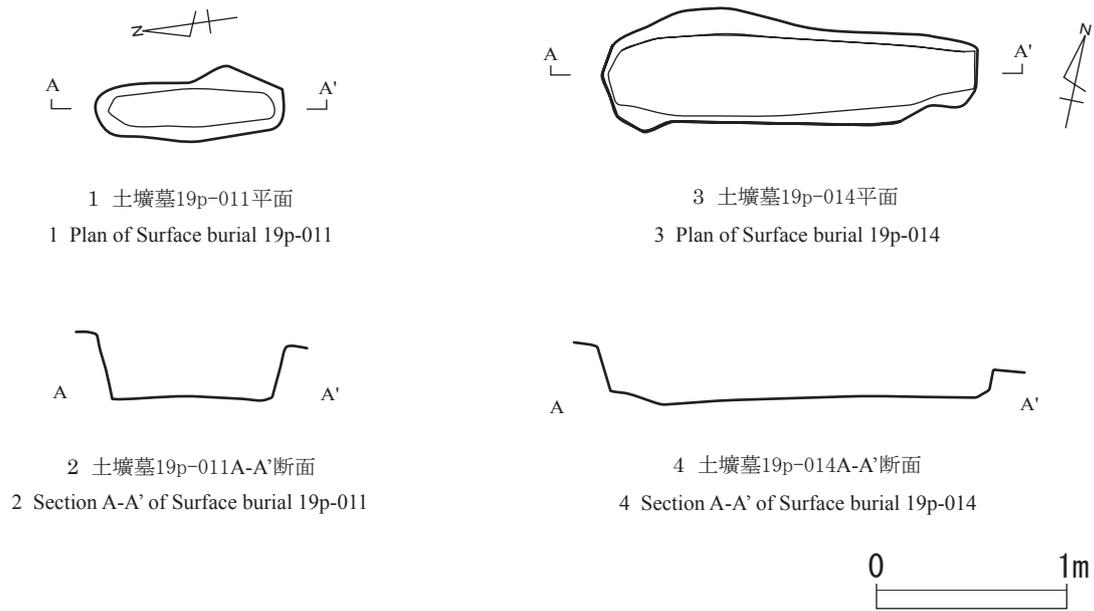


図25 土壙墓 19p-011、19p-014 平面・断面図

Fig.25 Plans and Sections of Surface burial 19p-011 and 19p-014

耳飾りは Leech-shaped (ヒル形) とも称される形状で、新王国時代に類例がある (Andrews 1990: 111, Fig.91g)。本体部分は表裏2枚の部品をつなぎ合わせて造られており、きわめて細いワイヤーを撚り合わせた装飾が、つなぎ目に沿って付けられていた。

b) ガラス製ビーズ (図 26.2、写真 3)

図 26.2 はローゼットを模した特徴的な意匠を持つガラス製ビーズであり、黄色を基調として白色、青色、黒色で模様が描かれていた。完全に同じではないが類例がグラブから出土している (Brunton and Engelbach 1927: Pl.XLIII.46.B-J)。グラブでこの種類のビーズが発見された墓でもほとんどが同様にマットを利用した埋葬だった (墓番号 22、249、276A、456、460、478、490)。



写真3 土壙墓 19p-011 出土ビーズ  
Photo 3 Beads from Surface burial 19p-011

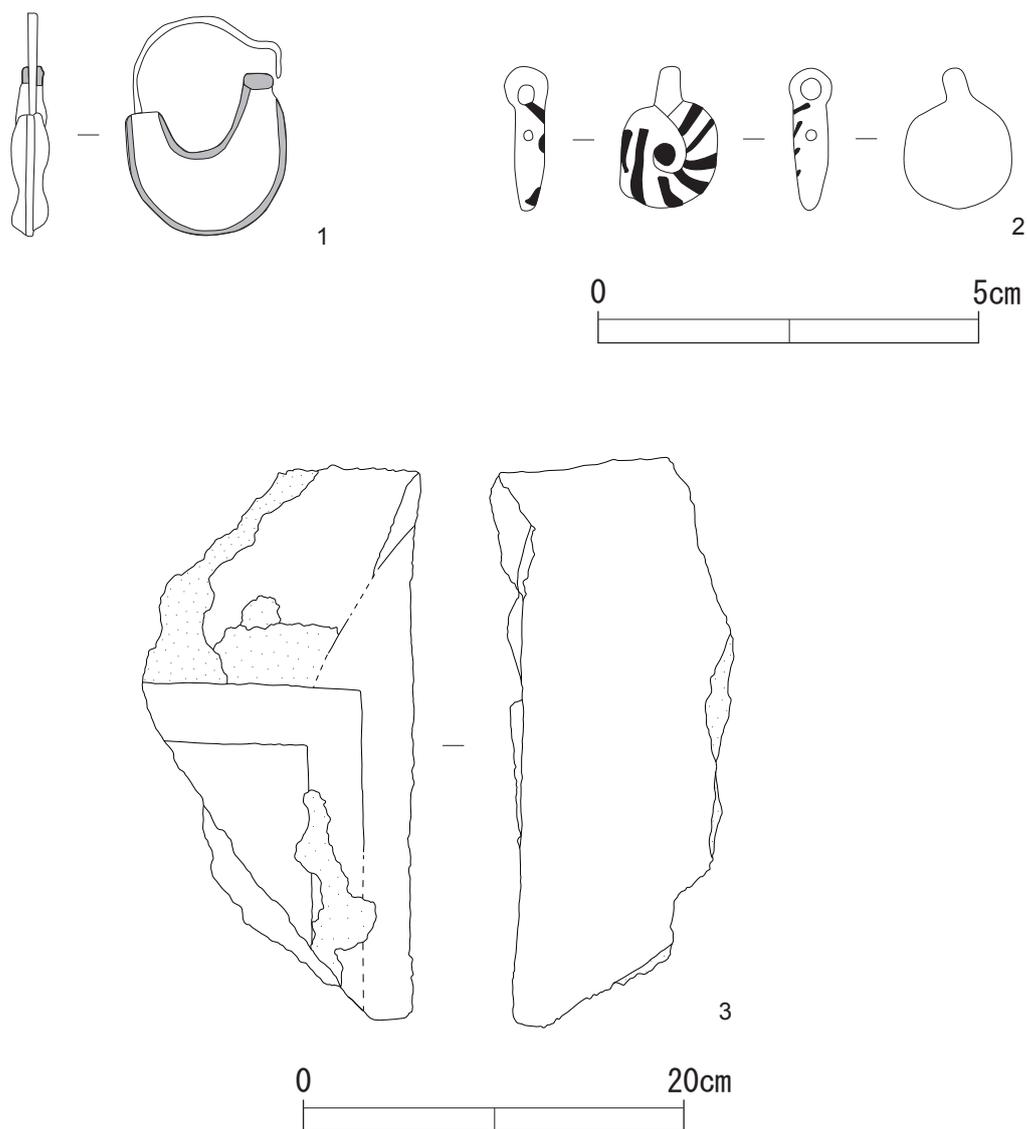


図26 土壙墓 19p-011、19p-014 出土遺物  
Fig.26 Finds from Surface burial 19p-011 and 19p-014

(2) 土壙墓 19o-014 (図 25.3, 4)

土壙墓 19p-014 はグリッド 2E50 の北縁に位置しており、今次調査の地上部の発掘によって発見された。土壙は東西に長く、南北 0.5m、東西 2.0m、深さ 0.4m であった。盗掘による攪乱を受けていたが、西側に頭骨の破片が残存しており、土壙の東側には脚部の骨が出土していることから、おそらく西に頭を向けていたと考えられる。土器片がわずかに発見されたが、断片的であるため、器形を推測するには至らなかった。東端には土壙に蓋をするような形で置かれていた石灰岩片(図 26.3)が発見されており、コーニス(柱頭)を有する石灰岩製ステラの右上端の断片と考えられる。

5. おわりに

今次調査でも、中王国時代、新王国時代の2つの時代の埋葬習慣について興味深い資料を取得することができた。

シャフト90および96は激しく攪乱されていたものの、シャブティを中心に第19王朝から第20王朝に年代づけられる遺物群を発見することができた。シャフト90と96は、平面の位置関係からシャフト84（第18次調査、吉村他2012: 17-21）、シャフト86（第15次調査、吉村、近藤、長谷川他2011: 61-65, 70-82）、シャフト88（第14次調査、吉村、近藤、矢澤他2011: 22-23, 46-57）と並ぶ一連のグループのようにも見受けられたが、これらは出土遺物や年代にも差があり、一様ではないことがわかってきた。また、シャフト90と96では、地下室の構成は類似してはいるものの、前者から出土するシャブティはファイアンス製、後者は陶製と木製に限られるように、隣接するシャフトであってもその内容は異なってくる。こうした差異をどう評価していくかは、今後の課題である。

中王国時代については、シャフト墓内部での調査成果もさることながら、地上部での祭祀活動の痕跡が発見されたことは貴重な成果と言える。明確な地上の構造物を持たないシャフト墓での祭祀活動の痕跡は報告例が乏しく、中王国時代の葬送儀礼を考古学の面から補足するものとなる。

土壙墓では植物のマットにくるまれた子供の未盗掘の埋葬を1基発見することができた。装身具の類例を参照すると、同様にマット葬であり、埋葬の形態および被葬者の属性と装身具利用との関係は今後検討に値するだろう。

「タ」墓周辺で集中的に発掘を行ってきたことで、墓域の西端における様相が明らかになりつつある。今後も調査継続することで、墓域全体の形成過程や埋葬習慣を考察するための資料を蓄積していきたい。

## 註

- 1) 第19次調査の隊員構成は次の通りである。隊長：吉村作治、現場主任：矢澤健、考古学班：近藤二郎、和田浩一郎、高橋想、北村玲、堀内則子、半田竜介、建築学班：西本真一、X線分析班：中井泉、阿部善也、張本路丹、遠山加奈枝、GIS・探査班：津村宏臣、岸田徹、渡邊俊祐、サイバー大学実習生：荒木利美、大田幸治、大橋陽子、白岩和雄、菅井映子、砥綿宏樹、中達美恵、渉外：吉村龍人、ムハンマド・アシュリー。図版の作成は早稲田大学エジプト学研究所の堀内則子、高橋想、半田竜介を中心に行われ、その努力に帰するところが大きい。ここに記して感謝の意を表したい。
- 2) 胎土の分類はウィーン・システムに準拠している (Nordström and Bourriau 1993: 168-182)。以降の土器の胎土に関する記述も同様である。
- 3) テル・エル＝ダバアの資料を用いた大型丸底壺形土器の研究では、(口縁部の最大径) / (口唇の厚み) × 100 という式によって割り出した数値から年代が検討されている。このインデックスはAI (Aperture Index) 2 と呼ばれており、テル・エル＝ダバアのd2層（第12王朝末）では約930から660の範囲で平均711.7、d1層（第13王朝初期）では約640から350の範囲で平均528.8となり、顕著な差が出ることが分かっている (Szafranski 1998: 101, Fig.4)。図2.12は588.2、図2.13は500.0でありこの基準に従うならば、年代は第13王朝初期となる。
- 4) シャフト106の遺構と出土遺物の詳細は第18次調査の概報に記載されている (吉村他2013: 35-41, Fig. 図19～23、写真5)。
- 5) 「イルウイ」で始まる名前だが、その後ろを確定できない。
- 6) Ranke 1935: 71.3。
- 7) 古代エジプトにおいてはカバの牙が象牙に類似する材料として多用されていたと考えられている (Krzyszowska and Morkot 2000: 320)。ここでは専門家による正確な同定を行っていないため、牙製という言葉を用いた。
- 8) Ranke 1935: 355.22。
- 9) 前述のAI (Aperture Index) 2では423.8となり、d1層（第13王朝初期）の範囲に含まれる。
- 10) 前述のAI (Aperture Index) 2では445.5となり、d1層（第13王朝初期）の範囲に含まれる。なお、その他の大型丸底壺のAI2については次の通りである。図23.12: 468.8、図23.13: 584.2、図23.14: 555.6、図23.15:

611.1、図 23.16 : 705.9、図 23.18 : 460.9。

### 参考文献

- Andrews, C.  
1990 *Ancient Egyptian Jewellery*, London.
- Aston, D.A.  
1996 *Egyptian Pottery of the Late New Kingdom and Third Intermediate Period (Twelfth – Seventh Centuries BC)*, Heidelberg.  
2004 “Amphorae in New Kingdom Egypt”, *Ägypten und Levante XIV*, pp.175-213.
- Baba, M. and Yoshimura, S.  
2011 “Ritual Activities in Middle Kingdom Egypt: A View from Intact Tombs Discovered at Dahshur North”, in Bárta, M, Coppens, F. and Krejčí, J. (eds.), *Abusir and Saqqara in the year 2010*, vol.1, Prague, pp.158-170.
- Brunton, G. and R. Engelbach  
1927 *Gurob*, London.
- Krzyszowska, O. and Morkot, R.  
2000 “Ivory and related materials”, in Nicholson, P.T. and Shaw, I. (eds.), *Ancient Egyptian Materials and Technology*, Cambridge, pp.320-331.
- Martin, G.T.  
1997 *The Tomb of Tia and Tia: A Royal Monument of the Ramesside Period in the Memphite Necropolis*, London.  
2001 *The Tombs of Three Memphite Officials: Ramose, Khay and Pabes*, London.
- Niwinski, A.  
1988 *21st Dynasty coffins from Thebes: Chronological and typological studies*, Mainz am Rhein.
- Petrie, W.M.F.  
1891 *Illahun, Kahun, and Gurob*, London.
- Ranke, H.  
1935 *Die Altägyptischen Personennamen I*, Glückstadt, Hamburg and New York.
- Raven, M.J.  
1991 *The Tomb of Iurudef: a Memphite Official in the Reign of Ramesses II*, Leiden and London.
- Schiestl, R. and Seiler, A.  
2012 *Handbook of Pottery of the Egyptian Middle Kingdom*, vol.I, Vienna.
- Schneider, H.D.  
1996 *The Memphite Tomb of Horemheb, Commander-in-Chief of Tutankhamûn, II: A Catalogue of the Finds*, Leiden and London.
- Szafranski, Z.E.  
1998 “Seriation and Aperture Index 2 of the Beer Bottles from Tell El-Dab’a”, *Ägypten und Levante VII*, pp.95-119.
- Willems, H.  
1988 *Chest of Life: A Study of the Typology and Conceptual Development of Middle Kingdom Standard Class Coffins*, Leiden.
- 吉村作治、近藤二郎、長谷川奏、矢澤健、柏木裕之、秋山淑子  
2011 「Ⅱ. 第14次調査概要」、『エジプト学研究』別冊第15号、早稲田大学エジプト学会、pp.15-60.
- 吉村作治、近藤二郎、矢澤健、柏木裕之、秋山淑子  
2011 「Ⅲ. 第15次調査概要」、『エジプト学研究』別冊第15号、早稲田大学エジプト学会、pp.61-83.
- 吉村作治、馬場匡浩、近藤二郎、西本真一、柏木裕之、矢澤健  
2010 「エジプト ダハシュール北遺跡発掘調査報告ー第12次・第13次発掘調査ー」、『エジプト学研究』第16号、早稲田大学エジプト学会、pp.5-46.
- 吉村作治、馬場匡浩、近藤二郎、長谷川奏、柏木裕之、秋山淑子  
2009 「エジプト ダハシュール北遺跡発掘調査報告ー第10次・第11次発掘調査ー」、『エジプト学研究』第15号、早稲田大学エジプト学会、pp.5-38.
- 吉村作治、矢澤健、近藤二郎、西本真一  
2013 「エジプト ダハシュール北遺跡発掘調査報告ー第18次発掘調査ー」、『エジプト学研究』第19号、早稲田大学エジプト学会、pp.15-43.

吉村作治、矢澤健、近藤二郎、馬場匡浩、西本真一、柏木裕之、秋山淑子

2012 「エジプト ダハシュール北遺跡発掘調査報告ー第16次・第17次発掘調査ー」、『エジプト学研究』第18号、早稲田大学エジプト学会、pp.21-67.

# 第6次ルクソール西岸 アル＝コーカ地区調査概報

近藤 二郎\*<sup>1</sup>・吉村 作治\*<sup>2</sup>・柏木 裕之\*<sup>3</sup>  
河合 望\*<sup>4</sup>・高橋 寿光\*<sup>5</sup>

Preliminary Report on the Sixth Season of the Work  
at al-Khokha Area in the Theban Necropolis  
by the Waseda University Egyptian Expedition

Jiro Kondo\*<sup>1</sup>, Sakuji Yoshimura\*<sup>2</sup>, Hiroyuki Kashiwagi\*<sup>3</sup>,  
Nozomu Kawai\*<sup>4</sup> and Kazumitsu Takahashi\*<sup>5</sup>

## Abstract

The team from the Institute of Egyptology at Waseda University initiated clearance, conservation and documentation at the tomb of Userhat (TT 47), Overseer of King's Private Apartment under Amenhotep III, and its vicinity at al-Khokha area in 2007. Although this tomb is one of the most important private tombs from the reign of Amenhotep III, comprehensive scientific research has not yet been conducted because its location had become unknown after the report of the tomb by Howard Carter in 1903.

In the previous seasons, we uncovered the entrance of the tomb, which has the lintel and doorjambs on both sides. They were decorated with incised hieroglyphic inscriptions and the figures of the tomb owner, Userhat. We also located the subterranean structure of the tomb through the clearance of the debris in a hole where the ceiling of the chamber was collapsed in the past. At the south side of the western rear wall of the transverse hall, we found a relief decoration which depicts Amenhotep III and Queen Tiye seated under a canopy. At the inner chamber, we found a couple of statue, probably of Userhat and his wife, was carved in the south wall of the chamber.

In this season, we continued clearance at the tomb of Userhat (TT47) and its vicinity in order to obtain more information related to the tomb. After removing the large limestone blocks, chippings, and debris from the collapse of the ceiling of the transverse hall of TT47 accumulated in front of the south side of the western rear wall, we are able to excavate a little bit further to the bottom of the hall so that the scene on the wall could be more visible than the last season. We also continued the clearance of debris covered at the southern part of the forecourt of the tomb and our clearance revealed the southern part of the forecourt.

## 1. はじめに

早稲田大学古代エジプト調査隊は、1972年1月にエジプト・アラブ共和国、ルクソール西岸のマルカタ南遺跡で発掘調査を開始し、1974年1月にコム・アル＝サマック（魚の丘）において、新王国第18王朝ア

\* 1 早稲田大学文学学術院教授

\* 2 早稲田大学名誉教授

\* 3 サイバー大学世界遺産学部客員教授

\* 4 早稲田大学高等研究所准教授

\* 5 早稲田大学エジプト学研究所招聘研究員

\* 1 Professor, Faculty of Letters, Arts and Sciences, Waseda University

\* 2 Professor Emeritus, Waseda University

\* 3 Visiting Professor, Faculty of World Heritage, Cyber University

\* 4 Associate Professor, Waseda Institute for Advanced Study, Waseda University

\* 5 Visiting Fellow, Institute of Egyptology, Waseda University

メンヘテプ3世時代の彩色階段を発見した。この発見を受けて、新王国第18王朝アメンヘテプ3世時代をその後の主な研究対象とし、アメンヘテプ3世の王宮であるマルカタ王宮址、アメンヘテプ3世時代のルクソール西岸岩窟墓や王家の谷・アメンヘテプ3世王墓の調査など、当該時代の研究を進めてきた。

こうした研究の一環として、早稲田大学エジプト学研究所は2007年度から新たにルクソール西岸、アル=コーカ地区に位置するアメンヘテプ3世時代の岩窟墓、第47号墓を対象に調査を開始した(図1, 2)。調査の対象とした第47号墓は、アメンヘテプ3世のハーレム(後宮)の長官などを務めたウセルハトという人物の墓で、アメンヘテプ3世時代の最も重要な墓のひとつである。第47号墓は同王治世後半に特有な、レリーフ装飾と列柱を備えた大型の岩窟墓であり、この墓の構造、装飾、被葬者の称号、家族関係などを明らかにするとともに、これらの資料をもとに研究を実施し、同時代の大型岩窟墓の特質と発展を解明することを調査の目的とした。第47号墓はH.A. ラインド(Rhind)やH. カーター(Carter)などの報告により19世紀からその存在が広く知られていたものの、総合的な調査は行われておらず、調査前の時点で、墓は厚い堆積に覆われ、正確な位置すら不明となっていた。

第3次までの調査により、これまでカーターなどによって報告されていなかった第47号墓の入口と入口

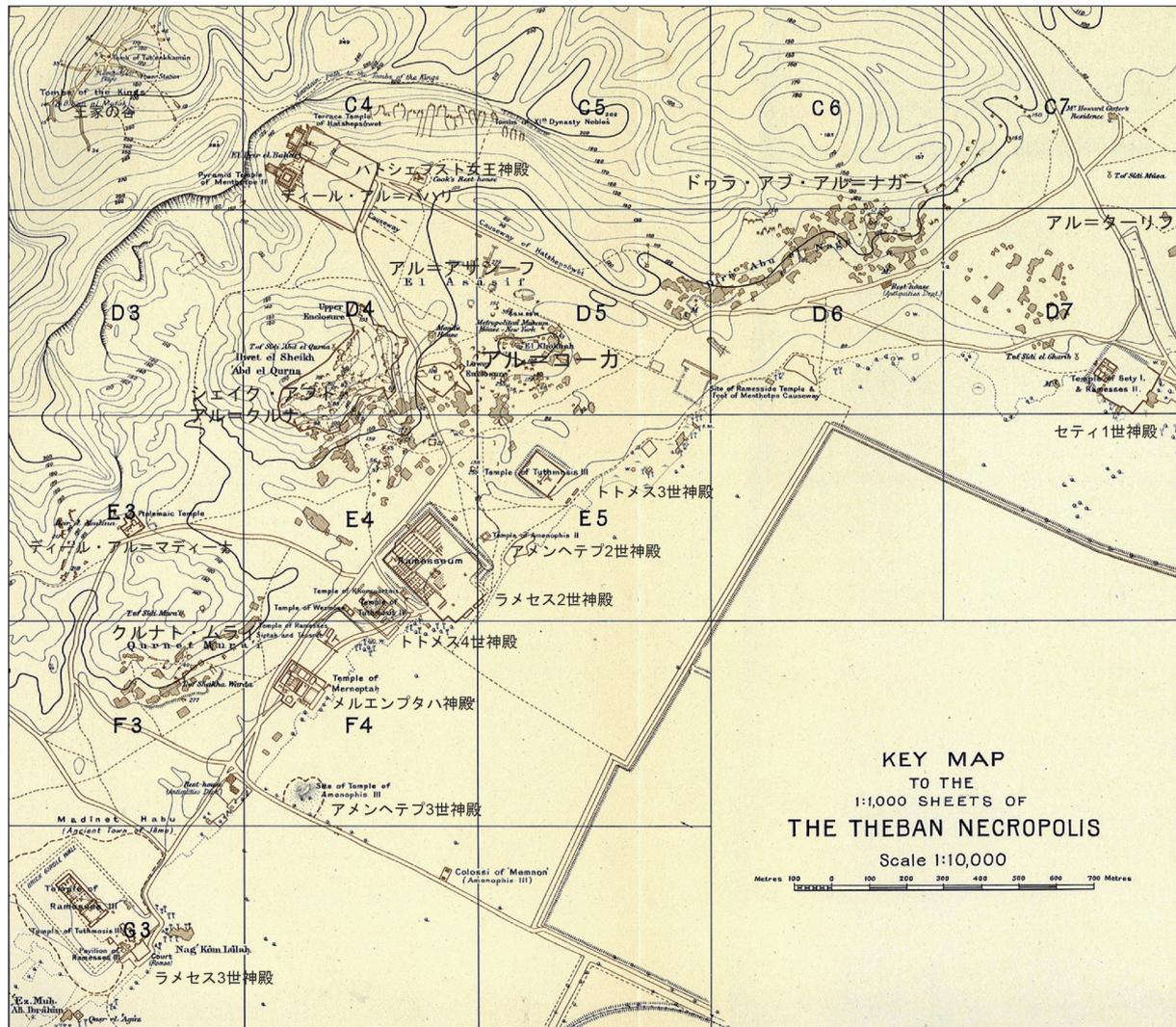


図1 ルクソール西岸地図 (Engelbach 1924: pl.II を一部改変、スケール 1:20,000)

Fig.1 Map of Theban Necropolis

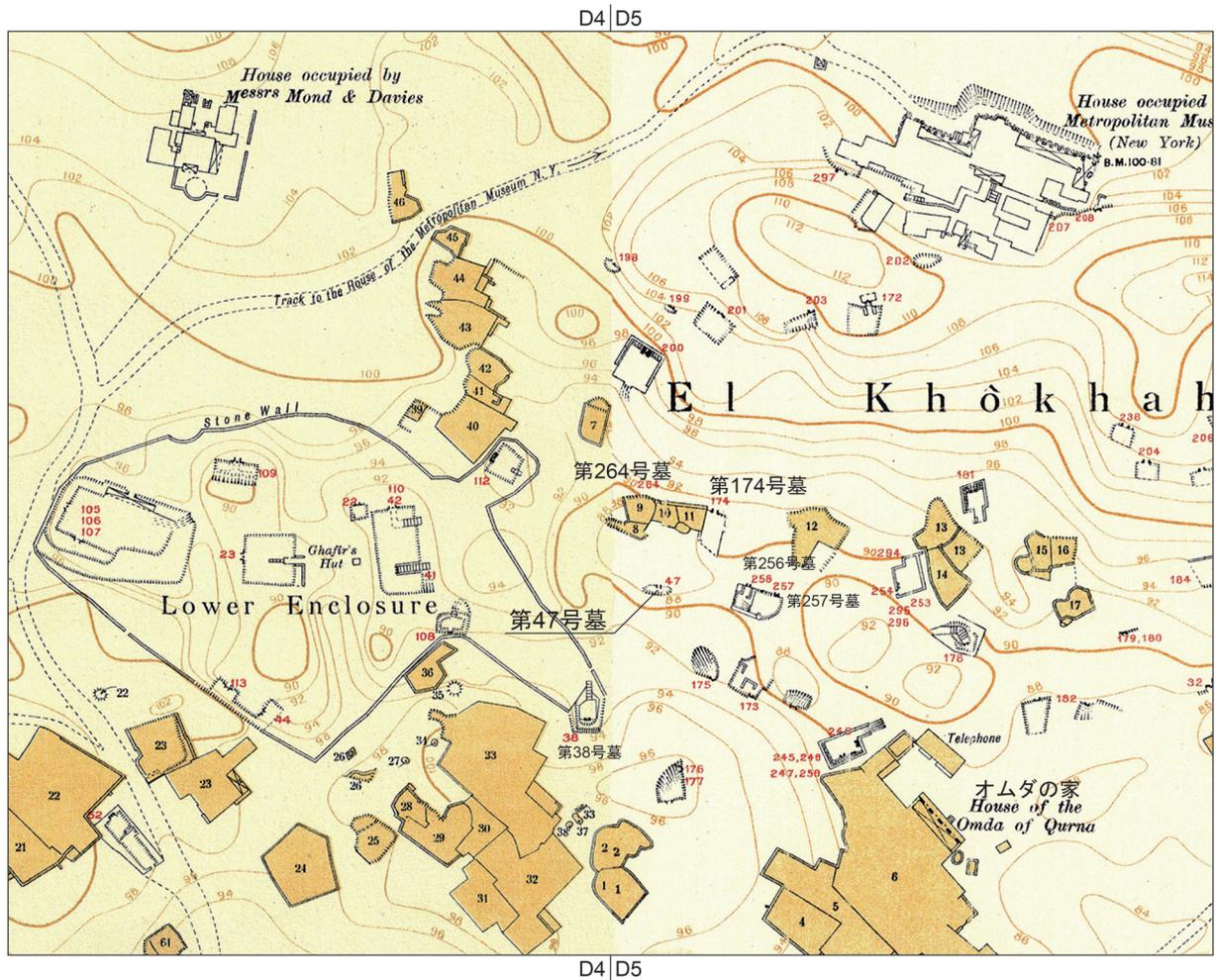


図2 アル=コーカ地区地図 (“Map of the Theban Necropolis” of Survey of Egypt from 1922 to 1924 を一部改変、スケール 1:2,000)  
Fig.2 Map of al-Khokha area

両脇の脇柱を新たに発見し、入口の詳細を明らかにすることができた。脇柱には、南北それぞれ垂直方向に5行の碑文が刻まれており、下部には被葬者であるウセルハトが座った姿で描かれている。また、脇柱の碑文から、これまで知られていたウセルハトの称号「王のハーレムの長官 (*imy-r ipt nswt*)」に加え、「王宮の印綬官の監督官 (*imy-r htmtyw nw pr-nswt*)」という別の称号が明らかになった。更に、第192号墓(ケルエフ墓)のように、ウセルハトの名前や図像の顔などが意図的に削られた痕跡も確認された。続く第4次調査においては、前室天井崩落箇所の掘り下げを行い、内部の状況を確認した。この際、前室には柱を繋ぐ「梁」がみられ、前室から奥室に至る通路の存在も確認された。

第5次調査においては、今後の発掘、保存修復に向け、第47号墓内部の状況確認を目的として発掘調査を実施し、前室奥壁(西壁)の南側では浅浮彫のレリーフ装飾と碑文を発見した。第47号墓出土の王妃ティイのレリーフが現在ブリュッセル王立美術・歴史博物館に収蔵されているが、この部分から持ち出されたものである事を確認した。また、並行して、第47号墓の北側に位置する第174号墓、第264号墓の保存修復作業を実施した。

この成果を受け第6次調査では、第47号墓前室奥壁(西壁)周辺のクリーニングを中心に調査を実施した。同時に、将来同墓前庭部を発掘するために、前庭部南側の堆積の土砂除去作業を行い、日乾煉瓦を積んだ擁壁を設置した(図3)。

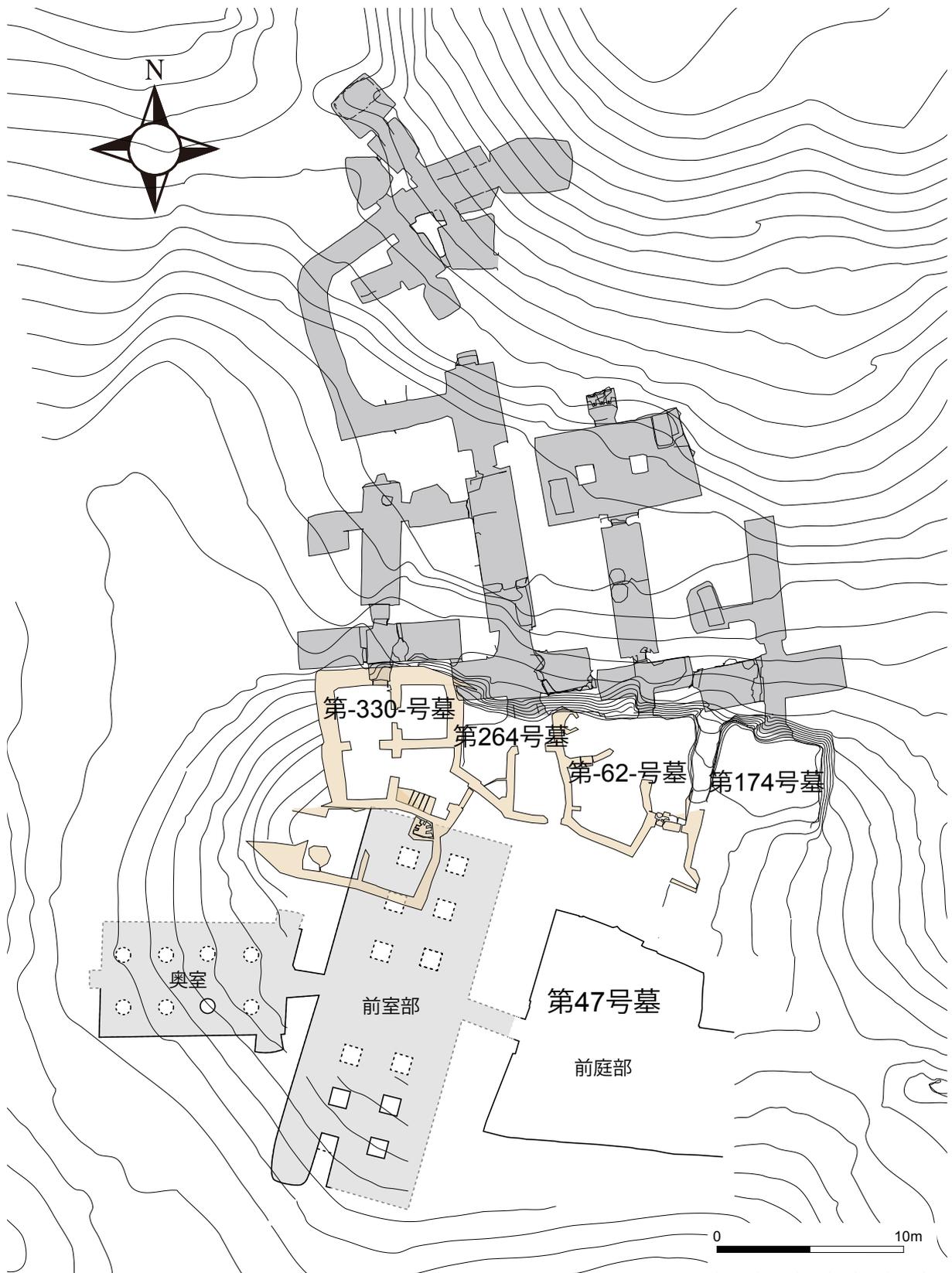


図3 第47号墓およびその周辺地図 (第6次調査終了時)

Fig.3 Map of TT47 and its vicinity

本稿では、こうした経緯と調査目的のもと、ルクソール西岸アル=コーカ地区の第47号墓および周辺において2012年度に実施した第6次調査について報告を行う。

## 2. 第47号墓の調査

### (1) 第47号墓前室奥壁周辺の発掘調査

第5次調査において、第47号墓前室奥壁（西壁）南側のレリーフ装飾と碑文を発見した。この壁面のモチーフは、キオスクに座るアメンヘテプ3世とティイの像を礼拝する被葬者ウセルハトを表したもので、第5次調査の時点ではキオスクの上部と王と王妃の図像の最上部、それらの左（南）側に位置する縦7行の銘文帯が確認された。第6次調査では、図像と碑文の全体を把握するために、さらにこの壁面の周辺の発掘調査を実施した。

これまで報告しているように、第47号墓の前室が穿たれた石灰岩岩盤の状況は極めて悪く、天井が崩落し、無数の亀裂が見られる。前室奥壁（西壁）周辺の石灰岩岩盤の状況も例外ではない。壁から1mほどで天井部分は崩落しており、大小の石灰岩の塊、破片が散乱している状況であった。前回の調査に引き続き安全を確認しながらこれらの石灰岩の破片を除去する作業を継続した。

その結果約1mの堆積を除去し、レリーフで表現されたキオスク内に座るアメンヘテプ3世とティイ王妃の図像の状況を把握することができた（写真1）。前述のとおり、ティイ王妃の浮彫は、現在ベルギーのブリュッセル王立美術・歴史博物館に収蔵されているが、第5次調査では王妃の冠の2枚羽根飾りの上部と王妃を示す碑文の一部  $r-p^c\text{ut } \textcircled{3}(t) \text{ // // //}$  「偉大なる女性世襲貴族…」とあることからティイ王妃のレリーフが本来あった場所であることが確認された。また、この部分の写真はハワード・カーターが1903年のエジプト考古局の年報の中で公表している（Carter 1903: Fig.1）。ブリュッセル王立美術・歴史博物館に収蔵されているティイ王妃のレリーフが本来あった部分は、平坦に鋸で削り取られた痕跡を残していた。ティイ王妃の図像は、胸から腰のあたりまでの約15cmの部分が原位置を留めており、左手でロータスの花を掴む様子が表されているが、腰から下の腰掛け椅子の図像を含む部分も同様に鋸で削り取られている状況が確認された。アメンヘテプ3世の図像は、上半身の左側半分が辛うじて原位置を留めているが、顔の部分、上半身右側、玉座から下の部分が削り取られたか崩落した状況であった。前述のカーターが報告した写真ではアメンヘテプ3世の左肩と左腕の一部と玉座の一部が見られるが、残存部からアメンヘテプ3世は、翼の装飾のある玉座に座り、右手にヘカ笏、左手にネケク殻笏を持ち、「シェビウ (*šbyw*)」と呼ばれる特徴的な二重の首飾りを身に付けていることが明らかとなった。同様な表現は、同時代の大型岩窟墓であるケルエフ墓（第192号墓）のアメンヘテプ3世像にも見られる（Epigraphic Survey: Pls.48, 49）。キオスクの前に刻された縦7行の銘文帯の下には、被葬者ウセルハトがアメンヘテプ3世とティイ王妃に向かって礼拝する姿勢で表現されていた。ウセルハトの鬘の浮彫は未完成で、顔の部分は鑿で意図的に破壊された痕跡を示していた。

### (2) 第47号墓前庭部南側の発掘調査

第47号墓前庭部の南側には非常に厚い堆積土があり、第2次調査より掘り下げ作業を継続してきた。今次調査では、前庭部の南壁と南西角を確認することができた。また、この前庭部南側の岩盤上に堆積する石灰岩チップ層は間に風成の黄色砂層を挟み、2層に分層された。後述するように、出土した土器の分析から、上層は第18王朝末期、下層は第18王朝中期に年代づけられた。

さらに、今回は来期調査での前庭部の発掘調査を見据えて、土砂を除去した石灰岩の岩盤直上に日乾煉瓦製の2段の段差を持つ擁壁を築いた（写真2）。



写真1 第47号墓前室西壁南側のレリーフ

Photo 1 Relief decoration on the south side of the western rear wall of the transverse hall



写真2 第47号墓およびその周辺、今期調査終了時（北東より南西に臨む）

Photo 2 TT47 and its vicinity after the fifth season, looking from north-east

### 3. 主要出土遺物

以下では、今回の調査において、第47号墓およびその周辺で取り上げた遺物のうち主要なものについて記述する。

#### (1) レリーフおよび彫像片

第47号墓前室奥壁（西壁）付近の発掘調査において多数の石灰岩製レリーフ片が出土した。これらは、第47号墓の壁面装飾を構成していたものである。特徴的なものでは、縦の銘文帯にラー（*R<sup>c</sup>*）の文字が刻まれた水平の玉縁、前室から奥室に入る入口脇に装飾された縦のブロック・ボーダーの一部、ヒエログリフが刻まれた破片などである。ヒエログリフの刻まれた破片には、*…nbt t3wy h<sup>c</sup>…*「二国の女主人、…出現する者…」と読めるものがあり、形容辞からティイ王妃を示したものであることが推測される（図4-1）。女性の鬘を装飾した彫像の破片も出土しており、規格から判断すると、第47号墓奥室のウセルハトとその妻の彫像の一部であった可能性が高い。

#### (2) シャブティ

第47号墓前庭部南側の発掘では、多くの第3中間期および末期王朝時代に年代づけられるシャブティが出土した（図4-2～8）。ほとんどのシャブティは素焼き製で、僅かにファイアンズ製のものがあつた。ファイアンズ製シャブティの中には、*3sir w<sup>c</sup>b n Imn*「オシリス、アメン神のウアブ神官」と記されているものがあつた（図4-9）。これらの類例は、同じアル=コーカ地区の第253号墓、254号墓、294号墓などに見られる（Strudwick and Strudwick 1996: 105, Pl.35. Ct.86g）。

#### (3) 葬送コーン

今次調査においても多くの葬送コーンが出土した。第47号墓の被葬者であるウセルハト（*Wsr-h<sup>c</sup>t*）の葬送コーン（Davies and Macadam 1957: #406）は3点で、うち2点は四角錐の形状をしており、そのうちの1点は1辺が接する2面にスタンプが捺されていた（図5-1）。これは、おそらくコーナー部分に置かれていたものと推測される。今回出土のものを含めるとこれまで出土したウセルハトの葬送コーンは17点となる（近藤他 2013: 114）。

また周囲の岩窟墓に由来すると考えられるのが2点のヘミィ（*Hmy*）の葬送コーンである（Vivó and Costa 1998: 619, A.08）。これは第256号墓に由来すると考えられる（Mostafa 1995: 76）（図5-2）。その他には、センネフェル（*sn-nfr*）（Davies and Macadam 1957: #423）（図5-3）、ロマ（*Rm*）（Davies and Macadam 1957: #489）（図5-4）、ナクト（*Nht*）（Davies and Macadam 1957: #235）（図5-5）、ネブアメン（*Nb-Imn*）（Davies and Macadam 1957: #558）（図5-6）、メンチュウ（*Mntw*）（Davies and Macadam 1957: #362）（図5-7）、ヘビ（*Hby*）（Davies and Macadam 1957: #15）（図5-8）、アアケペルラー・セネブ（*3-hpr-R<sup>c</sup> snb*）（Davies and Macadam 1957: #372）（図5-9）などである。これらの葬送コーンはほとんどが第47号墓前庭部南側の堆積土砂で出土したものである。

#### (4) 木棺片

木棺の破片も多く出土している。部位は、蓋、身、耳、足などの一部で木製あるいはカルトゥナーージュ製である（木製：図6-1～2、カルトゥナーージュ製：図6-3～9）。年代はラメセス朝からプトレマイオス朝時代までと多岐にわたる。

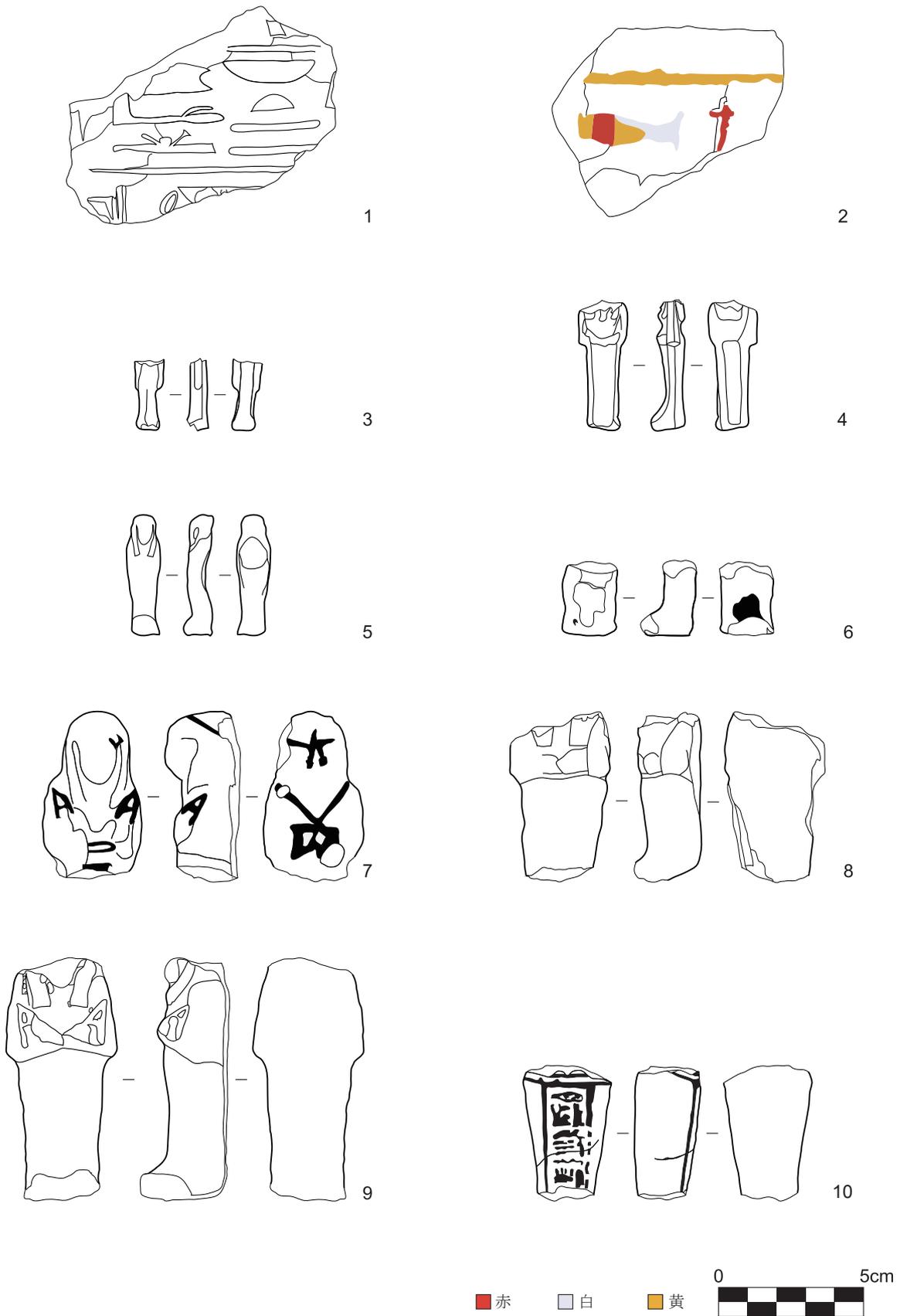


図4 第47号墓およびその周辺出土遺物 (1)  
 Fig.4 Major finds from TT47 and its vicinity (1)



図5 第47号墓およびその周辺出土遺物(2)  
Fig.5 Major finds from TT47 and its vicinity (2)



図6 第47号墓およびその周辺出土遺物 (3)  
 Fig.6 Major finds from TT47 and its vicinity (3)

#### (5) 土器

今期調査では、主に第47号墓前庭部南側の岩盤上に堆積した石灰岩チップ層から新王国時代の土器が出土した。石灰岩チップ層は間に風成の黄色細砂を挟み、2層に分割され、それぞれ特徴的な土器が出土している。

下層からは、皿形土器(図7-1)、アンフォラ(図7-2～3)が出土しており、いずれも内部にプラスターが入っていた。アンフォラについては、頸部付け根の部分が平坦に2次加工されていることから、アンフォラ(ワイン容器)からプラスター容器として墓造営の際に再利用されたと考えられる。皿形土器、アンフォラの類例は、トトメス3世の外国人妻の墓などに見られることから(Lilyquist 2003: Figs.62, 75-77)、これらは第18王朝中期に年代付けられる。

上層からはいわゆる「ビール壺」と呼ばれる壺形土器が出土した(図7-4～5)。類似した壺形土器は、マルカタ王宮からの出土がよく知られており(Hope 1989: Fig.2.f)、第18王朝後期に年代付けることができる。

新王国時代の土器を含む岩盤上に堆積する石灰岩チップ層は、第47号墓前庭部の前室の天井上にもあり、そこに含まれる土器は、第47号墓の造営の際の儀式および造営活動に使用された土器が、墓の岩盤の掘削廃土とともに廃棄された可能性が想定されている(近藤他 2012: 12-14, 図6)。今期調査で発見された前庭部上の岩盤に堆積する石灰岩チップ層の土器も、傾向が類似することから、同じように墓の岩盤の掘削排土とともに廃棄された可能性が考えられる。

#### 4. まとめ

2012年度の第6次調査では、大きく2カ所で発掘調査を実施した。まず、第47号墓の前室奥壁(西壁)南側付近では、前回の調査でキオスクに腰掛けるアメンヘテプ3世とティイ王妃のレリーフが確認され、さらにレリーフの状態を確認すべく下部に掘り進め、クリーニングを継続した。その結果、新たに玉座に座るアメンヘテプ3世の図像の詳細や未完成の被葬者ウセルハトの図像の存在が明らかになった。今後は、さらに下部に掘り進めることで同時代のレリーフ墓にみられるような「九弓の民」の図像等の確認をしていきたい。次に、第47号墓前庭部の南側に堆積した土砂の除去を行った。今次調査では、前庭部の南西角と南壁を確認することができた。また、前庭部南側の岩盤上に堆積した石灰岩チップ層は風成の黄色細砂層を挟んで分層され、土器の年代から上層が第18王朝末期、下層が第18王朝中期に年代づけられた。その他の灰色砂礫層からは現代の民家由来のものも含めた多岐にわたる遺物が混入しており、中からシャブティ、葬送コーン、木棺片、土器片などが大量に出土した。最後に、前庭部南壁上の岩盤直上の土砂堆積を除去後、来期以降の調査での前庭部の発掘調査を見据えて、日乾煉瓦製の擁壁を築いた。

以上、第6次調査の成果の概要を述べた。来期以降も発掘調査、出土遺構・遺物、保存修復作業を継続し、第47号墓とその周辺の墓について更に明らかにしていきたい。

なお、本調査は、2012年度の早稲田大学特定課題研究(2012B-026)「テーベ岩窟墓第47号(ウセルハト墓)の研究」の助成によるものである。

#### 謝辞

エジプト現地調査では、エジプト・アラブ共和国考古省大臣ムハンマド・イブラヒーム閣下、古代エジプト部部長ムハンマド・ビアーリー博士(当時)、外国調査隊管轄事務局長ムハンマド・イスマイル博士、上エジプト総局長 Mansour・ボライク氏、上エジプト・ルクソール考古局長ムハンマド・アセム・アブド・アル=サボール氏、カルナク神殿査察局長イブラヒム・ソリーマン氏、ルクソール西岸クルナ査察局長ムハ

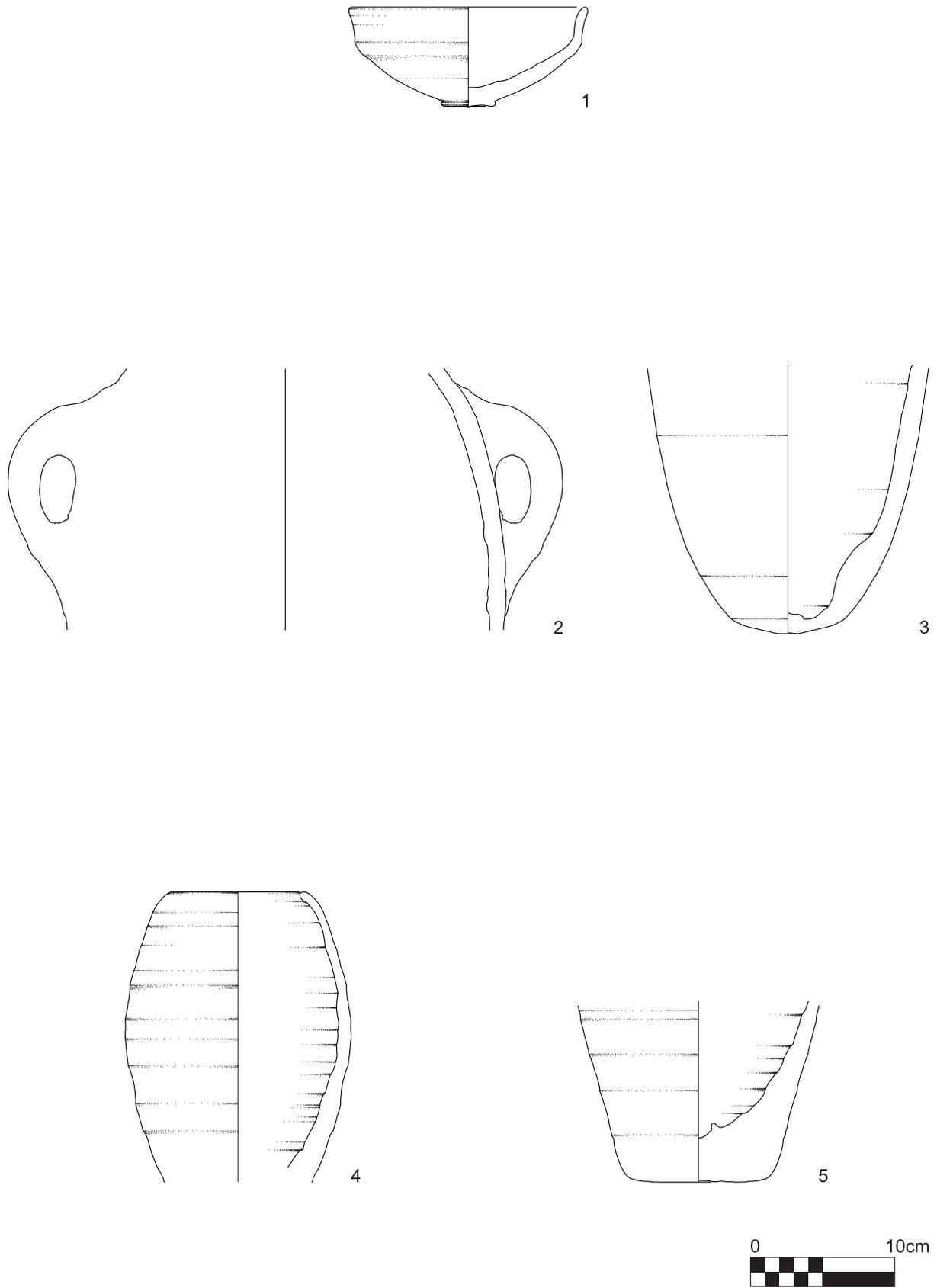


図7 第47号墓およびその周辺出土遺物 (4)  
Fig.7 Major finds from TT47 and its vicinity (4)

ンマド・アブド・アル=アジーズ氏、副局長ノール・アブドアル=ガファル・ムハンマド氏、査察官アスマー・カマル・アル=ディーン・アハマド氏、アフファフ・ムハンマド・マハムード氏、外国調査隊管轄クルナ事務局ムハンマド・アリー・ハムダン氏をはじめとする方々に多大なご協力を頂いた（肩書きは調査当時のもの）。

また、図版の作成には早稲田大学エジプト学研究所の学生ボランティア福田莉紗、石崎野々花の協力を得た。

ここに記して感謝の意を表す。

## 註

- 1) マルカタ南遺跡のコム・アル=サマック（魚の丘）における調査に関しては主に以下を参照（古代エジプト調査委員会編 1983）。
- 2) マルカタ王宮址の調査は主に以下を参照（早稲田大学古代エジプト建築調査隊編 1993）。ルクソール西岸岩窟墓の一連の調査は主に以下を参照（早稲田大学エジプト学研究所編 2002, 2003, 2007）。また王家の谷・アメンヘテプ3世王墓における調査は主に以下を参照（Kondo 1992; 1995; Yoshimura and Kondo 1995; Yoshimura and Kondo (eds.) 2004; Yoshimura et al. 2005; 吉村 1993; 吉村、近藤 1994; 2000; 河合他 2001; 吉村他 2005, 2013a, b; 高橋他 2013）。
- 3) 第47号墓の研究史、研究上の問題点、アメンヘテプ3世時代の大型岩窟墓の問題について詳しくは以下を参照（近藤 1994）。その他、アメンヘテプ3世時代の大型岩窟墓についてはD. アイクナー（Eigner）の論考を参照（Eigner 1983）。
- 4) これまでの報告としては、ラインドによるウセルハトの葬送コーンの報告（Rhind 1862: 137）、ハワード・カーターによる第47号墓の構造に関する記述やウセルハトの葬送コーン、王妃ティイのレリーフ写真などの報告（Carter 1903: 177-178, pl.II）、A.E.P. ウェイゴール（Weigall）の記述（Weigall 1908: 125）などが挙げられる。またベルギーのブリュッセル王立美術・歴史博物館には第47号墓由来の王妃ティイのレリーフが収蔵されている（van de Walle et al. 1980: 18-20, figs.3, 4）。
- 5) これまでの調査については以下を参照（近藤他 2009; 2010; 2011; 2012; 2013）。
- 6) 調査は2012年12月23日から2013年1月12日まで実施された。調査の参加者は以下の通りである。考古班：吉村作治、近藤二郎、河合 望、高橋寿光、竹野内恵太、福田莉紗、建築班：柏木裕之、渉外：吉村龍人、ムハンマド・アシュリー。
- 7) 類似したアンフォラの再利用は、アメンヘテプ3世王墓でも見られる（高橋他 2009: 87）。

## 参考文献

- Aston, D.A.  
2004 “Amphorae in New Kingdom Egypt”, *Ägypten und Levante XIV*, pp.175-214.
- Aston, D.A. and Aston, B.G.  
2001 “The Pottery”, in Martin, G.T., van Dijk, J., Raven, M., Aston, B.G., Aston, D.A., Strouhal, E. and Horáčková, L., *The Tombs of Three Memphite Officials, Ramose, Khay and Pabes*, London, pp. 50-61.
- Bourriau, J., Nicholson, P.T and Rose, P.  
2000 “Pottery”, in Nicholson, P.T. and Shaw, I. (eds.), *Ancient Egyptian Materials and Technology*, Cambridge, pp.121-147.
- Carter, H.  
1903 “Report of work done in upper Egypt (1902-1903)”, *Annales du Service des Antiquités de l'Égypte* 4, pp.171-180.  
Collins, L.  
1976 “The Private Tombs of Thebes: Excavation by Sir Robert Mond 1905 and 1906”, *The Journal of Egyptian Archaeology* 62, pp.18-40.
- Davies, N. de G. and Macadam, M.F.L.  
1957 *A Corpus of Inscribed Egyptian Funerary Cones*, Oxford.
- Eigner, D.  
1983 “Das Thebanische Grab des Amenhotep, Wesir von Unterägypten: Die Arkitektur”, *Mitteilungen der Deutschen*

- Archäologischen Instituts Abteilung Kairo* 39, pp.39-50.
- Epigraphic Survey  
1980 *The Tomb of Kheruef: Theban Tomb 192*, Chicago.
- Holthoer, R.  
1977 *New Kingdom Pharaonic Sites: The Pottery*, Scandinavian Joint Expeditions Vol.5:1, Lund.
- Hope, C.A.  
1989 “The XVIII Dynasty Pottery from Malkata”, in Hope, C.A., *Pottery of the Egyptian New Kingdom: Three Studies*, Burwood, pp.3-44.
- Kondo, J.  
1992 “A Preliminary Report on the Re-clearance of the Tomb of Amenophis III”, in Reeves, C.N. (ed.), *After Tutankhamun: Research and Excavation in the Royal Necropolis at Thebes*, London and New York, pp.41-54.  
1995 “The Re-clearance of Tombs WV 22 and WV A in the Western Valley of the Kings”, in Wilkinson, R.H. (ed.), *Valley of the Sun Kings: New Explorations in the tombs of Pharaohs*, Tucson, pp.25-33.
- Lilyquist, C.  
2003 *The Tombs of Three Foreign Wives of Tuthmosis III*, New York.
- Mostafa, M.F.  
1995 *Das Grab des Neferhotep und des Meh (TT 257)*, Theben VIII, Mainz am Rhein.
- Nordström, H.-Å and Bourriau, J.  
1993 “Ceramic Technology: Clays and Fabrics”, in Arnold, D. and Bourriau, J. (eds.), *An Introduction to Ancient Egyptian Pottery*, Mainz am Rhein, pp.143-190.
- Ranke, H.  
1952 *Die ägyptischen Personennamen*, Band I, II, Glückstadt.
- Rhind, A.H.  
1862 *Thebes: Its Tombs and Their Tenants, Ancient and Present: A Record of Excavations in the Necropolis*, London.
- Strudwick, N and Strudwick, H.  
1996 *The Tombs of Amenhotep, Khnumose, and Amenmose at Thebes (Nos. 294, 253, and 254)*, Oxford.
- Taylor, J.H.  
1989 *Egyptian Coffins*, Princess Risborough.
- van de Walle, B., Limme, L. and De Meulenaere, H.  
1980 *La collection égyptienne, Les étapes marquantes de son développement*, Bruxelles.
- Vivó, J. and Costa, S.  
1998 “Funerary cones Unattested in the Corpus of Davies and Macadam (Annex I)”, *Bulletin de la Société d'Égyptologie de Genève* 22, pp.59-72.
- Weigall, A.E.P.  
1908 “Report on the Tombs of Shékh abd' el Gürneh and el Assasif”, *Annales du Service des Antiquités de l'Égypte* 9, pp.118-136.
- Yoshimura, S., Capriotti, G., Kawai, N. and Nishisaka, A.  
2005 “A Preliminary Report on the Conservation Project of the Wall Paintings in the Royal Tomb of Amenophis III (KV 22) in the Western Valley of the Kings: 2001-2004 Seasons”, *MEMNONIA* XV, pp.203-212.
- Yoshimura, S. and Kondo, J.  
1995 “Excavation at the tomb of Amenophis III”, *Egyptian Archaeology* 7, pp.17-18.
- Yoshimura, S. and Kondo, J. (eds.)  
2004 *Conservation of the Wall Paintings in the Royal Tomb of Amenophis III -First and Second Phases Report-*, Tokyo.
- 河合 望、吉村作治、近藤二郎、ジョルジョ・カプリオッティ  
2001 「アメンヘテプ III 世王墓保存修復プロジェクト予備調査概報」、『エジプト学研究』第9号、早稲田大学エジプト学会、pp.39-45.
- 古代エジプト調査委員会編  
1983 『マルカタ南〔I〕 一魚の丘<考古編・建築編>一』、早稲田大学出版部。

近藤二郎

1994 「テーベ私人墓第47号」、『エジプト学研究』第2号、早稲田大学エジプト学会、pp.50-60.

近藤二郎、吉村作治、菊地敬夫、柏木裕之、河合 望、西坂朗子、高橋寿光

2009 「第1次ルクソール西岸アル=コーカ地区調査概報」、『エジプト学研究』第15号、早稲田大学エジプト学会、pp.39-70.

2010 「第2次ルクソール西岸アル=コーカ地区調査概報」、『エジプト学研究』第16号、早稲田大学エジプト学会、pp.47-77.

2011 「第3次ルクソール西岸アル=コーカ地区調査概報」、『エジプト学研究』第17号、早稲田大学エジプト学会、pp.45-63.

2012 「第4次ルクソール西岸アル=コーカ地区調査概報」、『エジプト学研究』第18号、早稲田大学エジプト学会、pp.5-20.

近藤二郎、吉村作治、柏木裕之、河合 望、高橋寿光

2013 「第5次ルクソール西岸アル=コーカ地区調査概報」、『エジプト学研究』第19号、早稲田大学エジプト学会、pp.107-120.

高橋寿光、吉村作治、近藤二郎

2009 「2006年-2007年度アメンヘテプ3世王墓出土土器調査概報」、『エジプト学研究』第15号、pp.71-92.

高橋寿光、西坂朗子、阿部善也、中村彩奈、中井 泉、吉村作治

2013 「アメンヘテプ3世王墓壁画に使用された顔料の化学分析」、『エジプト学研究』第19号、pp.59-96.

吉村作治、近藤二郎

1994 「アメンヘテプ3世王墓の調査について エジプト・ルクソール西岸、王家の谷西谷調査報告」、『人間科学研究』第7巻第1号、pp.187-199.

2000 「王家の谷・西谷調査報告-1992年8月~2000年1月-」、『エジプト学研究』第8号、pp.57-64.

吉村作治、近藤二郎、河合 望、西坂朗子、瀬戸邦弘、高橋寿光、中右恵理子

2005 「アメンヘテプ3世王墓保存修復作業概報：2001年3月~2004年3月」、『エジプト学研究』第13号、pp.5-21.

吉村作治、西坂朗子、高橋寿光

2013 「第3期アメンヘテプ3世王墓壁画保存修復プロジェクト概報」、『エジプト学研究』第19号、pp.43-58.

吉村作治、苅谷浩子、西坂朗子、高橋寿光

2013 「アメンヘテプ3世の石棺蓋の保存修復作業概報」、『エジプト学研究』第19号、pp.97-106.

早稲田大学エジプト学研究所編

2002 『ルクソール西岸岩窟墓〔I〕-第241号墓と周辺遺構-』、早稲田大学エジプト学研究所.

2003 『ルクソール西岸岩窟墓〔II〕-第318号墓と隣接する墓-』、株式会社アケト.

2007 『ルクソール西岸岩窟墓〔III〕-第333号墓、A.21号墓、A.24号墓、W-4 (Nr.-127-)号墓-』、株式会社アケト.

# エジプト先王朝時代の穿孔技術に関する実験考古学的研究 － フリント製小型ドリルの切削能力と形状変化の観察 －

長屋 憲慶\*

An Experimental Approach to the Drilling Technology in the Predynastic Period:  
Cutting Capability and Reduction Patterns of Flint Micro-drills

Kazuyoshi NAGAYA\*

## Abstract

Drilling technology is one of the most common methods using in craft production during the Predynastic and Early Dynastic periods. There is no doubt that the holes made in beads and palettes, the handles of stone vessels and in fittings for wooden furniture were by perforation. The flint tools used in this technology are mainly represented by micro-drills which are small drills mainly made from bladelets. They appear to be well-developed by the mid Naqada II period. Hundreds of the micro-drills were found around the ceremonial courtyard of HK29A at Hierakonpolis and in caches in the Early Dynastic town mound of Nekhen.

While both the final products and the tools for making the perforations are well-known in the Predynastic contexts, the actual function of micro-drills has not been adequately discussed so far.

In this paper, I conducted an experiment aiming to reveal the perforation method of micro-drills, and to evaluate materials, such as stones, bones, wood or leathers, on which micro-drills might work, and how they would morphologically be changed through perforation.

As a result of the experiment, the flint micro-drill with bow-method demonstrated its cutting capability for any materials which have been used in the craft productions in the Predynastic Period. Moreover, microscopic observation on the surface of drills detected several negatives of removal (damages), which might be caused by particular actions or bow operations, and due to the particular hardness of materials. Coincidence of the damages observed both on the experimental and the archaeological samples may indicate that the micro-drills found from Hierakonpolis were actually used for perforation works on hard stones, such as carnelian beads.

## 1. 序論

本研究は、もの作りにおける基礎的技術の一つである穿孔技術について、実験考古学的手法からアプローチする。穿孔技術は、古代エジプトの工芸品製作において不可欠である。ビーズ・パレットの孔、石製容器の把手、家具部材の接合部の孔など数多くの品々の製作に、この技術は用いられている。

\* 早稲田大学文学学術院 助手（文化構想学部）

\* *Research Associate, Faculty of Letters, Arts and Sciences, Waseda University*

こうしたエジプト固有のもの作りの始まりを想起させる資料として、先王朝時代の中心的遺跡であるヒエラコンポリスからは、多数のフリント製小型ドリル（micro-drill）や紅玉髓製ビーズ、原石等が出土している。しかし、このドリルを如何に用いて種々の素材が加工されたのか、その具体的方法は明らかになっていない。

また、同遺跡出土の小型ドリルの形状にはいくつかのバリエーションが認められる。では、ドリルの形状差は如何にして生じるのであろうか。

本研究は、複製したフリント製小型ドリルで様々な物質に穿孔し、その切削能力を検証する。さらに、使用前後のドリルを観察・比較することにより、穿孔作業によって起こる形状変化パターンを明らかにし、考古資料の機能あるいは加工対象材を推定するのに有効な指標の抽出を目指す。以上により、エジプト先王朝時代におけるフリント製小型ドリルを用いた穿孔技術を解明したい。

## 2. 研究略史

### (1) 錐の穿孔原理と分類

錐による穿孔（ドリル加工）とは、回転運動と軸方向の送り運動を与えることによって工作物に穴を削孔していく加工法である（砥粒加工学会 1995: 165）。一般的に錐は、直に手に持って使用されるか（手拵法）、棒状の木柄の先端に装着して使用される。着柄する場合の分類（図1）は、発火具と同様の道具見立てで説明され、揉錐、弓錐、舞錐に分類される（宮原 2009: 4）。

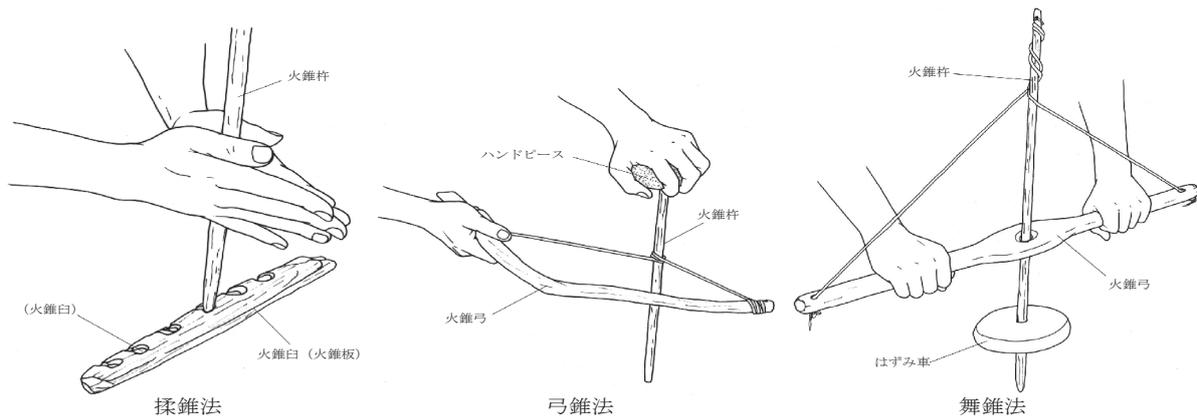


図1 錐の分類（宮原 2009 図 1-3 を一部改変）

Fig.1 Classification of perforation methods

### (2) エジプトにおける穿孔技術

穿孔技術が工芸品製作に欠かせない技術であることは既に述べた。しかし、その作業がどのような道具あるいは方法で実施されていたのかを示す資料は少ない。以下では、穿孔作業の様子を窺い知ることができる資料について、1) フリント製小型ドリルが出土している先王朝時代ヒエラコンポリス遺跡<sup>1)</sup>、2) 穿孔技術に関する既往の遺物研究、3) 古代の穿孔法に関する画像および考古資料、の点から概観する。

#### ①ヒエラコンポリス遺跡出土のフリント製小型ドリルと紅玉髓製ビーズ

ヒエラコンポリス（図2）は上エジプトのナイル川西岸に位置し、先王朝時代を代表する遺跡である。この遺跡のいくつかの地区では、フリント製小型ドリル、加工物（被削材）である紅玉髓原石や製品（ビーズ）等、穿孔技術に繋がる一連の資料が出土している。

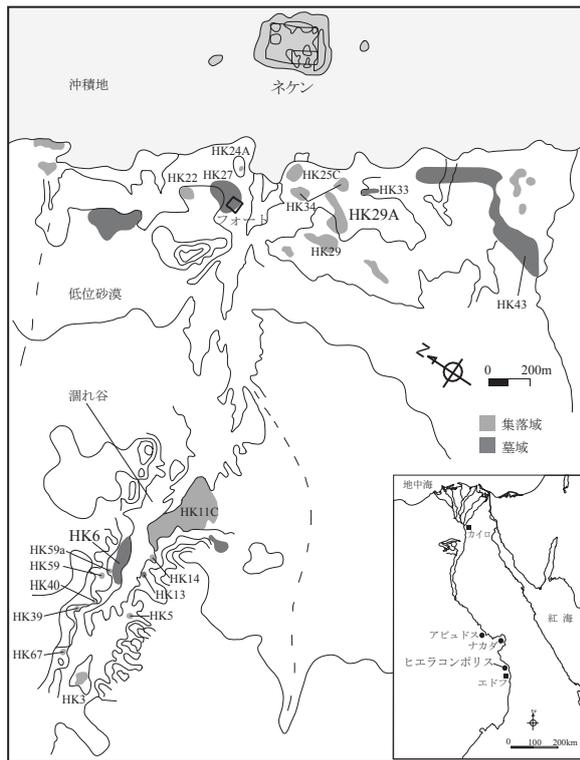


図2 ヒエラコンポリス遺跡  
Fig.2 General map of Hierakonpolis

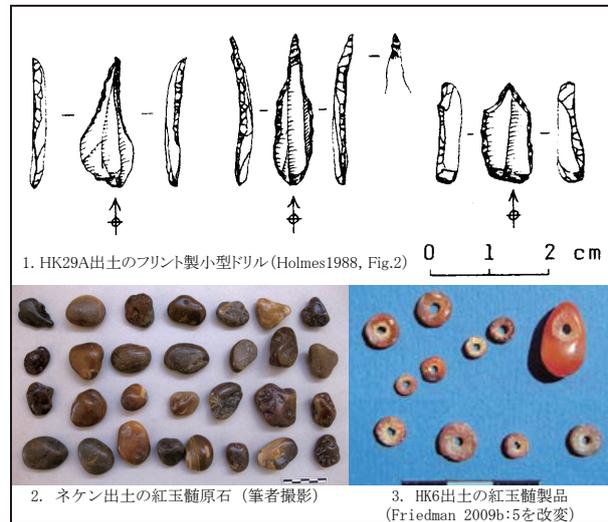


図3 ヒエラコンポリス出土の穿孔技術関連資料  
Fig.3 Flint drills, carnelian pebbles and beads from Hierakonpolis

#### <初期神殿：HK29A 地区>

HK29A 地区は、初期神殿とそれに附属する工房址から成る。年代は、ナカダ IIA 期～第 1 王朝にあたる。神殿址は、幅 45m 奥行 13m に及ぶ前庭と、4 本の巨大な木柱が備えられた入口で構成される。神殿外部には廃棄用ピットあり、そこからは 4 万点近い動物骨（家畜、野生動物、魚等）が見つかった。こうした特殊な遺構と出土遺物の状況から、様々な儀礼的活動の存在が推定されている (Friedman 2009a; 2011)。

石器についても、種々の剥片石器、両面加工石器とその製作剥片等が出土している。中でも注目すべきが、フリント製小型ドリルである (図 3-1)。1980 年末、D.L. ホルムズによりこの資料は報告されている (Holmes 1988:6-7)。紅玉髓製の剥片、チップ、ピース未製品などがドリルと共に出土していることから、穿孔作業がこの神殿に付帯する工房で行われていた可能性が示されている (Holmes 1992: 43-44)。また、根拠は示されていないが、穿孔には弓錐法が用いられたとホルムズは推定している (Holmes 1988: 6)。

#### <集落址：ネケン>

ネケンは、ナカダ III 期から初期王朝時代にかけて営まれた集落遺跡である。

20 世紀初頭の J. E. キベルと F. W. グリーンによる調査で、フリント製小型ドリルと紅玉髓（原石、成形・穿孔途中のピース未製品）、その他貴石の欠片（アメジスト、水晶、黒曜石）から成るデポジットが発見されている。ドリルの用途は共伴する貴石類への穿孔であったと、出土状況をもとに想定されている。但し、穿孔方法は詳しくは述べられていない。デポジットの年代は古王国時代とされ、本稿が扱う資料よりも 1000 年近く新しい (Quibell and Green 1902: 12)。

1960 年代以降になると、M. A. ホフマンや W. A. フェアサーヴィスらにより、集落の本格的な調査が行われる (Fairservis 1986; Hoffman et.al. 1987)。特に、1984 年にホフマンによって行われた 10N5W 地区の発掘

調査では、新石器時代のバダリ文化から初期王朝時代に至るまでの連続する8層位が確認され大きな成果を上げた (Hoffman et.al. 1987)。

同地区からは、ドリルを含む多量の石器や、紅玉髓原石 (図 3-2) が出土している。出土石器の詳細は、2000年以降になって T. ヒカデや筆者らによって報告された (Hikade 2000, 2004; Nagaya 2012)。特にヒカデは、同地区が前述の HK29A 地区と同様に、工人達による専門的な石器・ビーズ製作工房であったと考察している (Hikade 2004: 191-193)。

#### <エリート墓地：HK6 地区>

エリート墓地 (HK6) は、1979年から現在に至るまで調査が行われている (Adams 2000a, 2000b; Friedman 2000, 2005, 2006, 2011)。遺跡の性格は、支配者層の墓地とされ (Friedman et al. 1999)、ナカダ IC-III 期に年代づけられる (Adams 1998: 3)。この墓地からは近年、副葬品として納められた紅玉髓製ビーズやペンダントが出土している (Friedman et al. 2011: 171) (図 3-3)。

#### ②遺物研究例

出土遺物を対象とした穿孔技術の研究は、製品 (ビーズ) の観察や、穿孔実験、複製実験などが挙げられる。

製品の研究では、A. J. グイネットと L. ゴレリック (Gwinnett and Gorelick 1993) による顕微鏡観察が代表的である。彼らは先王朝時代から末期王朝までのビーズの切削面に対して、シリコン樹脂を用いたレプリカ・セム法で観察し、各時代に利用されたドリルの材質と形状を推定した。この中で、バダリ期とナカダ期を含む先王朝時代の紅玉髓製ビーズの穿孔には、フリント製ドリルが用いられたとしている (Gwinnett and Gorelick 1993: 127, 131)。穿孔手順としては、表面を研磨し穿孔の切っ掛けを形成した後、研磨剤を用いた回転運動によって穿孔する方法が想定されている。使用されたドリルの形状については、孔の形状と一致する円錐形であったとしている (Gwinnett and Gorelick 1993: 127)。

実験的手法を用いた研究では、遠藤仁 (Endo 2009; 遠藤 2013) がフリント製小型ドリルを用いて紅玉髓製ビーズの穿孔実験を行っている。遠藤によると、紅玉髓のような硬度の高い石材に対してフリント製ドリルで穿孔することは容易ではなく、石英砂を研磨剤として用いたとしても回転運動では傷を付けることが出来ないとの実験結果を示している。また、その解決策として、回転ではなく敲击により表面に凹みを作成し、その上で回転運動による穿孔を施すという、新たな穿孔法の可能性を提示している (遠藤 2013: 46)。

最後に研磨剤について記述する。フリント製小型ドリルを用いた穿孔における研磨剤の使用に関する研究や記述はごく限られる。先述のグイネットとゴレリックは、イラクの新石器遺跡であるジャルモ (Jarmo) 出土ビーズについて、破碎した石英 (石英砂) を平たい刃部のフリントドリルと共に用いることで穿孔が可能になると指摘し、エジプトの新石器バダリ文化期においても、同様の方法での穿孔を想定している (Gwinnett and Gorelick 1993: 126)。また、石製ドリルしか存在しないバダリ期からナカダ期においては、硬質石材への穿孔には研磨剤が必要であるとも述べている (Gwinnett and Gorelick 1993: 131)。

また、石製ドリル以外の場合では、D. A. ストックスは、葦製円筒形ドリルと銅製鋸を用いた石材への穿孔、切断実験を行い、乾燥石英砂と湿潤石英砂を研磨剤に用いた際の切削能力を比較している。ストックスの実験では、乾燥石英砂 (dry sand abrasive) の方が切削能力は高く、また道具の消耗度が低いことが示されている (Stocks 2003: 111-116)。ただし、彼の用いた湿潤石英砂は、砂に水を混ぜただけのものであることを付記しておきたい。この点を勘考し、湿潤石英砂を用いたペースト状研磨剤について、第5章で検証する。

### ③ 図像および考古資料に見る古代の穿孔方法

王朝時代におけるドリルを用いた最古の穿孔の例は、図像資料と考古遺物の双方から確認できる（図4）。最古の図像はサッカラにある第5王朝ティ墓（Wild 1966）に見られ、そこには職人が錐を使い木箱に付ける把手用の穴を穿つ場面が描かれている（図4-a）。新王国時代の例では、テーベに位置するレクミラの墓（Davis 1953）において、職人が木製椅子の部材に穿孔する様子が描かれている（図4-b）。同墓の別場面には、職人が3本組の弓錐を用いてビーズに孔を穿つ様子が見られる（図4-c）。興味深いのは、どの図像でも弓錐が描かれている点である。

考古遺物に目を向けると、最古の弓錐には中王国時代のものが挙げられる（図4-d-1）。杵と弓は木材で作られている。新王国時代になっても同様の物が継続して利用されていたようである（図4-d-2, 3）。また新王国時代には、銅製のドリルが存在していたようである。

以上、図像資料および出土遺物からみると、少なくとも古王国時代の時点で弓錐を用いた穿孔法が採用されていたようである。また、揉錐や舞錐の使用例は認められない。穿孔を用いて製作されるのは、図像資料をみただけでは家具およびビーズが挙げられる。材質で見ると、軟質材（木材等）、硬質材（石材等）の双方に対して同じ穿孔方法が用いられていたようである。また、ドリル本体の材質は、新王国時代には銅が用いられていたようである<sup>2)</sup>。

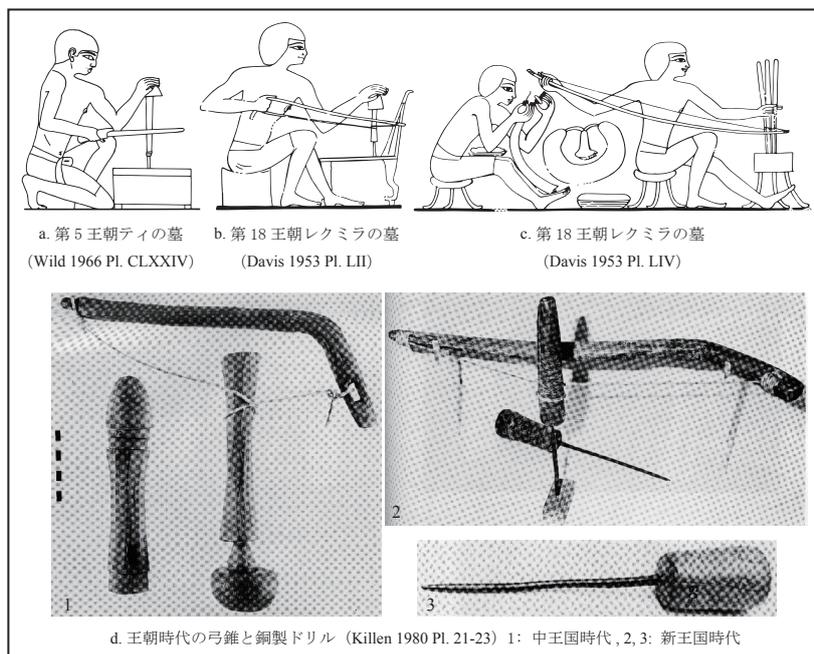


図4 王朝時代の穿孔技術に関する図像・考古資料

Fig.4 Bow-drills in the Dynastic Period

### 3. HK29A 地区出土フリント製小型ドリル

ヒエラコンポリス遺跡 HK29A 地区出土のフリント製小型ドリルについて、その形態的特徴に着目して概略する。筆者は、過去に HK29A 地区出土の石器資料の一部を分析した（長屋 in press）。この中には 118 点の小型ドリルが含まれている。本章では、上記ドリルの特徴を明らかにし、実験用に複製するドリルの形態と寸法の目安を付けることを目的とする。以下に、石材、素材剥片、先端部平面形、刃部選択位置、長側縁二次加工、寸法を整理する（表1、図5）。

#### (1) 石材

ドリルの石材には、目の粗い灰褐色のフリントが用いられている（Holmes 1992: 41-42; Hikade 2004: 190; Takamiya and Endo 2011: 741）。筆者が扱う資料も、これと同様の特徴を持つ。

表1 HK29A 地区出土フリント製小型ドリルの基本データ  
Pl.1 Dimensional and morphological features of micro-drills (HK29A, Hierakonpolis)

形状		寸法 (mm)							
剥離物 (N=104)		刃部選択位置 (N=117)		長さ (N=74)		幅 (N=76)		厚さ (N=76)	
細石刃	99.0%	端部側	81.2%	15mm	4.1%	5mm	3.9%	2mm	13.2%
石刃	1.0%	基部側	18.8%	16mm	9.5%	6mm	10.5%	3mm	38.2%
剥片	0.0%	計	100.0%	17mm	14.9%	7mm	22.4%	4mm	36.8%
計	100.0%			18mm	10.8%	8mm	31.6%	5mm	9.2%
		長側縁二次加工 (N=118)		19mm	21.6%	9mm	17.1%	6mm	2.6%
先端部平面形 (N=110)		両側縁	47.5%	20mm	12.2%	10mm	13.2%	計	100.0%
尖頭	68.2%	右側縁	16.1%	21mm	12.2%	11mm	1.3%		
斜向(右)	18.2%	左側縁	5.9%	22mm	5.4%	計	100.0%		
斜向(左)	13.6%	未加工	30.5%	23mm	4.1%				
計	100.0%	計	100.0%	24mm	0.0%				
				25mm	2.7%				
				26mm	1.4%				
				27mm	1.4%				
				計	100.0%				

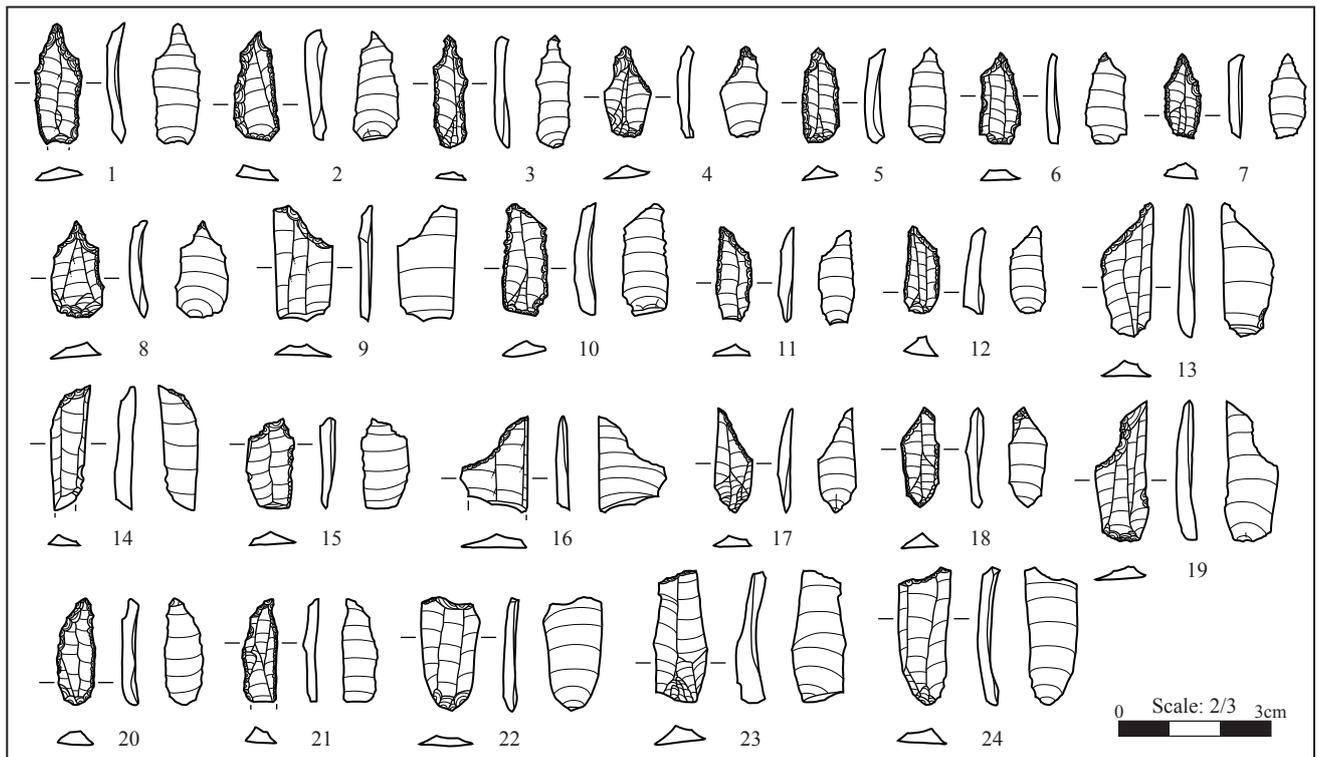


図5 フリント製小型ドリル (ヒエラコンポリス遺跡HK29A 地区出土)

Fig.5 Flint micro-drills found from HK29A at Hierakonpolis

(2) 素材剥片

主に細石刃を素材にして製作され、稀に小型の不定形剥片も素材となる (Holmes 1992: 41; Hikadde 2004: 191)。筆者が扱った資料では、99%が細石刃で、石刃が1%だった。

(3) 先端部平面形

平面形については、T. ヒカデ (2004) が 10N5W 地区出土ドリルを用いた分類を行っている。ヒカデは平

面形を3分類し、1) 最長で4cmに達する細長いもの、2) 先端部が尖り、基部が幅広のもの、3) 先端部がやや尖り、全体的に短くて作りの粗雑なもの、としている。また、その他として破損品を挙げている(Hikade 2004: 191)。ただし、ヒカデの分類は刃部に着目したものではなく、むしろ全体の形とプロポーシオンを重視している。また、破損品には特に注意が払われていない。

しかし本稿では、こうしたドリル先端部のバリエーションが使用による形状変化を反映するとの見通しのもと、先端部平面形のみによる分類を行う。そこには、ヒカデが「その他」とする破損品(尖頭形でないもの)も含まれる。以上の観点から、先端部平面形を、1) 尖頭: 刃部が尖頭形を呈するもの、2) 斜向/右: 刃部が斜め右に傾くもの、3) 斜向/左: 刃部が斜め右に傾くもの、に3分類した。

最も多いのは尖頭形で、68.2%を占める。斜向タイプは、右が18.2%、左が13.6%で、合わせて31.8%となった。

#### (4) 刃部選択位置

刃部選択位置は、ドリルの刃部が素材剥片の基部側(打点側)にあるのか、剥離が抜けた端部側にあるのかによる分類である。

端部側に刃部を持つものが圧倒的に多く81.2%を占める。一方、基部側は18.8%である。剥片剥離の原理として、折損しない限り剥片の端部は尖頭形になる。端部側に刃部が選択されるのは、それをそのまま刃部に二次加工するのが最も合理的であるからと考えられる。

#### (5) 長側縁二次加工

長側縁二次加工については、1) 両側縁に加工のあるもの、2) 右側縁のみに加工のあるもの、3) 左側縁のみに加工のあるもの、4) 未加工のもの、に4分類した。

両側縁が最も多く47.5%を占め、右側縁16.1%、左側縁5.9%、未加工30.5%となった。

#### (6) 寸法

ドリル寸法は、概ね長さ17-21mm、幅7-9mm、厚さ3-4mmの範囲に集中する。

#### (7) フリント製小型ドリルの形態的特徴

考古資料の観察から、ヒエラコンポリス遺跡HK29A地区出土のフリント製小型ドリルの代表的な形態は、1) 目の粗いフリント、2) 細石刃素材、3) 尖頭形の刃部平面形、4) 素材端部への刃部作出、5) 両側縁への二次加工、6) 長さ17-21mm、幅7-9mm、厚さ3-4mmのサイズ、であることが示された。

### 4. 先王朝時代の石器・石製品研究の問題点と実験の目的

エジプト先王朝時代の石器研究では、主に遺物の分類とその体系化に注意が払われ、一方で石器の用途やそれに要する技術を具体的に検証する試みは極めて少ない。

本稿が扱うフリント製小型ドリルについては、1世紀以上前からその存在が認識されているものの、ドリルそのものへの詳細な観察は行われておらず、またこれを用いた穿孔方法や切削能力、加工対象物についてはほとんど明らかになっていない。また研磨材についても、先・初期王朝時代の石製品製作における利用が想定されている一方で、その材料や配合、使用した場合の切削能力などは検証されていない。

ヒエラコンポリス出土のフリント製小型ドリルは、神殿に付随する場所や、遺跡内でもごく一部の地区な

ど、限られた場所から出土する特殊遺物である。また、これを用いて製作されたとおぼしき製品（紅玉髓製ビーズやペンダント）がエリート墓地から出土している。このような道具、材料、製品の、地区を跨いだ繋がりは、初期国家形成期における威信材あるいは奢侈品の製作と分配の流れおよびその背後にある社会の様態を考察する上でも重要と考える。

一方、ドリル自体に目を向けると、その形態は多様である。この形態的バリエーションは、①未使用品、②使用中のもの、③摩耗品・欠損品（廃品）といった、状態を異にする様々な遺物の集合と考えられる。では、実際にどのような穿孔作業（方法、対象材）によってドリルの形状変化をもたらされるのであろうか。

以上の観点から、本稿では、複製ドリルを用いた穿孔実験を行い、1) フリント製小型ドリルを用いた穿孔方法とその切削能力、2) 加工対象物の材質の違いによるドリルの形状変化パターン、3) 研磨剤の材料・配合とその有効性、という3点を検証し、考古遺物の分類に有機的な意味を与えることを目指す。

## 5. フリント製小型ドリルを用いた穿孔実験

### (1) 実験の方法

第3章までに明らかにしたエジプト先王朝時代の小型ドリルの諸特徴をもとに、ドリルを復元製作する。穿孔方法としては、王朝時代の図像および出土資料から想定される弓錐法を用いる。これらを用いて、木材や石材に対して穿孔する。

尚、製作の癖や穿孔の力加減を一定にするために、ドリル製作から穿孔に至る全ての主作業は筆者一人の手で行った。

### (2) 穿孔具の復元製作<sup>3)</sup>

穿孔具を構成するドリル、補助具、研磨剤について以下に詳述する。

#### ①フリント製小型ドリルの製作

##### <石材>

石材は、エジプト産のフリントを用いる。フリントは、日本のウェブサイト（美濃考古学研究会<sup>4)</sup>）より購入した。当サイトによると、フリントはカイロの東150kmで採集されたナイル川の転石とされる。大きさは拳大で、色調は乳白色、茶、グレーと様々である。質感も目の粗い物から細かなものまで様々ある。石材の大きさは、長径が10cm～15cm程度であるが、細石刃を剥離するための石核としては十分に事足りる。石質については、できる限り遺物と同質の目の粗い灰褐色フリントを選んだ。

##### <素材剥片の剥離> (図6)

素材剥片の剥離は、上記フリントで単設打面石核を準備し、銅塊を木柄に装着した軟質ハンマーを用いて直接打撃によって行った。

小型ドリルの素材剥片には、細石刃の他に石刃と不定形剥片も選択する<sup>5)</sup>。寸法については、第3章(7)で示した計測値を目安にして素材剥片を選別する<sup>6)</sup>(表1)。長さは、二次加工および使用時に少なからず減少するため、素材の時点で20mm以上のものを選ぶ。幅については二次加工による微調整が可能のため重視しなかった。事実、ヒエラコンポリス遺跡出土資料の中には、長側縁に二次加工が施されたものが一定数存在する。厚さは、2mm以上6mm未満のものに限る。

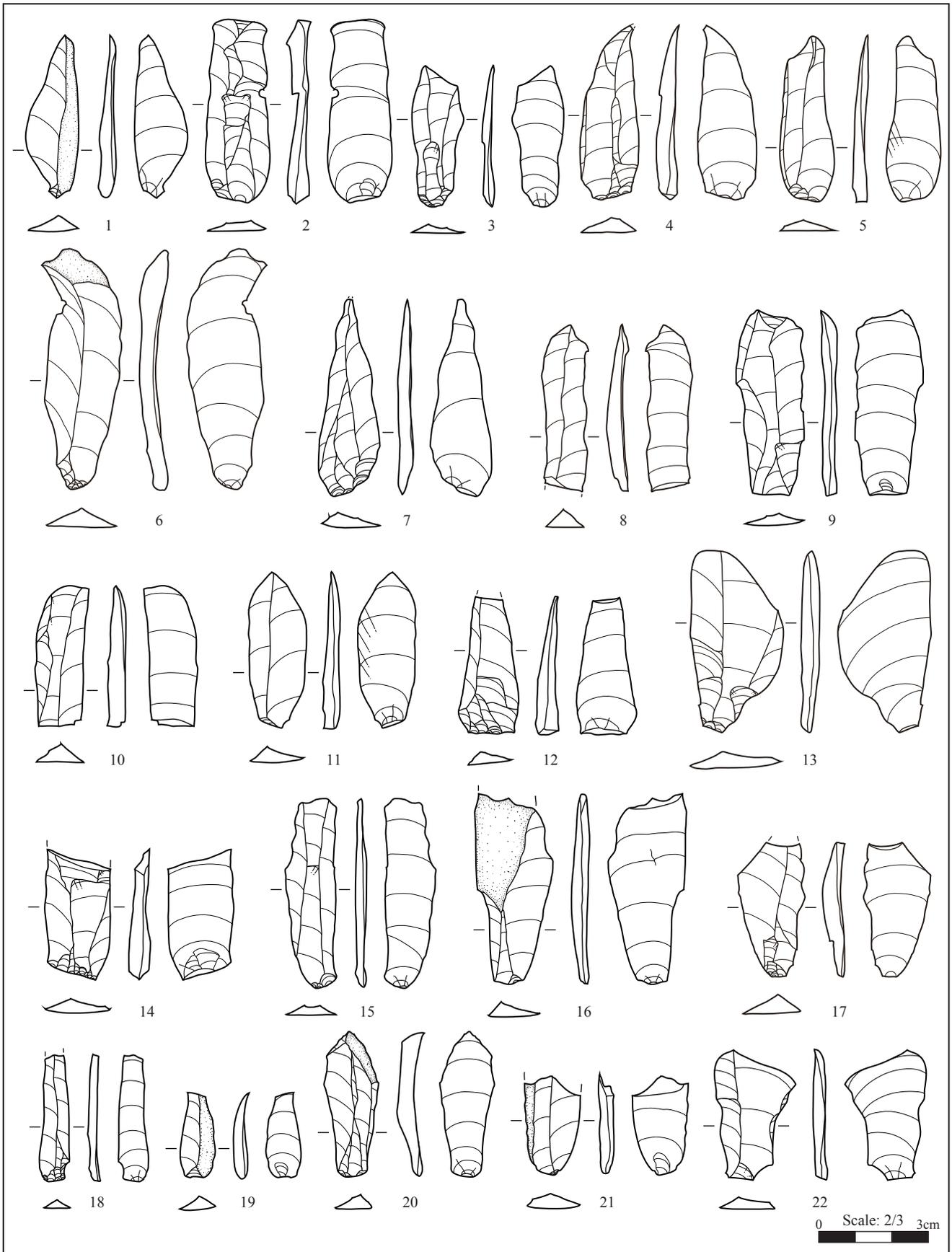


図6 複製素材剥片実測図  
Fig.6 Replicated blanks

＜小型ドリルの製作（二次加工）＞

考古遺物の観察から得られたフリント製小型ドリルの諸特徴を参考に、22点のドリルを複製した（図7）。製作には、銅製釘をプラスチック製の柄に固定した押圧具を用いた。平面形で見ると、ヒカデ（Hikade 2004）や第3章の分類のように、ドリルの平面形は3ないし4分類できる。しかし、ドリル加工の原理を勘案すると、作業効率の最も高いと考えられるのは尖頭形である。逆に傾斜した刃部形状は使用によって起こる変化であると予想される。こうした見立てのもと、本実験では尖頭タイプを用いる<sup>7)</sup>。刃部選択では、端部を選ぶものが圧倒的に多い。剥離物端部の尖った部分をそのままドリル刃部に加工するのが合理的と思われる。よって、本実験では、端部を刃部に加工することを計画した。ただし、加工途中で剥片が折損（失敗）した場合には、計画変更して基部側を刃部に加工した<sup>8)</sup>。長側縁への加工の有無については、本実験では比較的大型の剥片もドリル素材に選んでいるため、加工有りのものが必然的に増加した。

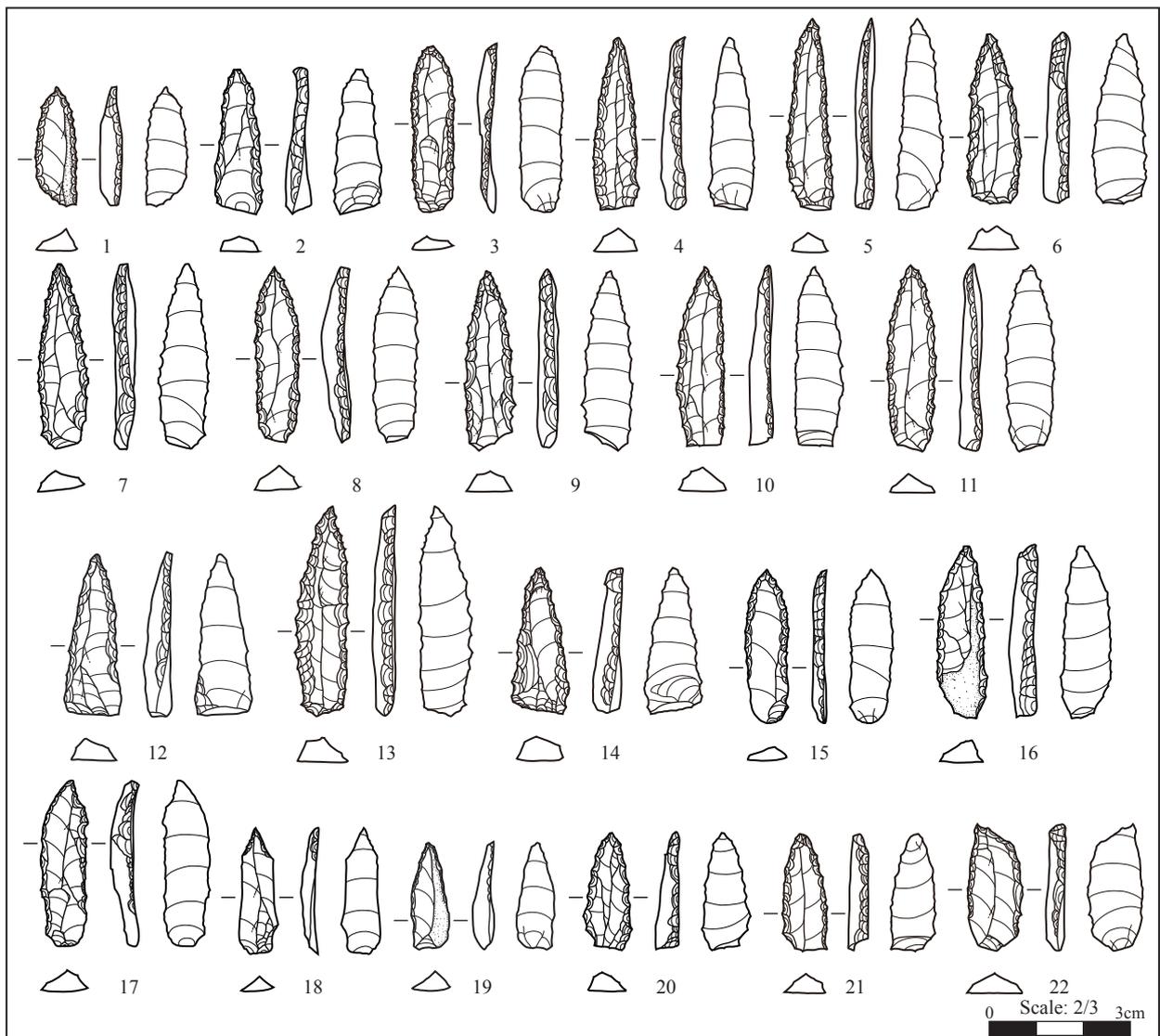


図7 複製ドリル実測図

Fig.7 Replicated drills

## ②穿孔補助具（柄、弓、当て具）の製作

第2章で示したように、エジプトにおける錐を用いた穿孔の最古例は、第5王朝ティ墓に描かれている弓錐法である。本実験においても弓錐法を用いる。

弓錐を構成する部材である火錐杵、火錐弓、当て具（ハンドピース）をそれぞれ製作した（図8）。火錐杵には、長さ30cm、太さ2cmの木製の角棒<sup>9)</sup>を用いた。先端部にはドリルを埋め込むための溝を設けた。その際、異なる長さのドリルを装着できるように、溝の深さの異なる3種類（1.0cm、2.0cm、2.5cm）を準備した。杵の基部（当て具との接触部）は、回転しやすいよう半球状に加工した。杵とドリルは、皮紐で結んで固定する。弓には長さ60cmの湾曲した木の枝を用い、両端に綿製のロープ（太さ約5mm）を結びつけた。製作にあたり、弓1ストローク（1往復）につきドリルが10回転するように設計した。実験時には弓のストローク数をカウントし、これを10倍してドリル回転数を求める。最後に、当て具には球形の木材（直径6cm厚さ3.6cm）を用い、杵との接触部に凹み（直径7mm深さ7mm）を施した。当て具は、回転する杵から掌を保護する役割を果たす。



図8 穿孔補助具  
Fig.8 Replication of bow-drill

## ③研磨剤

研磨剤とは、「遊離砥粒を水や油などの研磨液に分散させた溶液状のものの総称（砥粒加工学会 1995: 63）」である。砥粒とは、これに含まれる「高硬度の粒状または粉末状の物質（砥粒加工学会 1995: 164）」を指し、本実験では石英砂が相当する。研磨剤を用いた切削原理は、「砥粒が微細破砕を生ずると鋭い切れ刃が現れたり脱落すると隣接した新砥粒が表面に現れ、砥石表面に新たな切れ刃を構成する（砥粒加工学会 1995: 93）」ことによる。この現象は「自生発刃」と呼ばれる。重要なのは、現代的なものの作りの世界で研磨剤といえば、それは砥粒と液体の混合物（ペースト状）を指すという点である。一方のエジプト考古学の領域では、「研磨剤＝石英砂単体（あるいはそれに水を加えたもの）」という認識が一般的である。上記に研磨剤の切削原理を示したように、研磨剤とは液状であるが故にその能力が発揮される。そのため、古代の穿孔技術の解明のためには、研磨剤の材料や配合比率、砥粒の大きさの違いによる切削能力を検証する必要があるだろう。

本実験では、水、アカシア樹液、石英砂<sup>10)</sup>を混合して研磨剤を作成する。いずれの材料も先王朝時代のエジプトで入手可能なものである。実験には、石英砂の量を変えた3種類の研磨剤を使用する。すなわち、水とアカシア樹液を10gずつ1:1の割合で混合した粘性のある溶媒を3セット用意し、それぞれに石英砂を10g、20g、30gずつ加える。

## (3) 穿孔対象材

穿孔の対象物質には、4材（皮革、木、骨角、石）11種を選んだ（図9左）。

皮革には牛革を選んだ。エジプト先王朝時代に限らず、皮革は先史時代のあらゆる地域で様々な用途に利用された材質であると考えられる。

木材にはアカシア、ヤナギ、スギの3種を選んだ。G. キレンによると、エジプトは先王朝・王朝時代を

問わず木材に乏しい地域である。在地で入手可能な木材は、アカシア、タマリスク、ヤナギ等が挙げられる。中でも最も一般的に利用された木材はアカシアであったと考えられ、用途は家具や建材など多様である。タマリスクは、アカシアに比べると小型の木で、節が多く品質的に劣る。これは材木として使用されず、用途は家屋の風砂よけに限られる。ヤナギの用途は家具に限られる。また、より良質の木材（スギ、カシ等）が他地域から輸入されるようになるのは王朝時代になってから（Killen 1994: 7-9）ではあるが、今回の実験ではスギも対象とした。

骨角類には、牛骨（肩胛骨）と鹿角<sup>11)</sup>の2種を選んだ。骨角は、エジプト先王朝時代に限らず、多くの地域で石器時代から利用されてきた加工材である。

石材には、砂岩、石灰岩、粘板岩、角礫岩、紅玉髓の5種を選んだ。これらは石製容器、パレット、ビーズといった小型の孔を伴う製品の素材となるものである。

これら対象材を、厚さ2～14mm程度の切片に加工し、穿孔する（図9右）。

尚、実験条件の統一を図るために、4材11種への穿孔には研磨剤を使用しない。そもそも浸水性の高い皮革や木への研磨剤の使用は素材の品質を著しく損なうため、過去においてもこうした軟質材の孔あけに研磨材が利用された可能性は低いと考える。研磨剤の切削能力については、角礫岩1種を用いた検証結果を別項（6-3）にて記述する。



①牛革, ②牛肩胛骨, ③鹿角, ④アカシア, ⑤ヤナギ, ⑥スギ, ⑦砂岩, ⑧石灰岩, ⑨粘板岩, ⑩角礫岩, ⑪紅玉髓

図9 穿孔対象材

Fig.9 Workpieces before perforation

#### (4) 実験の手順

以下の手順で作業、観察を行う。

① 4材11種の切片に対し、ドリルが貫通するまで回転摩擦を加える<sup>12)</sup>。本稿は穿孔による形状変化の観察を目的の一つとしているため、ドリルの刃部再生は行わない。ドリルが摩耗・折損するなどして作業の継続が困難になった場合には、回転数を記録した上で新しいものに取り替える。

② 貫通後、穿孔コスト（物質1mmの穿孔にかかるドリル回転数）と、ドリルの減少度（物質1mmの穿孔によるドリル長さの消耗）を算出する。

③ 使用後のドリル表面を、低倍率のデジタル顕微鏡（サンコー社製 Dino-lite Basic DINOAM2001）を用い、30倍程度の倍率で観察・撮影し、穿孔作業による形状変化や刃こぼれのパターンを探る。

④ 上記とは別に、石英砂の配合率を変えた研磨剤を3通り準備し、角礫岩<sup>13)</sup>への切削能力の違いを観察する。

6. 実験結果

(1) フリント製小型ドリルの切削能力

実験の結果、4材11種すべての貫通に成功した(表2, 図10, 11)。これにより、フリント製小型ドリルを用いた穿孔が先王朝時代の工芸品に利用された大凡の物質に対して有効であることが示された。さらに、その方法については弓錐法の蓋然性が高い。

穿孔コスト(物質1mmの穿孔に要するドリル回転数)については、大局的に見ると、皮革や木など軟質の物ほど穿孔は容易であり、一方で骨角や石など硬質の物質には労力がかかる傾向にあることがわかった。つまり、穿孔コストは物質の硬さに相関する。個別に見ると、ビーズの原材料でもある紅玉髓のみ、1mm穿孔するために30000回転以上という極端なコストがかかった。木材の中でスギだけが極端に穿孔しやすかった理由には、水分の含有量の少ない古木であったため物理的強度が低くなっていたことが考えられる。

表2 実験結果一覧  
Pl.2 Experimental results: machinability of materials

材質	種類	原産地	切片厚さ (mm)	回転数	穿孔コスト (1mmあたり)	ドリル長さ (mm)		
						使用前-後	減少値	減少度 (1mmあたり)
皮革	牛革	不明	3.7	330	89.19	25.6-25.6	0.0	0.00
木	アカシア	日本	10.7	870	81.31	30.7-30.7	0.0	0.00
	ヤナギ	日本	14.0	720	51.43	*1 72.7-70.0	2.7	0.19
	スギ	日本	8.3	80	9.64	40.8-40.7	0.1	0.01
骨角	牛肩胛骨	日本	4.1	1240	302.44	36.3-34.8	1.5	0.37
	鹿角	日本	5.5	960	174.55	39.6-39.6	0.0	0.00
石	砂岩	エジプト	7.0	60	8.57	37.1-37.1	0.0	0.00
	石灰岩	エジプト	4.4	1060	240.91	38.3-38.1	0.2	0.05
	粘板岩	日本	5.0	2680	536.00	38.4-37.3	1.1	0.22
	角礫岩	エジプト	4.4	17540	3986.36	39.7-39.0	0.7	0.16
	紅玉髓	マダガスカル	2.6	92220	35469.23	*2 319.1-296.5	22.6	8.69

\*1: ドリル2本使用, \*2: ドリル11本使用だが、先端部を紛失したNo. 19を除外して計算



①牛革, ②牛肩胛骨, ③鹿角, ④アカシア, ⑤ヤナギ, ⑥スギ, ⑦砂岩, ⑧石灰岩, ⑨粘板岩, ⑩角礫岩, ⑪紅玉髓

図10 貫通後の切剖面

Fig.10 Workpieces after perforation

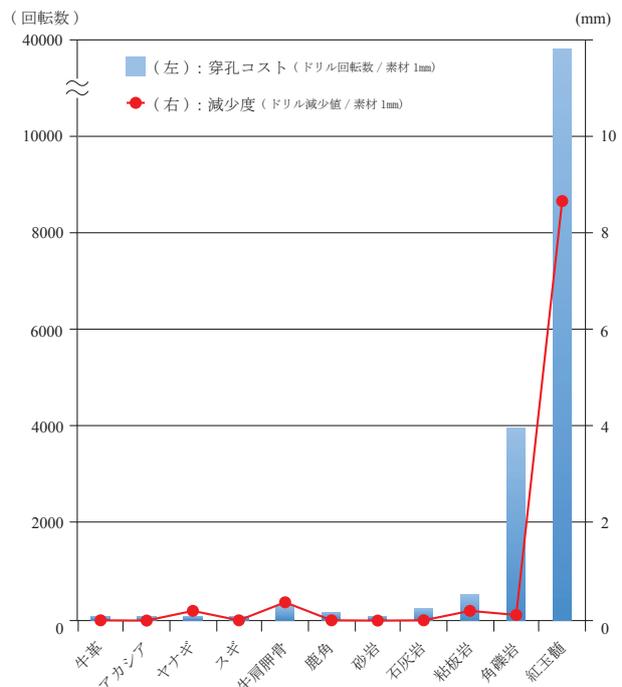


図11 材質別穿孔コストとドリル消耗度

Fig.11 Cutting capability and lost length of micro-drills by materials

また、ドリルの減少度（物質1mmの穿孔によるドリル長さの消耗）は、ドリル素材と対象材との硬さの関係を反映すると思われる。対象が硬い石であっても、ドリル素材であるプリントそのものよりも硬度が低ければ減少度は低くなる。一方で、硬い紅玉髓に穿孔する場合には減少度が高くなる。

最後に、穿孔コストと減少度を合わせて見た場合、辻褃の合わない点がある。すなわち、穿孔は容易だが道具は消耗する場合（ヤナギ：穿孔コスト51.43回転/mm, 減少度0.19mm）と、逆に穿孔は困難だが道具は消耗しにくい場合（鹿角：穿孔コスト174.55回転/mm, 減少度0.00mm）（角礫岩：穿孔コスト3986.36回転/mm, 減少度0.16mm）とが確認された。この一見矛盾したように見える結果は、1点毎に状態の異なるドリル先端部の形状・強度に由来するのかもしれない。矛盾解消のためには、対象物質別の実験数を増やし、データをより一般化する必要があるだろう。

## (2) ドリルの形状変化パターン

使用後のドリル表面の状態を観察・撮影した（表3, 図12）。今回の実験では、1）タテ型の剥離痕、2）ヨコ型の剥離痕、3）半球状摩耗、4）先端部平面形の変化という4パターンの形状変化が観察された。注目すべきは、各形状変化の成因に規則性が認められる点である（図13<sup>14</sup>,14）。以下、形状変化パターン別にその特徴、対象材、成因を記述する。尚、牛革、鹿角、砂岩に使用したドリルには上記いずれの形状変化も見られなかった。

### ①タテ型の剥離痕<sup>15)</sup>

タテ型の剥離痕は、ドリル先端部から基部へ向かって走る、石器腹面への剥離である。この剥離は、ドリルが対象物に対して垂直あるいはそれに近い角度で衝突することによって起こる。石製ドリルは1点1点が

表3 ドリル別形状変化の詳細  
Pl.3 Experimental results: cutting capability and reduction patterns of micro-drills

No.	対象材	回転数	貫通	長さ (mm)			形状変化	
				使用前	使用后	前-後	先端部	剥離痕
1	牛革	330	+	25.6	25.6	0.0	-	-
2	アカシア	870	+	30.7	30.7	0.0	-	ヨコ型 (平坦)
3	ヤナギ	70	-	35.5	35.4	0.1	潰れ	ヨコ型 (平坦)
4	ヤナギ	650	+	37.2	34.6	2.6	潰れ	タテ型
5	スギ	80	+	40.8	40.7	0.1	潰れ	タテ型
6	牛肩胛骨	1240	+	36.3	34.8	1.5	潰れ	ヨコ型 (平坦, 階段状)
7	鹿角	960	+	39.6	39.6	0.0	-	-
8	砂岩	60	+	37.1	37.1	0.0	-	-
9	石灰岩	1060	+	38.3	38.1	0.2	潰れ	ヨコ型 (階段状)
10	粘板岩	2680	+	38.4	37.3	1.1	潰れ	ヨコ型 (階段状)
11	角礫岩	17540	+	39.7	39.0	0.7	潰れ	ヨコ型 (階段状)
12	紅玉髓	20000	-	34.5	32.0	2.5	半球状摩耗	タテ・ヨコ型 (階段状)
13	紅玉髓	30300	-	45.0	34.6	10.4	扁平	ヨコ型 (平坦)
14	紅玉髓	20000	-	31.9	30.7	1.2	半球状摩耗	ヨコ型 (階段状)
15	紅玉髓	200	-	32.5	32.3	0.2	潰れ	ヨコ型 (階段状)
16	紅玉髓	5000	-	36.8	35.1	1.7	半球状摩耗	-
17	紅玉髓	15000	-	35.5	34.0	1.5	半球状摩耗 (光沢)	ヨコ型 (階段状)
18	紅玉髓	470	-	26.6	23.0	3.6	斜向 (左)	タテ・ヨコ型 (階段状)
19	紅玉髓	150	-	22.5	15.4	(7.1)	折損 (先端紛失)	-
20	紅玉髓	560	-	24.6	23.3	1.3	半球状摩耗	ヨコ型 (階段状)
21	紅玉髓	340	-	25.1	25.1	0.0	半球状摩耗	-
22	紅玉髓	200	+	26.6	26.4	0.2	潰れ	ヨコ型 (階段状)

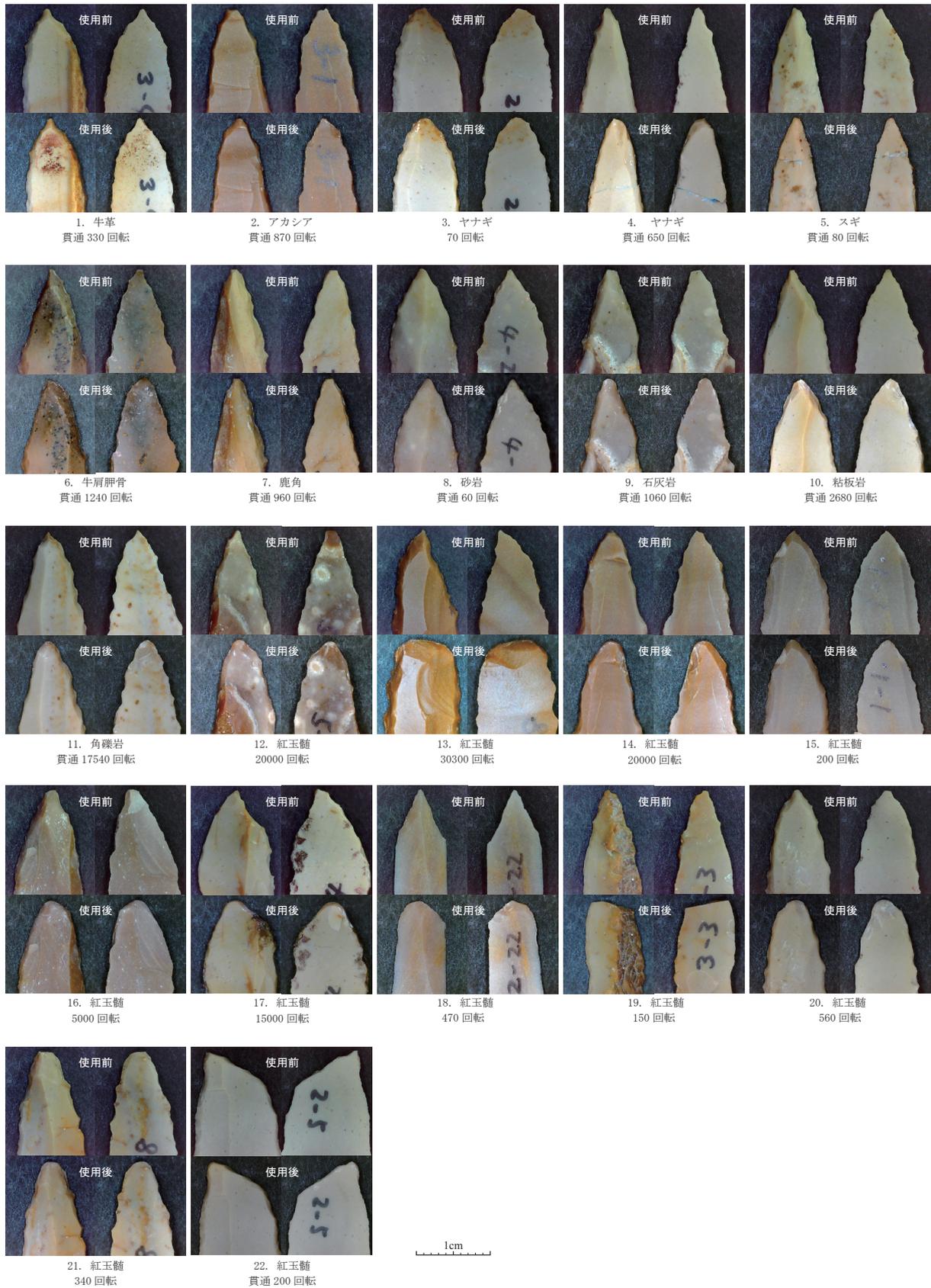


図 12 実験に使用したドリル（使用前後比較）

Fig.12 Experimented drills (before and after perforation)

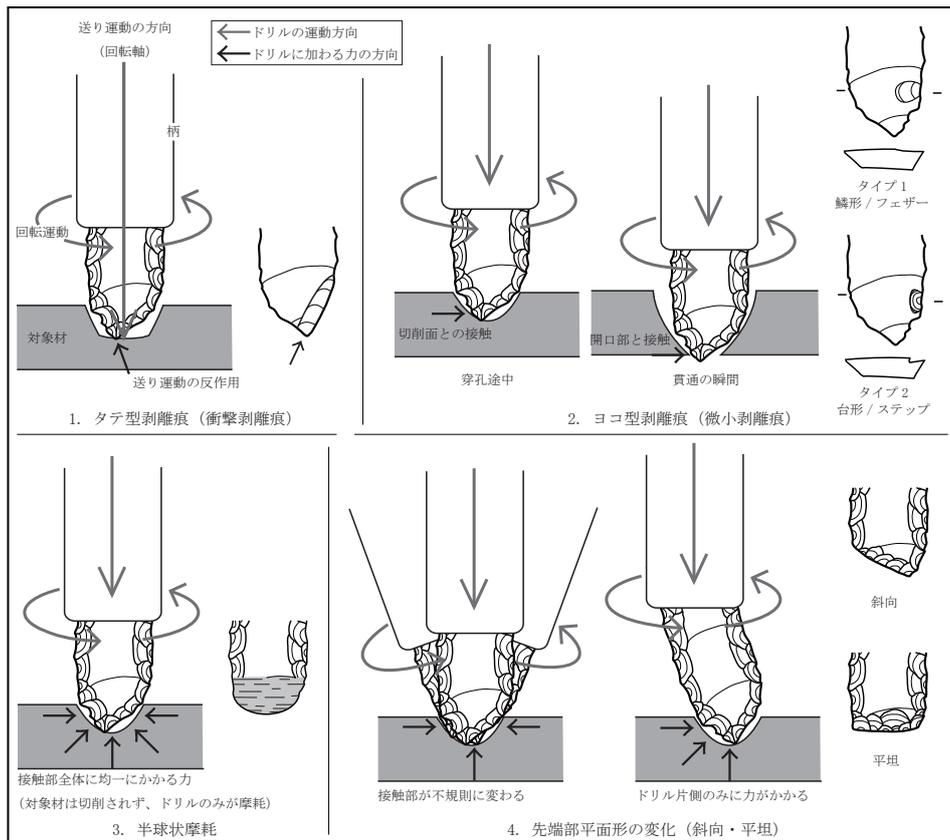


図13 ドリル形状変化の分類と成因

Fig.13 Classification of reduction patterns and their formative factors

手製であるため、先端部を回転軸線上に寸分違わず装着することは事実上不可能である。その結果、ドリル先端部と回転軸にずれが生じ、そのずれた部分に反作用がかかり欠損が起こる（図13-1）。

この現象は錐杵（軸）とドリルの装着時の位置関係に依るため、両者が馴染んでいない穿孔作業の初期（回しはじめ）に起こりやすいと思われる。言い換えれば、加工材の硬さを問わず、いずれの材質にも起こりうる現象であると言える。材質別には、タテ型剥離痕はヤナギ、スギ、紅玉髓に使用したドリルに認められた（No. 4,5,12,15,18）。

## ②ヨコ型の剥離痕

ヨコ型の剥離痕は、ドリル側面が対象物切削面に接触し、ドリル側面に対して横向きに働いた力によって生じた剥離である。この成因は2パターン想定できる。一つは穿孔途中での接触であり、もう一つが貫通の瞬間である（図13-2）。石器表面の一部が極端な圧力を受けた場合にこの剥離は起こりうる。そのため、穿孔途中の場合にはドリル側面の特に脆弱な部分に剥離が生じる。また、貫通の瞬間には対象物開口部の鋭利なエッジがドリルに接触し擦れ合うことによって剥離が生じる。この点を勘案すると、前述のタテ型剥離が穿孔初期に起こりやすいのに対し、ヨコ型剥離は穿孔作業の終盤により生じやすいと考えられる。

さらに、ヨコ型剥離痕を詳細に観察すると、形態的に2分類できる<sup>16)</sup>。第一は、平面形が鱗形を呈し、剥離末端部がスムーズに収束する（タイプ1：鱗形 / フェザ）。第二は、平面形が台形を呈し、末端部が階段状の急角度を呈する（タイプ2：台形 / ステップ）。興味深いのは、タイプ1が軟質材に使用されたドリルに多く認められ（No.2,3,6,13）、一方のタイプ2が牛骨や石材といった比較的硬い材を穿孔したドリルに多

く認められたことである (No.6,9,10,11,12,14,15,17,18,20,22)。このような微小剥離痕の形成の傾向は、御堂島の記述を借りれば、「特定の操作法で、ある硬さの作業対象物に対して作業された場合に特徴的に生じる(御堂島 2005: 74)」(Odell 1977; 阿子島 1981)という原則が、本稿の観察結果にも適用されうるだろう。すなわち、穿孔という石器の使用法においても同様に、ヨコ型剥離痕の形状差は、対象材の硬さと錐の操作(回転摩擦・貫通)に関係すると考えられる。ヨコ型剥離痕は、実際の出土遺物がどんな材質に対して用いられたのかを推定するための重要な指標になると思われる。



図14 ドリル先端部腹面の拡大写真 (No. 19 は先端部紛失のため除外)

Fig.14 Close-up photo on the ventral surface of drills

### ③半球状摩耗

ドリル先端部が半球状に摩耗した状態である(図13-3)。ドリルがこの状態になると加工物は切削されず、空回りするだけである。ドリルの方が加工物に削られる現象と言い換えることもできる。紅玉髓に対して使用した6点に認められた(No.12,14,16,17,20,21)。早いものでは300~500回程度の回転で半球状摩耗が生じる(No.20,21)。15000回転したサンプル(No.17)には光沢が生じた。半球状への変化は、ドリルの回転回数に関係するというよりも、ドリルの材質よりも硬いあるいは同等の物質に穿孔した場合に起こりやすいと考えられる<sup>17)</sup>。

### ④先端部平面形の変化

本来尖頭形だった刃部が、斜めもしくは平坦に変形する現象である。紅玉髓に使用した2点のサンプル(No.13,18)に認められた。No.13は、20000回転の時点では光沢のある半球状だった。そこから過度に力を加えた結果、逆に加工物(紅玉髓)によって刃が削られ、最終的に30030回転して刃部が平坦に変形した。No.18の回転数はそれよりもかなり少ない。470回転で刃部の右半分のみが削られ、左側に偏った(斜向/左)。

変形の要因は、穿孔中のアクシデントに求められる(図13-4)。平坦と斜向どちらの場合も、ドリル先端が加工物に対し垂直に接しなかったことにより生じた。具体的には、弓錐操作中の1)回転軸のズレ、2)あるいはドリルと柄との装着部分のズレ、が起こったためと考えられる。

また、先端部平面形の変化は、紅玉髓以外の素材への穿孔では生じなかったため、ドリル素材と同等の硬さの物質に穿孔した場合に特有のものでもあると思われる。

### (3) 研磨剤の切削能力：角礫岩の場合

水とアカシア樹液を1対1で混合した溶媒に石英砂の配合率を変えた3種類の研磨剤を用いて、角礫岩に穿孔した。

結果、水・樹液・石英砂を同比率(1:1:1)で配合した研磨剤が最も優れた切削能力を持つことが分かった(図15)。研磨剤不使用の場合の角礫岩への穿孔コストが3986回転/mmであるのに対し、同率配合(1:1:1)の研磨剤使用時には195回転/mmとなる。その切削能力は、実に20倍にまで向上する。

また、石英砂の配合率によって切削能力に差があることもわかった。能力差が生じる理由には、研磨剤の粘度の違いが考えられる。配合率が1:1:1の研磨剤は、流動性のある液状(ハチミツ程度の粘り)を呈しており、穿孔時にドリルと対象物の間に留まりやすい。換言すれば、回転時にドリルの遠心力を受けても、研磨剤が切削面に残留する。その結果、回転摩擦と送り運動によって砥粒の自生発刃が起こり、高い切削能力が発揮される。一方、石英砂を3倍配合した研磨剤は、流動性のない固体状(ダンゴ程度の粘り)を呈する。この場合、数回の回転運動のみで、研磨剤は全て切削面から掻き出されてしまう。結果、効果的な自生発刃が起こらず、切削能力は低下する。

## 7. 予察：ヒエラコンポリス出土ドリル

本章ではヒエラコンポリス出土資料に目を向けて、複製ドリルの観察で得られた種々の痕跡との若干の比

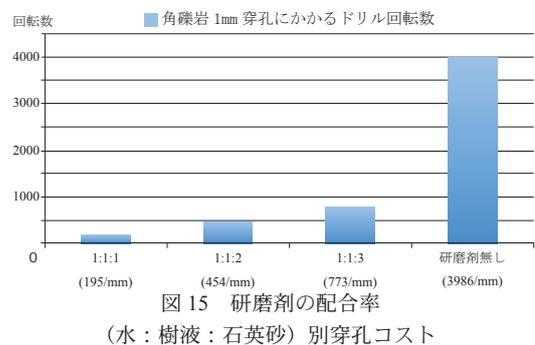


Fig.15 Cutting capability of abrasive sand paste for breccia

較を述べたい。

タテ・ヨコ型剥離痕（衝撃剥離痕・微小剥離痕）については、現在のところ、実際の出土遺物の顕微鏡観察を行うには至っていない。現状では実測図を確認することしかできないが、HK29A 地区出土ドリルの中には、腹面にこれらの剥離痕を有するものが存在する（図 16）。

ドリル平面形の変化については、本来は尖頭形であったドリルが穿孔中のアクシデント（回転軸あるいは着柄部のずれ）による変形で生じることが確認できた。第 3 章で既に述べたが、考古資料ではこの斜向タイプが一定の割合（31.8%）を占める（図 5- 11, 12, 21）。ただし、刃部側縁に二次加工時の剥離痕がなく、この所見には必ずしも符合しない遺物も存在する。したがって、過去においてもこうした斜向タイプが意図的に製作された可能性は残る（図 5-9, 13, 14, 17, 19）。事実、本実験において唯一使用した斜向タイプ（図 7-22）は、穿孔器として機能した。以上のことから、平面形の変化成因の全てをこの現象に求めることは当然できないが、一つの可能性として提示することはできるだろう。また、今後は更に、刃部形状の違いによる切削能力差についても検証する必要があるだろう。

半球状に摩耗したドリルについては、考古資料には認められない。この不一致は、考古遺物の用途を推定する上で残された問題である。しかし、摩耗したドリルはもはや利器としての用をなさないため、過去には刃部再生がその都度行われ、作業途中の痕跡が現在には残されていない可能性も、ここに付け加えておきたい。

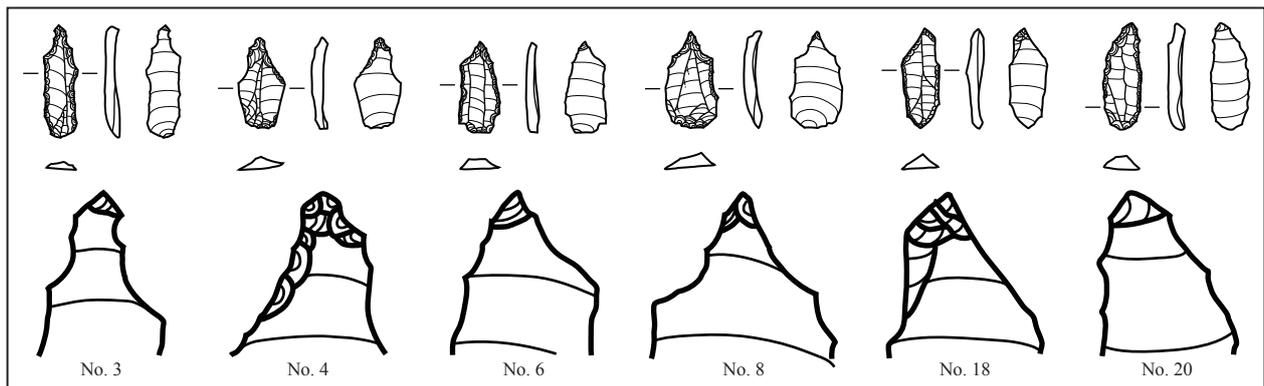


図 16 考古遺物（HK29A 出土資料）に認められるタテ・ヨコ型剥離痕  
Fig.16 Damages observed on the archaeological finds (HK29A, Hierakonpolis)

## 8. 結論

本稿では、エジプト先王朝時代の穿孔技術について、実験的手法による検証を試みた。その内容は、フリント製小型ドリルを用いた種々の材質への穿孔がそもそも可能であるのか、可能であるならば如何なる方法が想定しうるのかという問いに始まり、更に、穿孔作業によってドリルに生じる様々な形状変化を観察し、その類型化と成因の考察を図るものである。

本実験からは、以下の点が指摘できるだろう。

- 1) フリント製小型ドリルと弓錐を用いた穿孔は、先王朝時代に工芸品の素材として利用された基本的な材質に対して有効である。
- 2) 弓錐法は、図像資料に認められる古王国時代を遡り、先王朝時代に既に存在していた可能性が高い。
- 3) ドリルの穿孔コストと減少度は、対象材によって異なる。

4) 使用後のドリルの顕微鏡観察によると、加工物の硬さや作業段階、操作法に規定される固有の剥離痕（衝撃剥離痕・微小剥離痕）がドリル腹面に形成される。

5) 特に、ヨコ型剥離痕の形状の違い（鱗形/フェザー・台形/ステップ）は、対象物の硬さに由来する場合が多い。

6) 回転軸からずれた刃部を持つドリル（斜向、平坦タイプ）のいくつかは、本来は尖頭形であったものが作業時のアクシデントにより変形した可能性がある。

7) 顕微鏡観察の必要性が残るものの、上記4) 5) 6) の痕跡がヒエラコンポリス遺跡出土ドリルとも一部一致する。

8) 研磨剤（水・樹液・石英砂）を用いた穿孔は最大で20倍の切削能力を発揮する有効な手法であり、特に石材（硬質で浸水性が低い）の加工には、この方法が過去にも利用されていた可能性は高い。

## 8. 展望

本稿は、フリント製小型ドリルの切削能力と、穿孔によって生じる形状変化について、実験的手法を用いて検証した。

残された課題は3点ある。すなわち、1) 実験結果と同一基準での考古遺物の検証、2) より高倍率での顕微鏡観察による形状変化の抽出と類型化、3) 工芸品製作技術の一つを担う穿孔技術を、エジプト初期国家形成期という脈絡の中で位置づけること、である。

## 謝辞

本稿を草するにあたり、早稲田大学理工学術院名誉教授の宇田応之先生には、研磨剤の材料や実験方法に関するご教示を賜った。美濃考古学研究会（岐阜県）の後藤信幸氏には、エジプト産のフリントをはじめ実験用石材を破格でお譲りいただいた。竹野内恵太さん（早稲田大学大学院修士課程）には、エジプト産の石材（角礫岩、石灰岩、砂岩）をご提供いただいた。渡辺玲さん（早稲田大学文学部考古学コース・学部生）には、作業の補助をしていただいた。末尾ながらここに記して感謝いたします。

尚、本論文は「早稲田大学2013年度特定課題研究助成費B」（課題番号：2013B037）による研究成果の一部である。

## 註

- 1) ヒエラコンポリス以外の遺跡では、先王朝時代のアビドス遺跡の集落址から、300点あまりのフリント製小型ドリルと紅玉髓（あるいは瑪瑙）が見つかっている（Peet 1914: 3-4, pl. IIIa upper half）。
- 2) ドリル自体の出土例はないものの、銅製ドリルは初期王朝時代（0-2王朝）には利用されていたことが、ガイネットとゴレリックの研究から明らかになっている（Gwinnett and Gorelick 1993: 131）。
- 3) 素材剥片の剥離およびドリルへの二次加工には、現代的な石器作りで用いられている道具（銅製ハンマー、銅製押圧具、セメント製砥石等）を使用した。これらの道具は、ウェブサイト [Flintknappingtools.com](http://www.flintknappingtools.com) (<http://www.flintknappingtools.com/>) から購入した。
- 4) 美濃考古学研究会 (<http://www.geocities.jp/horado1841/>)。
- 5) 石器製作者（筆者）の技術の拙さ故に細石刃を量産できなかつたため、ドリル素材には不定形剥片も含まれる。
- 6) 考古遺物には使用により摩耗したのも含まれることが想定される。そのため、これらのデータは必ずしも使用前の寸法を示すわけではない。あくまで、実験で複製する際の目安として提示するものである。
- 7) ただし、ドリル No.22 のみ尖頭形ではなく斜向（左）である。この理由は、紅玉髓の穿孔に思いがけず多くのド

リルを費やし、準備していた尖頭形のものを使い切ってしまったためである。

- 8) その結果、復元製作したドリル 22 点中 4 点 (No.13,16,20,21) は、剥片の基部側に刃部を有する。同様のものは考古資料でも約 2 割を占める。興味深いのは、そのどれも端部側が折損している点である。復元製作中に実感したことだが、二次加工に失敗し剥片が折損した場合、先端部側は四角くなり加工が困難になる。しかし、そのまま捨ててしまうのは勿体ない。そこで、比較的丸みのある基部側に二次加工し直して尖頭形に仕上げた。印象の域を超えないが、先王朝時代においても、基部側に刃部を持つ考古資料は、このような加工失敗とやり直しに由来するのかもしれない。
- 9) 錐杵には角棒を用いた方が弓との相性が良くうまく回転する。逆に丸棒の場合、弓紐と棒との接触部分が滑ってしまい、ドリルが回転しづらい。考古遺物との整合性 (図 5) はないものの、本実験ではドリルの回転数を正確にカウントする必要があるため、角棒製の錐杵を使用する。
- 10) アカシア樹液は、フクロモモンガの餌として販売されているもの (日本産) を利用した。石英砂は、石英含有率 99.9% の高純度の砂 (オーストラリア産) を用いた。
- 11) シカは、エジプトでは稀な動物である。本来であれば、先王朝時代に存在した象牙や河馬牙を加工対象材として準備するべきではあるが、どちらの材もその希少性から入手できなかった。そのため今回は代用材として鹿角を用いた。
- 12) 貫通時にドリルが地面に接触し破損するのを避けるために、作業は厚みのあるゴム製板の上で行った。また、各材は、ビニール製の透明テープで板上に貼り付けて固定した。
- 13) 角礫岩は、硬すぎず柔らかすぎない材質であるため、研磨剤の配合比率による切削能力差が出やすいと考えた。また、貫通までに極端に長時間を要さないため作業にも適している。角礫岩は研磨剤未使用で 1mm 穿孔に 4000 回転程度の穿孔コストを示した (表 2, 図 11)。これは作業時間にすると 30 分程度である。因みに、最も硬い紅玉髓の貫通には 9 時間半を要した。また、本実験は気温が 10 度以下の日本の真冬に行ったため、作業が長期化すると研磨剤に含まれる樹液が凝固してしまう問題があった。これらの条件を考慮した上で、研磨剤の実験では角礫岩を用いた。
- 14) 図 13-2,4 に挙げた各 2 タイプの錐操作概念図とドリルの形状変化の組み合わせは、必ずしも排他的な 1 対 1 の対応関係にあるわけではない。
- 15) 狩猟具の破損痕跡のひとつで、石槍を刺突した際にできる彫器状の衝撃剥離痕 (岩瀬 2013: 7) と似た原理で形成されると考えられる。
- 16) 御堂島正による微小剥離痕の分類 (2005: 52 図 6) を参照した。御堂島はまた、微小剥離痕の大きさを最大幅によって大・中・小・極小 (2mm 以上、2 ~ 1mm、1 ~ 0.5mm、0.5mm 以下) に 4 分類している (御堂島 2005: 52)。本稿がヨコ型剥離痕と呼ぶ剥離痕の大きさは、上記に当てはめると大・中に分類される。
- 17) フリントと紅玉髓のモース硬度はともに 7 である。

## 参考文献

Adams, B.

1998 “Something Very Special down in the Elite Cemetery”, *Nekhen News* 10, pp.3-4.

2000a *Excavations in the Locality 6 Cemetery at Hierakonpolis 1979-1985*, Egyptian Studies Association Publication 4, British Archaeological Reports Int. Ser. 903. Oxford: Archaeopress.

2000b “Some Problems Solved in the Locality 6 Cemetery”, *Nekhen News* 12, pp.4-6.

Davis, N. de G.

1953 *Tomb of Rekh-Mi-Re*, New York.

Endo, H.

2009 “Beads Aren’t Boring,” *Nekhen News* 21, p.22.

Fairservis, W. A. Jr.

1986 *The Hierakonpolis Project No. 3: Excavation of the Archaic Remains East of the Nitched Gate, Season of 1981*, Occasional Papers in Anthropology, Vassar College, Poughkeepsie, New York.

Friedman, R.

2000 “Figures in Flint”, *Nekhen News* 12, p.14.

2004 “Predynastic Kilns at HK11C: One Side of the Story”, *Nekhen News* 16, p.18.

2005 “Excavating Egypt’s Early Kings”, *Nekhen News* 17, pp.4-5.

- 2006 "Bigger Than an Elephant. More Surprises at HK6", *Nekhen News* 18, pp.7-8, 16.
- 2009a "Hierakonpolis Locality HK29A: The Predynastic Ceremonial Center Revisited," *Journal of American Research Center in Egypt* 45, pp.79-103.
- 2009b "A Tour of the Palace," *Nekhen News* 21, pp.4-5.
- 2011 "4. Hierakonpolis," in Teeter, E. (ed.), *Before the Pyramids*, Oriental Institute Museum Publications 33, The Oriental Institute of the University of Chicago, pp.33-44.
- Friedman, R., Maish, A., Fahmy, A. G., Darnell, J. C. and Johnson, E. D.  
1999 "Preliminary Report on the Field Work at Hierakonpolis", *Journal of American Research Center in Egypt* 36, pp.1-35.
- Friedman, R., Van Neer, W. and Linseele, V.  
2011 "The Elite Predynastic Cemetery at Hierakonpolis: 2009-2010 Update," in Friedman, R. and Fiske, P. N. (eds.), *Egypt at its origins* 3, *Orientalia Lovaniensia Analecta* 205, Peeters, pp.157-191.
- Friedman, R., Baba, M., Linseele, V., Nagaya, K., Hardtke, F. and Jaeschke, R.  
2013 "Report on the 2009 Season at Hierakonpolis," *Annales du Service des Antiquités de l'Égypte* 85, pp.141-164.
- Gwinnett, A. J. and Gorelick, L.  
1993 "Beads, Scarabs, and Amulets: Methods of Manufacture in Ancient Egypt," *Journal of the American Research Center in Egypt* 30, pp.125-132.
- Hikade, T.  
2000 "From Chiefdom to Kingdom and Back: A Contribution Based on the Lithic Analysis from Square 10N5W at Nekhen," *Nekhen News* 12, pp.15-19  
2004 "Urban Development at Hierakonpolis and the Stone Industry of Square 10N5W," in Hendrickx, S., Friedman, R. F., Cialowicz, K. M. and Chlodnicki, M. (eds.), *Egypt at Its Origins: Studies in Memory of Barbara Adams*, *Orientalia Lovaniensia Analecta* 138, pp.181-197.
- Hoffman, M. A.  
1970 *Culture History and Cultural Ecology at Hierakonpolis from Palaeolithic Times to the Old Kingdom*, Ph.D. dissertation, Department of Anthropology, University of Wisconsin, Madison.
- Hoffman, M. A., Hamroush, H. A and Allen, R. O.  
1987 "The Environment and Evolution of an Early Egyptian Urban Center: Archaeological and Geochemical Investigations at Hierakonpolis," *Geoarchaeology: An International Journal* 2-1, pp.1-13.
- Holmes, D. L.  
1988 "Beads, Borers and Bifaces: The Stone Technology of a Temple," *Nekhen News* 4-1, pp.5-7.  
1989 *The Predynastic Lithic Industries of Upper Egypt: A comparative study of the lithic traditions of Badari, Naqada and Hierakonpolis*, BAR (15), Oxford.  
1992 "Chipped Stone-Working Craftsmen, Hierakonpolis and the Rise of Civilization in Egypt," in Friedman, R. and Adams, B. (eds.), *The Followers of Horus: Studies Dedicated to Michael Allen Hoffman*, Egyptian Studies Association Publication No. 2, Oxbow Monograph 20, pp.37-44.
- Killen, G.  
1980 *Ancient Egyptian Furniture, Vol. I: 4000-1300 BC*, Aris & Phillips, Warminster.  
1994 *Egyptian Woodworking and Furniture*, Shire Egyptology Series No. 21, Buckinghamshire.
- Nagaya, K.  
2012 "Square 10N5W: Technological Renovation of Lithic Production at Hierakonpolis," *Nekhen News* 24, pp.14-15.
- Odell, G. H.  
1977 *The Application of Micro-Wear Analysis to the Lithic Component of an Entire Prehistoric Settlement: Methods, Problems and Functional Reconstructions*, Ph. D. Dissertation, Harvard University.
- Peet, T. E.  
1914 *The Cemeteries of Abydos, Part II, 1911-1912*, Egypt Exploration Fund 34, London.
- Quibell, J. E. and Green, F. W.  
1902 *Hierakonpolis II*, Egypt Research Account 5, London: Bernard Quaritch.
- Stocks, D. A.  
2003 *Experiments in Egyptian Archaeology: Stoneworking Technology in Ancient Egypt*, Routledge, London.
- Takamiya, I. and Endo, H.  
2011 "Variations in lithic production at Hierakonpolis: A preliminary report from the excavation of HK11C square A6-

A7", in Friedman, R. and Fiske, P. N. (eds.), *Egypt at its origins 3*, *Orientalia Lovaniensia Analecta* 205, Peeters, pp.727-744.

Wild, H.

1966 *Le Tombeau de Ti*, Institut français d'archéologie orientale, Le Caire.

阿子島香

1981 「マイクロフレイキングの実験的研究—東北大学使用痕研究チーム研究報告その1」『考古学雑誌』66(4)、1-27頁。

岩瀬 彬

2013 「杉久保石器群の石器使用痕分析(2)—長野県セツ栗遺跡・貫ノ木遺跡高速道等第2地点出土資料を対象に—」『資源環境と人類』第3号、明治大学黒曜石研究センター紀要、1-19頁。

遠藤 仁

2013 「エジプト先—初期王朝時代におけるビーズ製作」『日本西アジア考古学会第18回総会・大会要旨集』日本西アジア考古学会、45-48頁。

砥粒加工学会編

1995 『切削・研削・研磨用語辞典』、工業調査会。

長屋憲慶

2014 「エジプト先・初期王朝時代の石刃剥離技術の発達と展開」『古代』第136号、早稲田大学考古学会(印刷中)。

御堂島正

2005 『石器使用痕の研究』、同成社。

宮原俊一

2009 『第17回足もとに眠る歴史展 回せ!—回転運動から考古資料を考える—』東海大学校地内遺跡調査団(編)、東海大学文学部展示活動委員会。

# クシュの碑文を母系制として読む －即位の記録と「アララとアメン・ラーの契約」－

齋藤 久美子\*

Reading the Kushite Texts in the Matrilineal Context:  
Enthronement Records and the Covenant between Alara and Amen-Re

Kumiko SAITO\*

## Abstract

The theory interpreting the royal succession in the 25th, i.e. the Kushite, Dynasty as hereditary through patrilineal succession line is more prevailing than that interpreting it as matrilineal, and the Kushite texts have been translated and interpreted in the patrilineal context. However, the patrilineal interpretation of the Kushite texts has depended on deductions from customs of the different time or place. The role of the king's mother in the enthronement ceremony has been explained assuming that the king's mothers were also king's wives. This assumption was deduced from the fact that the divine wives of Amen at Thebes in the early New Kingdom had both the titles "the king's mother" and "the king's wife" even though no king's mother had the title "the king's wife" in the Kushite Kingdom. As for the covenant between Alara and Amen-Re, in which Alara asked Amen-Re to grant kingship to the descendants of Alara's sister, the concept of legitimacy through the female ancestors expressed in the covenant has been interpreted in the patrilineal context by suggesting that a female succession line was established by means of successive adoptions like the succession of the divine wives of Amen at Thebes.

In this paper, I will argue that the matrilineal interpretation is more faithful to the texts, and the covenant between Alara and Amen-Re actually indicates the matrilineal succession of kingship. As the system of succession in the matrilineal society has been elucidated owing to the recent anthropological studies, it has become clear that the royal succession of the Kushite kingdom can be explained in the matrilineal context. The patrilineal theory should be reexamined now.

## 1. はじめに

第25王朝時代にエジプトを支配したヌビアの王たちの出身地であるクシュ王国の王位継承については、これまで、父系 (patrilineal)、傍系 (collateral)、母系 (matrilineal)、選抜 (election)<sup>1)</sup>、またはこれらを組み合わせたものなどが論じられてきた (詳しくは Morkot 1999; Kahn 2005)。クシュ研究の権威であるテレーク (Török) は父系説で、クシュの碑文の訳と解説をまとめたシリーズ T.Eide et al., *Fontes Historiae Nubiorum*.

\* 早稲田大学エジプト学研究所招聘研究員

\* *Invited Researcher, Institute of Egyptology, Waseda University*

*Textual Sources for the History of the Middle Nile Region*(以降FHNと表記)でも碑文を父系制で解釈しており、現状として父系説が優勢であるといえよう。母系説の根拠は、ギリシア時代の記述に、エチオピアの王は王位を自分の息子ではなく、姉妹の息子にゆずるとしたものがあること(Kahn 2005:145)、メロエ時代(紀元前3世紀中頃から紀元後3世紀中頃)には「カンダケ」と呼ばれる摂政あるいは支配者として権力を握った女性がいたこと(Kahn 2005:150注58)などである。筆者は、父系説が根拠としている「王は前王の息子である」という根拠が直接そのように記した碑文ではなく、「王の娘(*s3t nswt*)」と「王の姉妹(*snt nswt*)」(以下、称号として扱う親族名称は「」付きとする)の称号を持つ女性がいるという間接的なものであることに着目した。そこで別稿(齋藤 2014)において、「王の娘」と「王の姉妹」<sup>2)</sup>の称号を持つ女性がいても、王の父子関係の証拠とはならない可能性を指摘した。クシュでは親族関係を示す称号のうち「王の姉妹」のみを持つ女性がいる。父系制であれば、「王の姉妹」は「王の娘」でもあるはずで、より重要な「王の娘」の称号を省略したとは考えにくい。そこで、クシュ王国において母系社会にみられるキョウダイと平行イトコを同じ名称で呼ぶイロクォイ型またはクロウ型親族名称が使われていたのではないかと考えた。そうであれば、「王の姉妹」は王の平行イトコを含むことになる(齋藤 2014: 57)。称号の分析から、「王の姉妹」と「王の娘」の称号を持つ女性は王の平行イトコとなることを示し、王は前王の甥となり、クシュの王位継承は母系制である可能性を示した(齋藤 2014: 61-62)。そこで今回は、主流である父系説に対し、自説である母系説を補強するために、クシュの碑文を母系で解釈してみることにした。

クシュの碑文やそれに添えられた図像では、王族の女性の存在が顕著である。まず、王の即位を記録した碑文には、王母が即位行事に参加していたことが記されている。また、王が神に対し、王族女性の子孫の繁栄を祈願したものがあ(「アララとアメン・ラーの契約」)。これらの碑文を、父系説の代表であるFHNの解釈と比較しながら、王位の母系継承を示すものとして読んでみたい。

## 2. 即位に際し王母が登場する碑文

### (1) 碑文の概要とこれまでの解釈

即位に際し王母が登場する碑文にはタハルコ、アンラマニ、アスペルタのステラと、イリケアマノテが神殿の壁に記した碑文がある。4つの碑文の概要を説明した後に、父系と母系それぞれの解釈を比較していきたい。

タハルコ(紀元前690-664年)の碑文は治世6年の大増水を記録したステラ(Kawa V, FHN I: 145-158)に記されており、カワのアメン神殿の第一中庭から見つかった。上部の半円形の部分には、左右対称に、中央に描かれたアメン神に向き合って祈りをささげるタハルコと、その後ろでシストルムを手にした王母アバルの姿が描かれている(Lohwasser 2001: 397, Abb.7)。主碑文の前半は、タハルコの祈りを聞き入れ、アメン・ラーが過去の記録に無いほどの大増水を引き起こしたことを感謝するものである。最後に、大増水より6年前の即位時の出来事を振り返って、タハルコが陛下(前王)により王の兄弟や子どもたちの中から後継者として選ばれ即位したことが記されている。続いて、ヌビアにいた母のアバルを北の地(メンフィス)に呼び寄せ、アバルが即位したタハルコの姿を見ていかに喜んだかが以下のように記されている(FHN I: 153-155)。翻字は基本的にFHNからそのまま引用し<sup>3)</sup>、明らかな綴りの誤りは訂正した。碑文の翻字と訳の凡例は、注に記してある<sup>4)</sup>。

[*ist mwt=i*] *m T3-sti m snt-nswt bnr mrwt mwt- nswt T-b3-r ʿnh.ti*

その時、我が母、王の姉妹、甘い愛、王の母、アバル、生きよ、はヌビアにいた。

*is grt [hrn] =i hr=st m hwn n rnpt 20*

その時、新兵として我が彼女のもとを離れてから20年が経っていた、

*m iw=i hn<sup>c</sup> hm=f r T3=mhw*

我が陛下とともに北の地に来て以来。

*h<sup>c</sup>.n iw.n=s m hd r m33=i m-ht hnty rnpwt gm.n=s wi h<sup>c</sup>.kw(i) hr st Hr*

そこで、彼女は長い年月を経た後、我に会うために北へと舟で向かった、

*sšp.n(=i) h<sup>c</sup>w n R<sup>c</sup> hnm.n(=i) W3dty m tp=i ntrw nbw m s3 h<sup>c</sup>w=i*

ラーの王冠を受け取り、頭にウラエウスを付け、あらゆる神に体を守られた（我に）。

*wnn=s h<sup>c</sup>.tw r ʕ3 wr m-ht m3 nfrw hm=f*

陛下の美しさを見て、彼女は多いに喜んだ、

*mi m3 ʔst s3=s Hr h<sup>c</sup> hr st it=f Wsir*

イシスが彼女の息子ホルスが、彼の父オシリスの玉座に現れたのを見た時のように、

*m-ht wnn=f m hwn m hnw 3h-bit*

彼がケンミスの隠れ家で、若者になった後に。

*wnn šm<sup>c</sup> Mhw h3st nbt<sup>5)</sup> dhm=sn t3 n mwt-nswt tn*

南の国、北の国、全ての外国（の人々）が、この王母のためにひれ伏した。

*iw=sn m hb r ʕ3 wrw=sn m ʕb šr=sn*

彼らは偉大な祭典に参加していた、大きいものも小さいものも。

*nhm=sn n mwt-nswt tn m dd*

彼らは、この王母に喝采しながら言った、

*iw ʔst šsp.n st Hr mi mwt-nsw hnm.n=s s3=š*

「ホルスに迎えられた時のイシスは、息子に再会した後の王母の様だ」

アンラマニ（紀元前7世紀末）の碑文は、カワのアメン神殿の第一中庭から見つかった即位を記念してつくられたステラに記されている（Kawa VIII, FHN I: 216-228）。上部の半円形の部分には、左右対称に、中央に描かれたアメン・ラーに向き合って祈りをささげるアンラマニと王母ナサルサの姿が描かれている。碑文には、アンラマニが即位にあたり王母ナサルサを迎えるために使者を送ったこと、そして、やってきたナサルサの様子が次のように記されている（FHN I:223）。

*gm.n=s s3=s h<sup>c</sup> mi Hr hr-tp srh=f*

彼女は、玉座におけるホルスのように光輝く息子を見つけ、

*wn=s h<sup>c</sup>.tw wr ʕ3 m-ht m33=s nfrw hm=f*

彼女は、陛下の美しさを見てとても喜んだ、

*mi m33 ʔst s3=s Hr h<sup>c</sup> hr t3*

地上において光輝く息子ホルスを見た時のイシスのように。

続いて、アンラマニが姉妹をアメンのシストルム奏者として任命したことが記録されているが、この部分に関しては、次節で扱いたい。

アスペルタ（紀元前7世紀末頃）の「選出ステラ（Election Stela）」（Cairo JE 48866, FHN I:232-252）は、ゲベル・バルカルのアメン神殿から発見されたもので、アメン・ラーが王の兄弟たちの中からアスペルタを王として選出したいきさつが記されている。上部の半円形の部分（図1）には、右向きのアメン・ラーの前に同じく右を向いて跪くアスペルタと、それに向き合うかたちで左を向く王母ナサルサが描かれている。この場面で、ナサルサはアメン・ラーに対し次のように言った（FHN I:232-233）。



図1 アスペルタの選出ステラ（Grimal 1981: pl.V ©IFAO）  
Fig.1 Aspelta's Election Stela

ii.n(=i) hr=k Imn-R<sup>c</sup> nb nst T3wy <中略>

私は貴方様、両土の玉座の主、の元に来ました。<中略>

smn=k s3=k mry=k [I-s-p-r-t] <sup>c</sup>nh dt m i3t tp(y)t nt R<sup>c</sup>

貴方様が、貴方様の息子、貴方様の愛する者、[アスペルタ]、永遠に生きよを、ラー神の最高の地位に就けますように。

それに対しアメンは次のように言った（FHN I:233）。

s3(=i) mry [I-s-p-r-t] di=i n=k h<sup>c</sup> n R<sup>c</sup> nsyt=f hr nst it

我が愛する息子よ、我は汝にラー神の王冠、(汝の)父の玉座における彼の王権を授ける。

本文において、アメンが複数の次期王候補の中からアスペルタを選んだという記述の後には、アスペルタの母から6代遡って、女系の系譜が記されている（FHN I:240-241）。アスペルタの父、アスペルタの母、その母たちの名は全てカルトウーシュで囲まれている。名前の部分は削り取られていて、判読できない。

it=f pw s3=i S3-R<sup>c</sup> [---] m3<sup>c</sup> hrw

彼の父は、我が息子、ラーの息子、[名前欠損]、声正しき者である。

mwt=f sn(t)-nswt mwt-nswt hnwt Kš S3t-R<sup>c</sup> [---] <sup>c</sup>nh dt

彼の母は、王の姉妹、王母、クシュの女主人、ラーの娘、[名前欠損]、永遠に生きよである。

mwt=s sn(t)-nswt dw3t-ntr n Imn-R<sup>c</sup> nswt ntrw n W3st [---] m3<sup>c</sup> hrw<sup>6)</sup>

その母は王の姉妹、テーベの神々の王であるアメン・ラーの礼拝者、[名前欠損]、声正しき者。

mwt=s sn(t)-nswt [---] m3<sup>c</sup> hrw

その母は王の姉妹、[名前欠損]、声正しき者。

mwt=s sn(t)-nswt [---] m3<sup>c</sup> hrw

その母は王の姉妹、[名前欠損]、声正しき者。

mwt=s sn(t)-nswt [---] m3<sup>c</sup> hrw

その母は王の姉妹、[名前欠損]、声正しき者。

*mwt=s sn(t)-nswt [---] m3<sup>c</sup> hrw*

その母は王の姉妹、[名前欠損]、声正しき者。

*mwt=s sn(t)-nswt hnwt n Kš [---] m3<sup>c</sup> hrw*

その母は王の姉妹、クシュの女主人、[名前欠損]、声正しき者。

イリケアマノテ（紀元前5世紀後半）の碑文は、カワにあるT神殿の列柱室東壁に126行にわたり丁寧に彫られおり、イリケアマノテの即位とカワのアメン神殿への寄進を記録したものである（FHN II:400-428）。即位の儀式は各地で行われ、治世2年目にカワで行われた儀式に王母が参加したことが記録されている。その様子は以下のように記されている（FHN II:414）。王母の名前は欠損していて不明である。

*iw sn(t)-nswt hnwt n Kmt mwt-nswt [---] wnn[=s h<sup>c</sup>.tw] m 3w-ib hr m33 s3=sw h<sup>c</sup> m nswt<sup>7)</sup>*

王の姉妹、エジプトの女主人、王の母、[名前欠損]、彼女は彼女の息子が王として現れたのを見て喜んでいた。

[---] [T-r-k-Imn-niwt] <sup>c</sup>nh dt h<sup>c</sup> hr st-Hr mi R<sup>c</sup> dt nhh

[---] イリケアマノテ、永遠に生きよは、ラーのように永遠にホルスの玉座に現れた。

FHNのタハルコのステラの解説では、王母の訪問はケンミス神話の再演であり、王母の様子を、ホルスが父の後を継いで即位した様子を見て喜ぶイシスの喜びとして表現したものと述べられている（FHN I:158）。王母をイシスとすることで、王を神の子とすることであろう。解説を書いたテレークは、*mwt nswt* (king's mother) の称号を "Queen Mother" と英訳している。"Queen Mother" とは、父系制において前王の王妃であり息子が王に就いた女性の呼称であり、テレークが王母は王妃であると考えていることがわかる。

アンラマニのステラの解説でも、王母ナサルサの即位の儀式への参加は、タハルコのステラに記されていたアバルのメンフィス訪問と同様の神学的意味があり、王の正統性を示す意味があるとしている（FHN I:227）。これは、王母のイシスとしての役割を指したもので、タハルコのステラと同様に解釈している。

アスペルタの選出ステラの解説では、ステラ上部の半円形部分を続けて起きた3つのエピソードを記したものと述べている：1) 王母が息子アスペルタに王権を与えるよう神に祈る、2) それに応じて、神がアスペルタに王位を授け、世間に公表する、3) 王と彼の聖なる両親であるアメンとムトに対して、王母は神官としてシストルムを奏で、神が約束した王権の永続性の仲介者を演ずる（FHN I:246）。王母が祭祀を続けることで王権の永続性の約束が守られるということであろう。ここに描かれた王母の姿は、王母の神官としての役割を表したものとなる。

アスペルタの選出ステラにおいてアメンは、「彼（アスペルタ）の父」は、王を表す「ラーの息子」の称号を持つ我が息子であると宣言している。この記述はアスペルタの父は王であることを示すとされ、この宣言は父系継承を強調するものであると解釈されている（FHN I:248）。テレークは、続いて記されている母系系譜の7人の女性は全員が王妃で、王妃のうち王母になったものが前王母の養女になることによって作られた人工的な母系系譜であると考えている。テレークは、王位継承は基本的に父系継承であるが、時に兄弟間の継承が起こったことにより生じた2つの父系の家系のうち、より正統な家系では王母候補として王家の祭祀において神官職を務めている女性が王妃となっており、王妃たちのうち王母となった者たちが養子縁組により母系系譜を作っていると考えている（図4参照）。この母系系譜は、兄弟継承により生じた傍系に対し、自らの所属する家系の方がより正統であることを示し、父系系譜の正統性を補足するものであると考えてい

る(FHN I:248-252)。王妃が、神と王との仲介者としての神官の役割を演じていたことを重視した解釈である。

イリケアマノテの碑文にはイシスへの言及はないが、解説では、「ホルスを見たイシスのように」と補って、王母は息子がホルスの玉座に昇り、王として即位するのを見るためにカワを訪れたと説明し、タハルコのステラを参照するように示している(FHN I:426)。

FHNの解説においては、即位の儀式における王母の役割は、王母は王妃との前提で、王母をイシスとすることで、王の神聖な出自を示すという神学上のものとしている。そして、もうひとつの役割は、神が王権永続の約束を守ってくれるように、シストルム奏者として祭祀を行う神官を務めることであると考えている。

## (2) 父系説と母系説の対比

父系説では、即位の儀式における王母の役割は、王の神聖な出自を示すことと、王と神の仲介者として神官を務めるという神学上のものであると考えている。一方、母系で考えると、王母位を持つ女性から生まれたことが王の第一条件であることから、王母の即位の儀式への参加は、まさに王位の正統性を示すものである。父系説では王母は王妃であると考えているが、母系制と考えると王母は王妃とはならない点が対照的である。

父系説をとるテレークは、即位の儀式における王母のホルスの母イシスとしての役割において、以下のよう王母は王妃であったと考えた(Török 1997:225)。メンフィス神話では、イシスはケンミスにおいてパピルスの茂みに隠れてホルスの産み育てたと言われている。クシュの王はメンフィス滞在中にケンミス神話を知り、王位の正統性を示す儀式に取り入れたと思われる。第18王朝初期イアフメス・ネフェルトイリ以降、王の正妃または王の娘がアメンの神妻の称号を持つようになった。アメンと王妃の聖婚は次期王となる息子に神聖性を付与した(Ayad 2009:7)。王妃をアメンの神妻とすることで、次期王は人間界での父系の王位の正統性と、アメンの子としての神聖性を得ることができた。テレークは、第18王朝時代にはアメンの神妻が王妃であったことから連想し、神の妻であるイシスの役を演じている王母も王妃であると考えている。王母が王妃であれば、その息子は王の息子であり、父系制となる。

しかし、第25王朝から紀元前335年頃のナスターセンまでの間に、「王母」の称号を持つ女性は9人確認されているが、そのうち「王の妻」の称号を持つ者はいない(Lohwasser 2001:256)。王母が王妃である直接的な証拠は無いにも関わらず、テレークは *mwt nswt* (king's mother) を "Queen Mother" と英訳している。父系制か母系制かはっきりとしない現状においては、*mwt nswt* は「王母 (king's mother)」と直訳するべきであろう。父系か母系か解釈する以前に、父系制を前提としているところが問題である。

アスペルタの選出ステラに記された7代にわたる母系系譜においても、女性たちは「王の姉妹」の称号は持つが、「王の妻」の称号は持たない。にもかかわらず、テレークは全員が王妃であり、王母となった者が前王母の養女になることによって作られた人工的な母系系譜であると考えている。筆者は、アスペルタの父(*it.f*)と記された人物は、*it* (父)は祖先や先王を示す例があることから(Robins 1979:200 例:ホルエムヘブがトトメス3世に用いている)、アスペルタの実父ではなく、王朝の創始者であるアララであり、母系系譜の始まりの女性はアララの姉妹なのではないかと考えている。王朝の始祖を示したうえで、母系の系譜を初めから記したものとなる。これは、次節で扱う、アララが自分の姉妹の子孫の繁栄を神に願う「アララとアメン・ラーの契約」にも沿う解釈である。

王母が現れる即位の記録は、母系制で考えれば、王母はまさに王位の正統性を示すために即位の儀式に参加したと素直にそのまま読めば良い。「王の妻」の称号をもたない王母を王妃と考える必要もない。一方、父系説では、時代の異なるアメンの神妻から推測して王母は王妃と考え、演じているのは神学上の役割であると説明している。そしてアスペルタの選出ステラに見られた母系系譜は、人工的につくられたものと考え

ている。しかし、父系制であれば王母が王妃であることは重要であるにも関わらず、王妃の称号が記されない理由の説明は不十分である。父系説における王母=王妃という考え方は、次に扱う「アララとアメン・ラーの契約」の碑文の解釈にも見られる。

### 3. アララとアメン・ラーの間で交わされた契約

#### (1) 碑文の概要とこれまでの解釈

クシュ王朝の始祖であるアララがアメン・ラーと交わした契約が、タハルコの2つのステラに記されている (Kawa IV, FHN I:135-145; Kawa VI, FHN I:164-176)。それは、タハルコの祖母の兄にあたるアララが、自分の母、または姉妹を見守り、彼女の子孫を王にすることをアメン・ラーに祈願し、それを聞き入れた神がタハルコを王に任命したという内容である。王になる資格が特定の女性の子孫であるという内容であり、母系制を思わせるが、FHN では父系制で解釈されている。

Kawa IV と Kawa VI は同じ内容を記録したものと思われる。関連個所の訳は以下のとおりである。

・ Kawa IV 16 ~ 19 行目 (FHN I:141)

*hn.tw n=f mwwt nt mwt=i in sn=sn wr S3-R<sup>c</sup> T-r-r-i m3<sup>c</sup> hrw*

私の母の母たち<sup>8)</sup>は、彼女たちの兄、首長、ラーの息子、アララによって、彼(カワのアメン・ラー)に仕える者とされた。

*m dd <中略> m3=k n=i r ht n [mwwt] =i smn=k msw=sn tp t3*

(アララの)言うところでは、「<中略>・・・私のために私の母たち<sup>9)</sup>の子宮を見守り、彼女たちの子孫たちを地上において繁栄させたまえ。

*ir=k n=sn mi ir:n=k n=i di=k spr=sn r bw-nfr*

私にしたように、彼らのために行い、彼らが良きものを得られるようにしたまえ。」

*sdm.n=f n ddwt=f (i)r=n s<sup>c</sup>h<sup>c</sup>.n=f wi m nswt mi dd.n=f n=f*

彼(神)は彼(アララ)が我々について述べたことに耳を傾け、彼が彼に語ったとおり、私を王にした<sup>10)</sup>。

・ Kawa VI 22 ~ 25 行目 (FHN I:173-174)

*hn.tw n=f mwt n mwt=f in sn=st wr S3-R<sup>c</sup> T-r-r [m3<sup>c</sup> hrw] [m dd]*

彼の母の母<sup>11)</sup>は、彼女の兄、首長、ラーの息子、アララによって彼(カワのアメン・ラー)に仕えるものとされた。(アララが)曰く、

*i ntr mn<sup>h</sup> h<sup>h</sup> iw n s<sup>c</sup> n=f*

「おお、慈悲深き神、素早く、彼に会いにやって来た者、

*m3=k n=i r sn(t)=i hmt ms hn<sup>c</sup>=i m ht w<sup>c</sup>t*

私のために、私の姉(妹)、私とともにひとつの子宮から生まれた女性、を見守りたまえ。

*ir{n}=k n=s mi ir:n=k n ir n=k <中略>*

汝のために行いし者に対し汝が行ったように、彼女のために行いたまえ。・・・<中略>・・・

*stn{n}=k msw=s m t3 pn di=f spr=f r bw nfr h<sup>c</sup> m nswt mi ir:n=k n=i*

彼女の子孫たちをこの地に君臨させ、彼らに繁栄をもたらし、王として即位させたまえ、汝が私にしたように。」

*sdm .n=f n ddt=f nbt n d3 m3<sup>c</sup> r md=f nb*

彼（神）は彼の述べたことを全て聞き、彼の全ての言葉に注意を払うことを（怠りは）しなかった。

*rdi=f n=f s3=f snw=f S3-R<sup>c</sup> T3-h-r-k<sup>c</sup> nḥ dt nswt [---]*

彼（神）は彼のために、彼の息子、ラーの息子、タハルコ、永遠に生きよ、を王に指名した。

*r s[h]3 rn=f r smnh mnw=f r srwd twt=f r ht rn=f hr r3-pr*

彼（アメン）の名を記念し、彼の記念物を装飾し、彼の彫像を管理し、神殿に彼の名前を刻ませ、

*r nis rn n mwwt=f tp(ywt)-<sup>c</sup> r smn n=sn prt-hrw*

彼（タハルコ）の母たち（祖先の女性たち）の名を叫び、彼女たちの供物を供え、

*r di n=sn hmw-k3 s3w šps m ht nb*

彼女たちにたくさんのカー神官を与え、あらゆるものが豊富にあるようにするために。

FHN のテレークが書いた Kawa IV の解説では、王族女性のアメンのシストルム奏者への任命は、新王国時代および第3中間期の神と王の仲介者であり、正統性を示す力（a legitimating force）のある神妻の観念により理解されるべきであると述べている（FHN I:144）。新王国時代にアメンの神妻は王妃でもあったことから、「神官としての王妃は王権の更新と維持に重要な役割を演じている（下線は筆者による強調）」（FHN I:144）とも述べており、テレークがアメンのシストルム奏者に任命された王の姉妹が王妃であると考えていることがわかる。前節でみたように、テレークは、アスペルタ選出ステラに記された王母の母系系譜は養子縁組による人工的なものであると考えており、この母系系譜の初代の女性がアララの姉妹であるペバトゥマと考えている（FHN I:145）。「アララとアメン・ラーの契約」において、アララは母や姉妹であるペバトゥマの子孫の繁栄を願っているが、ペバトゥマは王妃であり、王位は基本的に父系継承との立場である。

Kawa VI の解説は、やはりテレークが書いたものであるが、Kawa IV のアララの契約と同じものからの引用と考えている（FHN I:175）。

また、アンラマニの即位を記録したステラでも、前節で触れた王母の訪問に続き、王が4人の姉妹をアメン・ラーのシストルム奏者に任命し、アメン・ラーに母の子孫の繁栄を願う一文がみられる（FHI I:223-224）。

*rdt.in hm=f snwt=f hmwt fdw n ntrw r sššyw*

陛下は彼の姉妹、4人の女性を、シストルム奏者として神々にささげた。

*w<sup>c</sup>t n Imn n Npt w<sup>c</sup>t n Imn-R<sup>c</sup> Gm-Itn*

ひとりをナパタのアメンへ、ひとりをゲム（パ）アテン（カワ）のアメン・ラーへ、

*w<sup>c</sup>t n Imn P3-nbs w<sup>c</sup>t n Imn-R<sup>c</sup> k3 n T3-sti*

ひとりをパネベスのアメンへ、ひとりを弓の地（ヌビア）の雄牛、アメン・ラーへ、

<中略>

*dd.in hm=f <中略> m3=k mwt=i smn=k msw=s tp t3*

陛下は言った、「<中略> 私の母を見守り、彼女の子孫たちを地上に君臨させたまえ。」

FHN では、4人の姉妹は、王権を更新するという王族女性の神学上の役割を果たさせるために、王がアメンにシストルム奏者として捧げたもので、女性の先祖を通じて正統性が認められるとする概念は、タハルコのステラに見られた「アララとアメン・ラーの契約」に由来するとされている（FHN I:227）。アンラマニのステラにアララは登場しないが、タハルコのステラに見られた「アララとアメン・ラーの契約」も父系で解釈していることから、ここに見られる女性王族の子孫が王となるという記述も父系制の範囲内で解釈してい

るといえる。

このように「アララとアメン・ラーの契約」は、女性王族の子孫を王にするよう祈願するものではあるが、FHNでは基本的に王位は父系継承で、王の神聖な出自を強調するために、代々神妻であった女性たちの子孫であったことを示す人工的に作られた母系系譜にも言及したものと解釈している。そして、アメンのシストルム奏者となった王の姉妹は、王妃であったことが前提となっている。

## (2) シストルム奏者は王妃か

父系説では、テレークが *mwt nswt* (王の母) を “Queen Mother” (元王妃で現王の母) と訳しているように、王母が王妃であることを前提にしている。王の子どもを神聖化するためにアメンに仕えさせた姉妹とは、王母候補であり、後に王妃となる者たちと考えているのである。しかし、王母の中に王妃の称号を持つ者はいない。父系説をとるゴッツォーリは、アララは王の姉妹と神の結合から生まれた子孫の神聖を強調したかったと考え、第18王朝のハトシェプストとアメンヘテプ3世の聖なる誕生を類例として挙げている。ハトシェプストとアメンヘテプ3世は、父王の姿を借りた神が王妃と交わったことにより自分が生まれたと記すことで、王位継承の正統性と神聖性を同時に示している。ゴッツォーリは、アララはさらに進んで、王の神聖な出自をさらに強調するために、神が王の姿を借りて王妃と交わるという記述は省き、王母は神とのみ交わったことにするために、王母は王妃ではあったが、王母と王妃の称号は併記しなかったと考えている (Gozzoli 2010, 485-486)。

では、アメンに捧げられたシストルム奏者が王妃となった証拠はあるのであろうか。父系説でアメンのシストルム奏者=王妃と考える根拠は、新王国時代初期にはアメンの神妻が王妃であったことである。しかし、アメンの神妻の意味づけは新王国時代末期以降変化していた。

神妻の地位の政治化の始まりは、ラムセス6世の娘イシスの任命からであるが、その地位の完全な政治的ポテンシャルが認識されたのは、第23王朝になってからである (Ayad 2009:15)。イシス以降、アメンの神妻の地位には王妃ではなく、独身女性が就くようになった (Ayad 2009:9)。テーベが首都ではなくなり、テーベを政治的に掌握するために、王の身内が派遣されたのである。クシュ王朝の場合も同様に、王妃ではなく、独身の王の娘がアメンの神妻になるべく派遣されている。父系説では、同時期の非婚のアメンの神妻ではなく、第18王朝初期に王妃が担っていた王と神の仲介者としてのアメンの神妻の役割を、ヌビアのアメンのシストルム奏者が担っていると考えている。かつて第18王朝時代、アメンの神妻は王妃であった。そして、第25王朝のアメンのシストルム奏者を第18王朝のアメンの神妻と同様とみなし、シストルム奏者=アメンの神妻=王妃と考える。即位の儀式について、王母=アメンの神妻=王妃と考えた時と同じ論法である。しかし、クシュ王国の場合シストルム奏者が王妃であったとは言い切れない。

新王国時代初期には、王妃とアメンの神妻の両方の称号が併記されていることがあるが、クシュではシストルム奏者と王妃の称号を併記した例は無い<sup>12)</sup>。「アララとアメン・ラーの契約」の中でも、王の姉妹は王妃の称号を持たない。シストルム奏者となった王の姉妹が、彼女をアメンに捧げた王の王妃であった例は確認できず<sup>13)</sup>、アメンに捧げられたシストルム奏者が王妃であったことを示す確かな証拠はない。

母系説では、シストルム奏者は王母候補ではあったが、王妃ではなかったと説明することができる。母系制では、王の同母姉妹が次の王母の候補者となる。そこで、「アララとアメン・ラーの契約」に見られる王の姉妹をアメンに仕える者としたという記述は、アララが即位と同時に自分の姉妹が王母候補者であることを宣言したものと考えられる。アメンのシストルム奏者となることがアメンとの聖婚を意味していたとする

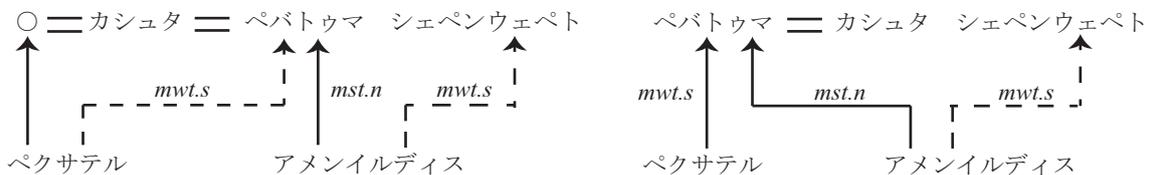
と、生まれた子どもは神の子であり、その子が王となれば王権の神聖性を高めることができると考えられたのであろう。シストルム奏者である王の姉妹は、息子が王となることで「王母」の称号を得る。母系制の場合、王母の夫は通常王ではない（図6参照）。生物学的な父親は重要ではなく、王母の夫の個人名は特定できないが問題はない。王母位を持つ女性の息子であれば、王位の正統性は示されている。碑文に記されている内容だけではシストルム奏者は王妃とは言えない現状において、碑文の内容は母系制の可能性をより強く示しているといえる。

### (3) 母系系譜は養子縁組による人工的なものか

テレークが支持する王母の母系系譜は養子縁組による人工的なものとする考えは、最初に1949年にマカダムによって提唱された（Macadam 1949）。アメンの神妻であったアメンイルディス1世の彫像の破片に、「神妻、カシュタ王の娘、神の礼拝者、アメンイルディス、彼女の母（*mwt.s*）は神の礼拝者シェペンウェプト、王妃ペバトゥマから生まれた（*mst.n*）」と記されており、ここでは、*mwt.s*は「彼女の養母」、*mst.n*は「～から生まれた」となり生母を表すと解釈されている（Macadam 1949:120）。ここまでの解釈に異論はないが、マカダムはその後 *mwt* が単独で使われている場合も、生母ではなく養母を意味すると考えている。アビュドスで見つかった門柱には、カシュタのもう1人の娘ペクサテルについて、「カシュタの娘、王妃ペクサテル、彼女の母（*mwt.s*）はペバトゥマ」と記されているが、マカダムは、「ペクサテルはおそらくペバトゥマの養女である」と述べている（図2.a）（Macadam 1949:129）。アメンイルディスの例では、アメンの神妻は養子縁組により後継者を定めるため、養母と生母の両方を示す必要から *mwt.s* と *mst.n* が使い分けられたが、ペクサテルの例のように *mwt* だけが用いられる場合にも養母と考える必要はない（図2.b）。ペクサテルの生母として他の女性に言及している資料も見つかっていない。

さらに、マカダムは、アスペルタの即位ステラに具体的に記された母系系譜でも、*mwt.s* は養母を示すとし、全ては養子縁組により生み出されたと考えた（Macadam 1949:126）。そしてテレークはその考えを引き継いで、アスペルタの即位ステラに記されたものは、養子縁組の連鎖であり、女系の系譜ではないとしている（Török 1997:236）。テレークは、王をアララの姉妹の子孫にするための人工的な母系のラインを復原するにあたり、アララの姉妹でもあるタハルコの祖母は、カシュタの妻であったペバトゥマと同一人物としている（FHN I:145）。しかし、これは推測にすぎない。

凡例： ← 生母， ← - - 養母



a. マカダムの説

(*mwt.s* は養母と考える)

b. 筆者の説

(アメンイルディスのみ *mwt.s* と *mst.n* が使い分けられている)

図2 *mwt.s* の解釈

Fig.2 Two ways of interpretation on *mwt.s*

母系制であったとしても、王母位が常に母から娘へ移譲されたとは限らない。母系制においては、王母位を持つ女性が必ずしも娘を産むことができるとは限らないからである。父系制であれば、一夫多妻制をとれば、後継者となる息子を何人も持つことは容易である。母系制の場合、ひとりの女性が生涯に産むことの



ヌタマニの父系ラインがあり、2つの家系を王位が行き来していたと考えた(図4)(Török 1997:561)。パイからシャバコが兄弟継承で、その後2つの家系において父系継承が行われ、タハルコを間にはさむものの、シェビトゥコとタヌタマニにも兄弟継承が見られるというものである。女性王族の子孫の繁栄を祈願した部分を、父系制を基本としつつも、神学上意味のある人工的な母系系譜に言及したものと考えると、アララの母からペバトゥマ、養女アバル、そしてタハルコの順で追うことができる。

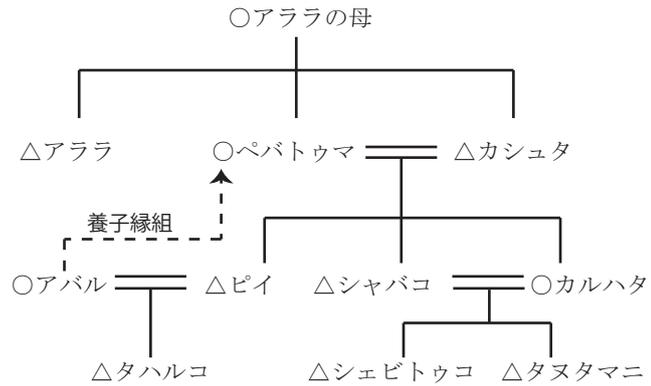


図4 テレークによる第25王朝の王位継承  
Fig.4 Royal succession in the 25th Dynasty reconstructed by Török

母系説で Kawa IV を説明すると(図5)、アララの母からアララの姉妹が王母位を継ぎ、その息子(パイとシャバコ)が王位を継ぎ、娘(アバル)が王母位を継ぎ、その息子がタハルコとなる。KawaVIでは、アララの姉妹からはじめて、王母の位を持つアララの姉妹の息子(パイとシャバコ)が王位、娘(アバル)が王母位を継ぎ、その息子がタハルコとなる。碑文通り、タハルコの母の母がアララの姉妹になっている。シェビトゥコはおそらくタハルコのイトコと考えられる<sup>17)</sup>。アララの姉妹まで遡りタハルコの正統性を示すためには、シェビトゥコとその母の系譜は必要なく、ステラには記されなかったのであろう。シャバコの後、シャバコの姉妹の息子であるシェビトゥコ、つづいてもうひとりの姉妹(アバル)の息子タハルコと即位していくが、王位は母方オジ(シャバコ)から2人の甥(シェビトゥコとタハルコ)へ順番に引き継がれており母系継承になっている。

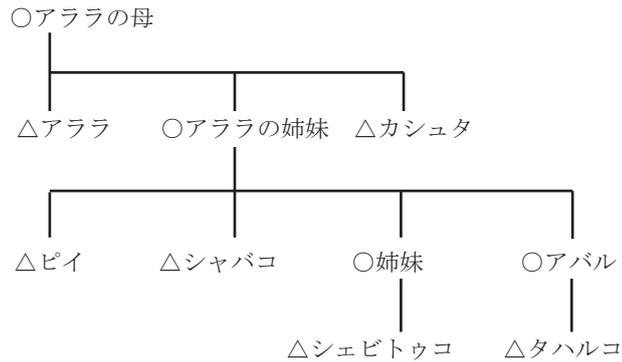


図5 母系で考えた場合のタハルコまでの王位継承  
(シェビトゥコをタハルコのイトコと考えた場合)  
Fig.5 Royal succession down to Taharqo based on the matrilineal system  
(supposing Shebitqo as Taharqo's cousin)

王位継承を父系説で説明するには、かつてのアメンの神妻の性質から王母は王妃であったと推測し、根拠が不十分であるにも関わらず母系の系譜は全てが養子縁組による人工的なものであるとする必要がある。一方、母系継承と考えれば、碑文の内容はそのまま解釈することができる。「王の妻」の称号を持たない王母やシストルム奏者を王妃と考える必要はない。王の姉妹の子どもが次期王となることから、王の母や王の姉妹の子孫の繁栄が祈願される。王母の即位の儀式への参加を記した碑文と「アララとアメン・ラーの契約」は、まさに母系継承を表しているといえる。

5. おわりに

見てきたように、父系説では、碑文の解釈が間接的な資料に基づいている印象を受けるが、母系説では、

記されている通りに解釈すれば良かった。母系系譜を人工的な養子縁組のつながりとするのも、根拠が不十分と思われた。マカダムが母系の系譜は全て養子縁組による人工的なものとする説を発表した1949年当時は、まだ母系制の仕組みが広く知れ渡ってはおらず、エジプト学者の間で正しい理解を得ていなかったと思われる。女性が王を務める母権制のようなものがイメージされていたとすると、歴代の男性の王の存在は母系制を否定するものであった。そこで、全ての事象を父系制になるように説明してしまったのであろう。しかし、母系制の特徴である母方オジから甥への政治的権力の相続が行われていたと考えれば、政治的権力を持つ歴代の王が男性であっても母系制はありうるのである。

1949年以降、社会人類学や文化人類学の研究により母系制のしくみが解明されてきた。母系制ではひとつの血縁集団内で、①出自と財産の相続は女系ラインで行われ、②財産の管理・運営権と集団全体の支配・統制権は男系のラインで行われる(図6)(前田2006:18)。兄弟と姉妹のふたつのラインが併存して集団の維持を果たすことから、母系制ではキョウダイ関係が夫婦関係より強固なことが特徴である(前田2006:20)。第25王朝以前の古代エジプト王朝は父系社会であり、「王の娘」の称号を持つ王妃は多くいるが、第18王朝初期を除き、王妃が「王の姉妹」の称号を用いることはあまりなかった(Troy1986:194)。しかし、クシュ王朝では「王の姉妹」の称号がしばしば用いられ、キョウダイ関係が重要であったことがわかる。

また、アララとカシュタ、パイとシャバコなど王位が兄弟の間で引き継がれることがあるが、ある母系社会では、家長や族長には集団内の最年長の男性になることが知られており(Fuller1976:59; 須藤1989:150-151; 前田2006:39)、存命中の兄弟がいれば、甥に引き継ぐ前に、兄弟間で権力が引き継がれることになる。アララとカシュタ、パイとシャバコの間で見られた王位の兄弟(傍系)継承も、母系社会の特徴のひとつといえるかもしれない。また、イロクオイ/クロウ型親族名称を用いる母系社会であったとすると、実の兄弟と母方平行イトコには同じ名称が用いられるため(合田1988:391)、「王の兄弟」という親族名称が、王の実の兄弟だけでなく、男性の母方平行イトコも意味していたことになる。さらに、母系制では姉妹の子どもたちは同等と見做されることから、王の母方平行イトコも順位は下がるものの王位継承権を持つことになる。選抜制を示すと考えられている、複数の「王の兄弟たち」の中から王が選ばれるという記述は、その後王となった人物の兄弟と平行イトコ(即位後の記録では「王の兄弟たち」と呼ばれる)の中から、その王が王として正式に認められた記録と見ることができる。したがって、選抜制と思われる記述も母系制の特徴のひとつといえるかもしれない。母系制の仕組みが明らかになるにつれ、クシュ王朝の王位継承の諸特徴は、母系制の枠組みの中で説明できそうであることがわかってきた。エジプトの父系制と接したことで、父系制か母系制かでは論じきれない独自の継承法が生み出されていた可能性もある。しかし、まずはクシュの王位継承法が母系制を基本としたものとして説明できるかどうか検証してみる必要があると思う。古い解釈を鵜呑みにせず、客観的に資料を検証し、クシュ王朝の王位継承法を見直すべき時であろう。

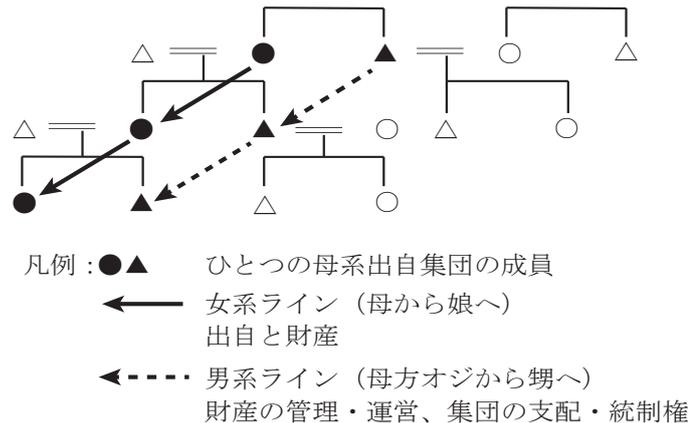


図6 母系制の相続(前田2006:19参照)

Fig. 6 A model of the matrilineal inheritance system

## 註

- 1) クシュの王の即位碑文には、王が「王の兄弟たち (*snw nswt*)」の中から選ばれたとする記述がある (FHN I:153; FHN I 239-240)。「王の兄弟たち」は実の兄弟だけを示しているのではないようであるが、具体的に何を意味するのかはわからず、「選抜制」と言われている (Kahn 2005:153)。ローヴァッサーは、王朝の始祖であるアララの姉妹の子孫は何世代にもわたり、「王の兄弟」、「王の姉妹」の称号を世襲して名乗り、「王の兄弟」の称号を持つ人の集団の中から王が選ばれたとする説を提唱している (Lohwasser 2000: 92, Tabelle 1)。
- 2) 古代エジプトでは「姉妹」を表す *snt* という言葉が、父母の姉妹や母の姉妹の娘などの省略形として使われていると思われる場合や、第18王朝以降王家以外では妻という意味で使われることがあった (Robins 1979: 203)。しかし、妻の意味で「妻 (*hmt*)」と *snt* が混用されることはない。クシュ王国では、「王の姉妹、王の娘、王の妻」と併記される例があることから、それぞれ区別しており、「王の姉妹」が「王の妻」の意味で使われることはなかったと思われる。
- 3) FHN では「王」を翻字で *nsw* と表記しているが、本稿では *nswt* を用いているため、FHN からの引用部分でも *nswt* と表記した。
- 4) 翻字については、欠損部の復原部分は [ ] で、読みや翻字に議論の余地がある部分は [ ] で、記されていないが話し言葉では発音されたと思われる文字を補った部分は ( ) で、誤って記されなかった部分を補った部分は < > で、誤って多く書かれた部分は { } で囲った。--- は復原不可能な欠損部を示す。訳については、意味が通るように筆者が補った部分を ( ) で囲ってある。
- 5) FHN I 154 ページでは *nbt* の翻字が抜けているが、図版 (Lohwasser 2001:Abb.7) で確認し、補った。
- 6) FHN I 240 ページでは、*m3<sup>r</sup> hrw* の翻字が抜けているが、ステラの図版 (Lohwasser 2001: Abb.23) で確認し、補った。
- 7) FHN II 414 ページでは *h<sup>r</sup> m nswt* の翻字が抜けているが、図版 (Lohwasser 2001:Abb.22) で確認し、補った。
- 8) 「母の母たち」とあるが、続く代名詞でも複数形が用いられており、「母の母」とすべきところを間違えたと単純に考えることはできない。別稿において、クシュでは「王の姉妹」に母方平行イトコが含まれるイロクォイ/クロウ型親族名称を用いていたのではないかと提案したが (齋藤 2014)、イロクォイ型イトコ呼称を用いる社会では、母の姉妹も母と同じ名称で呼ばれることがある (マードック 2001:291)。キョウダイと平行イトコが同じ名称で呼ばれるということは、親の立場からいえば、子と甥や姪を区別していないことになる。子の立場からいえば、母とその姉妹を区別せず、同じ名称で呼ぶということである。実際に、中国のモソ人の母系社会では、実の母親と母親の姉妹はみな「アミ」(または「エミ」と呼び、子どもから呼ぶ時は母もその姉妹も同じ待遇の存在となっている (金 2011:83; 遠藤 2002:153-154)。クシュでも母とその姉妹を区別していなかったとすると、母と母の姉妹がともに「母 (*mwt*)」となり、「母の母たち」は祖母とその姉妹と解釈することができる。このように解釈すれば、「母たち (*mwwt*)」は綴りの間違いではなく、アララが複数の姉妹をアメンに捧げたと考えることができる。
- 9) 表音文字で *mwy*、続いて女性の決定詞と複数形を示す3本の棒線が記されている。「母」を表すハゲワシの文字は無いが、文脈から考えて「母たち」を意味すると思われる。
- 10) FHN では「彼 (神) が彼 (アララ) に語ったとおり (約束したとおり)」と訳しているが、「彼 (アララ) が彼 (神) に語ったとおり (頼んだとおり)」と訳すことも可能である。
- 11) Kawa IV では「母の母たち」となっていたところが、Kawa VI では「母の母」となっているが、Kawa VI ではアララの複数の姉妹のうち、タハルコの祖母だけに限定して言及したものと考えられる (注8参照)。
- 12) テレークは、王妃の称号を持つパトゥマと、シストルム奏者の称号を持つパアブトゥタメリイが同一人物であると考え、王妃がシストルム奏者である例としている (FHN I:145)。しかし、他の研究者は、別人と考えている (Lohwasser 2001:172-175; Dunham&Macadam 1959: 146-146; Troy 1986:175-176)。
- 13) シストルム奏者が王妃であることが明らかな唯一の例は、アスペルタの王妃マディケンである。マディケンにシストルム奏者に任命したのは、アスペルタの兄アンラマニである (FHN I:262)。マディケンがアンラマニの妻とする意見もあるが、根拠は不明である (Dunham&Macadam 1949:144; Macadam 1949:131)。資料から分かっているのは、シストルム奏者に任命したのは兄アンラマニで、夫は弟アスペルタということだけであり、シストルム奏者に任命した王の王妃であったとはいきれない。マディケンの事例の背景は複雑であり、本稿において十分な議論を行うことができないため、別稿に譲りたい。
- 14) 「養子縁組ステラ (Adoption Stela)」(Louvre C257) とは、アスペルタの治世3年に、サナムのアメン神殿で王の姉妹で王妃でもあるマディケンが保持していた神官職と神殿からの収入を養女ケブへ移譲したことを記録したものである (FHN I:259-268)。

- 15) ケブは「王の姉妹、王の娘」の称号を持ち、別稿で論じたように、クシュがイロクオイ／ク로우型親族名称を用いていたとすると、アスペルタの平行イトコとなる（齋藤 2014: 58-61）。マディケンにはアスペルタの姉妹であり、マディケンにとってもケブは平行イトコとなる。
- 16) *s3t wrt* が「養女」の意味で使われる例は、第 26 王朝のアメンの神妻ニトクリスが、第 25 王朝のアメンの礼拝者アメンイルディアスの養女となったことを記録した「ニトクリス養子縁組ステラ」に見られる。ニトクリスに先立ち、シェペンウェペト 2 世の養女となったタハルコの娘アメンイルディアスが、*s3t.s wrt* 「彼女（シェペンウェペト 2 世）の長女」と記されている箇所がある（Caminos 1964:74, 75）。また、プサメティコス 1 世が、彼女（アメンイルディアス）に、自分の娘（ニトクリス）を「彼女の長女」にするために与えると記した箇所がある（Caminos 1964: 74）。
- 17) シェビトゥコがタハルコのイトコと考える根拠は、タハルコが墓所をヌリに移していることである。現段階では検証が不十分ではあるが、シェビトゥコの死亡時、シェビトゥコの姉妹カルハタの息子タヌタマニは生まれていなかったか幼すぎたため、イトコのタハルコが即位したものと考えている。アバルの姉妹からアバルへと王母位が移ったことが母系の系統が移ったものと認識され、墓所を移したのではないであろうかと考えている。

## 参考文献

Ayad, M.F.

2009 *God's Wife, God's Servant: The God's Wife of Amun(c.740-525 BC)*, London and New York: Routledge.

Caminos, R.A.

1964 "The Nitocris Adoption Stela", *Journal of Egyptian Archaeology* 50, pp.71-101.

Dunham, D. & Macadam, L.

1949 "Names and Relationships of the Royal Family of Napata", *Journal of Egyptian Archaeology* 35, pp.139-149.

FHN I

1994 Eide, T., Hägg, T., Holton, R.P. & Török, L. (eds.), *Fontes Historiae Nubiorum: Textual Sources for the History of the Middle Nile Region between the Eighth Century BC and the Sixth Century AD*. Vol.I From the Eighth to Mid-Fifth Century BC. Bergen: University of Bergen, Department of Greek, Latin and Egyptology.

FHN II

1996 Eide, T. Hägg, T., Holton, R.P. & Török, L. (eds.), *Fontes Historiae Nubiorum: Textual Sources for the History of the Middle Nile Region between the Eighth Century BC and the Sixth Century AD*. Vol.II From the Mid-Fifth to the First Century BC. Bergen: University of Bergen, Department of Greek, Latin and Egyptology.

Fuller, C.J.

1976 *The Nubians Today*, New York: Cambridge University Press.

Gozzoli, R.B.

2010 "Royal Sisters and Royal Legitimization in the Nubian Period (C.760-300:B.C.): Taharquo's Kawa Stelae as a Paradigm", in Goldlewski, W. & Łajtar, A. (eds.), *Between the Cataracts. Nubian Studies Conference Proceedings*. Vol.2/2, Warsaw, pp.483-494.

Grimal, N.-C.

1981 *Quatre stèles Napatéennes au musée du Caire JE 48863-48866, MIFAO* 106, Cairo: Fouilles de l'Institut Français d'Archéologie Orientale.

Kahn, D.

2005 "The Royal Succession in the 25th Dynasty," *Mitteilungen der Sudanarchäologischen Gesellschaft* 26, pp.143-163.

Lohwasser, A.

2000 "Die Auswahl der Königs in Kusch", *Beiträge zur Sudanforschung* 7, pp.85-102.

2001 *Die Königlichen Frauen im antiken Reich von Kusch, Meroitica* 19, Wiesbaden: Harrassowitz.

Macadam, M.F.L

1949 *The Temple of Kawa I. The Inscriptions*, London: Oxford University Press.

Morkot, R.

1999 "Kingship and kinship in the Empire of Kush", in Wenig, S. (ed.), *Studien zum antiken Sudan: Akten der 7. Internationalen Tagung für meroitische Forschungen vom 14. bis 19. September 1992 in Gosen bei Berlin, Meroitica* 15, Wiesbaden: Harrassowitz, pp.179-229.

Robins, G.

1979 "The Relationships specified by Egyptian Kinship Terms of the Middle and New Kingdom", *Chronique d'Égypte* 54, pp.197-217.

Török, L.

1997 *The Kingdom of Kush: Handbook of the Napatan-Meroitic Civilization*, Leiden: Brill.

Troy, L.

1986 *Patterns of Queenship in Ancient Egyptian Myth and History*, BOREAS 14, Uppsala: Acta Universitatis Upsaliensis.

遠藤織枝

2002 『中国雲南摩梭族の母系社会』遊学叢書 24、勉誠出版.

合田涛

1988 「親族名称」『世界大百科事典』第14巻、平凡社、pp.390-391.

齋藤久美子

2014 「古代エジプト第25王朝の王位母系継承を考える—親族名称に基づく新提案—」『オリエント』第56巻第2号、日本オリエント学会、pp.53-64.

須藤健一

1989 『母系社会の構造：サンゴ礁の島々の民族誌』紀伊国屋書店.

金龍哲（ジン ルンジョ）

2011 『結婚のない国を歩く —中国西南のモソ人の母系社会—』大学教育出版.

マードック, G.P.

2001 『新版 社会構造』内藤莞爾訳、新泉社.

(原著 G.P.Murdock 1949 *Social Structure*, London)

前田俊子

2006 『母系社会のジェンダー：インドネシア ロハナ・クドウスとその時代』ドメス出版.

# エジプト先王朝時代における石製容器の地域性

竹野内 恵太\*

## Regional Variation of Stone Vessels in Predynastic Egypt

Keita Takenouchi\*

### Abstract

In Predynastic Egypt, there was a material evidence of significant regional variation in Upper Egypt. This regional variation was pronounced in the late Naqada I to early II, but disappeared by the middle Naqada II. Although previous studies have discussed about the regionality, almost all of them dealt with only mass-produced goods such as pottery and lithic and high-valuable objects have been ignored. Therefore, the stone vessel as the most valuable items in this period should be analyzed.

Regional production system of the stone vessels is assumed not to be autonomous production in each site, but intensive production in limited large political centers such as El-Amrah, Naqada, and Hierakonpolis where stone vessels were probably produced by specialized craftsmen. In fact, stone vessels have been found in larger quantities at large center than small center. Then, it is reasonable to assume that the finished products were supplied from the large centers to other areas (possible small sites). This is why the distribution pattern of stone vessels should be interpreted from a viewpoint of production and distribution.

This paper aims to analyze regional variation of stone vessels and provide a viewpoint about distribution pattern of high-valuable goods. In this analysis, stone vessels unearthed from 15 Predynastic sites in Upper and Lower Egypt were selected. The selected sites were divided into three areas in Upper Egypt; Badari area, Naqada area, and Abydos area. Firstly, I analyzed regional differences based on the shape and material of stone vessels in each area through Naqada IC to IIIB. Next, the classification was examined according to the patterns of the regional differences in each period, and finally transition of regional variation of stone vessels was traced.

As a result, regional variation of stone vessels was not disappeared in the mid of Naqada II, but widespread through the Predynastic period. It is possible that this result is due to the differentiation of production center and the sophistication of distribution system.

### 1. はじめに

エジプトの先王朝時代は、社会経済システムが複雑化し、国家が形作られる過渡期と言える。王朝時代の技術伝統や文化要素は、この時代で醸成されていたと考えてよい。その過程の中で、政治的に自立していた

---

\* 早稲田大学大学院文学研究科修士課程

\* *Graduated Student, School of Letters, Arts and Sciences, Waseda University*

地域（＝政体）が、交換や戦争という競合関係の中で地域間の接触を密にしていく。そして、その帰結である統合体こそが国家として認識されているのである。考古学的なアプローチからは、土器や石器の器種の地域間における地域差の消失および製品の規格化という現象を概ね捉えており、国家形成の文脈の中にその地域的物質文化の統合過程を位置づけて理解されている。しかし、土器や石器のような頻出する物品の分析が進展する一方で、奢侈品あるいは財に関して地域性に視点を据えた研究は、これまで皆無に等しい。

先王朝時代において最も代表的な奢侈品であるものに、石製容器 (Stone Vessel) が挙げられる。石製容器は、当該期の早い段階から生産の専門性が高い遺物であり、各墓地遺跡から副葬品として一定量出土する典型的な遺物である。王朝時代へ連続する文化要素および発展する製作技術と捉えた際にも、当該期の石製容器を分析することは望ましいと言える。石製容器の地域性について研究した例はなく、未だ分析する余地は大いにある。そのため、本稿ではナイル川下流域に点在する諸遺跡出土の石製容器を対象として、その地域性と変容過程を分析する。また、地域性の形成と変容の要因となった生産体制と流通システムの変化についても言及する。

## 2. 既往研究と本論の目的

これまでの先王朝時代の文化的地域性に関する研究は、フィンケンシュタット (Finkenstaedt, E.) による白色交線文土器 (Cross line ware) の彩文研究 (Finkenstaedt 1980, 1981) やホルムズ (Holmes, C. L.) の石器組成および技術伝統の差異 (Holmes 1989)、フリードマン (Friedman, R.) による集落址出土土器の器形・混和材・表面調整に関する研究 (Friedman 1994) が、主立ったものとして挙げられる。氏らの成果から、少なくともナカダ II 前期までは、ヒエラコンポリス地域・ナカダ地域・アビュドス地域・バダリ地域それぞれが文化的地域性を有していることが共通見解となっている。ナカダ II 中期以降は、地域差が消失し、重大な地域性を看取できないとしている。上エジプト地域内部で均質化を迎えた物質文化は、ナカダ II 後期までに下エジプト地域へ波及する。この現象が、いわゆるナカダ文化波及 (Naqadan Expansion) であり、ナカダ末期には上下エジプト間で文化的差異は認められなくなる<sup>1)</sup>。

以上のように、物質文化における上下エジプト地域間・上エジプト地域内部の多様性とその統合過程は、土器および石器の研究領域では議論が進展している。これら遺物を生活必需品 (Subsistence) として位置づけるならば、一方の財 (Wealth) に位置づけられる石製容器に関する地域性研究は立ち後れていると言わざるを得ない。これまでの石製容器研究は、分類や編年といった基礎研究 (Kouli 1976, Aston 1993)、副葬品アゼンブリッジにおける分析 (Bard 1992 など) が重点的に行われおり、マロリー・グリーノーによる玄武岩製容器の分析 (Mallory-Greenough 2002) 以外には分布論に至ったものは管見に触れない。

マロリー・グローノー (Mallory-Greenough, L.M.) は、先王朝時代から第1王朝時代にかけて容器の素材となった玄武岩の化学分析を行い、この石材がカイロ西部のエル・ハダディーからアブ・ロアシュに位置する産地で獲得されたことを明らかにした (Mallory-Greenough 1999)。そして、玄武岩製容器の分布から、先王朝時代ではマアディ遺跡で製作されたものが諸遺跡へ流通されていたが、第1王朝時代になるとヒエラコンポリス遺跡で製作されたものが「交易人」の手によって流通していたと考えた (Mallory-Greenough 2002)。地域性研究というよりも、玄武岩製容器という高価値な財の動態を分析することが目的であったものの、唯一の分布論として評価できる。

ひとえに石製容器などの財と位置づけられる副葬品が地域性研究の対象とならない理由は、概して出土量が少ないことに他ならないかもしれない。しかし、土器や石器は出土量が多いといってもあくまで物質文化を構成する一つの要素に過ぎない。考古学的なアプローチに立脚するのであれば、総合的な遺物の様相から

地域的な多様性を導き出すべきである。石製容器は素材を岩石という獲得に一定度のアクセス制限を内包し、加工時に多大な労働量を要する。事実、石製容器は大規模遺跡を中心として出土し、大規模遺跡において高度に専門化された集約的な生産であったことが認められている (Köhler 1995)。おそらく、石製容器の分布とその変遷は、大規模遺跡における集約的な生産と他遺跡への流通という視点から読み解く必要がある。

すなわち、本論の研究手順は、まず石製容器の器種組成および石材構成の地域分布を確認し、その地域的な多様性を類型化する。次に、先王朝時代の各時期で認識された分布パターンの形成要因を生産と流通という視点から模索する。

### 3. 対象遺跡および地域区分

本論で対象とする遺跡は、エルカブ遺跡 (Hendrickx 1996)、アルマント遺跡 (Mond and Myer 1934)、ナカダ遺跡 (Petrie 1895, Baumgartel 1985, Payne 1996)、アムラ遺跡 (Randall and Mace 1902)、アビュドス遺跡 (Randall and Mace 1902)、マハスナ遺跡 (Ayrton 1911)、バダリ遺跡 (Brunton and Caton-Tompson 1924, Brunton 1927)、カウ遺跡 (Brunton 1927)、ハマミーヤ遺跡 (Brunton and Caton-Tompson 1924, Brunton 1927)、モスタゲッタ遺跡 (Brunton 1937)、マトマール遺跡 (Brunton 1948)・ハラゲ遺跡 (Engelbach 1923)、ゲルゼ遺跡 (Petrie 1912, Stevenson 2009b)、タルカン遺跡 (Petrie 1913, 1914)、ミンシャト・アブ・オマル遺跡 (Kroeper und Wildung 1994, 2000) の計 15 遺跡を選定した (図 1)。分析対象は、これら 11 遺跡で出土している石製容器である<sup>2)</sup>。編年については、ヘンドリックス (Hendrickx, S.) による最新の土器編年を採用し、IC 期・IIA-B 期・IIC-D 期・IIIA-B 期と便宜的に時期区分する (Hendrickx 1996, 2006)。

以上の 11 遺跡を地域に区分して分析を行いたい。本論では、先で示した地域性の既往研究を参考として、上エジプト地域については、ナカダ地域 (アルマント遺跡・ナカダ遺跡)・アビュドス地域 (アムラー遺跡・マハスナ遺跡)・バダリ地域 (バダリ遺跡・モスタゲッタ遺跡・マトマール遺跡) の 3 地域を単位としてそれぞれ分析を行う。ゲルゼ遺跡やタルカン遺跡、ミンシャト・アブ・オマル遺跡 (以下ミンシャト遺跡) は、一括して下エジプト地域と呼称し、遺跡ごとに分析する。エルカブ遺跡出土の石製容器は IIIA-B 期のみであるため、先に示した上エジプト地域区分には入れず、単独で分析する。遺跡ごとの出土石製容器の内訳は次の通りである。エルカブ遺跡 (出土墓数: 19 基 石製容器個体数: 10 個体)・アルマント遺跡 (出土墓数: 23 基 石製容器個体数: 3 個体)・ナカダ遺跡 (出土墓数: 156 基 石製容器個体数: 86 個体)



図 1 ナイル川下流域

Fig.1 Nile Valley

6 個体)・アムラ遺跡(出土墓数:74 基 石製容器個体数:62 個体)・アビュドス遺跡(出土墓数:20 基 出土石製容器:5 個体)・マハスナ遺跡(出土墓数:16 基 石製容器個体数:4 個体)・バダリ遺跡(出土墓数:30 基 石製容器個体数:12 個体)・カウ遺跡(出土墓数:10 基 出土石製容器:3 個体)・ハマミーヤ遺跡(出土墓数:14 基 出土石製容器:9 個体)モスタゲッダ遺跡(出土墓数:30 基 石製容器個体数:14 個体)・マトマール遺跡(出土墓数:35 基 石製容器個体数:17 個体)・ハラゲ遺跡(出土墓数:8 基 石製容器個体数:8 個体)・ゲルゼ遺跡(出土墓数:45 基 石製容器個体数:93 個体)・タルカン遺跡(出土墓数:275 基 石製容器個体数:155 個体)・ミンシャト・アブ・オマル遺跡(出土墓数:35 基 石製容器個体数:59 個体)。

#### 4. 本論の器形分類と使用石材について

##### (1) 器形分類

分析に先立ち、前提となる石製容器の器形分類について述べておく。これまで、石製容器の器形分類は、ピートリを始めとして(Petrie 1986, 1920)、アシュトン(Aston, B. G)やコウリー(Kouli, L)、マロリー・グリーンノー(Mallory-Greenough)らが行ってきた。コウリーは、ピートリによる石製容器のSD編年以降、初めて体系的な分類案を示した。対象時期幅は先王朝時代から第3王朝時代までと広範囲で、その分類設定は極めて仔細である(Kouli 1976)。しかし、後にアシュトンによって、コウリーの分類設定は細かすぎることで、時期的な特徴を勘案していないことが批判された。一方で、そのアシュトンは先王朝時代からグレコ・ローマ時代までの石製容器で特徴的な器形を抽出し、大まかな分類設定を試みている(Aston 1994)。

アシュトンも述べるように、氏の分類案は、新たに編年を組む目的のため設定したものではない。近年では、マロリー・グリーンノーが玄武岩製容器の分布研究の際に分類を試みている(Mallory-Greenough 2002)。

以上の分類案は、先王朝時代全体の石製容器に対して敷衍することが難しい。以前筆者が設定した分類についても、IIIA-B期の資料は用いていない(竹野内 2013)。よって本論の器形分類は、上記11遺跡出土の石製容器に基づいて新たに分類設定し、計34タイプを設けた(図2)。これまでの研究では、胴部や底部の形状よりも、把手の形状とその有無を上位の属性として認識しているため、本論の分類でもそれに準拠したい。詳細は基準表に譲ることとする(表1)。

まず、I類は円筒形を呈するものであり、さらにIa類・Ib類・Ic類に細分した。II類に

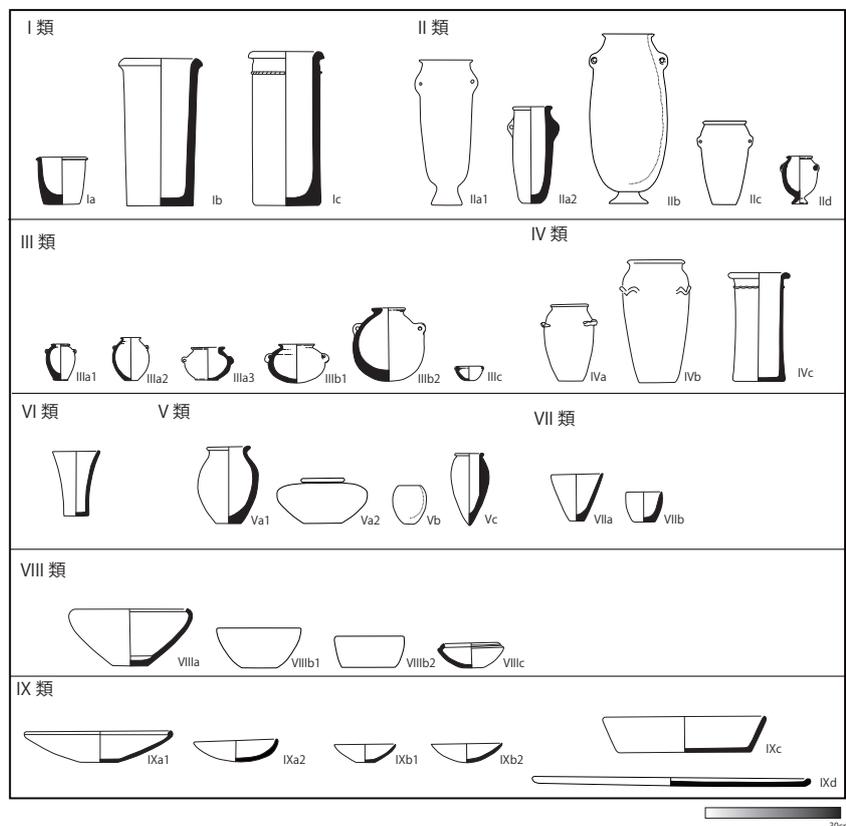


図2 本論の分類案  
Fig.2 Classification of Stone Vessels

ついては、壺形で、耳状の把手 (Lug Handle) と脚台が付属することに特徴をもつ。II類は肩部から胴部にかけて張り出し方の相違によって、IIa類・IIb類・IIc類・IId類に分け、IIa類については脚台の有無でさらにIIa1類・IIa2類に細分した。続いてIII類だが、II類の耳状把手と異なり、管状の把手 (Tubular Handle) が付属し、脚台はもたない。III類については、平底と丸底で大別し、それぞれIIIa類・IIIb類とした。一方、IIIc類については、壺形でなく鉢形を呈するイレギュラーな器形であるが、胴部の形状よりも把手を最上位の属性として位置づけているため、III類に加えた。また、IIIa類とIIIb類は、さらに胴部の形状によって細分し、IIIa1類・IIIa2類・IIIa3類・IIIb1類・IIIb2類とした。IV類は、波状把手を付属する壺形である。さらに胴部の形状から分け、IVa類・IVb類・IVc類とした。IVc類に関しては、円筒形を呈するI類と類似する器形である。しかし、繰り返しになるが、把手の形状とその有無を重視し、本論ではIV類に組み込んだ。V類は無把手の壺形である。II類およびIII類の壺形はそれぞれ特徴的な把手を付属するが、V類は把手を付属せず、壺形を呈する器形として設定し、Va類・Vb類・Vc類の3類に区分した。また、Va類は口縁を作出するものとし、Va1類・Va2類とした。VI類は、ピーカー形を呈する。VII類・VIII類・IX類は、それぞれ環形・鉢形・皿形である。これらを区分する際、客観的な指標として胴部の最大径と器高の比率から算出した値を元に設定した<sup>3)</sup>。それぞれは際立って特徴的な属性を有していないため、抽出できた属性を元に細分した。

(2) 使用石材と産地について

石製容器の素材となった岩石は、石灰岩 (Limestone)、トラバーチン (Travertin)、玄武岩 (Basalt)、角礫岩 (Breccia)、斑岩 (Porphyry)、泥岩 (Mudstone)、蛇紋岩 (Serpentine)、凝灰岩 (Tuff) である<sup>4)</sup>。石灰岩やトラバーチンは、ナイル川下流域では比較

表1 分類基準表  
Table 1 Criteria for Classification

Class	Type	Variation
I類 (円筒形)	a. 無把手で胴部がくびれず口縁部が外反する	平底
	b. 無把手で胴部がくびれる	平底
	c. 縄状把手付きで胴部がくびれる	平底
II類 (耳状把手付き壺)	a. 円筒形	1. 脚台 2. 平底
	b. 胴部が張る	脚台
	c. 肩部が張る	平底
	d. 底部が張る	脚台
III類 (管状把手付き壺)	a. 平底	1. 肩部が張り出し 2. 胴部が張り出す 3. 底部が張り出す
	b. 丸底	1. 底部が張り出す 2. 胴部全体が楕円形
	c. 浅鉢形で、口縁の作出なし	丸底
IV類 (波状把手壺)	a. 肩部が顕著に張り出す	平底
	b. 肩部がなだらか	平底
	c. 円筒形	平底
V類 (無把手壺)	a. 口縁が閉じ、肩部あるいは胴部が張り出す	1. 口縁作出あり 2. 口縁作出なし
	b. すんぐりした胴部	平底
	c. 底部の突端が尖る	尖底
VI類 (ピーカー形)	口縁が外傾、底部まで埋まる	平底
VII類 (環形)	a. 底径: 口径=1:2以下	平底
	b. 底径: 口径=3:5以上	平底
VIII類 (鉢形)	a. 口縁が内傾	平底
	b. 口縁が直立	1. 底径: 口径=1:2以下 2. 底径: 口径=3:5以上
	c. 口縁に段、いわゆるMeidum Bowl?	平底
IX類 (皿形)	a. 口縁が内傾	1. 平底 2. 丸底
	b. 口縁が直立	1. 平底 2. 丸底
	c. 底径: 口径=3:4以上	平底
	d. 器高が極端に浅い	平底

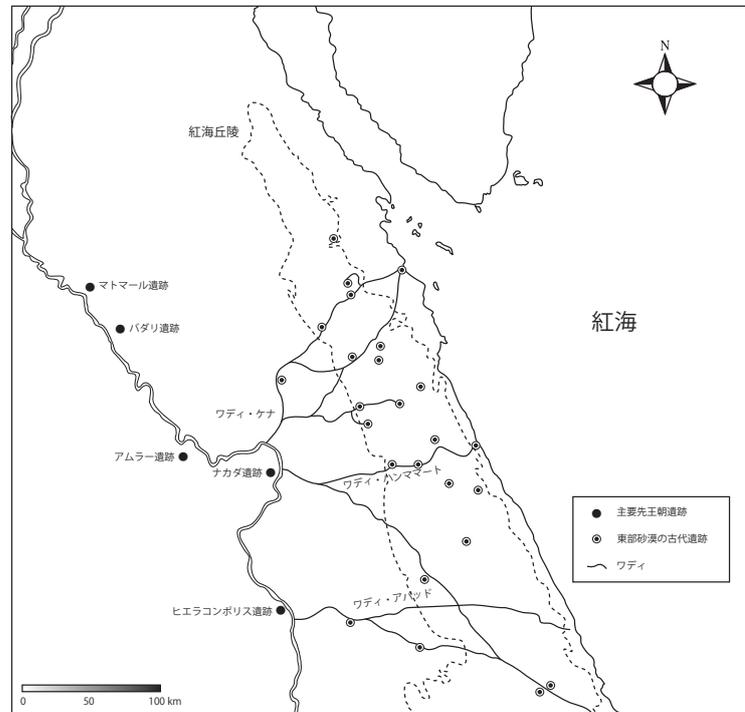


図3 東部砂漠におけるワディ (Sampsel 2003)

Fig.3 Wadis in the Eastern Desert

的どこでも産出する。玄武岩は、カイロ周辺とバハレーヤ・オアシス、エジプト中部、エジプト南部から主に産出する。マロリー・グリーンノーによると、先王朝時代から初期王朝時代に比定される玄武岩製容器は、全てカイロ西部から獲得されたことを指摘している (Mallory-Greenough 1999)。これは、下エジプト地域の先王朝時代マアディ遺跡の集落址から玄武岩製容器が大量に出土していることから裏付けられる。角礫岩や斑岩、蛇紋岩、凝灰岩は、東部砂漠の紅海丘陵において採掘地が見つかっており、地質学的には先カンブリア紀に形成された地層であるため、おそらくこれらの岩石は当該地域からしか産出しない。泥岩については、ワディ・ハンママートの砂岩層において採掘地が唯一見ついている。これら東部砂漠に位置する岩石は、ワディを介してのみアクセスすることができた (図3)。おそらく、ワディ・ハンママートやワディ・ケナが、石製容器やその他石製品の石材資源獲得のための重要な交通路として機能していたのだろう。

以上の内容を前提として、本稿の分析を行っていく。

## 5. 石製容器の器種構成・石材構成の地理的分布状況

### (1) 器種構成の地理的分布状況

#### ① IC 期 (図4)

ナカダ遺跡・アムラ遺跡・アビュドス遺跡・マハスナ遺跡・バダリ遺跡において石製容器の出土が認められる。ナカダ地域では、Ia 類を主体とし、次いでII類が多い。タイプVIとIXb2は、この時期でナカダ遺跡しか出土が見られない。アビュドス地域も出土量こそ少ないものの、ナカダ地域と同様の器種構成を示す。バダリ地域では、II類のみが認められる。

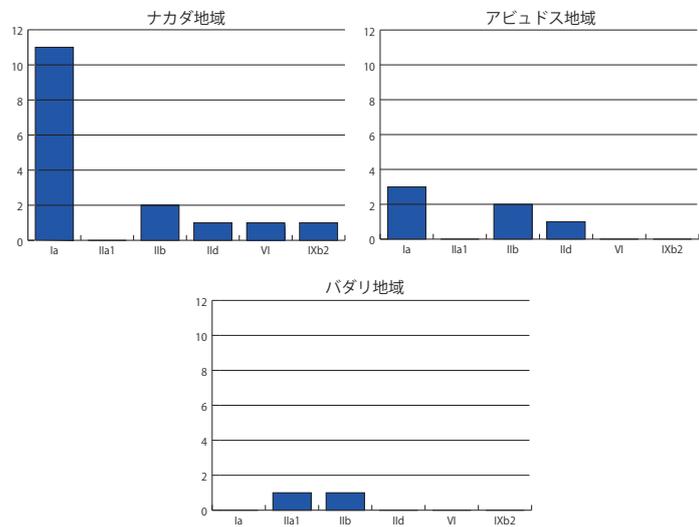


図4 IC期における器種構成

Fig.4 Shape Variation in IC

#### ② IIA-B 期 (図5)

ナカダ遺跡・アルマント遺跡・アムラ遺跡・マハスナ遺跡・バダリ遺跡・マトマール遺跡で石製容器が出土する。基本的にバダリ遺跡およびマトマール遺跡のバダリ地域では、出土量が少なく、アルマント遺跡も1個体しか出土しない。出土の中心は、ナカダ遺跡とアムラ遺跡であることがわかる。ナカダ遺跡では、当該期で出土するほぼ全ての器形のバリエーションをカバーする。特筆すべき地域間の差異は、アムラ遺跡の

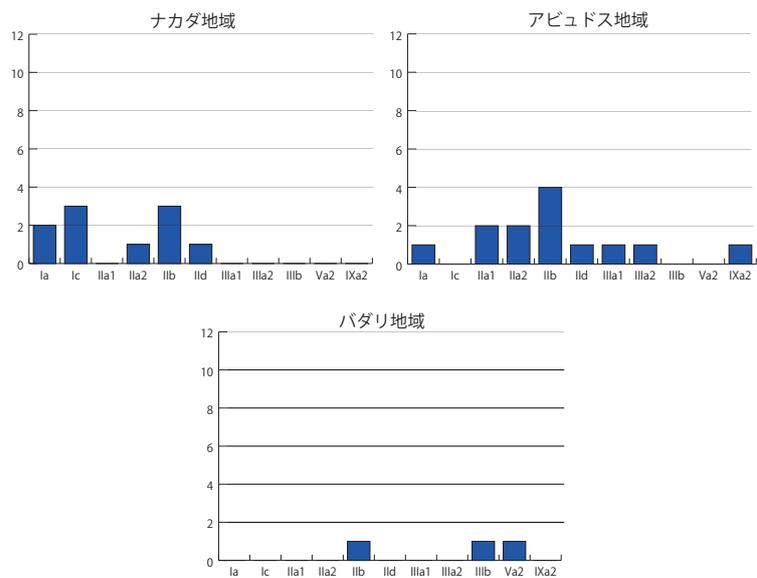
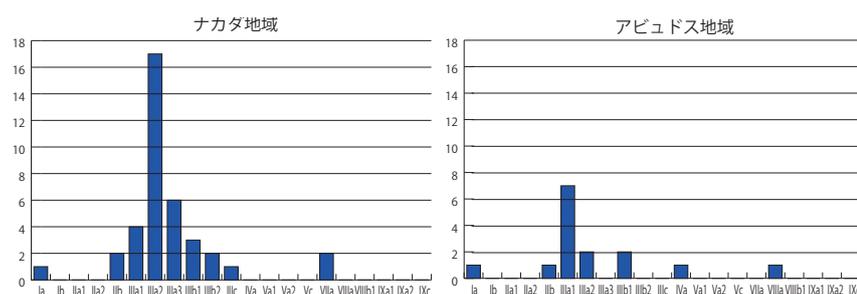


図5 IIA-B期における器種構成

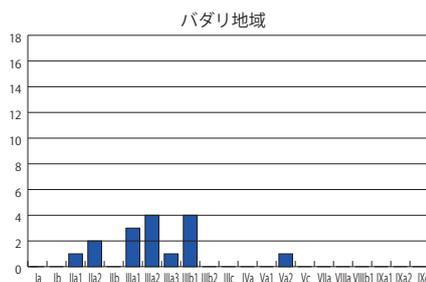
Fig.5 Shape Variation in IIA-B

Ic 類とバダリ遺跡およびマトマール遺跡における IIIb2 類と Va2 類の存在である。また、前時期に引き続き III 類はナカダ遺跡のみの出土を見せる。

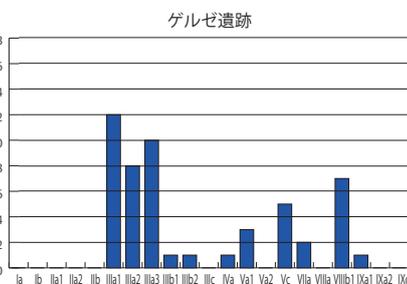


### ③ IIC-D 期 (図 6)

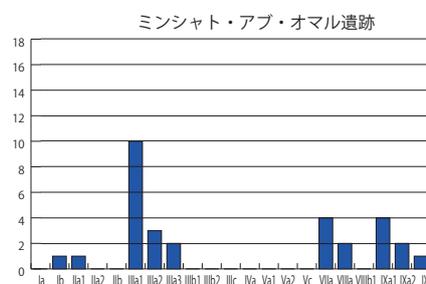
ナカダ遺跡・アルマント遺跡・アムラ遺跡・アビュロス遺跡・ハマミーヤ遺跡・カウ遺跡・バダリ遺跡・モスタゲッダ遺跡・マトマール遺跡・ゲルゼ遺跡・ミン



シャト遺跡といった 11 遺跡<sup>8</sup>で出土する。上エジプト内<sup>4</sup>部で器形における地域差は消失するが、上下エジプト



間で著しい差異が認められる。VII 類・VIII 類・IX 類



は排他的に下エジプト地域

図 6 IIC-D 期における器種構成

Fig.6 Shape Variation in IIC-D

から出土する。すなわち、

上エジプト地域が壺類を保有するのに対し、下エジプト地域は杯・鉢・皿といった口縁が開いた器形をもち、上下エジプト地域間で器形の差異において二項の様相が窺える。また、V 類についてはゲルゼ遺跡が出土の中心である。その中でも、Vc 類は底部が尖底であることに特徴づけられ、この特異な器形はゲルゼ遺跡でしか出土を見せない。ハラゲ遺跡でも Va2 類・VIIa 類がそれぞれ 1 点出土している。加えて、II 類は、上エジプト地域で若干数残存しているが、下エジプト地域では出土が認められないことも両地域間の大きな差異である。ただ、前時期のナカダ地域で主体的であった IIa 類が、この時期ではバダリ地域にのみ現れることは特筆すべきことかもしれない。一方で、ミンシャト遺跡では IX 類が顕著であり、下エジプト地域内部でも若干の差異を孕むこともまた指摘できる。この時期に主流である III 類は、やはり全遺跡で出土する。

### ④ IIIA-B 期 (図 7)

エルカブ遺跡・ナカダ遺跡・アルマント遺跡・アムラ遺跡・ハマミーヤ遺跡・バダリ遺跡・マトマール遺跡・タルカン遺跡・ミンシャト遺跡の 9 遺跡から石製容器が出土した。IIIA-B 期に、出土個体数が飛躍的に増加すると同時に、下エジプトのタルカン遺跡およびミンシャト遺跡に出土の中心が移る。この時期になっても、上下エジプト間で器形上の差異がある。上エジプト地域では全遺跡で III 類が出土する一方、下エジプト地域ではそれらを欠いた様相を捉えることができる。上エジプト地域で北限に位置するマトマール遺跡では、IIIa2 類が 1 個体出土するものの、基本的に下エジプトの器種組成に近似する傾向にある。概ね下エジプト地域から距離的に遠隔になるにしたがい、下エジプト地域における器種組成とは異なる様相であるかもしれ

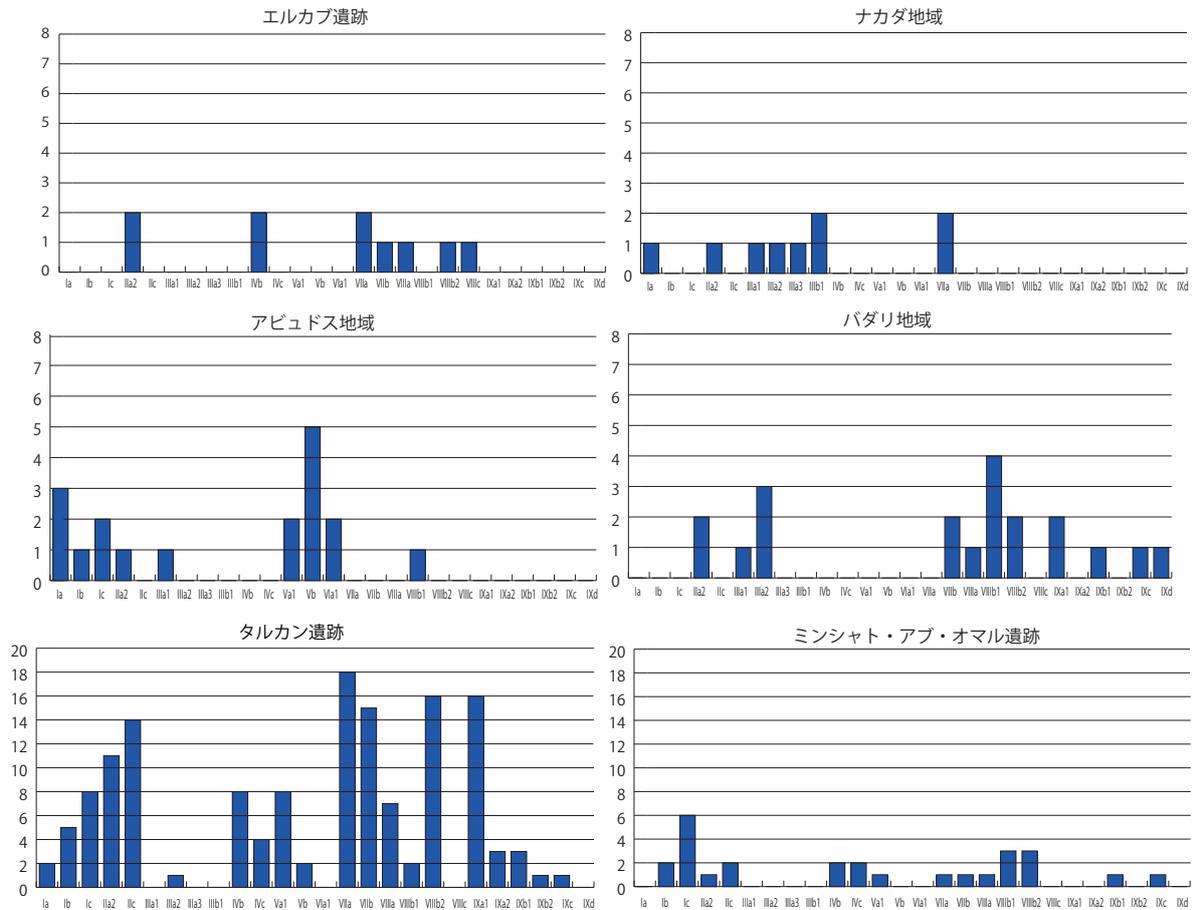


図7 IIIA-B 期における器種構成

Fig.7 Shape Variation in IIIA-B

ない。しかし、エルカブ遺跡に関しては注意が必要である。というのも、エルカブ遺跡は、唯一上エジプト地域内の遺跡で下エジプト地域の器種構成と類似するからである。また、ミンシャト遺跡では Ic 類が 1 点出土するが、この Ic 類は縄状把手を付属するものの極端に器高が低く、ビーカーに近い。このような Ic 類は、IIA-B 期のアムラ遺跡で早くから出土していることは、特記すべきである。

## (2) 地域間の石材利用形態

### ① IC 期 (図 8)

石材構成については、マハスナ遺跡やバダリ遺跡で玄武岩を主体とする一方、ナカダ遺跡やアムラ遺跡ではトラバーチンを素材の中心とする傾向にあると言える。また、Ia 類はほぼ全てトラバーチンで製作される傾向にあり、1 点のみ石灰岩製がある。II 類については、角礫岩 1 点を例外として、全て玄武岩から成る。VI 類はトラバーチン、IXa2 類は石灰岩からなる。

### ② IIA-B 期 (図 8)

石材構成については、ナカダ遺跡で石灰岩とトラバーチンが主体となるが、アムラ遺跡では玄武岩を素材の中心とする。バダリ遺跡とマトマール遺跡では、石灰岩のみから成る。特記すべきは、前時期にほぼ排他的に II 類が玄武岩から構成されていたのに対して、当該期には石灰岩やトラバーチンからも製作され始め、器形と石材の対応関係が解体されることである。この傾向は全地域で認められるものの、ナカダ地域を除く

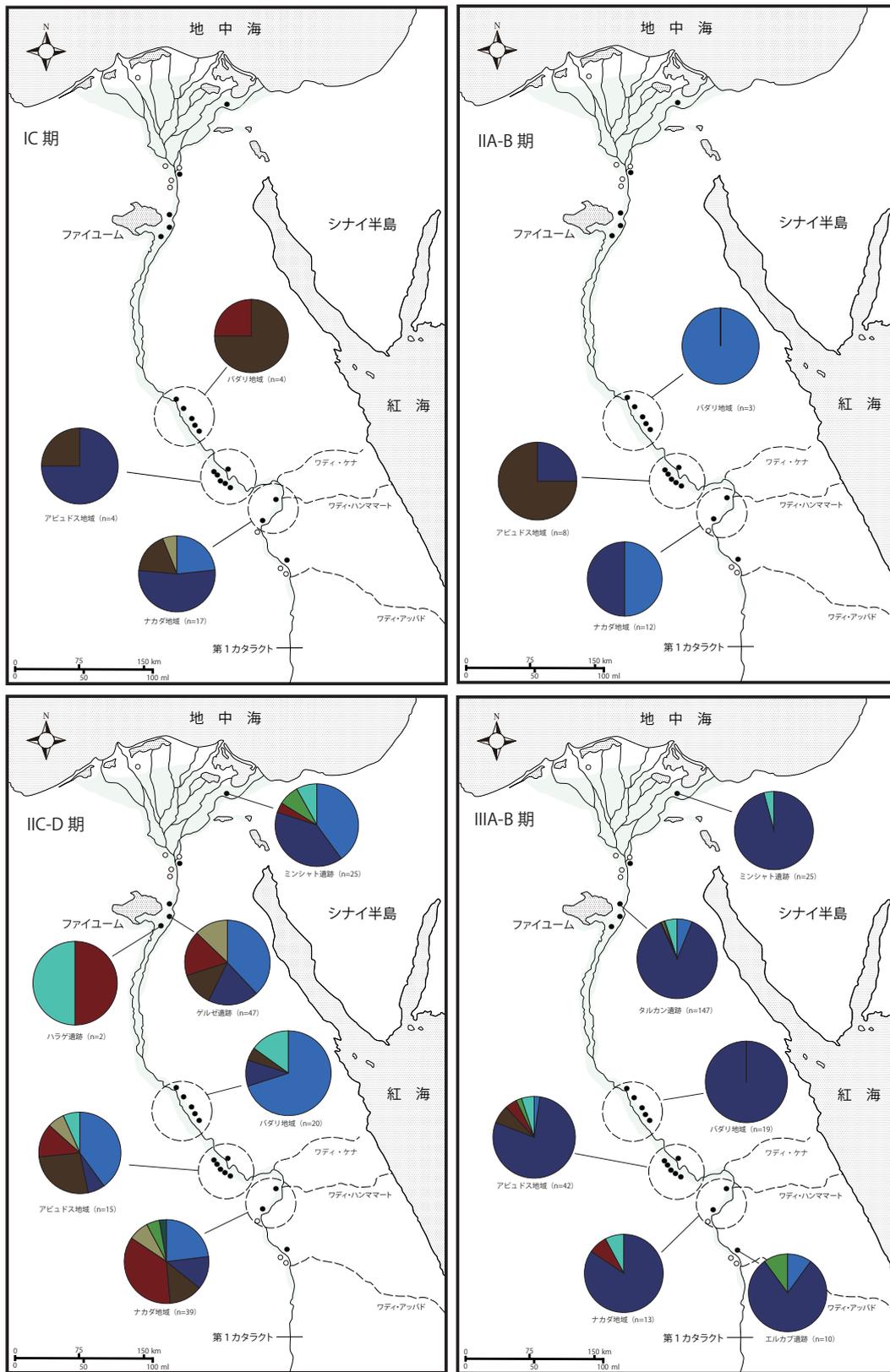


図8 各時期における石材構成  
Fig.8 Stone Variation in Each Period

アビュドス地域やバダリ地域では、玄武岩製のII類は未だ一定量の出土している。すなわち、この解体の様相は、ナカダ地域を中心として認められることになる。

### ③ IIC-D 期 (図8)

全体的な石材構成について見ると、上下エジプト間でさほどの差異はない。石灰岩やトラバーチン、東部砂漠由来である角礫岩や斑岩の利用は、概ね共通した石材構成となっている。しかし、特異な点は、カウ遺跡・バダリ遺跡・モスタゲッタ遺跡・マトマール遺跡といったバダリ地域にある。バダリ遺跡の泥岩製容器1点を除き、当該地域から出土する石製容器は角礫岩や斑岩、泥岩をほとんど指向されていないと言ってよい。この地域の4遺跡は、基本的に石灰岩やトラバーチン、玄武岩の3種類を指向したようである。器形ごとに使用された石材構成を見ると、I類やII類、III類では石灰岩・トラバーチン・角礫岩が主体である。VI類やVII類、VIII類は、石灰岩・トラバーチンが用いられる一方で、I類やII類、III類に比べ、斑岩や泥岩も素材として指向されたと言える。

### ④ IIIA-B 期 (図8)

全体的には上下エジプト間で明瞭な差異を読み取ることができない。一方で、上エジプト地域で角礫岩がこの時期になっても利用され続けるが、下エジプトでは角礫岩を素材とした石製容器は出土しない。また、ハマミーヤ遺跡およびマトマール遺跡では、割合上は角礫岩と泥岩の利用は一定量見られるものの、上エジプトの他遺跡よりも圧倒的に少ないと考えられる。当該地域は、基本的に石灰岩とトラバーチンを主体とした素材の利用傾向が窺えるだろう。下エジプト地域では、相対的に角礫岩や斑岩などのような東部砂漠由来の石材が少量であり、トラバーチンを主体とする。しかし、それらと比較して、同様に東部砂漠由来である泥岩の利用率は高く、トラバーチン以外では、次いで泥岩あるいは石灰岩が当該地域では指向されていた可能性にある。基本的にトラバーチンは全器種への使用が認められるが、角礫岩や斑岩、泥岩はIII類に限られる

## (3) 各時期の分布パターン

以上の分布パターンを各時期で類型化すると、図9～10のようになる。IC期では、上エジプト地域内部では、玄武岩製のII類のみを有するバダリ地域が特質的であり、VI類やIXa2類というイレギュラーな器形を除くとアビュドス地域とナカダ地域で器種構成・石材構成(Ia類:石灰岩、トラバーチン、II類:玄武岩)ともにまとまりをもつ。したがって、当該期の上エジプト地域はナカダ地域・アビュドス地域とバダリ地域という二極分化した様相にあると考えられる。

IIA-B期になると、玄武岩製容器の排他性においてアビュドス地域は他地域と一線を画す。翻ってナカダ地域とバダリ地域は石灰岩とトラバーチンのみからなる。また、ナカダ地域ではIII類が出現したことによって、他地域と異なる器種構成を見せる。アビュドス地域はほぼII類のみからなり、加えて他地域にはないIc類が出土する。この時期の石製容器の地域性は、3地域間で非常に複雑な様相を呈し、仔細に見るとそれぞれが独自性を有していると言える。

続くIIC-D期では、下エジプト地域のハラゲ遺跡とゲルゼ遺跡、ミンシャト遺跡が加わる。上エジプト地域内では、この時期になると器種構成上ほぼ違いはない。ただ、若干バダリ地域においてII類の指向性が強い。一方、下エジプト地域では、III類に加えてVII類・VIII類・IX類が中心的に出土し、トラバーチンに排他性がある。また、下エジプト地域では斑岩の全てがVII類・VIII類・IX類に用いられている一方で、上エ

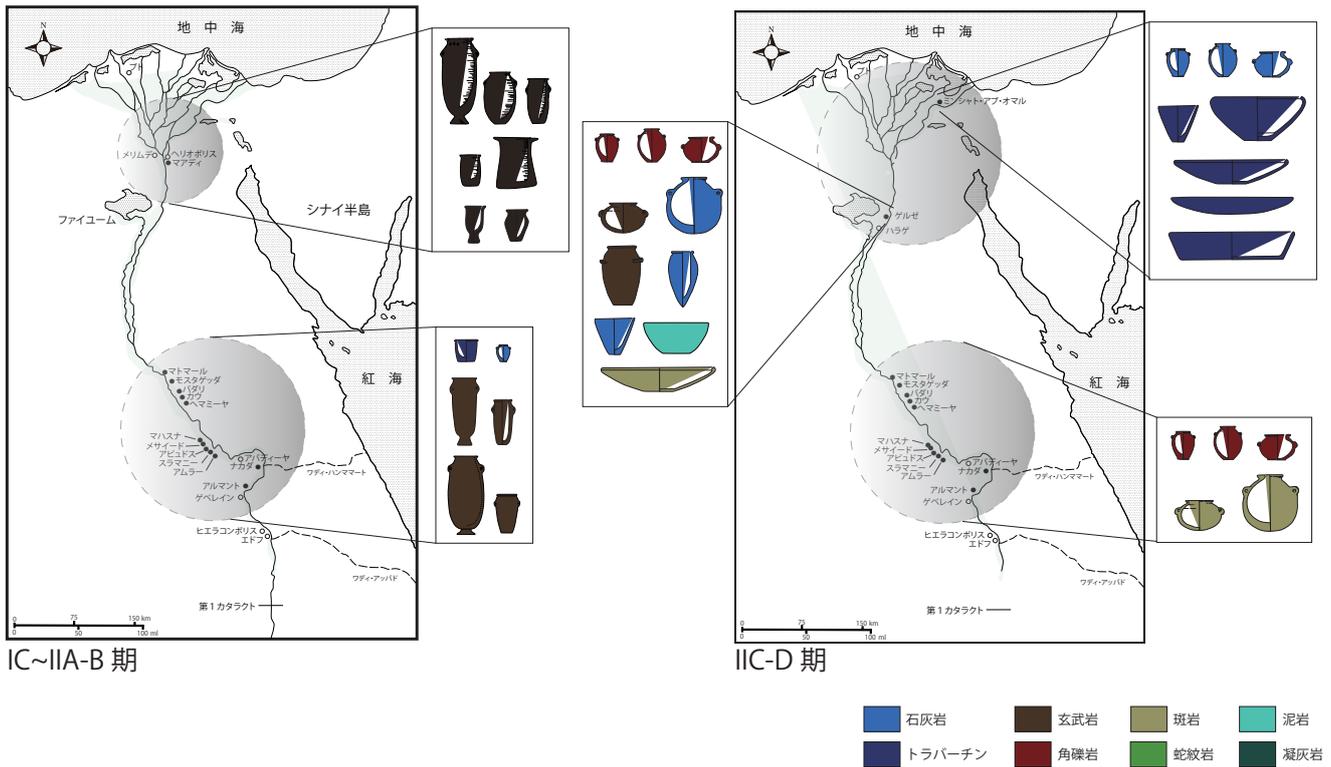


図9 IC ~ IIA-B 期および IIC-D 期における石製容器の地域性  
Fig.9 Regional Variation of Stone Vessels in IC~IIA-B and IIC-D

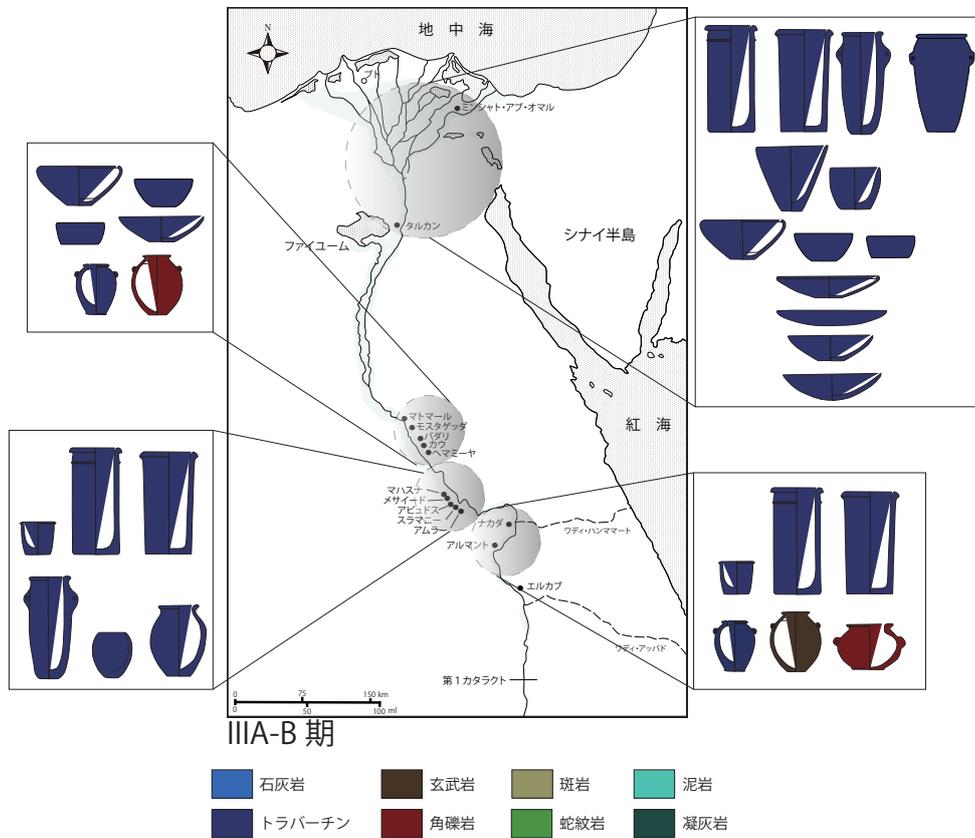


図10 IIIA-B 期における石製容器の地域性  
Fig.10 Regional Variation of Stone Vessels in IIIA-B

ジプト地域では斑岩自体の使用がほぼ認められない。当該期では上下エジプト地域間で二極構造的な様相にあると言える。

最後に IIIA-B 期であるが、この時期に出土の中心は下エジプト地域のタルカン遺跡へ移行し、大きな変化を示す。下エジプト地域はトラバーチンを中心とした I 類および VII 類～IX 類である一方、上エジプト地域では III 類が排他性をもつ。基本的に III 類はナカダ地域に集中し、バダリ地域では若干数保有している状況にある。しかし、バダリ地域は VII 類～IX 類が主体的である。留意すべきは、アビュドス地域の器種構成である。アビュドス地域は、上エジプト地域よりもむしろ下エジプト地域の器種構成に近いものの、下エジプト地域を特徴づける VII 類～IX 類はほぼ出土が認められない。そのため、当該期は、下エジプト地域、バダリ地域、アビュドス地域、ナカダ地域がそれぞれ異なる様相を見せる。

## 6. 石製容器の地域的多様性における形成要因

石製容器は、土器や石器と異なり、各遺跡・地域における自立的な生産体制は認められず、大規模遺跡を中心とした集約的な生産にあったことが想定される (Köhler 1995)。つまり、各地域における文化伝統の差異とその収斂という形成要因をそこには想定し得ない。土器や石器などの器種や素材は、ナカダ II 期中葉ごろには、上エジプト地域内部で偏差は消失する (Köhler 1995, Savage 2011)。しかし、石製容器の分布は、むしろ時期を経るごとに地域間の差異は広がっていく変遷過程にある。この地域色の広がりや、物質文化的な統一期である IIC-D 期から顕在化する傾向にあり、同時に出土量も上下エジプト全域で急増する。続く IIIA-B 期には、石材はトラバーチンとして画一化を迎えるものの、一方で器種構成については地域色のさらなる多様化を認めることができる。すなわち、下エジプト地域における鉢・皿 (VII, VIII, IX 類)、上エジプト地域における壺 (III 類) という IIC-D 期以来の伝統性は継続し、且つバダリ地域などでは上下エジプト地域の折衷的な様相をもつ器種構成が見られる。こうした各時期の地域性は、大規模遺跡から他地域への分配・流通という現象が介在して形成されたと言える。石製容器の分布パターンの変遷も、大規模遺跡における集約的な生産および他地域への流通という視点から解釈する必要性にある。

まず、IC 期の段階では、ナカダ地域を中心に出土すること、本時期に主体である Ia 類の出土量がナカダ地域からバダリ地域へ地理的勾配を呈すること、ナカダ地域でのみ多様な器形が認められることなどを勘案した際、ナカダ地域を軸とした石製容器生産にあり、ナカダ・アビュドス両地域においてその流通圏は限定される。一方、Ia 類の出土量に次ぐ II 類については、全て玄武岩から構成されており、化学分析によってマアディ遺跡における集約的な生産であったことが指摘されている (Mallory-Greenough 1999, 2002)。つまり、II 類のみから構成されるバダリ地域は、マアディ遺跡から搬出した石製容器を受容するに留まり、ナカダ地域は II 類を受容する傍らで、Ia 類などを独自に生産していた。出土量自体が極端に少ないことから、バダリ地域で石製容器生産が行われていたとは言い難い。

続く IIA-B 期では、前時期と比べ器種構成に大差ないものの、III 類が出現し、また器形と石材の対応関係が解体されることに特徴づけられる。つまり、II 類が玄武岩だけでなく、石灰岩やトラバーチンなどからも製作される。それと同時に、ナカダ地域およびアビュドス地域では II 類が主体となる。これらのことから、上エジプト地域、特にナカダ地域において、II 類の在地生産化が認められる。III 類の出現と II 類の在地生産化は、マアディ遺跡からの搬入品に依存しない自立的な生産体制が当該地域で確立し始めたことを示さだろう。一方、アビュドス地域では、玄武岩製の II 類が大半を占め、マアディ遺跡から流通した製品を積極的に受容していたと考えられる。また、依然としてバダリ地域は Ia 類の出土は認められず、出土量自体が非常に少ない。おそらく、前時期と同様、自立的な生産ではなく、搬入品に依存していたと考えられる。

IIC-D 期になると、器種構成および石材構成ともに大きく変動する。この時期主体となる III 類は、ナカダ地域で生成された固有の器形であり、上エジプト地域内の石製容器生産は、II 類の生産地であったマアディ遺跡廃絶後に飛躍的に向上する（竹野内 2013）。III 類に嗜好された角礫岩や斑岩は、東部砂漠の紅海丘陵に産出し、泥岩についてはワディ・ハンママトにその産地が確認されている（Stevenson 2009）。一方で、その遠隔に位置する下エジプト地域のゲルゼ遺跡などで斑岩や泥岩、角礫岩が排他的な器形をもって認められる。この傾向は、少なくとも下エジプト地域で石製容器の生産拠点があって、そこへ上エジプト地域から原材自体あるいは製品が流通していたことを示すだろう。すなわち、上下エジプト地域間における器種構成と石材構成の二極構造的様相は、そのまま二極分化した生産拠点と下エジプト地域へ延びる流通ラインの形成を物語る。

IIIA-B 期では、大量生産型の石製容器の生産体制が形成される。おそらく下エジプト地域で生産された VII 類、VIII 類、IX 類などが、ナカダ地域からは III 類が、バダリ地域へ搬出された。ここでは、バダリ地域は、外部からの流通とその受容による石製容器に依存していた可能性を支持したい。一方で、ナカダ地域は IIA-B 期以来の伝統的な石製容器生産を保持していたことは、III 類の排他性から理解できる。同時に、IIC-D 期から生産してきた杯や鉢、皿といった下エジプト地域のゲルゼ遺跡などで固有の石製容器は、この時期になって大量生産といった形で、当該地域で引き継がれていく。IIC-D 期のゲルゼ遺跡集団は、IIIA-B 期に形成されたタルカン遺跡集団の母体であったことが近年指摘されている（Madsley 2012）。人間集団間の共通性という点からも、ゲルゼ遺跡における石製容器生産がタルカン遺跡へ引き継がれた可能性を支持するだろう。また、IIIA-B 期でさらに生産地は分化傾向にある。各地域における生産地の分化は、トラバーチンという石材の画一化によって促進された可能性が考えられる。しかし、アビュドス地域とエルカブ遺跡が、むしろ下エジプト地域の器種構成に近いことは、ナカダ地域とはすでに異なる石製容器生産のあり方であったか、あるいは下エジプト地域からの搬入品に依存していたかのいずれかが考えられる。生産地の分化という背景は、近年のテル・エル＝ファルカ遺跡での調査成果からも裏付けられる。当遺跡では、石製容器製作に関連する遺物（石製穿孔器など）が出土し、先王朝時代末期ごろには、小規模な石製容器生産が地方レベルで行われていた可能性が指摘されている（Jórdeczka 2004）。

このように、IIA-B 期までに上エジプト地域で確立した石製容器生産は、IIC-D 期になると下エジプト地域への流通が指向され、さらにナカダ文化の広がりやマアディ遺跡の廃絶によって、生産地は上下エジプト地域間で二極構造を呈する。続く IIIA-B 期では、おそらく各地域に生産地が存立し、バダリ地域のみが下エジプト地域とナカダ地域双方向からの搬入品に依存していたのだろう。また、一貫してバダリ地域では、角礫岩や斑岩、泥岩など東部砂漠由来の石材を素材とした他製品がほとんど見られない。このことは、原産地近郊のナカダ地域もしくはアビュドス地域を含めた核地域が概して生産の拠点であり、その遠隔地域であるバダリ地域では製品のみがもたらされた傍証となろう。先王朝時代の石製容器の地域性は、こうした生産と流通における地域間関係によって生成されていたと考えられる。

## 7. おわりに

土器や石器の分析からは、少なくともナカダ II 中期ごろまでには上エジプト地域の物質文化は均質的になる（Holmes 1989, Friedman 2000）。しかし、石製容器の分布が、時期を経るごとに均質化するのではなく、むしろ地域的多様性は顕在化する様相にある。その要因となったのは、ひとえに生産地の分化と複雑な流通システムの発展にあった。石材資源へのアクセスが脆弱なバダリ地域では、他地域からの搬入に依存する他なかった。その一方で、さらに東部砂漠から遠隔にあるゲルゼ遺跡などで一部石製容器の生産が認められる

ことは、下エジプト地域へ延びる流通システムが指向され、IIC-D 期以降の地域間関係の再編成が背景にあるだろう。IIIA-B 期で最も地域的多様性が生成されることも、初期国家形成という時代の社会が要請した地域間関係、あるいは支配権力の地域的構造に基づく生産と流通の体制への変化にその要因を求めることができる。

こうした石製容器の地域性の変遷は、文化的統合というよりも、むしろ政治的統合のプロセスをその動態から跡づけることができる可能性にある。政治的な組織間の相互作用という視点から石製容器は捉えるべきである。それは、奢侈品あるは「威信財」の分布パターンが、日用品の分布パターンと異なることと同様であり、概して社会の政治経済という側面を表しやすい遺物であることに他ならないからだろう。このような視点から地域統合過程を再考する一助となれば、本稿の目的は達せられたと言えよう。

今後は、伝世品などの問題を含め、石製容器の分類および編年を精査し、地域編年をより仔細なものにする必要がある。

### 謝辞

本稿は、2013 年度に早稲田大学大学院文学研究科考古学コースで提出した修士論文の一部を骨子としている。修士論文の執筆時から、指導教員である文学学術院教授の近藤二郎先生にご指導を賜った。また、副査である早稲田大学高等研究所の河合望先生、早稲田大学エジプト学研究所の馬場匡浩氏、早稲田大学文化構想学部助手の長屋憲慶氏には、修士論文執筆時はもとより、日頃から有益なお話を聴かせていただいている。ここに厚く感謝を申し上げたい。

### 註

- 1) 一方で、このような見解を古典モデル (Classical Model) とし、近年では批判的な視座に立つ傾向がある。アダムス (Adams, B) やフリードマンらは、ピートリの土器分類でいう粗製土器 (Rough ware) は、上下エジプト全域で早い段階から出土し、そこに地域差は確認できないとしている (Adams and Freidman 1992)。また、ケーラー (Köhler, C) によると、デルタ地帯西部に位置するプト遺跡の集落址出土土器は、ナカダ文化波及以降も、世帯レベルでは製作され続け、上エジプトの影響は認められない (Köhler 1995)。石器研究の領域からは、捻れ状石刃や裁断加工器はナイル川下流域全域において IId2 期以前からすでに共通性を持っていたと考えられている (Schmidt 1996)。すなわち、近年の研究から、ナカダ文化の波及以前も上下エジプト地域間において物質文化的な共通項は存在し、いわゆる「文化的」地域性と考えられていた現象は、あくまで地理的・生態学的な差異に起因するものであり、地域的多様性 (Regional variation) として理解しなければいけない。
- 2) 本来であれば、先王朝時代の重要なセンターであるヒエラコンポリス遺跡も扱わなければいけない。しかし、当該遺跡出土の石製容器は、破片資料が多く、比較的まとまった報告がなされている「要塞墓地 (Fort Cemetery)」でもヘンドリックス編年に対応していない。そのため、本稿では、当該遺跡を扱わないこととする。
- 3) 器高/胴部最大径の割合は、VII 類が 2:3 以上、VIII 類が 2:3 未満、1:3 以上、IX 類が 1:3 未満とした。
- 4) 岩石の同定は、各遺跡の発掘調査報告書に依拠しているが、石材名称については、一部誤りがあるため、本稿では訂正して扱う。まず、報告書内ではアラバスター (Alabaster) とされているが、岩石学的及び地質学的にはトラバーチンが正しい (Harrell 2013)。続いて、大理石 (Marble) については、エジプトでは純粋な大理石があまり産出しないため、石灰岩とする (Aston 1994)。また、報告書内では、しばしば粘板岩 (Slate) や片岩 (Schist)、硬砂岩 (Greywacke) と表記されているが、地質学上これらは、泥岩 (Mudstone) あるいはシルト岩 (Siltstone) が正しい (Klemm and Klemm 2008)。本稿では、泥岩という名称を用いる。凝灰岩については、火山灰 (Volcanic Ash) として報告書では表記されるが、正確には凝灰岩 (Tuff or Tuffaceous Rock) である (Harrell et al 2000)。

### 参考文献

- Baumgartel, E. J.  
1970 *Petrie's Naqada Excavation: a Supplement*, London.

- Brunton, G.  
 1927 *Qau and Badari I*, London.  
 1937 *Mostagedda and the Tasian Culture*, London.  
 1938 *Matmar*, London.
- Brunton, G. and Caton-Tompson, G.  
 1924 *The Badarian Civilisation and Predynastic Remains near Badari*, London.
- Engelbach, R.  
 1923 *Harageh*, British School of Archaeology in Egypt, London
- Friedman, R. F.  
 1994 *Predynastic Settlement Ceramics of Upper Egypt: A Comparative Study of the Ceramics of Hemamieh, Nagada, and Hierakonpolis*, Department of Near Eastern Studies, University of California, Berkeley, University Microfilms International, Ann Arbor.
- Finkenstaedt, E.  
 1980 “Regional painting styles in Predynastic Egypt”, *Zeitschrift für Ägyptische Sprache und Altertumskunde* 107: 116-120.  
 1981 “The location of styles in painting: White cross-lined ware at Naqada”, *Journal of the American Research Center in Egypt* 18: 7-10.
- Guyot, F.  
 2008 “The Origins of Naqadan Expansion and the Interregional Exchange Mechanisms between Lower Nubia, Upper and Lower Egypt, the South Levant and North Syria during the First Half of the 4th Millennium”, in Midant-Reynes, B. and Tristant, Y. (eds.), *Egypt at Its Origins 2*, pp.707-740, Leuven.
- Harrell, J. A.  
 2013 “Ornamental Stones”, *UCLA Encyclopedia of Egyptology*, UC Los Angeles
- Harrell, J. A., Brown, V. M and Masoud, M. S.  
 2000 “An Early Dynastic Quarry for Stone Vessels at Gebel Manzal El-Seyl, Eastern Desert”, *The Journal of Egyptian Archaeology* 86, pp.33-42.
- Hendrickx, S.  
 1996 “The Relative Chronology of the Naqada Culture: Problems and Possibilities”, in Spencer, J. (eds.), *Aspects of Early Egypt*, pp.36-69, London.  
 2006 Predynastic-Early Dynastic Chronology, in Hornang, E., Krauss, R and Warburton, D.A. (eds.), *Ancient Egyptian Chronology*, Leiden and Boston.
- Jórdeczka, M.  
 2004 “Stone Implements from Tell El-Farkha”, in Hendrickxs, S., Friedman, R.F., Cialowicz, K.M., and Chlodnicki, M. (eds.), *Egypt at Its Origin*, pp.443-463, Leuven.
- Kaiser, W.  
 1957 “Zur Innen Chronologie der Naqadakultur”, *Archaeologia Geographica* 6, pp.69-77.
- Klemm, R. and Klemm, D.D.  
 2008 *Stones and Quarries in Ancient Egypt*, London.
- Köhler, E.C.  
 1995 “The State of Research on Late Predynastic Egypt: New Evidence for the Development of the Pharaonic State?”, *Göttinger Misyellen* 147, pp.79-92.  
 2008 “The Interaction Between and the Roles of Upper and Lower Egypt in the Formation of the Egyptian State. Another View”, in Midant-Reynes, B. and Tristant, Y. (eds.), *Egypt at Its Origins 2*, pp.515-543, Leuven.
- El-Kouli, A.  
 1978 *Egyptian Stone Vessels: Predynastic Period to Dynasty III Typology and Analysis*, Mazin.
- Kroeper, von. K. and Wildung, D.  
 1994 *Minshat Abu Omar I Ein vor und frühgeschichtlicher Friedhof im Nildelta Gräber 1-114*, Mainz  
 2000 *Minshat Abu Omar II Ein vor und frühgeschichtlicher Friedhof im Nildelta Gräber 115-204*, Mainz
- Mawdsley, L.  
 2012 “The Foundation and Development of Tarkhan During the Naqada IIIA2 Period”, in Evans, L. (ed.), *Ancient Memphis: ‘Enduring is the Perfection’*, pp.331-348, Leuven.
- Mallory-Greenough, L.M.  
 1999 “The Stone Source of Predynastic Basalt Vessels: Mineralogical Evidence for Quarries in Northern Egypt”, *The Journal of Archaeological science* 26, pp.1261-1272.

- 2002 “The Geographical, Spatial, and Temporal Distribution of Predynastic and First Dynasty Basalt Vessels”, *The Journal of Egyptian Archaeology* 88, pp.67-93.
- Mond, R.  
1937 *Cemeteris of Armant I*, London.
- Payne, J. C.  
1987 “Appendix to Naqada Excavations Supplement”, *The Journal of Egyptian Archaeology* 73, pp.181-189.  
1993 *Catalogue of the Predynastic Egyptian Collection in the Ashmolean Museum*, Oxford.
- Petrie, W.M.F.  
1896 *Naqada and Ballas*, California.  
1912 *The Labyrinth Gerzeh and Mazghuneh*, London.  
1913 *Tarkhan I and Memphis V*, London.  
1920 *Prehistoric Egypt*, London.
- Randall, D.M.C. and Mace, A.C.  
1902 *El Amrah and Abydos*, London
- Rizkana, I. and Seeher, J.  
1984 “New Light on the Relation of Maadi to the Upper Egyptian Cultural Sequence”, *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts Abteilung Kairo* 10, pp.237-252.  
1987 *Maadi I: The Pottery of the Predynastic Settlement*, Mainz am Rhein.  
1988 *Maadi II: The Lithic Industries of the Predynastic Settlement*, Mainz am Rhein.
- Sampson, B. M.  
2003 *Traveler's Guide to the Geology of Egypt*, Cairo and New York.
- Schmidt, K.  
1996 “Lower and Upper Egypt in the Chalcolithic Period. Evidence of the Lithic Industries: a View from Buto”, in Krzyzaniak, L., Kroeper, K., & Kobusiewicz, M. (eds.), *Interregional contacts in the later prehistory of Northeastern Africa*, Poznan.
- Stevenson, A.  
2009b *The Predynastic Egyptian Cemetery of El-Gerzeh: Social Identities and Mortuary Practices*, Leuven.
- Way, T. von der  
1989 “Tell el-Fara'in-Buto. 4. Bericht”, *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts. Abteilung Kairo* 45, 275-307.  
1993 “Untersuchungen zur Spätvor- und Frühgeschichte Unterägyptens”, *Studien zur Archäologie und Geschichte Altägyptens* 8, Heidelberg.
- Way, T, Köhler, C and Schmidt, K.  
1988 “Tell el-Fara'in- Buto, 3. Bericht, *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 44, pp.283-306.
- 竹野内恵太  
2013 「ナイル川下流域における石製容器の出現と展開に関する一考察」『エジプト学研究』第19号、135-177頁。

オブジェクト・フリーズ (*frise d'objets*) と  
出土遺物の比較  
- 装身具およびアミュレットを中心に -

山崎 世理愛\*

Comparison between the *frise d'objets* and Burial Goods:  
Focused on the Ornaments and Amulets

Seria YAMAZAKI\*

Abstract

In the ancient Egypt, personal ornaments were essential items among the burial goods, and some of them are mentioned in the funerary texts such as the Coffin Text and the Book of the Dead. The *frise d'objets* which was applied to the interior of the Middle Kingdom coffins also shows them as the polychrome pictures as well as the texts. Those funerary texts sometimes explain the material and position of the ornamental items with the dead, and it is intriguing that they are often found according to these explanations. Therefore, such funerary texts and pictures about burial ornaments seem to be a “norm”.

This paper focuses on the correlation between the *frise d'objets* and burial goods especially of the ornaments and amulets. Previous studies have suggested that the *frise d'objets* was the tomb-inventory or abstracted renderings of the ritual acts. However, I suppose that the *frise d'objets* is not just drawings of the objects, but at least in part, a “norm” of the burial goods and a means to show bearing knowledge of the ritual, which are needed for access to the afterlife. In order to know whether there were any rules in keeping the “norm”, the *frise d'objets* and the ornamental objects found from the burials of Senebtisi, Wah and anonymous lady were compared. There are at least 27 items listed in the *frise d'objets*, among which 15 items could be actually recognized in the burials. In addition, it is observed in each burial that there are very few ornaments and amulets which are not listed in the *frise d'objets*. As the results, some rule of performing the “norm” could be identified. Person of a high social position tends to be buried with a variety of ornaments and amulets as much as possible, while person of a lower position seems to possess a limited variation of the ornamental objects such as bracelets and anklets.

It is probable that although all the ancient Egyptian desired the ideal burial in keeping with the “norm”, the actual performance was depended on their socioeconomic situations, and lower class selected the burial items from the list of the *frise d'objets*.

---

\* 早稲田大学文学部考古学コース3年

\* Undergraduated Student, School of Humanities and Social Sciences, Waseda University

## 1. はじめに

装身具は古代エジプトにおいて先王朝時代より使用され、しばしば副葬品として死者とともに埋葬された。そして、時代が下るにつれその種類は増え、中王国時代にはラフーン (Lahun) やダハシュール (Dahshur) の王妃の墓からネックレスやブレスレット、頭飾りなど様々な装身具が出土している。また、古代エジプトでは装身具およびアミュレット<sup>1)</sup>が「コフィンテキスト (coffin text)」や「オブジェクト・フリーズ (frise d'objets)」、「死者の書 (book of the dead)」など葬祭に関する文書の中で言及されるかあるいは絵として描かれる文化があった。さらに、それらはしばしばその言及と一致した材質や位置で男女関係なく副葬品として出土するのである。すなわち、葬祭に関する文書で言及されたり絵として描かれた装身具およびアミュレットは、古代エジプト人に共通して必要とされた物であったのではないだろうか。そして、もしそれを「規範」と呼べるのであれば、実際の出土遺物と比較をすることで、両者の関係性および社会階層が異なる被葬者の間には「規範」の遵守にどのような違いがあるのかについて知ることができると思う。本稿では、そのようないわゆる「規範」の中でもこれまであまり注目されてこなかった「オブジェクト・フリーズ」に焦点を当てることとする。

「オブジェクト・フリーズ」については、ジェキエ (Jequier, G.) による「オブジェクト・フリーズ」に描かれた個々物に着目した研究 (Jequier 1921) が現在でも最も重要な位置を占める。また、ウィレムズ (Willems, H.) はジェキエの研究を評価しながらも、一つ一つの物が持つ意味や名前の同定に終始して、「オブジェクト・フリーズ」全体にまでは研究は及んでいないとし、描かれた物の配置関係や木棺の内側を装飾した他の要素との関係性を中心に、より広い視野で研究をおこなった (Willems 1988)。そして、「オブジェクト・フリーズ」と実際に出土した遺物の両方を考察した研究としては、パッチ (Patch, D.C.) による下エジプトの衣装 (“Lower Egyptian” costume) の持つ意味とその変遷における研究 (Patch 1995) が挙げられる。しかしながら、一つの墓内における遺物のアセンブリッジとの関係をみていこうとした研究は、遺跡の報告書で多少触れられる以外は管見の限り行われていない。そこで本稿では、研究の出発点としてまず先行研究をもとに「オブジェクト・フリーズ」の主な特徴を概観した上で、「オブジェクト・フリーズ」と一つの墓から出土した装身具およびアミュレットとの比較をおこなう。

## 2. 「オブジェクト・フリーズ」について

本章では、まず先行研究の中でも特にウィレムズの研究 (Willems 1988) を中心に「オブジェクト・フリーズ」についてまとめ、その特性を明確にしていく<sup>2)</sup>。

### (1) 描かれた位置と時代

中王国時代の箱型木棺は、特にメンフィス地域と中部エジプト (中でもベニ・ハサン (Beni Hasan)、メイル (Meir)、ベルシャ (Bersheh) など) では外側よりも内側に装飾が集中しており (Snape 2011: 143-144)、「コフィンテキスト」、装飾的に表現されたヒエログリフ (ornamental Hieroglyphic text)、偽扉 (false door)、供物卓 (offering table) などが様々な色を使って描かれた。「オブジェクト・フリーズ」とは、そのような木棺の内側における装飾を構成する一つの要素であり、多彩色で描かれた日用品や儀式で使う道具などの絵が並んだものを指す (図1)。それらの絵は、しばしば関係する体の部位に合った場所に描かれた。つまり、枕や鏡は被葬者の頭が位置する場所に合わせて描かれ、サンダルはそれとは反対側の足側に描かれたのである。また、時には絵だけでなく、その物の名前や材質、置くべき場所をヒエログリフで記したラベルが近くに描かれることもあった。

ウィレムズは木棺を集成し分析することによって、箱型木棺は「オブジェクト・フリーズ」が胸側に無い<sup>3)</sup>木棺 (タイプ1) とある木棺 (タイプ2) との大きく2つのタイプに分けられると考え、さらに両者には年

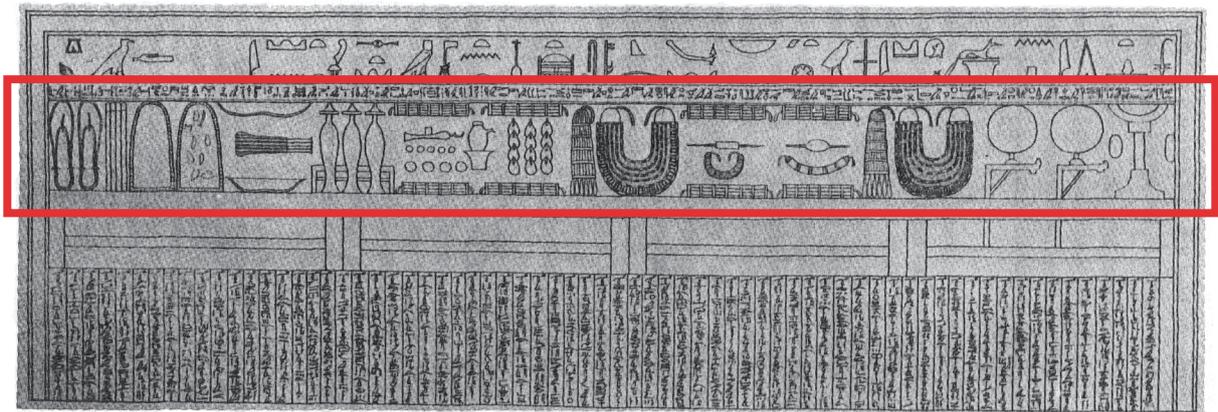


図1 木棺内側背中側に描かれた「オブジェクト・フリーズ」(Willems 1988: fig.26 一部加筆)

Fig.1 Back panel (interior view) of the coffin showing the *frise d'objets* (Willems 1988: fig.26, with additions)

代の違いがあるということを指摘した(図2)。

まず、タイプ1についてウィレムズは、古王国時代と第1中間期の墓や棺の装飾を引き継ぎ、さらにタイプ2に先行する木棺であると述べている。また、タイプ1の中でも頭側と背中側に「オブジェクト・フリーズ」が描かれたタイプ1aと、頭側、足側、背中側に「オブジェクト・フリーズ」が描かれたタイプ1bが主流であったという。タイプ1aの木棺は、第11王朝や第12王朝初めのものでテーベ(Thebes)やベルシャ、ヘラクレオポリス(Heracleopolis)周辺から出土しているがほどなく使われなくなり、タイプ1bがその後も継続して使われ、ベルシャ、ベニ・ハサン、メイルやその他中部エジプト、メンフィスから出土しているということである。

次に、タイプ2についてウィレムズは、第12王朝アメンエムハト2世の治世頃に登場し、タイプ1にほぼ取って代わった木棺であると述べている。このタイプの登場によって「オブジェクト・フリーズ」が占めるスペースが増え、それまで描かれていた物に加えて新しく描かれる物が出てきたようだ。また、「オブジェクト・フリーズ」以外の様々な装飾にも変化が見られ、タイプ2はそれまでのタイプ1とは明らかに性格を異にする木棺であるということが分かる。ウィレムズは、このような変化がエジプト中の木棺に同じく起こっていることから、遠く離れた工房間においてもなんらかの接触があり、全国的規模で同じ変化が導入されたのだと述べている。

ここまで2つのタイプについて述べてきたが、ウィレムズによるとこの他に4側面どこにも「オブジェクト・フリーズ」が見られないタイプ3の木棺も存在する。このタイプにおける主な装飾は「コフィンテキスト」であるが、胸側に偽扉や装飾的に表現されたヒエログリフが加わることもあった。例外的な様式ではあるが、中王国時代を通してエジプト全土において見られるという。そして、第12王朝後半のダハシュールにある王女の墓においてはタイプ3の木棺が一般的であったということだ。

## (2) 描かれた物と意味

「オブジェクト・フリーズ」の持つ意味については、死後に必要とされる様々な物を示した副葬品の一覧表である可能性が指摘されている(Andrews 1984: 41; Snape 2011: 143)。さらにウィレムズは、「コフィンテキスト」の内容と一致する物があることから、一部はその挿絵としての役割を担っていたのであろうと述べている。そして、「オブジェクト・フリーズ」は単なる副葬品の絵ではなく、儀式における行為を概略して表現したものであるということも主張している。

以上のように、「オブジェクト・フリーズ」が持つ意味については様々な指摘がされているが、中でもウィ

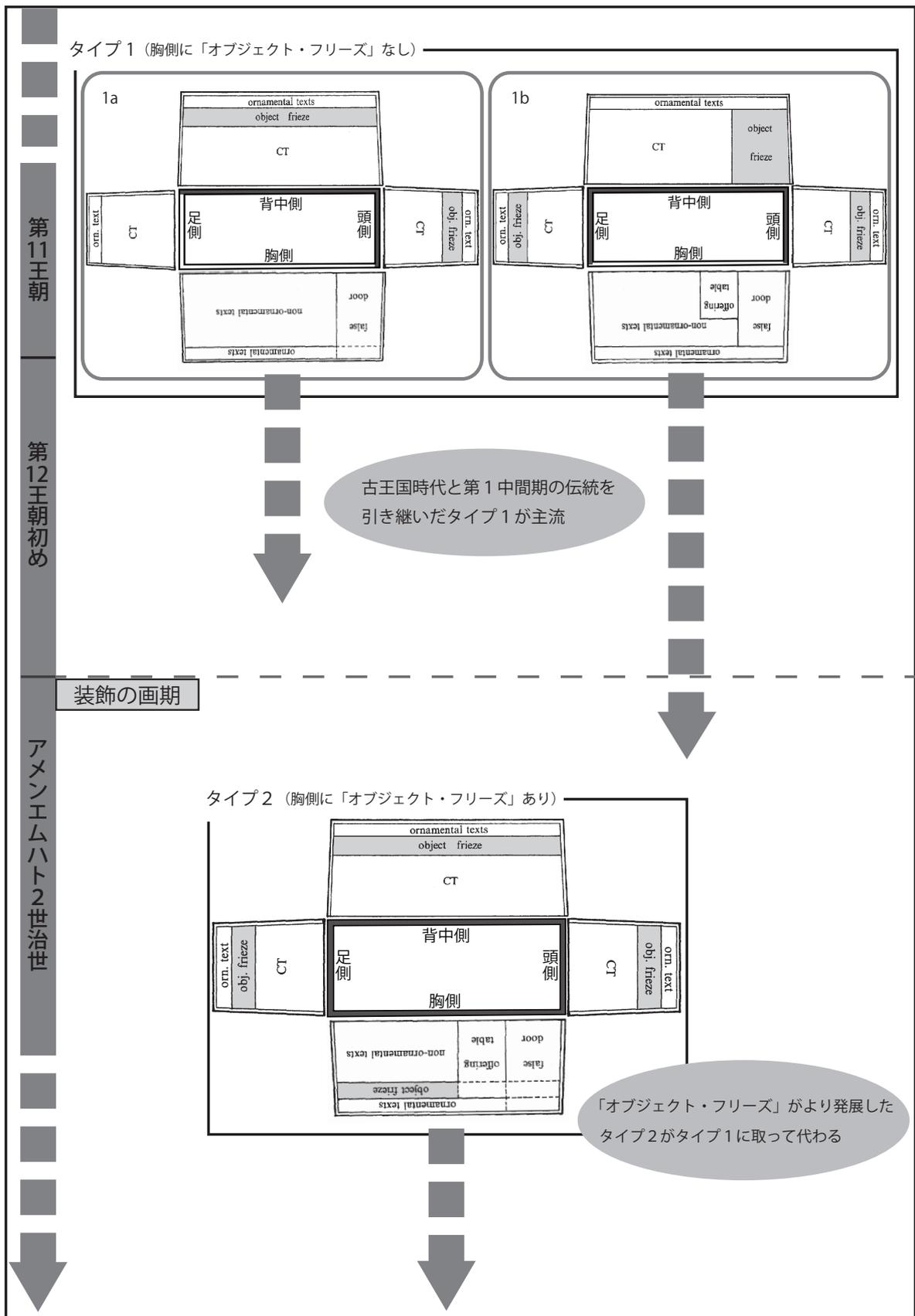


図2 タイプ1とタイプ2の木棺における装飾と年代 (Willems 1988: figs.19-21 の一部を引用して作成)  
 Fig.2 Inner decoration and typology of Type 1 and Type 2 coffins (Coffin panels are after Willems 1988: figs.19-21)

レムズは儀式との関係を強く主張しており、詳しく述べている。まず、「オブジェクト・フリーズ」には7つの聖なる軟膏（油）壺、2袋の化粧用顔料（bags of eye-paint）など口開けの儀式で使われる物を中心に、さらにその他儀式で必要とされる物、そして埋葬に際して被葬者の身体に着けられたアミュレットなど、埋葬までに行われる儀式と関係する様々な物が描かれた。また、いくつかのアミュレットは「コフィンテキスト」においても言及されており、たとえばライオンのアミュレット (*h3t-amulet*) は、首に置くことで二度目の死からその人を護るという役割を担っていたことがテキストに書かれている。このように、「オブジェクト・フリーズ」は埋葬やそれに関わる儀式と強く結びついており、埋葬までに行われる一連の儀式を表現したものであるとウィレムズは考えている。つまり、「オブジェクト・フリーズ」は儀式を再現する役割を担っていたのである。

次に、ウィレムズの研究に従って木棺内側の4側面それぞれに描かれた物について見ていく。まず、頭側（図3）に描かれた主な物としては7つの聖なる軟膏（油）壺、2袋の化粧用顔料、枕が挙げられる。また、これに加えて儀式で使われる道具や香炉が描かれることもあった。これらは「ピラミッドテキスト」や供物リストの内容に由来すると考えられ、さらに口開けの儀式と深く関係するのである。

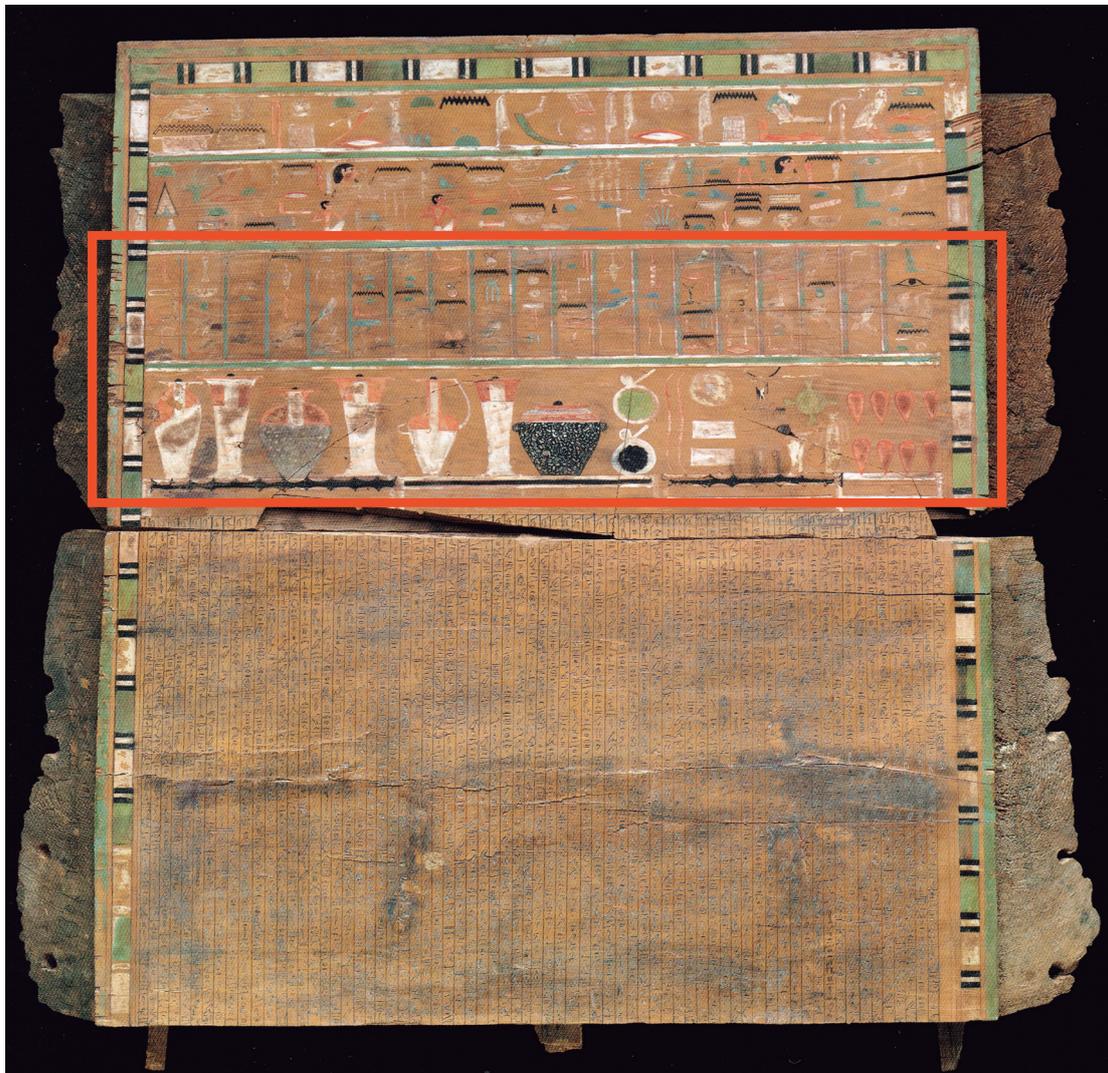


図3 頭側の「オブジェクト・フリーズ」(Freed et al. 2009: fig.69 一部加筆)

Fig.3 Head panel (interior view) of the coffin showing the *frise d'objets* (Freed et al. 2009: fig.69, with additions)

次に、足側にはサンダル、アネク (*ꜥnh*) そしてその他儀式で使われる道具が描かれ、これらの道具は最初メンフィス地域で登場し、次第に南でも見られるようになるという。足側に描かれた物は頭側よりも種類が豊富であり、他の地域よりも精巧な「オブジェクト・フリーズ」が施されたバルシャでは、儀式と関連する物や日用品がさらに加えられたという。背中側と胸側は、両端側と異なり「オブジェクト・フリーズ」を描くスペースが豊富であったため、50以上の絵が描かれることもあった。まず、背中側には胸側よりも早く「オブジェクト・フリーズ」が施されるようになり、主に襟飾り (collar)、ブレスレット、エプロン、武器、笏、サンダルなどが描かれた。これらは基本的に、首、胸、腕に関係する物は頭に近い位置に描かれ、武器やサンダルは足に近い位置に配置されたということである。また、これらの絵はそれぞれ除外されることがあったが、特にタイプ1の木棺から襟飾りとブレスレットが除かれることは稀であった。最後に、胸側に「オブジェクト・フリーズ」が描かれるようになるのはアメンエムハト2世の治世頃からであり、鏡、襟飾り、ブレスレット、古王国時代の供物リストで言及されている武器や笏、そして書記の道具などが描かれた。胸側の特徴としては、「ピラミッドテキスト」や古王国時代の供物リストで言及されている物を重視して描かれるという点が挙げられるようである。

以上それぞれの側面に描かれた物について述べてきたが、これらの中には剃刀などの日用品も含まれており、儀式とは関係のないように思われる物もある。ウィレムズによるとこのような日用品は、第11王朝から第12王朝初めまで主流であったタイプ1の木棺において多く見られる。しかし、胸側に「オブジェクト・フリーズ」が描かれるタイプ2がタイプ1に取って代わった第12王朝半ば頃になると、襟飾りやブレスレット、化粧道具などの数が減少すると同時に、特に背中側において日用品が減り、王位の象徴や儀式に由来する物が新たに加わるという明確な変化が起こるのである。このような変化は、第12王朝半ばに死者とオシリスとの同一視が進み、つまり死者が王としての役割を強く持つようになってきていることを示唆している。しかし、ウィレムズはこの点に政治的な意味合いを持たせてはならず、特に関係は無いであろうと述べている。

以上から、「オブジェクト・フリーズ」は「ピラミッドテキスト」や供物リスト、「コフィンテキスト」との関係が非常に深く、儀式とは切り離せないものであったということが分かる。さらに、描かれる物には時代によって違いがあり、それはタイプ2の木棺が主流となる第12王朝半ばにおいて顕著に見られるということである。

### 3. 「オブジェクト・フリーズ」に描かれた装身具およびアミュレット

本章ではまず、前章を踏まえた上で「オブジェクト・フリーズ」が持つ役割について「規範」や知識の所有という観点から捉え直す。そして、描かれた物の中でも特に装身具およびアミュレットを取り上げまとめる。

#### (1) 「オブジェクト・フリーズ」の役割—「規範」・知識の所有を示すもの—

前章で述べた通り、「オブジェクト・フリーズ」の持つ意味については、副葬品の一覧表としての役割と儀式を再現する役割という大きく2つが指摘されている。両者に共通する点として、「オブジェクト・フリーズ」には副葬品として重要視され、埋葬に際して必要とされた物が描かれたという点が挙げられる。つまり言い換えれば、「オブジェクト・フリーズ」は副葬品についてのいわゆる「規範」のような性格を持っているのではないかということである。また、「オブジェクト・フリーズ」には武器や化粧道具なども含まれるため、一見してそれは被葬者の性別によって描かれる物に偏りが生まれるように思われる。しかし実際は、「オブジェクト・フリーズ」が描かれるか否か自体には男女差が見受けられるが<sup>4)</sup>、描かれた物に男女差は特に

表れず、被葬者が男性であるからといって武器が多く描かれたり、女性であるからといって化粧道具が多く描かれたりということはない(Willems 1988: 50-51)。すなわち、地域差や時代差による違いはあるものの、「オブジェクト・フリーズ」には副葬すべき物がジェンダーの影響を受けずに描かれたということが示唆される。さらに、「オブジェクト・フリーズ」は被葬者が知識を所有していることを誇示する役割も担っていたと考えられる。「オブジェクト・フリーズ」と関係が深いものとして「コフィンテキスト」が挙げられるが、「コフィンテキスト」は古王国時代の「ピラミッドテキスト」と異なり王以外の人々が所有していたことから、それまでは王だけにしか開かれていなかった死後に永遠の生命を得る道が、中王国時代には王以外の人々にも開かれたといういわゆる「来世の民主化 (the democratization of the afterlife)」が起こったのだと言われていた。しかし、ヘイズ (Hays, H.) は来世で復活できるかどうかを葬祭に関わる文書を所有しているかどうかを求めるこの説に否定的であり、真に必要なとされたのは文書ではなく知識と儀式であると述べている (Hays 2011: 130)。つまり、「ピラミッドテキスト」や「コフィンテキスト」を有していることは、儀式における知識の所有を誇示しているのであり、逆に言えばそのような文書を持っていなくとも知識と儀式によって死後に永遠の生命を得られるということである<sup>5)</sup>。そして、前章で述べた通り「オブジェクト・フリーズ」に描かれた物の多くは儀式との関係が深いことが指摘されている (Willems 1988: 207)。また、王族など身分の高い被葬者であっても木棺に「オブジェクト・フリーズ」が描かれない場合がしばしば見られ、埋葬に際しての必須事項ではなかったことが推測される。したがって、「オブジェクト・フリーズ」もまた、儀式や副葬すべき物における知識の所有を単に誇示する役割を持っていたのだと考える。

以上、「オブジェクト・フリーズ」が持つ意味や役割について捉え直したが、すなわち「オブジェクト・フリーズ」とは、副葬すべき物を示す「規範」としての機能を持ち、そして儀式の再現を通して儀式についての知識を所有していることを誇示するものだということである。本稿では、特に「オブジェクト・フリーズ」の「規範」としての役割に焦点をあてて論じていく。

## (2) 副葬すべき物として示された装身具およびアミュレット

次に、「オブジェクト・フリーズ」に描かれた多様な物の中でも装身具およびアミュレットに注目し、それらは副葬品においていわゆる「規範」であったという視点から考察していく。

まず、「オブジェクト・フリーズ」に描かれた装身具およびアミュレットについて、既往の研究 (Jequier 1921; Lacau 1904, 1906; Willems 1988) をもとにまとめ直すと、表 1<sup>6)</sup>・図 4～10 のようになる。ただし、これら全てが一つの木棺に描かれた訳ではなく、「オブジェクト・フリーズ」が占めるスペースの広さなどによって一部が選ばれ、主に背中側と胸側に描かれたのである。前章で述べた通り、中でも襟飾りやブレスレットが頻繁に描かれ、特にタイプ 1 の木棺でそれは顕著だということであった。

表 1・図 4～10 より、「オブジェクト・フリーズ」には非常に多彩な装身具およびアミュレットが描かれたということが見て取れる。そしてそれらを詳細に見ていくと、まず王あるいは王家の象徴 (royal insignia) に由来する物がいくつ含まれるということが分かる。たとえば、C5 のハヤブサあるいはハゲワシの襟飾りと H のヘッドバンドは主にウィレムズの言うタイプ 2 の木棺に見られ、L2 のビーズのエプロンなど伝統的な王の衣装はタイプ 1 の木棺においても多く見られる。つまり、「オブジェクト・フリーズ」は、「ピラミッドテキスト」に由来する物や、かつては王だけに限られていた王位の象徴である王冠や笏などを含むことが指摘されている (Willems 1988: 202-204) が、それは装身具およびアミュレットにおいても例外ではないということである。次に、全体的に見てペンダント、ネックレス、襟飾りと首に着ける装身具およびアミュレットが多いという点が指摘できる。古代エジプト人は、来世への道のりにおいて首は特に傷付きやす

表1 「オブジェクト・フリーズ」に描かれた装身具およびアミュレット  
Pl.1 Ornaments and amulets shown in the *frise d'objets*

<p><u>ヘッドバンド</u></p> <p>H: 多様な装飾がされた輪で表現される (sšd)</p>
<p><u>ペンダント</u></p> <p>P1: 赤色の樽形ビーズで、しばしば両端に緑色のビーズを伴う (swrt)</p> <p>P2: 緑色の管形 (あるいは樽形) ビーズで、しばしば両端に赤色のビーズを伴う (wšd)</p> <p>P3: 赤色でヘビの頭の形をしている (mnkbyt)</p> <p>P4: ライオンの頭と前脚部分の形をしており、カーネリアン製であるべきとされる (hšt)</p> <p>P5: ヒエログリフ  の形をしている (imnt)</p>
<p><u>ネックレス</u></p> <p>N1: 同じ形のビーズを連ねたもの (ꜥt)</p> <p>N2: いくつもの形や色が異なるビーズを特に規則性なく連ねたもので、しばしばスカラベやウジャットの眼が含まれる (ꜥt)</p> <p>N3: 貝の形をしたビーズを連ねたもの (wd3w)</p>
<p><u>襟飾り (collar)</u></p> <p>C1: 両端に半円形のターミナルを伴う (wsh)</p> <p>C2: 両端にハヤブサの頭のターミナルを伴う (wsh)</p> <p>C3: 金製の襟飾り (nbw)</p> <p>C4: 襟飾りの重さのバランスをとるための重り (mꜥnht)</p> <p>C5: 王の装身具に由来し、ハヤブサあるいはハゲワシの形をしている (wsh nrt など)</p> <p>C6: たくさんの小さいビーズで構成されたネックレスを両端でまとめたもので、様々な形のビーズで装飾された重りが伴う (mnit)</p>
<p><u>プレスレットあるいはアンクレット</u></p> <p>B1: 幅の広いプレスレット / アンクレット (mnfrty/srwy)</p> <p>B2: 幅の狭いあるいは一連のプレスレット / アンクレット (ꜥdnt など)</p> <p>B3: カーネリアンまたはアメジスト製で右腕に着けるべきとされたビーズ (hpꜥt)</p>
<p><u>伝統的な王の衣装 ("Lower Egyptian" costume)</u></p> <p>L1: しっぽ (mnkrt など)</p> <p>L2: ビーズのエプロン (bsš)</p> <p>L3: ツバメの形をしておりしばしば背中に円盤を伴う (šit)</p>
<p><u>アミュレット</u></p> <p>Am1: ハヤブサの形をしている</p> <p>Am2: ヒエログリフ  の形をしていて、足の下に置くことが指示されている (ꜥnh)</p> <p>Am3: 結び目のような形をしている (tit)</p> <p>Am4: 輪の形あるいは輪の下に横棒を伴う (ꜥnh š3w)</p> <p>Am5: コブラの形をしている (iꜥrt など)</p> <p>Am6: ハゲワシの形をしている (nrt など)</p>

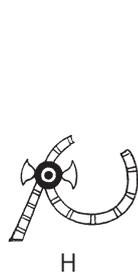


図4 ヘッドバンド

Fig.4 Headband (Lacau 1906: fig.491)

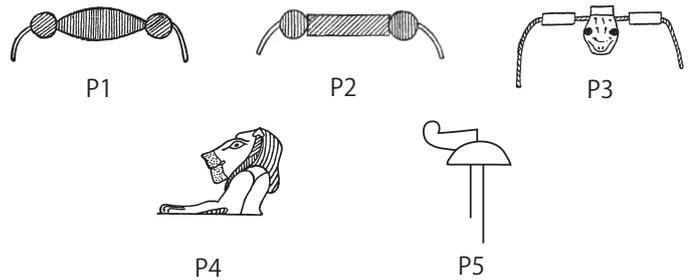


図5 ペンダント

Fig.5 Pendants (Lacau 1906: figs.445, 454, 463, 92, and P5 is after Willems 1988: table13 redrawn)

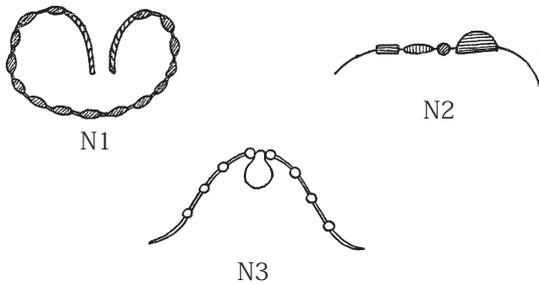


図6 ネックレス

Fig.6 Necklaces (Lacau 1906: figs.457, 456, 467)

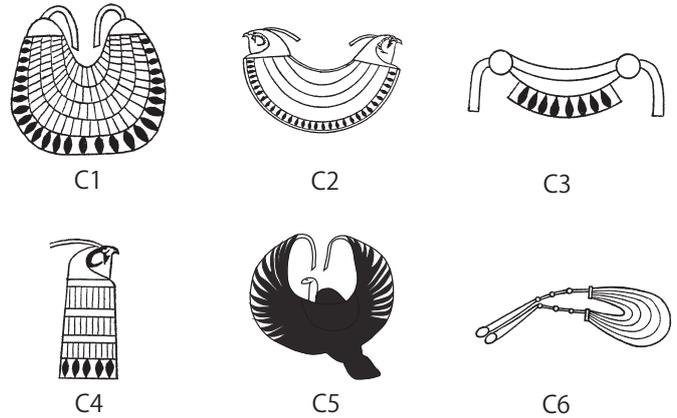


図7 襟飾り

Fig.7 Collars (Lacau 1906: figs.429, 430, 434, 440, 472, and C5 is after Garstang 1902: pl.26 redrawn)

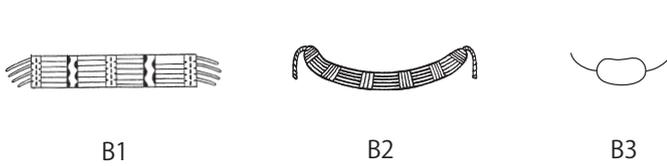


図8 ブレスレットあるいはアンクレット

Fig.8 Bracelets and anklets (Lacau 1906: figs.425, 437, and B3 is after Willems 1988: table13 redrawn)

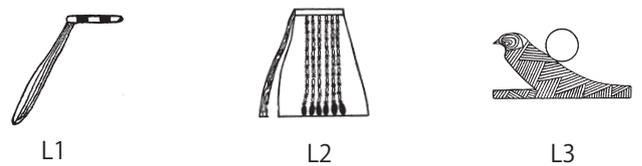


図9 伝統的な王の衣装

Fig.9 "Lower Egyptian" costume (Lacau 1906: figs.408, 400, 95)

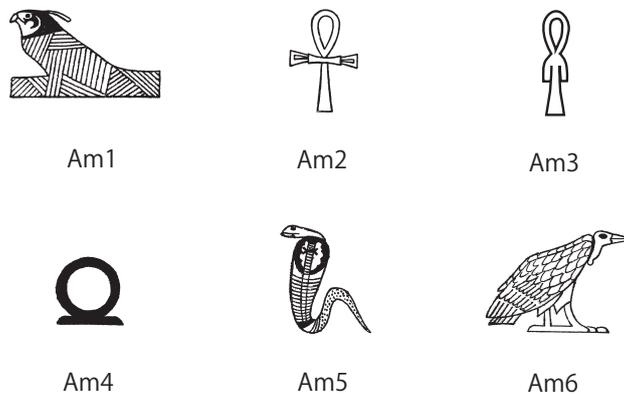


図10 アミュレット

Fig.10 Amulets (Lacau 1906: figs.96, 115, 112, 90, 100, and Am3 is after Jequier 1921: fig.854 redrawn)

い体の部分であると考えた (Pinch 1994: 111-112) ため、これらの首に着ける物が「オブジェクト・フリーズ」には多く含まれ、「規範」として示されたのだと考える。さらに、その中でも襟飾りが重要視されたということが推測される。表1・図4～10においてはターミナル<sup>7)</sup>の形を主な基準として分け、材質での分類はC3の金製のもの以外は考慮しなかった。しかし、材質や名前によってさらに細分すると、実際は10種類以上の襟飾りが「オブジェクト・フリーズ」には描かれたのである (Mace and Winlock 1916: 65)。したがって、副葬品として様々な材質・色の襟飾りを入れることが理想的であるとされたのではないだろうか。また、ペンダントには赤色が多いということも指摘できる。表1で挙げた5つのペンダントのうち、3つがカーネリアン製であることが示されているかあるいは赤色で描かれているのである。P1の赤色をしたスウェルトビーズ (*swrt*) と共に描かれることが多く形態も類似しているペンダントとして緑色のP2が挙げられるが、実際に出土するのも、人形木棺やマスクの首に描かれるあるいは象嵌されるのも専ら赤色のスウェルトビーズの方なのである<sup>8)</sup>。つまりこれは、類似する2つのペンダントであっても、緑色より赤色の方が好まれたということを示唆している。さらに、新王国時代においても赤色志向は変わらなかった。たとえば、「死者の書」においてもいくつかの装身具およびアミュレットが言及されているが、その中で結び目の形をしたティト (*tii*) はやはり赤色の貴石で首の位置に置くことが指示されている。また、「オブジェクト・フリーズ」に描かれたP3つまり赤色でヘビの頭の形をしているペンダント (*mnkbyt*) は、新王国時代の墓の壁画にも赤色で描かれ、さらに同時代からの出土例も多いのである<sup>9)</sup>。このような色の志向は、元々慣習であったかあるいは当初からその色に意味を込めていたと思われる。しかし、いずれにせよ赤色であるべきことが葬祭に関する文書に示されることによって、それは「規範」という確固としたものとなり、中王国時代以降「コフィンテキスト」や「オブジェクト・フリーズ」が姿を消した新王国時代においても、ペンダントにおける赤色志向は継承されていったのだと考える。

以上「オブジェクト・フリーズ」に描かれた装身具およびアミュレットについて見てきたが、非常に多種多様なものが描かれたということや、いくつかは王や王家の象徴に由来するということが判明した。また、首に着けるタイプの装身具およびアミュレットが多いのは古代エジプト人独自の考えに起因するということ、そして色といった細かい点も「コフィンテキスト」や「オブジェクト・フリーズ」で示されることによってそれは「規範」としての性格を帯び、中王国時代以降も継承されていくのだということも指摘した。

#### 4. 出土遺物との比較

ここでは、前章で提示した「オブジェクト・フリーズ」に描かれた装身具およびアミュレットと実際の出土遺物との比較・考察をおこなっていく。

本稿では、「オブジェクト・フリーズ」と一つの墓から出土した装身具およびアミュレットとの比較をすることで、一人の被葬者がどの程度あるいはどのように「規範」を遵守していたのかを知ることが目的であるため、対象とする墓は未盗掘であることが望ましい。また、その中でも特に装身具およびアミュレットについて詳細な報告がされている墓が分析対象として有効であると考えられる。そこで今回は、中王国時代の墓の中でもほぼ未盗掘で、とりわけ詳細な報告がされているセネブティシ (Senebtisi) の墓を分析対象の軸に据える。さらにそれに加えて、未盗掘で発見され装身具およびアミュレットについて詳細に報告されているウアフ (Wah)、ナガ・エッデイル (Naga ed-Deir) に埋葬された名前不明の女性の墓を分析対象とし比較をおこなう。

まず、セネブティシは第12王朝末頃リシュトに埋葬された非常に身分の高い女性である。ほぼ未盗掘のまま発見された墓からは、多数の土器や笏、カノポス壺などが出土した (Mace and Winlock 1916)。しか

し、セネブティシは「家の女主人 “lady of the house”」の称号を有しているという以外は、どのような人物であったかはよく分かっていない。土器に「クイーンズウェア (“queen’s ware”）」が含まれていないことなどから、王族ではなかったと思われるが、社会階層が非常に高かったことは明確である (Grajetzki 2014 : 34-35)。次に、ウアフは第 12 王朝初め頃テーベに埋葬された「貯蔵所の監督官 “overseer of the storehouse”」の称号を持つ男性である。未盗掘で発見され墓からは食べ物の供物が出土し、木棺からは精巧に作られたミイラが見つかった (Roehrig 2003)。最後に名前不明の女性とは、第 11 王朝後半にナガ・エッデルに埋葬された社会階層が高くないと思われる女性である (Freed et al. 2009: 52)。この女性は、未盗掘の墓 (N453b) から装身具およびアミュレットを身に着けた状態で発見された (Eaton 1941)。また、今回対象とする 3 人の被葬者は誰も「オブジェクト・フリーズ」を所有していないが、前章で指摘した通り、そこに描かれた物事についての知識があれば良いと考えるため、それぞれの墓から出土した遺物と、「オブジェクト・フリーズ」に描かれた装身具およびアミュレットを網羅的に示した表 1 とを比較するという方法をとる。

以上を踏まえて、まず表 2<sup>10)</sup> には表 1 で示したいわゆる「規範」に挙げられている物を副葬品として実際に所持しているか否かを示し、さらにそのうち 3 人の被葬者いずれかが所有している装身具およびアミュレットについてはそれぞれの出土数を図 11<sup>11)</sup> に示した。

まず表 2 より、「オブジェクト・フリーズ」に描かれた装身具およびアミュレツ

表 2 「規範」と実際に出土した装身具およびアミュレットとの比較  
Pl.2 Comparison between the *frise d'objets* and burial goods (ornaments and amulets)

	セネブティシ	ウアフ	名前不明の女性
H 	○	—	—
P1 	○	○	—
P2 	—	—	—
P3 	—	—	—
P4 	—	—	—
P5 	—	—	—
N1 	○	○	○
N2 	—	○	—
N3 	○	—	—
C1 	○	○	—
C2 	○	—	—
C3 	○	—	—
C4 	—	—	—
C5 	—	—	—
C6 	—	—	—
B1 	○	—	—
B2 	—	○	○
B3 	—	—	—
L1 	○	—	—
L2 	○	—	—
L3 	○	—	—
Am1 	—	—	—
Am2 	—	—	—
Am3 	—	—	—
Am4 	○	—	—
Am5 	—	—	○
Am6 	—	—	—

トのうち何種類を副葬品として所有しているのかを見てみると、セネブティシが12種類と最も多く、中にはヘッドバンドや伝統的な王の衣装など王位の象徴に由来する物が多く含まれるということが分かる。続いてウアフの5種類、そして名前不明の女性が3種類と最も少なかった。この結果から、今回扱った被葬者の中では、セネブティシが最も副葬すべき物についての知識を所有している社会集団に属していたと考えられ、対してウアフと名前不明の女性は「規範」をそれほどには知らなかったか、あるいは知っているもそれを実際の副葬品にあまり反映させることが出来ない社会集団に属していたのだと推測する。しかし、ウアフは埋葬のされ方やマスクを着けていたことから比較的社会的階層は高く、さらにセネブティシと同じくP1と「オブジェクト・フリーズ」において重要視されたと思われるC1を所持しているため、セネブティシほどではないとしても儀式や副葬すべき物についての知識を相当有していた人々によって埋葬されたと考えられる。したがって、ウアフと名前不明の女性の間にも明確な差があったと思われる。つまり、セネブティシ、ウアフ、名前不明の女性という順でより多くの知識を所有し、且つそれを実際の埋葬に反映できる社会集団に属していたと考えられるのである。ただし、名前不明の女性がAm5を所持していることを考慮すると、彼女が属していた社会集団が「規範」についての知識をほとんど所有していなかったということではなかったようである。また、ウィレムズの言うタイプ2の「オブジェクト・フリーズ」からは、タイプ1と比べて襟飾りやブレスレットの数が大幅に減少したということであったが、タイプ2が主流であった時代に埋葬されたセネブティシは両方とも所持しており、表2を見ると特に襟飾りは3種類も所有していることが分かる。つまりこれは、一度「規範」として示されると、その物は時代によって「オブジェクト・フリーズ」に描かれる頻度に差が出たとしても、変わらず重要視され続けるということを示唆している。

次にそれぞれの出土数を示した図11を見てみると、「規範」に挙げられている装身具およびアミュレットのうち、セネブティシは多くの種類を少数ずつ所持している一方で、ウアフは網羅している種類は少ないものの、特定の物を集中的に多く所持しているということが分かる。この結果より、セネブティシは「規範」の遵守において、より多くの種類を副葬品として取り入れることを重視していたのに対して、ウアフは種類よりも量に重点を置いていたと考えられる。特にウアフはブレスレットおよびアンクレットの数が非常に多く、襟飾りを重要視していたと思われるセネブティシとは異なる様子がうかがえる。名前不明の女性においてもウアフのような状況が見て取れ、やはりブレスレットおよびアンクレットが多く出土している。以上か

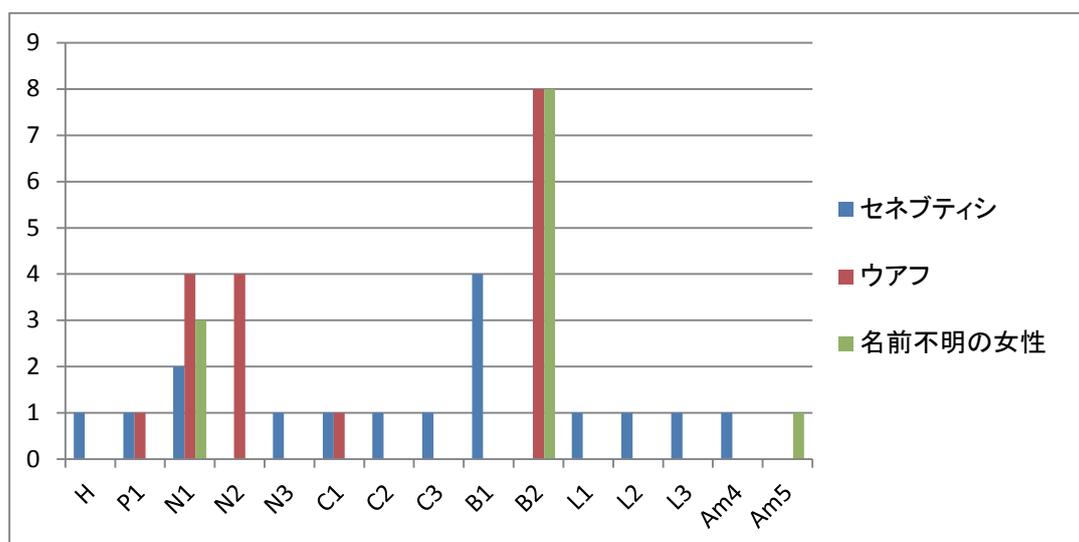


図11 「規範」通りの装身具およびアミュレットにおけるそれぞれの出土数

Fig.11 Number of the ornaments and amulets keeping the "norm"

ら、被葬者によって「規範」の遵守において価値を置く点が異なっていたということが分かる。クーニー (Cooney, K.M.) は、ラメセス朝時代の木棺には被葬者の経済状況によって重視した部分が異なっていることが表れており、経済状況や受けてきた教育など個人の境遇が埋葬には強く反映されるのだと述べている (Cooney 2007: 287)。したがって本稿の場合も、3人の被葬者がどのように副葬品における「規範」を遵守していたかには、彼らの経済状況をはじめ個人の身の上が大きく影響したと考える。

しかし、より多くの種類を副葬品として取り入れようとしたであろうセネブティシにおいても、「オブジェクト・フリーズ」に示された装身具およびアミュレット全てを実際に所有している訳ではない。上述した通り、「規範」の中にも特に重要視された物があり、それらにはセネブティシとウアフ両者が所有していたP1と襟飾り、そしてどの被葬者も所有しており、複数個出土することもあるネックレスとプレスレット、アンクレットが挙げられる。そしてこれは、首に着ける物や襟飾りの種類が多く、プレスレットあるいはアンクレットが除かれることは稀であるというその物の重要性を示唆する「オブジェクト・フリーズ」の特徴に当てはまる。セネブティシの場合は、これら主要な物を網羅した上で、さらに「規範」に沿って王位の象徴に由来する装身具およびアミュレットを副葬品として取り入れているのである。

3基の墓から出土した装身具およびアミュレットは、以上のような「規範」に挙げられている物が大半であった。しかし、少数ではあるものの「規範」に沿っていない物も出土している。最後にこれらの装身具およびアミュレットについて述べることにする。まず、セネブティシの墓からは98個もの小さな花の形をした金製の髪飾りが頭近くの樹脂から出土している (Mace and Winlock 1916: 59)。さらに多彩色のビーズで構成されたベルトも出土しており、これは実際に日常で身に着けていた物であると指摘されている (Mace and Winlock 1916: 70)。一方、「規範」に合致して出土したセネブティシの襟飾りやプレスレットは明らかに実用的ではない<sup>12)</sup>。すなわち、襟飾りやプレスレットは「オブジェクト・フリーズ」に示された「規範」を意識し、副葬を目的として製作されたのに対して、「規範」に合致しない装身具およびアミュレットは、日常で愛用していた物をそのまま副葬品に利用したと推測できるのである。また、名前不明の女性の墓からは貝製ビーズで作られたベルトが出土しているが、貝のベルトは特に女性を護るものと信じられていた (Grajetzki 2014: 127)。以上のような装身具およびアミュレットは、被葬者のジェンダーを反映しており、主にアイデンティティを示す役割を担っていたと考えられる。ウアフの墓からは、スカラベの指輪以外は「規範」に当てはまらない装身具およびアミュレットは出土しておらず、これは被葬者が男性であることに起因すると思われる。以上より、「規範」に合致しない物の方が、装身具が持つアイデンティティの主張という意味を強く帯びているとすることができる。

## 5. おわりに

本稿において分析対象とした3人の被葬者は、埋葬方法や副葬品の量および質から考えて、セネブティシ、ウアフ、名前不明の女性の順で属していた社会階層が高かったと想定される。そのような社会階層の違いを踏まえた上で、中王国時代の「オブジェクト・フリーズ」を副葬品における「規範」と捉え、そこに描かれた装身具およびアミュレットと実際の出土遺物とを比較したところ、「規範」は被葬者によって遵守の志向が異なるということが分かった。今回の分析では、「規範」に挙げられている物のうちより多くの種類を実際の副葬品に取り入れようとするセネブティシに見られる志向と、種類ではなくある特定の物を集中的に多く取り入れようとするウアフおよび名前不明の女性に見られる志向が確認された。さらに、前者は襟飾りに、後者は特にプレスレットおよびアンクレットに比重を置いていたようである。以上の分析結果より、社会階層が比較的低い被葬者であっても「規範」の範囲から副葬品が選択され、そして様々な種類の物を所有でき

ない代わりに同じ物を複数個所有するという「取捨選択」が行われていることが分かった。

しかし、本稿では地域差・時代差をほとんど考慮していないという点や、分析対象が非常に少ないという点が特に問題点として挙げられる。したがって今後は、データの集成および分析をより詳細におこない、本稿に欠落している地域差・時代差も含めて考察していくつもりである。

## 謝辞

本研究ノートを作成するにあたり、指導教授である早稲田大学文学学術院近藤二郎先生に感謝いたします。早稲田大学エジプト学研究所の馬場匡浩氏には、着想の段階から丁寧かつ熱心なご指導を賜り、また同研究所の矢澤健氏には、多数の有益なご指摘を頂きました。心より感謝いたします。

## 註

- 1) 古代エジプトにおける装身具とアミュレットを明確に区別することは非常に難しい。なぜなら、装身具のほとんどは、身体を飾る役割の他にアミュレットとしての役割も持っていたからである (Hayes 1953; Pinch 1994; Aldred 1971; Andrews 1990)。たとえば、王朝時代を通して身に着けられた襟飾り (collar) は、死者を護るアミュレットとしての役割を担っていたことが指摘されている (Petrie 1914; Aldred 1971)。逆に、アミュレットとしての意味を強く帯びたスカラベやウジャトの眼は、時に指輪やブレスレットの一部となり、装身具としての側面を持つのである。そこで本稿では、あえて両者を特に区別はせず、装身具およびアミュレットと称することで、それら全般を指すこととする。
- 2) 本章において特に出典が明記されていない文章の内容は全て Willems 1988 に依拠する。
- 3) 古王国時代末より、被葬者は棺の中に左脇を下にして、頭位方向が北、そして体の正面は東側 (つまり棺の側面) を向くように入れられた (Snape 2011: 140-141)。中王国時代においてもこの埋葬姿勢がとられたため、「オブジェクト・フリーズが胸側に無い」とは棺の内側において、被葬者の体の正面が向いている側面に「オブジェクト・フリーズ」が見られないという意味である。
- 4) 女性よりも男性の被葬者の木棺に「オブジェクト・フリーズ」は描かれることが多かったようである (Willems 1988)。
- 5) 葬祭文書によって来世で復活できるのであれば、中王国時代において「コフィンテキスト」を所有していない王には来世への道が開かれていないことになってしまう (Hays 2011)。
- 6) P1, P2, N1, N2 はしばしばブレスレットあるいはアンクレットとして描かれることがある。しかし大半は首に着けるものとして描かれる。P4, P5, B3, は「コフィンテキスト」において言及があり、P4 と B3 は材質・置く位置、P5 は置く位置が指示されている。また、襟飾りと B1 あるいは B2 も「コフィンテキスト」で言及されている可能性がある (Willems 1988; Faulkner 1973, 1977, 1978)。伝統的な王の衣装とは、パッチの言う “Lower Egyptian” costume を指す。表中の「アミュレット」とは、ペンダントやネックレスなどの形状で出土することはあるものの、中王国時代の葬祭に関する文書においては特に首や腕などに着けることが示されていないものである。Am4 は足の下に置くことが指示されているが、アンクレットとは異なるためアミュレットに分類した。
- 7) 襟飾りの両端に付き、ビーズの束をまとめる役割を果たす。半円形やハヤブサの頭の形をしたものが一般的である。
- 8) MMA 11.150.15, 12.183.25, 25.3.252, 22.1.271, 34.1.118, 34.1.158, Freed et al. 2009, fig.22 など。
- 9) MMA 64.271, EA 64843, 3128 など。
- 10) その物を所有している場合は「○」、所有していない場合は「—」で示した。
- 11) 表2においてどの被葬者も所持していなかった物に関してはこの図には含めなかった。N1 と N2 は、ブレスレットあるいはアンクレットとして「オブジェクト・フリーズ」に描かれる場合がある。本図においては、ウアフの N2 のうち3つはブレスレットの形態をしている。また、B2 には B1 のように何重ものビーズの連なりで構成されたものと、1連のみで構成されたものがある。ウアフの8つはどれも3重なのに対して名前不明女性の8つは全て1連のものである。
- 12) 襟飾りは材質が脆すぎ重りが無い点、ブレスレットとアンクレットは小さすぎる点で実用的でない。

## 参考文献

- Aldred, C.  
1971 *Jewels of the Pharaohs*, London.
- Andrews, C.  
1984 *Egyptian Mummies*, London.  
1990 *Ancient Egyptian Jewellery*, London.  
1994 *Amulets of Ancient Egypt*, London.
- Cooney, K.M.  
2007 “The Functional Materialism of Death: a Case Study of Funerary Material in the Ramesside Period”, in M. Fitzenreiter (ed.), *Das Heilige und die Ware*, IBAES VII, London, pp.273-299.
- Eaton, E.S.  
1941 “A Group of Middle Kingdom Jewellery”, *Bulletin of the Museum of Fine Arts* 39, no.236, pp.94-98.
- Faulkner, R.O.  
1973 *The Ancient Egyptian Coffin Text: Volume I Spells 1-354*, Warminster.  
1977 *The Ancient Egyptian Coffin Text: Volume II Spells 355-787*, Warminster.  
1978 *The Ancient Egyptian Coffin Text: Volume III Spells 788-1185 and Index*, Warminster.  
2010 *The Ancient Egyptian Book of the Dead*, rev.ed., London.
- Freed, R.E., L.M. Berman, D.M. Doxey and N.S. Picardo.  
2009 *The Secret of Tomb 10A Egypt 2000BC*, Boston.
- Garstang, J.  
1902 *El-Arabah, a Cemetery of the Middle Kingdom: Survey of the Old Kingdom Temenos: Graffiti from the Temple of Sety*, London.
- Grajetzki, W.  
2006 *The Middle Kingdom of Ancient Egypt*, London.  
2014 *Tomb Treasures of the Middle Kingdom: The Archaeology of Female Burials*, Philadelphia.
- Hayes, W.C.  
1953 *The Scepter of Egypt I: From the Earliest Times to the End of the Middle Kingdom*, New York.
- Hays, H.M.  
2011 “The Death of the Democratisation of the Afterlife”, in Strudwick, N. and H. Strudwick (eds.), *Old Kingdom, New Perspectives: Egyptian Art and Archaeology 2750-2150 BC*, Oxford, pp.115-130.
- Jéquier, G.  
1921 *Les Frises d'objets des sarcophages du Moyen-Empire*, Cairo.
- Lacau, P.  
1904 *Sarcophages antérieurs au Nouvel Empire vol.I*, Cairo.  
1906 *Sarcophages antérieurs au Nouvel Empire vol.II*, Cairo.
- Mace, A.C. and H.E. Winlock  
1916 *The Tomb of Senebtisi at Lisht*, New York.
- Patch, D.C.  
1995 “A “Lower Egyptian” Costume: Its Origin, Development, and Meaning”, *Journal of the American Research Center in Egypt* 32, pp.93-116.
- Petrie, W.M.F.  
1914 *Amulets*, London.
- Pinch, G.  
1994 *Magic in Ancient Egypt*, London.
- Roehrig, C.  
2003 “The Middle Kingdom Tomb of Wah at Thebes”, in Strudwick, N. and J.H.Taylor (eds.), *The Theban Necropolis: Past, Present and Future*, London, pp.11-13.
- Snape, S.  
2011 *Ancient Egyptian tombs: the Culture of Life and Death*, Oxford.
- Willems, H.  
1988 *Chest of Life: A Study of the Typology and Conceptual Development of Middle Kingdom Standard Class Coffins*, Leiden.
- 杉並希子  
2005 「イドットのマスタバ墓埋葬室の供物リストについて」『オリエント』第48巻第1号、日本オリエント学会 pp.88-116.

# 争乱の中の大エジプト博物館建設と 文化財保存修復をめぐる国際協力

高木 規矩郎\*

## 1. はじめに

チュニジアをはじめとして中東各地に広がった一連の民主化運動「アラブの春」は、エジプトでも2人の大統領が退陣に追い込まれる政治変動になった。とくに2013年夏に始まったモスLEM同胞団がらみの争乱は政治テロの様相を帯び、独立行政法人国際協力機構 JICA が中心になって進めてきた大エジプト博物館 GEM 建設、付属の保存修復センター GEM-CC の人材育成事業など日本が全面的にかかわった古代エジプト文化財行政にも影響を与えている。2010年春発行のエジプト学会紀要「エジプトの考古学博物館構想に見る JICA 文化財政策」に続いて、研修を軸に本格化していた GEM-CC に対する技術移転活動の実態と争乱下での GEM 本体の工事の見通しを報告する。

## 2. 国際協力機構 JICA プロジェクトの展開

### (1) GEM (大エジプト博物館) プロジェクトと JICA の支援

グローバル化に伴って世界各地で観光の機会が増えており、歴史的な遺跡のみならず博物館の文化遺産も観光資源として重要視されてきた。1902年に開館したエジプト考古学博物館は、100年以上にわたってファラオ時代の文化遺産を収蔵し展示してきた。しかしその施設・設備はすでに老朽化が進み、館内は長期にわたる収集活動による収集品であふれている。エジプトではツタンカーメン・コレクションをはじめ貴重な文化遺産を展示する新たな施設を建設することが強く望まれてきた。エジプト政府は3大ピラミッドに近いギザ台地に大エジプト博物館 Grand Egyptian Museum (GEM) 建設を計画した。

エジプト政府考古省は建設に先だって、GEM 開設の準備に当たる大エジプト博物館保存修復センター Grand Egyptian Museum Conservation Center (GEM-CC) の建設を進めてきた。GEM の展示品の多くは保存修復が欠かせず、安全かつ安定した環境での収蔵管理が求められていたからである。床面積 3400 m<sup>2</sup> で最新かつ豊富な設備を整えた GEM-CC は、2010年6月に正式に開設された。ツタンカーメン・コレクションの一部を含む 10,000 点を越す文化遺産がカイロ市内の考古学博物館 Museum of Egyptian Archaeology や各地の収蔵施設から移送され、一部は修復が進んでいる。これらは収蔵庫で管理され、GEM 本体の完成に備えている。

### (2) GEM-CC (大エジプト博物館保存修復センター) の活動と JICA

JICA は博物館建設の総事業費のうち 348 億円を有償資金協力 (円借款) として援助する一方で、2008 年

---

\* サイバー大学客員教授

6月からGEM-CCスタッフの人材育成と技術協力を目的とするGEM-CCプロジェクトを立ち上げ、資金、技術両面でこの大事業を支えてきた。GEM工事現場はギザのピラミッドの近くでカイロ市内から離れているということもあって、争乱の影響はほとんどなく状況は落ち着いている。工事も今のところは中断されることなく、引き続き情勢を見ながら慎重に進められてきた。

JICAはプロジェクトのマネージメントのための契約を2010年1月20日にアメリカのピグ社とエジプトのエハフ社とのジョイントベンチャーの形で締結した。工事はエジプトのオラスコム社とベルギーのベシックス社とのジョイントベンチャーとして2012年3月5日着工し、順調に進めば2015年秋の完成予定だった。GEMの工事そのものは「まだ土台の方を掘っているという状況で、全体の7%ぐらいの進捗状況」とJICAではいつている。一方GEM-CCプロジェクトの方は、5年間で60回にわたる研修を軸に実績をあげてきたが、日本人講師の派遣がストップするなどエジプトの争乱は予期せぬ障害として立ちはだかっていた。今回の紀要ではJICAの基本構想に加え、GEM-CCで保存修復の研修に当たる東京文化財研究所（以下、東文研）客員研究員の松田泰典教授の体験に基づくGEM-CCの現状である。

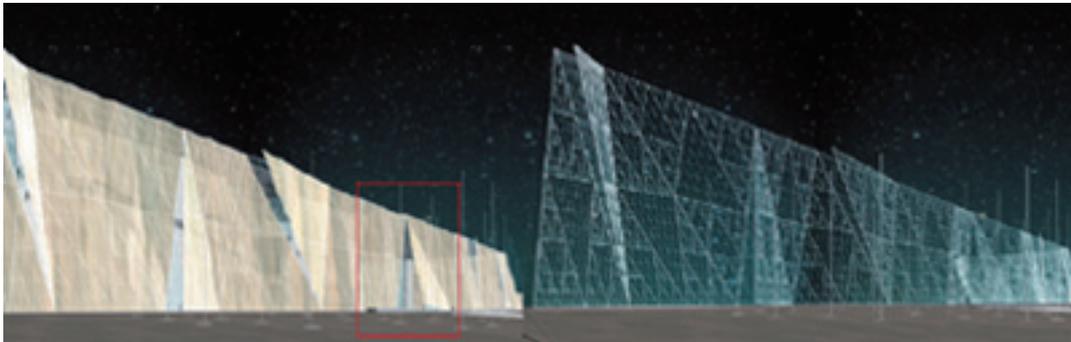


図1 GEMとGEM-CC完成予定図(JICA提供)

### (3) GEM - CCプロジェクト「フェーズI」

JICAはGEM本体の建設と合わせて、人材育成と技術協力を目的として2008年にGEM-CCプロジェクトを開始した。まず2010年6月にGEM-CCの施設や人材が整うまでの準備期間として「フェーズI」の期間が設定され、実施可能な分野から技術研修を開始し、保存修復にかかる人材育成計画の作成に当たった。GEMに収蔵予定の文化財の受け入れに当たって、対象の遺物はどのようなものか、いつの時代のものなのか、どこで見つかったのか、どのように発掘されたのか、発掘のときの状態はどうだったのか、どのような修復を加えてどこに保管されているのか、シリアル・ナンバーはどれか、など確認しなければならないことが数多くあった。文化財の「戸籍」をひとつひとつ作り、写真撮影も合わせて「ドキュメンテーション」に緊急に取り組む必要があった。

明らかにされた履歴はすべてデータベースに入力する。非常に地味な作業ではあるが、文化財が略奪され盗品マーケットに出回った時などに、どこの博物館にあったものかなどについてデータで確認できれば、戻ってくる可能性が高くなる。略奪阻止にもつながるはずである。ところがエジプトには博物館ごとの統一したデータベースがきちんと整備されていなかった。記録を残しているのかも怪しく、付き合わせていくとあるはずのものがなかったりすることも少なくなかった。一部には盗品が国外に流れていって、盗賊の資金につながっていた。

プロジェクトでは2008年にエジプト考古学を学んだ若いエジプト人スタッフを訓練し、全土に広がる遺

跡での遺物測定などを通して画像を作成したり、調査に基づく考古学データを収集し、集積する考古遺物データベース部 Archeological Database Department (ADD) を設立した。

文化財の正確なデータベースは、膨大なコレクションを有する博物館には欠かせないものであり、優れた展示デザインや遺物の移送、収蔵品管理は、一つ一つの文化財に関する正確な情報に支えられて初めて実現する。データベース作成に乗り出した当初は、誤った情報の入力やデータの重複といったミスもあいついだ。

エジプト人考古学者、日本人 IT 専門家・考古学専門家、青年海外協力隊ボランティアが ADD チームとして活動した。まずチームが効率的に仕事を進められるように、作業手順やマニュアルを作成し、作業基準に基づいて登録番号を確認し間違っているところは訂正を加える。遺物の大きさや重さを量り、最後に写真撮影を行って収集データをデータベースに正確に入力していった。ADD が構築したデータベースの情報は GEM の展示計画や文化財の GEM-CC への移送、梱包作業などでさっそく威力を発揮した。ADD は 2012 年に GEM の 1 部門として JICA から GEM にハンドオーバーされた。

ADD については作業がスタートした 2008 年当時は、GEM-CC の開設前でプロジェクトとして指導すべきエジプト側のカウンターパートがいなかったため、考古学部新卒のエジプト人スタッフ 16 人を JICA が雇用し、日本人 IT 専門家が派遣され指導してきた。日本の枠組みの中、日本式の教え方を通じて、GEM で収蔵される遺物約 25,000 件のデータを作成した。ただ JICA としては、カウンターパート雇用で変則的なことをしてきたという思いもあったのか、早めにリリースした経緯がある。現在彼らは GEM 傘下の企業スタッフとなっている。文化財データベースの整備支援は「フェーズ I」の重要な成果といえる。

#### (4) 技術研修本格化の「フェーズ II」

2010 年 6 月にオープンした GEM-CC は、2015 年 8 月に完工予定の GEM 本体に隣接し、ギザの広大な敷地に建っている。正面から奥に向かって、3 つのエリアに分けられ、入口にあたる管理・搬入エリアにはトラックヤード、開梱室、準備室（コンディション・チェック）、大型貴重品保存修復室、図書室、事務室などが配置されている。建物中央部の保存修復・科学分析エリアには保存修復室 6 か所（石製遺物室、木製遺物室、無機遺物室、有機遺物室、ミイラ室、特別プロジェクト室）と科学分析室 6 か所（走査電子顕微鏡室、透過電子顕微鏡室・光学顕微鏡室、X線分析装置室、フーリエ変換赤外分光分析装置・化学室、微生物室、保存修復材料実験室）からなっている。また奥の収蔵エリアには材質ごとに設けられた 9 か所の収蔵室が並んでいる。

GEM-CC の開設をまって 2011 年 7 月に始まったプロジェクト「フェーズ II」は、人材育成計画に基づく技術研修の本格化を目指すものである。日本側では東文研の文化遺産国際協力センターが JICA と連携協定を結び国内支援業務を行うことになった。JICA は東文研、奈良文化財研究所、九州国立博物館、国立民族学博物館、東京藝術大学の 5 学術機関による国内支援委員会を作って、プロジェクトへの専門的、技術的な助言を受けるとともに東文研は研修講師を務める短期専門家の推薦、派遣、日本での研修会の実施に当たってエジプト人研修員受け入れに協力してきた。

一方エジプトでは JICA プロジェクト・オフィスが現地のカウンターパート、日本人長期専門家（チーフアドバイザー、保存修復計画担当、研修の業務調整担当の 3 人）、短期専門家（保存修復のテクニカル・チーフアドバイザー）とチームを組んで、プロジェクト管理に当たってきた。骨格はエジプト人技術者や学者を対象に行う研修を通しての技術指導・人材育成で、プロジェクトの目標実現に当たって、国内支援委員会を軸とした「オールジャパン体制」で取り組んでいる。

### (5) 技術支援5本の柱

GEM-CCのエジプト人スタッフの多くは保存修復分野ですでに豊富な知識は持っていたが、実践活動は十分なものとはいえず、特定分野に偏っていることも多い現状だった。さらにほとんどの科学者は保存科学についての知識を持っていなかった。当面こうした欠陥を補い改善することが目標となった。

プロジェクトは「フェーズⅡ」の開始にあたり、3項目からなる到達目標を策定した。

- ①国際的に広く受け入れられている保存修復理念に基づく活動原則の重要性を、GEM-CCスタッフとして理解を深める。
- ②GEM-CCの全般的な活動に対する理解のもとで、スタッフは各専門分野における活動について責任と役割を果たすために、必要な考え方、知識、技術を体得する。
- ③専門家の間での交流を通じて、エジプト、日本両国の相互理解を促進する。

そして重点的に技術支援する5本の柱を定めた。

- ①予防保存 Preventive Conservation の原則の導入と実践
- ②保存修復に関する知識および技術の向上
- ③保存科学の導入と実践（環境管理、診断・分析技術、材料科学）
- ④収蔵品の保存管理・取り扱いに関する知識・技術の活用
- ⑤国際的な水準を確保するための情報収集・発信および人材交流

さらに「GEM-CCが自立的に運営され、国際的に認められる水準にある総合的な保存修復・研究機関として十分に機能するようになること」がプロジェクトの最終目標として認知された。

## 3. 松田泰典教授の異文化体験

### (1) 国際協力の内実

古代エジプトの文化遺産を日本の技術を生かして保存修復しようというJICAのプロジェクトに、東文研文化遺産国際協力センター客員研究員の松田教授がチーフアドバイザーとしてかかわっている。東京農工大学で農芸化学、東京藝大大学院で保存科学を専攻、ミキモト真珠研究所を経て1993年から東北芸術工科大学助教授、教授、2001年には文化財保存修復研究センターを設立した。2009年からGEM-CCプロジェクト専門家としてJICAの活動に加わり、技術協力に基づくエジプトでの研修では「総合的害虫(IPM)」、「文化財移送・梱包」、「遺物取り扱い」、「写真撮影」、「収蔵品管理」、「染織品保存修復」、「金属保存修復」、「パピルス保存修復」、「分析・診断技術」、「微生物管理」とテーマはバラエティに富んでいる。

### (2) 予防保存

最近世界的に強く言われているのは、壊れる前に予防しようという予防保存 Preventive Conservation の理念である。エジプトでは全く根付いていなかったのが、研修では重点的に指導していくことになった。たとえば虫に食われないように木材や有機物の保存対策を考える。食われないようにするにはどうしたらいいのか。虫の生息環境の調査が必要になる。虫を殺すにはどうしたらいいのかということも分かってもらわなければいけない。虫だけでなくカビの被害対策、湿度管理の関係、有害な大気汚染物質の問題もある。大エジプト博物館周囲は砂漠なので、砂や汚染物質が入ってこないようにするためのモニタリングも必要であ

る。いわゆる文化財害虫といわれる木を食い荒らすような木くい虫だとか、セーターなど衣類に穴をあける害虫の衣蛾（いが）は日本でもエジプトでもほぼ同じような状況である。日本と同じようにエジプトでも有機物はたくさんあり、木材に虫がついて運び込まれてきた実例もある。よく調べたら木を食った後の粉が出てきて、すでに文化財のどこかが食われているという判断の根拠にもなった。

文化財を適切な方法で梱包して安全に移送するということが予防保存の一つである。カイロ中心部のタハリール広場に面したエジプト考古学博物館からツタンカーメンのコレクションをはじめとして大量の資料が移送され、新しい博物館で展示されることになっている。貴重な資料をどのように梱包し、安全に運ぶかという技術を取得するということが研修テーマの一つで、日本通運㈱が具体的な指導に当たっている。2010年から11,000点ぐらいは移送を終えた。現実問題としては考古学博物館から移送された大量の文化遺産を保存の対象としてきちんと対処していかななくてははいけない。エジプト国内の他の博物館や収蔵所からも移送されてきた資料もある。



図2 すでに国際協力プロジェクトが始まっている GEM-CC (JICA 提供)

### (3) 保存科学

次に大事なものは保存科学の分野である。現在の保存修復は、科学的な情報・技術や経験に基づいてかなり行われている。とくに修復の材料とか、環境的な知識（環境科学）といったさまざまな科学的根拠に基づく修復技術や保存管理が世界的に進められている。その分野でもエジプトはまだまだ発展途上にあり、研修で取り上げている。劣化現象や材料学の知識、接着剤など修復のために導入されるさまざまな材料の科学的な評価 evaluation を実験的にやってみるとことも研修テーマとして欠かせない。

GEM-CC がオープンした 2010 年当時は、エジプトにはまだ保存科学が導入されておらず、修復家と科学者の間のコミュニケーションが良くない時期があった。センターには科学者が現在約 25 人在籍している。電子顕微鏡や各種分析機器が入っていて、大学院で科学を学んだ若者たちがオペレーターとして配置された。文化財についての知識や興味はほとんどなかったため、まず科学者が文化財の知識を持つことが必要になっ

た。修復家はもちろん文化財の知識を持ってカイロ大学等で勉強してきた。その風通しをもう少しよくしなければいけないという想いが持ち上がった。

松田教授が1980年代はじめに保存修復の勉強を始めたころは、日本もやはりエジプトと同じ状況だった。日本では、1933年に設立された古美術保存協議会を母体とする古文化財科学研究会が文化財保存修復学会 Japan Society for the Conservation of Cultural Property となり保存修復界を牽引してきており、学会の中で情報共有などいろいろな協力態勢を構築することができた。専門の大学では、学生に保存科学と保存修復の両方を教えるということを経験してきた。東京藝大文化財保存学専攻でも保存科学を教えているし、両方の知識を持った人材養成を実践している。最近の日本の若者の中にはこのような知識を持った専門家が育ってきている。日本でも苦労した経験があるので、エジプトでも早い段階でこうした環境を整える必要があるとの考えが定着してきた。

エジプトで行っている GEM-CC の研修では科学者と修復家が一緒に受けられるようになっており、いつもお互いが理解しあえるような状況作りを志向している。お互いに壁を設けていたような状況は大きく改善されてきた。松田教授は「コミュニケーションもとれるようになったし、お互いにどこが分からないところなのかということが少しずつ認識されるようになってきた。科学者も自分たちには分からないなりに文化財と接していく上で、必要とされることが何なのかということが少しずつ分かり始めている」といっている。

#### (4) 保存修復

古代エジプトの文化遺産には木材、金属もあれば、金属もあるが多くは石である。展示されるのも石が多いが、ガラスもあればファイヤンスと呼ばれる焼き物や土器もある。さまざまな材質でできているので、それぞれの材質に特化したような研修を行わなくてはならない。ミイラも研修テーマにある。ミイラへの介入的修復に関しては日本人には経験がない。ミイラの保存には環境管理が重要であるため、予防保存の観点で研修を進めることになった。ミイラの場合はカビを発生させないとか、腐敗させないとかということが根本的に大事なので、展示ケースとか収蔵ケースの環境をよくするというを主眼に研修を組んでいて、アメリカ



図3 GEM-CCでの松田教授の講義風景  
(本人提供)



図4 データベース作成作業中のGEM-CCスタッフ  
(腕にはエジプトと日本の国旗)(JICA提供)

カのゲッティ保存研究所の日本人研究員に講師としてエジプトに来てもらうことになった。修復作業は素材にかかわらず劣化状態の観察・記録の過程、汚れを除去するクリーニングの過程、弱った個所の補強や欠損部を処置する過程、展示・収蔵の準備過程の順に進められる。ただ細かいところは素材によって異なるので、素材別の研修が必要である。

#### (5) GEM 発信

GEM-CC は 2014 年 5 月に 3 回目の独自のシンポジウムを予定している。GEM-CC の 1 年間の成果を自分たちで企画して情報発信しようというもので、外部の専門家も入って、いろいろアドバイスするような環境作りを心掛けている。JICA は財政的な支援をしているが、企画は全部エジプト人にまかせている。松田教授をはじめ日本側も一緒にチームとして全面的にサポートする態勢を組む。海外での研修もあり、学会での発表事例も出始めている。ユネスコ（パリ）の組織である国際博物館会議保存委員会 ICOM-CC という世界最大の保存修復専門家集団が、2014 年 9 月にメルボルンで大会を行うが、そこで JICA 側は GEM-CC の支援活動について発表することになっている。GEM-CC のスタッフによる保存修復の研究発表も予定されている。いろいろな方面で研究成果を理解してもらおうということで、初めての国際的な保存修復の専門学会での体験となる。2013 年には奈良での金属関係の国際学会があり、エジプト人スタッフも参加して発表する機会があった。学会で成果を発表したり、できれば日本で学位を取らせたいという夢も広がりつつある。

多くの研修を通して見えてきたのは、研修をやったあといかにして継続的にフォローアップするかということである。人材育成にとって欠かせないことである。研修を行ったということだけでは、能力向上にはつながらない。研修のあと、研修生と日本に帰国した講師とがいつもコミュニケーションをスムーズにとれるように態勢を組み直した。直接研修生と講師の間でやり取りをしてもらったり、講師からのアドバイスを受けて率先して自分たちでやれることはやってもらっている。フォローアップのトレーニングコースは、JICA 主導で行われており 2013 年春から本格的に始まった。「このまま放っておくと流れて行ってしまっただけなので、もっとここに水をためて、きちんと動かすようなことをしてもらわなくてはいけない」と松田教授も力説する。GEM-CC をエジプトのみならず周辺地域の中心的な保存修復の研究機関にしたいという思いもある。JICA をはじめ関係者はエジプト人が指導的な立場になって、北アフリカ諸国や中東世界での保存修復の中核としての実践的な存在になる光景を思い描いている。

### 4. 地域センターとペトラ博物館

#### (1) JICA 文化遺産へのアプローチ

JICA 経済基盤開発部平和構築・都市・地域開発グループの林宏之課長が 2012 年 10 月に文化遺産国際コンソーシアムの分科会で行った講演「ペトラ博物館整備計画における JICA の取り組み」で、ヨルダンの世界遺産ペトラ遺跡における博物館建設構想がはじめて明らかにされた。まず文化遺産に対する取り組みの基本理念を明らかにした。2008 年 10 月、政府開発援助 ODA の実施ツールを新 JICA に集約化した。技術協力を通して開発途上国の人材育成、制度構築のために専門家を派遣して、必要な

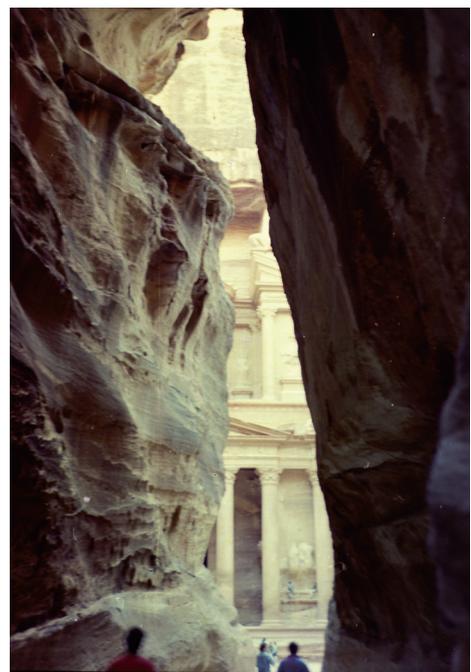


図5 断崖の先に突然開けたペトラ遺跡  
(1990.03 高木治恵撮影)

機材を供与し研修などによって人材育成を図る。ウガンダへの農業支援などが1例である。

供与対象の国が一定以上の所得水準を達成している場合は、有償資金協力（円借款）が活用される。長期返済、低金利という緩やかな条件で、開発資金（円貸）を貸しつけるもので、多くの資金を要する大規模インフラなどにあてられる。トルコの第2ボスポラス橋などがある。そして外交政策の必要から外務省が自ら実施するものを除く無償資金協力は、所得水準が低い開発途上国を対象に開発資金を供与するものである。学校、病院、井戸、道路などの基礎インフラの整備や医薬品、機材などの調達にあてられる。イエメンの小中学校校舎建設などの例がある。いずれも JICA が2国間援助として ODA の運用にあたる。これに対し多国間援助の場合は直接にはかかわらず、ODA は関連する国際機関に拠出される。

JICA は「すべての人々が恩恵を受けるダイナミックな開発」Inclusive & Dynamic Development をビジョンに掲げ、(戦略1) 包括的な支援、(戦略2) 連続的な支援、(戦略3) 開発パートナーシップの推進、(戦略4) 研究機能と対外発信の強化という4つの構想のもとに実現を目指す。そして文化遺産へのアプローチでは、文化遺産を核にした持続可能な地域開発を目標とした。

JICA イラク事務所次長としてバグダッドに転勤した林課長は、メールで2012年の講演で使用したシートを参照しながら、ペトラ博物館建設の理念に触れた。

「JICA が文化遺産保全を協力対象とする場合の前提として社会経済開発とのリンクがなければ難しい。すなわち単に文化遺産保護・保全を目的としたプロジェクトをいくら相手国政府から JICA に上げてもらっても、ODA の目的のひとつである社会経済開発に資するものでないと駄目なので、その点を留意してほしいという観点で説明した。また文化遺産関係の案件の多くは、観光開発と親和性があることが多いのだが、そうした観点からのプロジェクトは必ずしも文化財関係の先生方の思惑と合致しない場合もある（＝遺産保全への直接的支援）ので、この点の理解も得る必要があるということから、このシートで説明させていただいた」

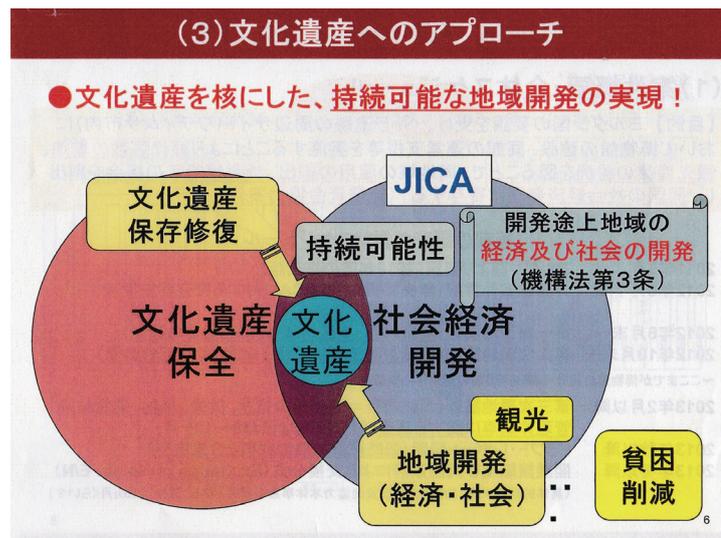


図6 JICA の文化遺産へのアプローチ（シート）

## (2) 地域センターとしての GEM-CC の目標

JICA の支援で2012年秋、シンガポール国立遺産センター National Heritage Center で行われた国外視察研修とカイロでの関連のワークショップを通して、GEM-CC 戦略管理計画 Strategic Management Plan が打ち立てられた。そこでは「保存修復および資料管理における地域の中心的センターとなる」とした GEM-CC のビジョンが明確にされ、同時に以下の7本の柱からなる活動目標が示された。

- ① 収蔵資料のドキュメンテーション、保存修復を進め、GEM での展示に備える。
- ② 保存修復、博物館学、エジプト学、考古学、有形文化遺産のための国際的な教育、訓練、研究機関となる。

- ③保存修復、資料管理分野における最高度に訓練されたスタッフを育てる。
- ④エジプトの有形文化遺産と考古省のプロジェクトへの技術支援を提供する。
- ⑤同じような目的を持つ国際的なセンターや機関と協力したプロジェクトを推進する。
- ⑥エジプトや国際機関のための有形文化遺産に関する支援を提供する。
- ⑦エジプト国民および国際的なコミュニティにプロジェクトと任務を伝えるための革新的な取り組みを弛むことなく追及する。

### (3) ペトラ博物館整備計画と JICA の取り組み

インディー・ジョーンズの映画で知られるヨルダンのペトラ遺跡は、岩窟を利用した宝物殿（エル・カズネ）や大神殿跡などからなる古代ナバテア人の首都だったが、ローマの属州となった。そのペトラで日本の無償資金協力による博物館建設計画が進んでいる。JICA のエジプトでの体験を生かし、ヨルダンの要請で観光客の増加、観光産業の振興を図り、雇用の創出、外貨獲得につながる社会経済基盤の発展に寄与しようというものである。JICA は 2011 年 8 月にヨルダン側からの要請を受け、2012 年 8 月から 3 次にわたる現地調査を実施、概略設計に当たった。世界からの観光客が訪れるペトラの中核として日本とヨルダンの友好のシンボルにしようとしており、下手なものは作れないとの思いもあった。

ただペトラ遺跡群の圧倒的な存在に対して展示可能な遺物が不足しているという現実があり、誰を対象にして何を見せるか、どうやってインパクトを出すのかといった問題があった。そこで GEM の体験を踏まえて、ペトラでも東文研の支援を求めることになった。2013 年秋には博物館の設計や積算を行う調査の前段階となるさまざまな前提条件への対応について協力あおいだ。世界遺産ペトラの近くに建てる博物館なので、イコモス執行委員だった岡田保良・国士館大教授の協力を仰いだ。JICA は博物館建設推進に当たって、ユネスコにつながりがある関係者の知恵を借りたり、東文研のネットワークで日本の考古学関係者を紹介してもらって直接協力するなどオールジャパン態勢での対応を構築してきた。

着工するのは 2014 年秋ぐらいになる予定で工期は 15 ヶ月を見込んでいる。GEM-CC のように技術協力を並行させて、博物館の開館に向けた支援を行うことも計画の中核となっている。計画が動き出す 1 年前から考古学関係者とどうしたらいいのか話を進めてきた。「世界遺産のペトラに博物館を建設するにあたっては、オールジャパンでできることをやっていくべきだとの発想で、東文研の協力を仰いで、案件の初期段階から援助関係者と文化遺産関係者が一緒にやってきた。このこと自体が前例のないことなので、試行錯誤しつつ取り組んでいく」と JICA の林課長は、ペトラ計画の現状を語っていた。

## 5. 争乱とギザの荒廃

### (1) 争乱の波紋

GEM の工事が進み、人材育成が進む GEM-CC のあるカイロ郊外のギザ地区は、3 大ピラミッドやスフィンクスがあるエジプト観光のメッカである。ところが 2011 年のエジプト革命以降、外国人観光客がめっきり減り、カイロをはじめとして騒乱状態が長期化している現在、観光客が来ないギザに日本の資金援助で大規模な博物館や保存修復センターを作る意味があるのかといった疑問の声もきかれるようになった。

大ピラミッド脇で「第 2 の太陽の船」の調査研究を続けている黒河内宏昌（NPO 法人太陽の船復原研究所）教授は、争乱下のギザの情景を伝えてくれた（2014 年 2 月 8 日）。

「外国人観光客の数は少ないが、エジプト人観光客はけっこう訪れている。とくに学校の春休み期間中なので、昼頃ともなればたくさんの家族連れ、若者たち、ちびっ子たちがやってきて、結構にぎやかになる。

日本人観光客は情勢が落ち着き始めていると見てか、最近は個人観光客ではあるが、ちらほら見かけるようになった。争乱の影響は何らかの形ではあるのだろうが、たとえば何かが壊されたり、盗まれたりといったことは、今回の“第2革命”に関しては、ギザでは見受けられない」

目の前に混乱が及んでいないこともあってか、GEMの工事も何とか続けられている。しかし2011年1月に起きたエジプト革命の混乱は、ようやく本格化しようとしていたJICAプロジェクトに水を差すことになったことはゆがめられない現実である。2013年11月に大隈大講堂で開かれた早稲田大学エジプト・フォーラム22が、過去21回のフォーラムでは例のない「争乱を乗り越えて」というテーマを設定したこと自体が、発掘調査や保存修復活動におけるエジプトの現状の深刻さを物語っている。

GEM本体の工事が始まる1年前の革命状況下で、当時のムバラク大統領の即時退陣を迫る暴動が起き、カイロの中心にあるタハリール広場に面したエジプト考古学博物館では、展示品約70点が破壊され18点が略奪の被害を受けた。人類の遺産「ツタンカーメンの黄金のマスク」は無事だったが、「黒豹の背に乗るツタンカーメン王立像」(高さ85センチ)は略奪被害後、黒豹の背の部分で真っ二つに折れ、王の左手や黒豹の脚はバラバラの状態で見つかった。文化財受難の状況はさらに広がり、2013年8月にはモルシ前大統領を支持するムスリム同胞団と軍や治安当局との武力衝突が続き、ナイル川中流のマラウィ国立博物館では1000点以上の文化財が略奪被害に遭った。8月なかばには治安当局がカイロ市内の2か所の広場で行われていた座り込みのデモを強制的に排除するとともに、考古庁は治安面から考古学博物館の一時閉鎖に踏み切った。

2014年1月にはカイロ市内の警察本部が爆破されて、その爆発物で道を隔てたイスラム美術博物館Islamic Art Museumに大きな被害が出た。リニューアルされて2年前に開館したばかりで、10世紀から現代



図7 ギザのピラミッドが見えるGEM工事現場 (JICA提供)

までのイスラム美術を集めている。ユネスコは 100,000 ドルの修復費用拠出を決めた。エジプトの騒乱状態が長引き、文化財保存修復の現場にも火の粉が飛んでいる。チーフアドバイザーとして現地で GEM-CC プロジェクトの指揮に当たっていた松田教授自身、2011 年と 2013 年の騒乱で外務省が危険度をあげて退避勧奨を出したため、他の日本人関係者とともに帰国せざるを得なくなり、プロジェクトの一時中断を余儀なくされた。

## (2) GEM-CC 人材育成プログラム工程にも狂い

2007 年 12 月からエジプトと日本で行われてきた研修実績が途切れていることも、争乱の影響を物語っている。2011 年のエジプト革命では約 5 ヶ月近くの中断を余儀なくされた。

松田教授は GEM の将来について不安を隠さない。とくに 2013 年秋の争乱では計画していた研修がすべて延期になってしまった。講師陣の日程調整が難しく、再派遣は翌年になった。本質的には 1 年近くプロジェクトが流れかねない状況だった。「われわれ保存を専門にしている人間からすると、見に来られる人がいて初めて保存というものが意味を持つてくると思う。このままずっとこの状況がつづくわけではない。いずれ回復するだろうし、その時にきちんと保存・展示できるような能力を身につけておいてもらわないといけない。あまり近視眼的には考えてはいなくて、この博物館ができるまでに能力を備えてもらうことが望むところである」と治安回復に期待を寄せる。

総合的にプロジェクトの管理に当たる JICA 関係者も「GEM 本体の工事の遅れは出ていないが、情勢によっては工事が止まってしまうようなこともあり得る。これからどうなるのかについては正直言ってわからない。われわれとしては治安情勢がこれ以上悪くならないように祈るだけだ」と争乱の行方になると言葉を濁らせた。外国人観光客の姿がめっきり減ったギザで GEM 工事の音がむなしく砂漠の空に消えている。エジプトの治安が回復してくれないと、観光客も戻ってこないし、いくら新しい施設を日本が作って、技術指導しても見てもらわなかったら何にもならないのではないか。

2008 年から 5 年かかって研修などを通してエジプト人スタッフもある程度のことは、自分たち対応できるようになった。その過程では日本側の考えと折り合わず、すり合わせができるまでに時間がかかったのも事実である。エジプト人は、知識はあるのだが、手の動かし方を知らないという日本側の評価であった。「そんなこと分かっている」と頭から決めてかかってくることもよくあった。でも手を動かしていないので、実際やろうと思っても何もできない現状であった。こうした現状を実感してから「学び」が始まる。日本人講師の言うことに真剣に耳を傾けるようになった。同じ研修を何回かやっているうちにようやく折り合いがついてきた。でも争乱が起こって日本側が引き揚げてしまうと蓄積されたものが滞ってしまう。当然ながら一旦取得してきた技術の質も下がるわけで、サイの河原で石を積むような状況に直面している。

## 6. 国際協力の本質

### (1) 保存修復は人類の英知

エジプトではリビア、チュニジア、シリアなど周辺諸国も含め、「アラブの春」以降の争乱状況は、一時的に鎮静化しても「百年戦争」のように何回も繰り返されていくのではないかという不安が残る。パレスチナ紛争型の紛争の歴史の繰り返しである。そのたびに略奪が起きたり、現存体制の改革が行われたりする。長期的にエジプトの歴史遺産そのものがどういう方向に行くのか。歴史遺産の保存そのものにもっと力を入れるようになってくるのか、全体的な展望について考えていることはあるのか、中東の革命的な状況が今後どういう方向に行くのかということについては、暗中模索の状態にある。GEM、GEM-CC の現状を追って

強く感じたことである。

ただエジプトの産業を考えると観光に従事する国民は数百万人ともいわれ、観光客がもたらす収益が非常に大きい。エジプト国民がより安定した生活を支えていく上で治安を回復して、観光客が戻ってくるような情勢を取り戻すことは国家の緊急課題である。古代エジプトの豊かな文化遺産は国民生活を維持していく重要な観光資源でもある。ここに博物館をしっかりと守って、歴史的に蓄積されてきたものをきちんと保存していく意味があるはずである。そのために JICA が壮大な支援プログラムを構築し、人材育成のために技術協力を展開することは国際協力パターンである。JICA が長期展望を持ってない不安の中で、日本からの援助で成り立っていることを考慮しながら GEM プロジェクトを追ってみて、その背景にエジプトをはじめ争乱の続く中東世界で、国民生活の安定と国家の正常化に対する強い思いがあることを知らされた。ここには保存修復を通して文化遺産を護るという人類の永遠の英知が活かされている。

## (2) 世界に向かう鎌倉世界遺産登録運動の展開

争乱下でエジプトの文化遺産の現状と未来への継承を考えていくことは、鎌倉の文化遺産保全の意義を考えていく上でも重要な切り口を与えてくれた。私は鎌倉世界遺産登録推進運動に市民の推進協議会の立場で広報活動の一端を担ってきたが、イコモス勧告によって2013年4月末、登録不記載と決まった。紀要でエジプトでの争乱と文化遺産のかかわりを取り上げることによって、鎌倉限定の運動の限界が見えてきた。歴史の古さや残された遺産の壮かさなど古代エジプトと中世鎌倉では同列に考えられないが、いずれも世界遺産という同じ媒体の対象となっている。エジプトでは JICA の支援などで保存修復が国際協力の対象となっているが、鎌倉の遺産の価値が国際的視野で語られたことはない。

日本国民の感性からしても鎌倉はあまりにもローカルな世界遺産候補であった。いつ登録されるのか全く分からないが、世界史における中世鎌倉あるいは「武家の古都」の意味をじっくりと探って登録再挑戦を考



図8 エジプト考古学博物館でのデータベース作成作業 (JICA 提供)

えていくことである。国際社会から中世鎌倉の保存修復についてさまざまなアイデアが寄せられるような時代の変化を見据えて、歴史的存在感を発掘し、15年近い海外特派員の体験を生かしてささやかながら活動を続けていきたいと思っている。

#### 謝辞

紀要作成に当たってはGEM工事にかかわった林宏之（経済基盤開発部平和構築・都市・地域開発第二課長）、星光孝（中東・欧州部主任調査役）両氏の協力とGEM-CC保存修復専門家の東京文化財研究所客員研究員、松田泰典（前・東北芸術工科大学）教授の助言を得た。JICAの林氏は現在イラク事務所次長、星氏はペトラ博物館構想を担うヨルダン事務所に赴任された。また東文研文化遺産国際協力センターの田島さか恵さん、文化遺産国際協力コンソーシアム調査員の原田怜さん、JICA広報室の朽木恵子さんの協力を得た。

## 活動報告

# 2013 年度 早稲田大学エジプト学会活動報告

## 1. 総会

日時：2013 年 4 月 22 日（月）18：30-19：00

会場：エジプト考古学ビル 2 階

## 2. フォーラム、シンポジウム

(1) エジプト・フォーラム 22 『太陽の船プロジェクト再開～エジプトの争乱を乗り越えて～』

日時：2013 年 11 月 10 日（日）15:00-18:00

会場：早稲田大学大隈記念講堂（大講堂）

プログラム：

- ・基調講演「エジプトの社会情勢と早大隊のエジプト調査」

吉村作治（早稲田大学名誉教授・工学博士）

- ・パネルトーク「社会混乱期の文化財の情況」

コーディネーター：吉村作治

パネリスト：前田耕作（和光大学名誉教授）

中川武（早稲田大学教授・工学博士）

近藤二郎（早稲田大学教授）

宮下佐江子（古代オリエント博物館研究員）

黒河内宏昌（太陽の船復原研究所教授）

懇親会会場：大隈会館



吉村先生による基調講演



宮下先生によるシリアの報告

(2) エンターテイメントから見るエジプト文明 第2回『今甦る「ピラミッド再現計画」』

日時：2014 年 3 月 24 日（月）18:30-20:30

会場：早稲田大学小野記念講堂

登壇者： 吉村作治（早稲田大学名誉教授）  
 佐藤孝吉（元日本テレビ取締役専務・エグゼクティブ・プロデューサー）  
 白井裕泰（ものづくり大学教授）  
 高安克明（(株)いまじん、プロデューサー）  
 河合 望（早稲田大学准教授）



素晴らしい司会進行でした



プロの演出に感動しました

### 3. 定期研究会

#### (1) 第17回

日時：2013年4月22日（月）

会場：エジプト考古学ビル2階

発表題目：「アブ・シール南丘陵遺跡イシスネフェルト埋葬墓出土人骨の鑑定」

発表者：馬場悠男（国立科学博物館名誉研究員）

#### (2) 第18回（特別研究会）

日時：2013年6月3日（月）

会場：早稲田大学早稲田キャンパス11号館506教室

発表題目：「ピラミッド時代の王女と高官たち～アブ・シール遺跡の新発見～」

発表者：ミロスラフ・バルタ（チェコ共和国カレル大学教授、  
 同大学エジプト学研究所所長・早稲田大学高等研究所訪問研究者）

#### (3) 第19回

日時：2013年10月21日（月）

会場：エジプト考古学ビル2階

発表題目：「土器づくりからみたさまざまなアジア：エジプト、台湾、バングラデシュ、インドネシア」

発表者：齋藤正憲（早稲田大学本庄高等学院教諭）

#### (4) 第20回

日時：2013年12月9日（月）

会場：エジプト考古学ビル2階

発表題目：「先王朝時代のものづくり～石器の複製・使用実験を中心に～」

発表者：長屋憲慶（早稲田大学文化構想学部助手）

#### 4. 定期研究会発表要旨

##### (1) 「アブ・シール南丘陵遺跡イシスネフェルト埋葬墓出土人骨の鑑定」

馬場悠男

ラメセス2世の孫娘と考えられるイシスネフェルトの埋葬墓から出土した4体の人骨を整理・鑑定した。1号人骨はヨーロッパ系の小児である。胸椎が楔状に変形しており、ショイエルマン病の可能性が高い。2号人骨はヨーロッパ系の大柄な中年女性である。顔は細長い顎は頑丈で、歯の咬毛が進んでいる。骨盤は出産経験があることを示す。右脛骨に骨髄炎の所見が認められる。1号と2号では、顔の形態が酷似し、上顎切歯が大きいことのみがアジア系の特徴に一致する。鼻腔上面は破壊され、脳出しが行われたことを示している。また、同じように眉と髪を描いたような形跡がある。

3号人骨は、保存は悪いが、大柄な若いアフリカ系の女性と判断された。4号人骨は、極めて大柄なヨーロッパ系の若い男性と同定された。骨盤に骨髄炎の所見が認められる。4体のうちで、3号のアフリカ系女性と4号のヨーロッパ系男性は、イシスネフェルトとは考えられない。1号と2号は多くの特徴が酷似し、母子である可能性が極めて高い。もし、1号がイシスネフェルトなら、2号はその母親であってラメセス2世の息子の妻となるので、埋葬墓にはイシスネフェルトではなく彼女の名前が付いたであろう。従って、2号がイシスネフェルトであると考えると全てが整合する。

##### (2) 「ピラミッド時代の王女と高官たち～アブ・シール遺跡の新発見～」

ミロスラフ・バルタ

チェコ共和国エジプト学研究所は1991年以来アブ・シール南遺跡で調査を継続し、紀元前3千年紀の多くの墓を発見してきた。特に近年発見された古王国時代第5王朝の墓地は、極めて重要な高官や王族の墓を含んでいる。特に規模が大きい墓は、ネフェル（あるいはネフェルシェプス）の大型マスタバ墓で、それよりやや時代が新しいドゥアプタハ、シェプスプタハ、イティ、ネフェルの岩窟墓がある。さらに、前庭部に列柱空間を持つシェレトネプティ王女とネフェルインプウの岩窟墓がこれらの墓と隣接する。墓地は第5王朝のニウセルラー王の治世に年代づけられ、葬制における多くの変化を示している。たとえば、家族墓が出現し、王のピラミッドから離れて独立して造営された高官墓が現れることである。また、おそらくシェレトネプティ王女の墓があることは、近傍に埋葬された高官の一人と婚姻関係にあり、王が娘を有力貴族と政略結婚させることにより権力の維持を図ったことを示すと考えられる。2012年の調査では、ネフェルの岩窟墓の礼拝室と彫像室（セルダブ）を発掘し、彫像室からは多くの彫像が無傷の状態で見つかった。

これらの調査の成果は、考古学によって歴史的に価値のある資料が得られ、古王国時代第5王朝だけでなく古王国時代の崩壊の予兆についてもより多くの理解が可能となったことを示すものである。

##### (3) 「土器づくりからみたさまざまなアジア：エジプト、台湾、バングラデシュ、インドネシア」

齊藤正憲

土器づくり民族誌に関心を寄せる報告者は、まずはエジプトならびに台湾において現地調査を実施した。結果、東西アジアの対比が把握された。すなわち、エジプト＝西アジアではロクロ成形・昇焰式窯焼成であるのに対し、台湾＝東アジアでは叩き成形・覆い焼き焼成であった。では、東西アジアの中間／境界ではどのようなになっているのか？ その答えを求めてバングラデシュでの調査を計画・遂行した。結果、成形ではロクロと叩きが融合していた。焼成でも昇焰構造の施設を用いつつも、土器の焼成環境は覆い焼きであった。つまり、東西アジアの境界に位するバングラデシュでは技術の折衷が認められたのである。では、境界では

なく、辺境ではどうなっているのか？ 新たな調査地としてインドネシアを選定し、フィールドワークを実施したのである。結果、成形においては叩き、回転台、ロクロ、プレス機が共存し、焼成でも窯焼成と覆い焼きの両方が併存していた。技術が折衷した境界に対して、辺境では技術は共存するものであるらしい。そしてこの差異は、外来文化に対する姿勢の違いを示唆し、文化醸成のプロセスの違いをも物語るのではないか？ ならばここから、アジアの諸文化を境界型と辺境型に類型化し得る、境界／辺境論とも呼ぶべき視座が浮かび上がってくるのである。

#### (4) 「エジプト先王朝時代の穿孔技術～石器の複製・使用実験を中心に～」

長屋憲慶

本発表は、もの作りにおける基礎的技術の一つである穿孔技術について、実験考古学的手法からアプローチするものである。穿孔技術は、古代エジプトの工芸品製作において不可欠な技術である。ビーズ・パレットの孔、石製容器の把手、家具部材の接合部の孔など数多くの品々の製作に、この技術は用いられている。

こうしたエジプト固有のもの作りの始まりを想起させる資料として、先王朝時代の中心的遺跡であるヒエラコンポリスからは、フリント製小型ドリル (micro-drill) が多数出土している。しかし、このドリルを如何に用いて種々の素材 (石、骨角、木等) が加工されたのか、その具体的な方法は明らかになっていない。本研究は、実際にドリルを製作して様々な物質に穿孔を試み、使用後のドリル表面を観察することにより、穿孔技術の解明を目指した。

弓錐を用いた実験の結果、硬質石材 (紅玉髓) を含む全ての素材を穿孔 (貫通) できた。また、素材の硬度やドリルの操作法に応じて、先端部に特有のダメージ (剥離痕、形状変化) が生じることが観察された。さらに実験データと考古遺物との比較検討の結果、王朝時代の壁画等で見られる穿孔技術 (弓錐法) は、先王朝時代に既に存在していたと推察された。

#### 5. 法人会員

早稲田大学エジプト学会の法人会員として、(株) 熊谷組、(株) ポニーキャニオン、RKB 毎日放送 (株)、(株) アケトにご支援をいただきました。ここに記して感謝いたします。

## 2013 年 エジプト調査概要

### 1. 調査期間および調査参加者（敬称略）

#### (1) 太陽の船調査

調査期間： 2013 年 1 月 1 日～12 月 31 日（継続中）

調査参加者： 吉村作治、黒河内宏昌、吉村龍人、ユーセフ・カーリッド、岩出まゆみ、佐々木愛（以上 NPO 法人太陽の船復原研究所）、アフィフィ・ローハイエム、アイーサ・ジダーン、モハメド・ムスタファ、ディア・エルディン（以上エジプト考古省）、青木繁夫、イザベラ・ウフマン、アリ・アスファル、フセイン・バシル、フセイン・カマル、オサマ・アブエルヘル、ムハンマド・アンワル、エルシャイマ・エルサイドエイド、アマル・リファート（以上サンプル分析の総括ワークショップ参加者）、シェリーフ・アブデルファタハ、ムハンマド・フセイン、エザト・フセイン（以上現場施設の整備）、鎌倉真音、柏木裕之、高橋寿光、山田綾乃（以上部材の取り上げ作業）

#### (2) ルクソール西岸・アル＝コーカ地区調査

調査期間： 第 6 次調査 2012 年 12 月 23 日～2013 年 1 月 12 日

調査参加者： 吉村作治、近藤二郎、柏木裕之、河合 望、高橋寿光、竹野内恵太、福田莉紗

#### (3) ダハシュール北遺跡

調査期間： 倉庫整理作業 2013 年 2 月 6 日～3 月 4 日

調査参加者： 吉村作治、近藤二郎、矢澤 健、和田浩一郎、山田綾乃、竹野内恵太、山崎世理愛

### 2. 調査概要

#### (1) 太陽の船プロジェクト

##### ① サンプル分析の総括ワークショップ

2013 年 3 月 27・28 日、クフ王第 2 の船部材サンプルの強化処理に関する追加テストの成果を、海外の専門家も交えて協議し、サンプル分析の総括をするワークショップを、JICA の支援を得てカイロにて開催。「ナノセルロース」の有効性が確認される一方、文化財保存への使用例がないことから、現場でさらに詳細な実験的作業（パイロットワーク）を行うこととした。

##### ② 現場施設の整備

部材取り上げのためのクレーン、ならびに取り上げた部材の強化処理を行う保存処理場のデザインを決定し、見積もりをとった。

##### ③ 部材の取り上げ

2013 年の 6 月より部材の取り上げを開始したが、部材の強度は予想以上に落ちており、ピットの中で和紙を用いたフェーシングにより一時的補強を行うこととした。またピットから取り上げた部材を、ピット内の 85% 前後の湿度から 60% 前後の環境へと徐々に適応させる安定化作業を開始。部材が環境に馴染んだの

ちに強化処理に着手することとした。

一方、2013年6月下旬から始まったモルシ政権打倒運動に伴う治安悪化により、プロジェクトは一時ストップしたが、9月には宿舎と現場周辺の治安も回復し、作業を再開することができた。

#### ④広報活動

シンポジウム「クフ王の船取り上げに向けて」（2013年1月25日（金）、於早稲田大学小野梓記念講堂）と、エジプトフォーラム22「太陽の船プロジェクト再開！～エジプトの騒乱を乗り越えて～」（2013年11月10日（日）、於早稲田大学大隈記念講堂）を開催。また吉村作治監修、RKB毎日放送制作のTV特番『新発見！



大型の部材を取り上げている光景



取り上げた部材を視察する吉村先生（右から2人目）と高橋隊員（右端）

ピラミッドに隠された真実を解け！太陽の船大発掘スペシャル』が、12月8日（日）にTBS系列にて全国放映された。

## (2) ルクソール西岸・アル＝コーカ地区調査

ルクソール西岸（ネクロポリス・テーベ）のアル＝コーカ地区での調査は、2007年12月から開始され、2012年12月～2013年1月にかけて第6次調査が実施された。この調査の目的はアル＝コーカ地区に位置する新王国時代第18王朝アメンヘテプ3世治世末期の高官ウセルハトの墓(TT47)を再調査することにより、この墓の正確な平面プランおよび墓内装飾・碑文を明らかにしようとするものである。第6次調査では、ウセルハトの前庭部南側に厚く堆積する砂礫の本格的除去を実施した。この南側の砂礫の堆積は、第47号墓前庭部のクリーニングを実施しても常に南側から砂礫が流入し、前庭部を再び覆ってしまうため、前庭部の南側斜面を岩盤まで砂礫を除去し、岩盤上に日乾煉瓦によって崩落砂礫を止める壁体を設置した。これにより南側から前庭部への砂礫の崩落を止めることに成功し、今後、前庭部を覆う砂礫の除去作業を容易にすることが可能となった。この作業と並行して、第47号墓の前室奥壁（西壁）南側付近での発掘調査を実施した。この部分はハワード・カーターによりエジプト考古局年報(Annales des Royaux d'Arts et d'Hitorir, Brussels)に収蔵されている王妃ティイのレリーフが存在していた場所にあたり、第5次の調査でキオスクに腰掛けるアメンヘテプ3世とティイ王妃の図像と壁面が削り取られている様子が確認された。さらにレリーフの状態を確認すべく下部に掘り進め、クリーニングを継続した。その結果、新たに玉座に座るアメンヘテプ3世の図像の詳細や未完成の被葬者ウセルハトの図像の存在が明らかになった。

なお、調査は2012年度早稲田大学特定課題研究B(2012-026)「テーベ岩窟墓第47号(ウセルハト墓)の研究」(研究代表者：近藤二郎)の助成により実施された。



前室奥壁（西壁）のレリーフ



第6次調査終了状況

### (3) ダハシュール北遺跡調査

サッカラにある考古省査察局の倉庫にて、ダハシュール北遺跡出土遺物の整理作業を実施した。対象は、2008年第16次調査でシャフト110から発見された4体の黒色の人型木棺の実測作業と、過去の調査で出土したシャブティ、アミュレット、ビーズなどの実測、写真撮影である。

人型木棺は、イリセルアアとタウブパウマアトの2人の人物に属する二重木棺である。全面が黒色に塗られ、黄色で細部の図像や銘文が表現されており、良好な保存状態で発見された。黒色の人型木棺は新王国時代第19王朝以降見られなくなるが、シャフト110の木棺は第19王朝から第20王朝に年代づけられる土器、シャブティボックスが共伴して出土しており、メンフィス地域におけるラムセス王朝期の葬制を語る上で重要な遺物と言える。過去の調査で全体の外形の実測と写真撮影は行っており、今回は細部の特徴の記録や図像、銘文のトレースを実施し、過去のデータと統合する作業を行った。



倉庫内での木棺実測の様子



イリセルアアの外棺

### 3. 謝辞

2013年度も早稲田大学古代エジプト調査隊の活動に対し多くの企業様よりご支援をいただきました。ここに記して感謝いたします。

(株)ニトリホールディングス、(株)ダイドードリンコ、(社)全国優良石材店の会、RKB毎日放送(株)、(株)熊谷組、(株)エアーリンク、キリンホールディングス(株)、サントリーウエルネス(株)、(株)ポニーキャニオン、(株)ワイズマート、(株)アケト

2014年度も調査・研究そしてエジプト学の普及に邁進してまいりますので、今後ともご支援、応援のほど宜しくお願い申し上げます。

## 編集後記

『エジプト学研究第20号』をお届けします。早いもので「アラブの春」から3年が経過しました。思い返せば2011年は年初から激動の年でありました。ムバラク政権の崩壊につながったエジプトの民主化運動などアラブ世界で吹き荒れた嵐は、今も続いており、終息の時期を予想することさえできません。日本でも3月11日に東日本大震災があり、被災地では今も復興に向かって努力が続けられています。エジプトでも、2012年に大統領選挙が実施され、ムスリム同胞団の政権であるムルシー政権が誕生しましたが、ムルシー大統領就任1年にあたる昨年7月に大統領職を解任、拘束されるという事態に陥りました。その混乱などもあり、昨年秋以降、日本発着のエジプト航空も運休状態にあります。現在の暫定政権下で治安の回復が急務になっています。今後続く、大統領選挙をはじめとする新体制づくりから、しばらくは目を離せそうありません。安定したエジプト国家が誕生してくれることを切に望んでいます。

このような状況の中でも、エジプトにおける調査・研究は継続・実施されています。特に2013年12月から2014年1月にかけてのルクソール西岸での岩窟墓調査において、ウセルハト墓(TT.47)の前庭部の堆積砂礫除去作業中に鮮やかな色彩で描かれた壁画を持つ未知の岩窟墓(コンスウエムヘブの墓)の発見があり、年始に大きく報道されました。2014年冬に本格的な発掘調査を予定しており良い成果があがるものと期待されています。

さて、本号『エジプト学研究』20号には、エジプトにおける3本の最近の調査報告、そして論文が1本、研究ノートが3本、動向1本、活動報告という内容になっています。今回は大学院生によるものが2本、また研究ノートでは学部3年(2013年度)のものが掲載されています。若手の研究成果を積極的に掲載していこうとの当初からの意向が反映された形になっており、非常に嬉しく思います。今後もこうした傾向を維持・発展させていければと思います。

最後に本号の編集には、河合 望・馬場匡浩両氏に大変お世話になりました。明記して感謝したいと思います。

2014年3月末日

近藤 二郎

早稲田大学文学学術院教授

早稲田大学エジプト学研究所所長

エジプト学研究 第20号

2014年3月31日発行

発行所 / 早稲田大学エジプト学会

〒169-8050 東京都新宿区戸塚町1-104

早稲田大学エジプト学研究所内

発行人 / 吉村作治

The Journal of Egyptian Studies No.20

Published date: 31 March 2014

Published by The Egyptological Society, Waseda University

1-104, Totsuka-chyo, Shinjyuku-ku, Tokyo, 169-8050, Japan

© The Institute of Egyptology, Waseda University